The pLATEX $2_{\mathcal{E}}$ Sources

Ken Nakano & Japanese TEX Development Community 2020-04-12

Contents

ply	vers.dt	$t\mathbf{x}$			1		
p I $\!$							
起動 2.1 2.2	ĿŦĘX	$2_arepsilon$ 起動時の実行コードの取得 \dots			2 2 2		
late	xreleas	e パッケージへの対応			3		
pli	fonts.c	${ m ltx}$			6		
概要					6		
4.1	DOCST	rrip プログラムのためのオプション			6		
4.2	拡張コ	1マンド			7		
コー	ド				8		
5.1	準備				8		
	5.1.1	和文フォント属性			8		
	5.1.2	長さ変数			9		
	5.1.3	一時コマンド			10		
	5.1.4				10		
	5.1.5	支柱			12		
5.2	NFSS2				14		
	5.2.1	エンコードの宣言			15		
	5.2.2	ファミリの宣言			19		
	plate: plf 概4.1 4.2 5.1	PIMTEX 2 _€ の 起動時に実行 2.1 PITEX 2.2 PIMTE latexreleas plfonts.com 概要 4.1 DOCS 4.2 拡張コード 5.1.1 5.1.2 5.1.3 5.1.4 5.1.5 5.2 NFSS 5.2.1	起動時に実行するコード 2.1 IATEX 2 _€ 起動時の実行コードの取得 2.2 pIATEX 2 _€ 起動時に実行するコードの構築 latexrelease パッケージへの対応 plfonts.dtx 概要 4.1 DOCSTRIP プログラムのためのオプション 4.2 拡張コマンド コード 5.1 準備 5.1.1 和文フォント属性 5.1.2 長さ変数 5.1.3 一時コマンド 5.1.4 フォントリスト 5.1.5 支柱 5.2 NFSS2 の拡張コマンド 5.2.1 エンコードの宣言	plivie X 2 _€ のバージョンの設定 起動時に実行するコード 2.1 Lete X 2 _€ 起動時の実行コードの取得 2.2 plivie X 2 _€ 起動時に実行するコードの構築 latexrelease パッケージへの対応 plfonts.dtx 概要 4.1 Docstrip プログラムのためのオプション 4.2 拡張コマンド コード 5.1 準備 5.1.1 和文フォント属性 5.1.2 長さ変数 5.1.3 一時コマンド 5.1.4 フォントリスト 5.1.5 支柱 5.2 NFSS2 の拡張コマンド 5.2.1 エンコードの宣言	起動時に実行するコード 2.1 Istex 2 _€ 起動時の実行コードの取得 2.2 pletex 2 _€ 起動時に実行するコードの職築 latexrelease パッケージへの対応 plfonts.dtx 概要 4.1 DOCSTRIP プログラムのためのオプション 4.2 拡張コマンド コード 5.1 準備 5.1.1 和文フォント属性 5.1.2 長さ変数 5.1.3 一時コマンド 5.1.4 フォントリスト 5.1.5 支柱 5.2 NFSS2 の拡張コマンド 5.2.1 エンコードの宣言		

		5.2.3 数式用フォント	28
		5.2.4 従属書体の宣言	30
		5.2.5 フォントの選択	$\frac{30}{32}$
		5.2.6 エンコードの指定	$\frac{32}{39}$
		5.2.7 ファミリの指定	41
		5.2.8 シリーズの指定(新 NFSS 対応)	43
		5.2.9 シェイプの指定(新 NFSS 対応)	46
		5.2.10 書体の切り替え(新 NFSS 対応)	50
	5.3	強調書体	63
	5.4	下線マクロ	64
	5.5	合成文字	65
	5.6	イタリック補正と \xkanjiskip	73
	5.7	デフォルト設定ファイルの読み込み	75
6	デフ	ォルト設定ファイル	75
Ū	6.1	テキストフォント	75
	6.2	プリロードフォント	76
	6.3	組版パラメータ	77
7	フォ	ント定義ファイル	77
\mathbf{c}	plc	ore.dtx	80
8	概要		80
9	コー	۴	80
	9.1	プリアンブルコマンド	80
	9.2	直前の JFM 由来スペースの削除【コミュニティ版独自】	81
	9.3	改ページ	82
	9.4	改行	83
	9.5	オブジェクトの出力順序	86
	9.6	トンボ	91
	9.7	脚注マクロ	103
	9.8	相互参照	107
	9.9	疑似タイプ入力	108
			108 110

	and the	111 111
10	2013 年以降の新しい pT _E X 対応 1	115
11	e-pT _E X での FAM256 パッチの利用	118
12	IPT $_{ m E}$ X $2_{arepsilon}$ と $_{ m P}$ IPT $_{ m E}$ X $2_{arepsilon}$ の更新タイミングずれ対策	L 2 0
d	plext.dtx 1	22
13	概要 1	122
14	組方向オプションについて 1	122
15	15.1 表組環境	128 133 139 141
\mathbf{e}	pl209.dtx 1	44
16	DOCSTRIP 用モジュール 1	L44
17	2.09 互換マクロ 1	144
18	スタイルファイル 1	L46
f	kinsoku.dtx 1	48
19		148
	19.1 半角文字に対する禁則	
	19.2 全角文字に対する禁則	149

20	文字間のスペース	150
	20.1 ある英字と前後の漢字の間の制御	150
	20.2 ある漢字と前後の英字の間の制御	153
\mathbf{g}	jclasses.dtx	L 5 5
21	オプションスイッチ	155
22	オプションの宣言	156
	22.1 用紙オプション	157
	22.2 サイズオプション	157
	22.3 横置きオプション	158
	22.4 トンボオプション	158
	22.5 面付けオプション	158
	22.6 組方向オプション	159
	22.7 両面、片面オプション	159
	22.8 二段組オプション	159
	22.9 表題ページオプション	159
	22.10 右左起こしオプション	159
	22.11 数式のオプション	159
	22.12 参考文献のオプション	160
	22.13 日本語ファミリ宣言の抑制、和欧文両対応の数式文字	160
	22.14 ドラフトオプション	161
	22.15 オプションの実行	161
23	フォント	161
24	レイアウト	165
	24.1 用紙サイズの決定	165
	24.2 段落の形	166
	24.3 ページレイアウト	166
	24.3.1 縦方向のスペース	166
	24.3.2 本文領域	167
	24.3.3 マージン	173
	24.4 脚注	176
	24.5 フロート	177
	2451 フロートパラメータ	177

		24.5.2	フロートオブジェクトの上限値	179
25	改ペ	ージ(E	日本語 TEX 開発コミュニティ版のみ)	180
26	ペー	ジスター	()L	181
	26.1	マーク	⁷ について	182
	26.2	plain ·	ページスタイル	182
	26.3	jpl@ir	1ページスタイル	182
	26.4	headn	nombre ページスタイル	183
	26.5	footno	ombre ページスタイル	183
	26.6	headii	ngs スタイル	183
	26.7	boths	tyle スタイル	184
	26.8	myhea	ading スタイル	186
27	文書	コマント	o.	186
	27.1	表題		186
	27.2	概要		191
	27.3	章見出	出し	192
		27.3.1	マークコマンド	192
		27.3.2	カウンタの定義.........................	192
		27.3.3	前付け、本文、後付け	194
		27.3.4	ボックスの組み立て	195
		27.3.5	part レベル	196
		27.3.6	chapter レベル	198
		27.3.7	下位レベルの見出し	200
		27.3.8	付録	201
	27.4	リスト		201
		27.4.1	enumerate 環境	204
		27.4.2	itemize 環境	205
		27.4.3	description 環境	206
		27.4.4	verse 環境	206
			quotation 環境	207
			quote 環境	207
	27.5		- ト	207
			figure 環境	207
			table 環境	208
	27.6	キャフ	プション	209

	27.7	コマ	ンドパラメー	タの	設定									210
		27.7.1	arrayとtal											
		27.7.2	tabbing 環境											
		27.7.3	minipage 璟											
		27.7.4	framebox 瑪											
		27.7.5												
•		. .	_	-	Ì	,								
28	フォ	ントコ	マンド											211
29	相互	参照												212
	29.1	目次												212
		29.1.1	本文目次											215
		29.1.2	図目次と表	目次										217
	29.2	参考	文献											218
	29.3	索引												219
	29.4	脚注												219
30	今日	の日付												220
31	初期	設定												22 1
h	jlt	xdoc.	${ m dtx}$											223
変	更履	歴												22 6
索	引													240

File a

plvers.dtx

$1 \quad \mathrm{p} ot\hspace{-0.1cm}P \mathrm{T}_{\mathrm{E}}\!\mathrm{X}\ 2_{arepsilon}$ のバージョンの設定

```
現在の pIATeX 2_{\varepsilon} がベースとした IATeX 2_{\varepsilon} のバージョンは、下記のとおりです。
                                                                 1 (*2ekernel)
                                                                2 %\def\fmtname{LaTeX2e}
                                                                3 %\edef\fmtversion
                                                                4 (/2ekernel)
                                                                5 (latexrelease)\edef\latexreleaseversion
                                                                6 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle def \rangle platexrelease \rangle response \rangle platexrelease \rangle response \
                                                                 7 (*2ekernel | latexrelease | platexrelease)
                                                                                  {2020-02-02}
                                                                9 (/2ekernel | latexrelease | platexrelease)
                                                                    また、現在の pIAT_{	extsf{FX}}\,2_{arepsilon} は最低でも IAT_{	extsf{FX}}\,2_{arepsilon}\,2017-04-15 以降(バージョン番号す
                                                           なわち日付が YYYY/MM/DD 形式から YYYY-MM-DD 形式に変更された版)を前提とし
                                                           ます。なお、\mathbb{P}T_{F}X 2_{\varepsilon} 2017/01/01 以降は e-\mathbb{T}FX 必須になっています。
                                                              10 (*plcore)
                                                              11 \ifx\fmtversion\@undefined
                                                              12
                                                                                      \errhelp{Please reinstall LaTeX.}%
                                                                                       \errmessage{This cannot happen!^^JYour file 'latex.ltx'
                                                             13
                                                             14
                                                                                                                                     might be broken}\@@end
                                                             15 \else
                                                                              \verb|\colored| \colored| \c
                                                             16
                                                                                      \errhelp{Please update your TeX installation; if not available,
                                                             17
                                                                                                                          obtain it^^Jmanually from CTAN
                                                             18
                                                                                                                           (https://ctan.org/pkg/latex-base) or from^^JGitHub
                                                              19
                                                                                                                          (https://github.com/latex3/latex2e).}%
                                                             20
                                                                                      \errmessage{This version of pLaTeX2e requires LaTeX2e 2017-04-15
                                                                                                                                      or newer!^^JObtain a newer version of 'latex',
                                                             23
                                                                                                                                     otherwise pLaTeX2e setup will^^Jnever succeed}\@@end
                                                             24 \fi
                                                             25 \fi
                                                             26 (/plcore)
               \pfmtname pIPT_FX 2_{\varepsilon} のフォーマットファイル名とバージョンを定義します。
   \pfmtversion
                                                             27 (*plcore)
                                                             28 \def\pfmtname{pLaTeX2e}
\ppatch@level
                                                             29 \def\pfmtversion
                                                             30 (/plcore)
                                                             31 (platexrelease)\edef\platexreleaseversion
                                                             32 (*plcore | platexrelease)
                                                                                   {2020-04-12}
                                                             34 (/plcore | platexrelease)
```

```
35 \*plcore\\
36 \def\ppatch@level{0}\
37 \/plcore\\
```

コミュニティ版 pIFT_EX 2ε ではパッチファイルを使用しないので、パッチファイルをロードするコードは削除しました。

2 起動時に実行するコード

2.1 IATEX $2_{arepsilon}$ 起動時の実行コードの取得

このファイルの直前で \LaTeX 2ε の latex.ltx が読み込まれているはずなので、その起動時の実行コード(\everyjob トークンの内容)を保存します。

 $ext{MT}_{ ext{EX}} 2\varepsilon$ 2018-04-01 patch level 1 までは、\everyjob が

\typeout{LaTeX2e version}\typeout{Babel version}

だけでしたが、patch level 2 以降ではいくつかのコードが \everyjob で遅延実行 されるようになっています。それらのコードを抽出するため、最初と最後に区切り トークン(それぞれ \platexNILa と \platexNILb)を付けておきます。

```
38 \end{array} $$ \end{array} $$\end{array} $$ \end{array} $$ \end{array} $$\en
```

2.2 $pIPT_{F}X$ 2ε 起動時に実行するコードの構築

\everyjob $ext{IMT}_{FX} 2_{\varepsilon}$ 起動時の実行コードを元に、 $ext{pMT}_{FX} 2_{\varepsilon}$ 用の調整を加えます。

42 \begingroup

pIATeX 2_{ε} のバージョン表示を作ります。

- 43 \ifnum\ppatch@level=0
- 44 \toks2={\pfmtname\space<\pfmtversion>\space}%
- 45 \else\ifnum\ppatch@level>0
- $\label{lem:loss} $$46 $$ \toks2={\phimtname\space<\phimtversion>+\prace}% $$$
- 47 \else
- 48 \toks2={\pfmtname\space<\pfmtversion>-pre\ppatch@level\space}%
- 49 \fi\fi

\everyjob の内容をパースして

- LATEX 2_{ε} のバージョン表示の中身(\typeout{}の引数)を #2
- バージョン表示の前に実行されるコードがあれば#1
- バージョン表示の後に残っているコードがあれば #3

File a: plvers.dtx Date: 2020/03/28 Version v1.1u

```
50 \edef\platexNILa#1\typeout#2#3\platexNILb{%
51 #1\noexpand\typeout{\the\toks2 (based on #2)}#3}
52 \global\everyjob\expandafter\expandafter\expandafter{\platexBANNER}%
不要になったマクロ定義は削除しておきます。
53 \endgroup
54 \let\platexBANNER=\@undefined
55 ⟨/plcore⟩
```

3 latexrelease パッケージへの対応

最後に、latexrelease パッケージへの対応です。

 $\verb|\plincludeInRelease| \\$

platexrelease パッケージでは \plIncludeInRelease...\plEndIncludeInRelease のブロックを使います。

```
56 (*plcore | platexrelease)
57 \newif\if@plincludeinrelease
58 \Oplincludeinreleasefalse
59 \def\plIncludeInRelease#1{%
    \if@plincludeinrelease
61
      \PackageError{platexrelease}
62
        {mis-matched \string\plIncludeInRelease}%
        {There is an \string\plEndIncludeRelease\space missing}%
63
      \@plincludeinreleasefalse
64
    \fi
65
    \kernel@ifnextchar[%
66
    {\@plIncludeInRelease{#1}}
    {\@plIncludeInRelease{#1}[#1]}}
69 \def\@plIncludeInRelease#1[#2]{\@plIncludeInRele@se{#2}}
70 \def\@plIncludeInRele@se#1#2#3{%
    \toks@{[#1] #3}%
71
    \verb|\expandafter\ifx\csname\string#2+\@currname+pllIR\endcsname\relax| \\
72
      \ifnum\expandafter\@parse@version#1//00\@nil
73
74
            >\expandafter\@parse@version\pfmtversion//00\@nil
         \GenericInfo{}{Skipping: \the\toks@}%
75
       \expandafter\expandafter\expandafter\@gobble@plIncludeInRelease
76
77
78
         \GenericInfo{}{Applying: \the\toks@}%
79
        \@plincludeinreleasetrue
        \expandafter\let\csname\string#2+\@currname+plIIR\endcsname\@empty
80
      \fi
81
    \else
82
```

File a: plvers.dtx Date: 2020/03/28 Version v1.1u

```
83
      \GenericInfo{}{Already applied: \the\toks@}%
      \expandafter\@gobble@plIncludeInRelease
84
86 }
87 \def\plEndIncludeInRelease{%
    \if@plincludeinrelease
     \@plincludeinreleasefalse
89
90
91
      \PackageError{platexrelease}
92
       {mis-matched \string\plEndIncludeInRelease}{}%
94 \long\def\@gobble@plIncludeInRelease#1\plEndIncludeInRelease{%
    \@plincludeinreleasefalse
    \@check@plIncludeInRelease#1\plIncludeInRelease
      \@check@plIncludeInRelease\@end@check@plIncludeInRelease}
97
#2#3\@end@check@plIncludeInRelease{%
    \ifx\@check@plIncludeInRelease#2\else
100
101
      \PackageError{platexrelease}
       102
103
    \fi}
104 (/plcore | platexrelease)
```

IATeX 2_ε が提供する latexrelease パッケージが読み込まれていて、かつ pIATeX 2_ε が提供する platexrelease パッケージが読み込まれていない場合は、巻き戻し機能に よって pIATeX 2_ε のコマンドが IATeX 2_ε のコマンドで上書きされ、動作が壊れてしまいますので、警告を出します。

以前は \AtBeginDocument を使って \@begindocumenthook の末尾に警告文を入れていましたが、 $\mbox{IMT}_{E}X\ 2_{\varepsilon}\ 2020-02-02$ 以降に付属の latexrelease パッケージで巻き戻すとフックの実行より早い段階(具体的には \process@table 内の \kanjiprocess@table 実行中)で「\series@maybe@drop@one@m が未定義」というエラーが出てしまうので、\process@table の先頭に警告文を入れます。万が一 \process@table も巻き戻し対象とされてしまった場合のため、\@begindocumenthook の先頭にも入れておきます。

```
105 \*plfinal\>
106 \expandafter\def\expandafter\process@table\expandafter{%
107 \expandafter\p@warn@latexrelease\process@table}
108 \begingroup
109 \toks@\expandafter{\expandafter\p@warn@latexrelease\@begindocumenthook}
110 \xdef\@begindocumenthook{\the\toks@}
111 \endgroup
112 \def\p@warn@latexrelease{%
113 \ifx\latexreleaseversion\@undefined\else
114 \ifx\platexreleaseversion\@undefined
115 \@latex@warning@no@line{%
```

```
Package latexrelease is loaded.\MessageBreak

Some patches in pLaTeX2e core may be overwritten.\MessageBreak

Consider using platexrelease.\MessageBreak

See platex.pdf for detail}%

fi

li

li

lit

let\p@warn@latexrelease\relax

li

li

/plfinal
```

File b plfonts.dtx

4 概要

ここでは、和文書体を NFSS2 のインターフェイスで選択するためのコマンドやマクロ について説明をしています。また、フォント定義ファイルや初期設定ファイルなどの 説明もしています。新しいフォント選択コマンドの使い方については、fntguide.tex や usrguide.tex を参照してください。

第4節 この節です。このファイルの概要と DOCSTRIP プログラムのためのオプションを示しています。

第5節 実際のコードの部分です。

第6節 プリロードフォントやエラーフォントなどの初期設定について説明をしています。

第7節 フォント定義ファイルについて説明をしています。

4.1 DOCSTRIP プログラムのためのオプション

DOCSTRIP プログラムのためのオプションを次に示します。

オプション	意味
plcore	plcore.ltx の断片を生成します。
trace	ptrace.sty を生成します。
JY1mc	横組用、明朝体のフォント定義ファイルを生成します。
JY1gt	横組用、ゴシック体のフォント定義ファイルを生成します。
JT1mc	縦組用、明朝体のフォント定義ファイルを生成します。
m JT1gt	縦組用、ゴシック体のフォント定義ファイルを生成します。
pldefs	pldefs.ltx を生成します。次の4つのオプションを付加
	することで、プリロードするフォントを選択することがで
	きます。デフォルトは 10pt です。
xpt	10pt プリロード
xipt	11pt プリロード
xiipt	12pt プリロード
ori	plfonts.tex に似たプリロード

4.2 拡張コマンド

pI $egth{T_{\rm E}}
extrm{X} 2_{\varepsilon}$ は、以下の新しいコマンドを定義します。

コマンド	意味
\Declare{Yoko Tate}KanjiEncoding	和文エンコードの宣言
\DeclareKanjiEncodingDefaults	デフォルトの和文エンコードの宣言
\KanjiEncodingPair	和文エンコードのセット化
\DeclareKanjiFamily	ファミリの宣言
\DeclareKanjiSubstitution	和文の代用フォントの宣言
\DeclareErrorKanjiFont	和文のエラーフォントの宣言
\reDeclareMathAlphabet	和欧文を同時に切り替えるコマンド宣言
\{Declare Set}RelationFont	従属書体の宣言
\userelfont	欧文書体を従属書体にする
\adjustbaseline	ベースラインシフト量の設定
\{roman kanji}encoding	エンコードの指定
\{roman kanji}family	ファミリの指定
\{roman kanji}series[force]	シリーズの指定
\{roman kanji}shape[force]	シェイプの指定
\use{roman kanji}	書体の切り替え
\mcfamily, \gtfamily	和文書体を明朝体、ゴシック体にする

さらに、オリジナルの $ext{LFT}_{ ext{E}} ext{X} ext{ } 2_{arepsilon}$ の以下のコマンドを再定義します。

コマンド	意味
\DeclareFontEncoding	エンコードの宣言
\DeclareFontFamily	ファミリの宣言
$\verb \DeclareFixedFont $	フォントの名前の宣言
\selectfont	フォントを切り替える
\set@fontsize	フォントサイズの変更
\fontencoding	エンコードの指定
\fontfamily	ファミリの指定
\fontseries[force]	シリーズの指定
\fontshape[force]	シェイプの指定
\usefont	書体の切り替え
\normalfont	デフォルト値の設定に切り替える
\bfseries, \mdseries	シリーズを太字、中字にする

5 コード

この節で、実際のコードを説明します。

5.1 準備

NFSS2 を拡張するための準備です。和文フォントの属性を格納するオブジェクトや 長さ変数、属性を切替える際の判断材料として使うリストなどを定義しています。

IFTEX の tracefnt パッケージに相当するデバッグ機能は、pIFTEX では ptrace パッケージで提供します。以前(アスキー版)では ptrace の前に tracefnt を手動で \usepackage する必要がありましたが、コミュニティ版では ptrace が自動で tracefnt を読み込むように改良してあります。

- 1 (*trace)
- 2 \NeedsTeXFormat{pLaTeX2e}
- 3 \ProvidesPackage{ptrace}
- 4 [2020/03/26 v1.7e Standard pLaTeX package (font tracing)]
- 5 \RequirePackageWithOptions{tracefnt}
- 6 (/trace)

5.1.1 和文フォント属性

ここでは、和文フォントの属性を格納するためのオブジェクトについて説明をして います。

\k@encoding 和文エンコードを示すオブジェクトです。\ck@encoding は、最後に選択された和 \ck@encoding 文エンコード名を示しています。\cy@encoding と \ct@encoding はそれぞれ、最 \cy@encoding 後に選択された、横組用と縦組用の和文エンコード名を示しています。

\ct@encoding ここでは単に「空」に初期化するだけにしています。

- 7 (*plcore)
- 8 \let\k@encoding\@empty
- 9 \let\ck@encoding\@empty
- 10 \let\cy@encoding\@empty
- 11 \let\ct@encoding\@empty

\k@family 和文書体のファミリを示すオブジェクトです。

12 \let\k@family\@empty

\k@series 和文書体のシリーズを示すオブジェクトです。

13 \let\k@series\@empty

\k@shape 和文書体のシェイプを示すオブジェクトです。

14 \let\k@shape\@empty

\curr@kfontshape 現在の和文フォント名を示すオブジェクトです。

15 \def\curr@kfontshape{\k@encoding/\k@family/\k@series/\k@shape}

\rel@fontshape 関連付けされたフォント名を示すオブジェクトです。

16 \def\rel@fontshape{\f@encoding/\f@family/\f@series/\f@shape}

5.1.2 長さ変数

ここでは、和文フォントの幅や高さなどを格納する変数について説明をしています。 頭文字が大文字の変数は、ノーマルサイズの書体の大きさで、基準値となります。 これらは、jart10.clo などの補助クラスファイルで設定されます。

小文字だけからなる変数は、フォントが変更されたときに(\selectfont 内で) 更新されます。

- \Cht \Cht は基準となる和文フォントの文字の高さを示します。\cht は現在の和文フォン
- \cht トの文字の高さを示します。なお、この"高さ"はベースラインより上の長さです。
 - 17 \newdimen\Cht
 - 18 \newdimen\cht
- \Cdp \Cdp は基準となる和文フォントの文字の深さを示します。\cdp は現在の和文フォン
- \cdp トの文字の深さを示します。なお、この"深さ"はベースラインより下の長さです。
 - 19 \newdimen\Cdp
 - 20 \newdimen\cdp
- \Cwd \Cwd は基準となる和文フォントの文字の幅を示します。\cwd は現在の和文フォン\cwd トの文字の幅を示します。
 - 21 \newdimen\Cwd
 - 22 \newdimen\cwd
- \Cvs \Cvs は基準となる行送りを示します。ノーマルサイズの\baselineskipと同値で\cvs す。\cvs は現在の行送りを示します。
 - $23 \newdimen\Cvs$
 - $24 \newdimen \cvs$
- \Chs は基準となる字送りを示します。\Cwd と同値です。\chs は現在の字送りを示\chs します。
 - $25 \newdimen\Chs$
 - 26 \newdimen\chs
- \cHT \cHT は、現在のフォントの高さに深さを加えた長さを示します。\set@fontsize コマンド (実際は \size@update) で更新されます。
 - 27 \newdimen\cHT

5.1.3 一時コマンド

\afont Later X 内部の \do@subst@correction マクロでは、\fontname\font で返される外部フォント名を用いて、Later フォント名を定義しています。したがって、\font をそのまま使うと、和文フォント名に欧文の外部フォントが登録されたり、縦組フォント名に横組用の外部フォントが割り付けられたりしますので、\jfont か \tfontを用いるようにします。\afont は、\font コマンドの保存用です。

28 \let\afont\font

5.1.4 フォントリスト

ここでは、フォントのエンコードやファミリの名前を登録するリストについて説明 をしています。

 $p\text{IAT}_{\text{EX}}\,2_{\varepsilon}$ の NFSS2 では、一つのコマンドで和文か欧文のいずれか、あるいは両方を変更するため、コマンドに指定された引数が何を示すのかを判断しなくてはなりません。この判断材料として、リストを用います。

このときの具体的な判断手順については、エンコード選択コマンドやファミリ選択コマンドなどの定義を参照してください。

\inlist@ 次のコマンドは、エンコードやファミリのリスト内に第二引数で指定された文字列があるかどうかを調べるマクロです。結果は\ifin@に格納されます。第二引数はリストそのもの(リストが格納されたマクロではなく)を指定することになります。 典型的には以下のように呼び出します。

\edef\tmp@item{{\k@encoding}}%
\expandafter\expandafter
\inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kyenc@list}

\do@subst@correction の日本語化に必要なので、pIFTEX 2_{ε} 2020-04-12 以降では比較時に引数・リストとも \detokenize によって文字列化するようにしました。

- 29 (/plcore)
- 30 $\langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease \{2020/04/12\} \{\inlist0\}$
- 31 (platexrelease)

{Detokenize}%

- 32 (*plcore | platexrelease)
- $33 \left(1125 \right)$
- 34 \edef\reserved@a{%
- 35 \unexpanded{\def\in@@##1<}%
- 36 \detokenize{#1}%
- 37 \unexpanded{>##2##3\in@6\ifx\in@##2\in@false\else\in@true\fi}\in@6}%
- 38 \detokenize{#2}%
- 39 \unexpanded{<}%</pre>
- 40 \detokenize{#1}%
- 41 \unexpanded{>\in@\in@@}}%
- 42 \reserved@a}

```
43 \( /plcore | platexrelease \)
44 \( platexrelease \) \plEndIncludeInRelease \)
45 \( platexrelease \) \plIncludeInRelease \{ 0000/00/00} \{ \inlist@ \}
46 \( platexrelease \) \quad \{ platexrelease \} \\ \def\inlist@#1#2\{\%\}
48 \( platexrelease \) \quad \def\inlist@#1<\#1>##2##3\in@0\{\%\}
49 \( platexrelease \) \quad \infty\in@##2\in@false\else\in@true\fi\}\%
50 \( platexrelease \) \quad \in@#2<\#1>\in@\in@\}
51 \( platexrelease \) \plEndIncludeInRelease
```

\enc@elt \enc@elt と \fam@elt は、登録されているエンコードに対して、なんらかの処理を \fam@elt 逐次的に行ないたいときに使用することができます。

53 \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt} 54 \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}

52 (*plcore)

\fenc@list \fenc@list には、\DeclareFontEncoding コマンドで宣言されたエンコード名が \kenc@list 格納されていきます。

\kyenc@list \kyenc@list には、\DeclareYokoKanjiEncoding コマンドで宣言されたエン コード名が格納されていきます。\ktenc@listには、\DeclareTateKanjiEncoding コマンドで宣言されたエンコード名が格納されていきます。

ここで、これらのリストに具体的な値を入れて初期化をするのは、リストにエンコードの登録をするように \DeclareFontEncoding を再定義する前に、欧文エンコードが宣言されるため、リストに登録されないからです。

 $55 \enc@elt<OML>\enc@elt<OT1>\enc@elt<OMS>\%$

56 \enc@elt<OMX>\enc@elt<TS1>\enc@elt<U>}

57 \let\kenc@list\@empty

 $58 \left(\frac{0}{1} \right)$

59 \let\ktenc@list\@empty

\kfam@list \kfam@listには、\DeclareKanjiFamilyコマンドで宣言されたファミリ名が格納 \ffam@list されていきます。

\notkfam@list \ffam@list には、\DeclareFontFamily コマンドで宣言されたファミリ名が格 \notffam@list 納されていきます。

\notkfam@listには、和文ファミリではないと推測されたファミリ名が格納されていきます。このリストは\fontfamilyコマンドで作成されます。

\notffam@listには欧文ファミリではないと推測されたファミリ名が格納されていきます。このリストは \fontfamily コマンドで作成されます。

ここで、これらのリストに具体的な値を入れて初期化をするのは、リストにファミリの登録をするように、\DeclareFontFamilyが再定義される前に、このコマンドが使用されるため、リストに登録されないからです。

60 \def\kfam@list{\fam@elt<mc>\fam@elt<gt>}

- 61 \def\ffam@list{\fam@elt<cmr>\fam@elt<cmss>\fam@elt<cmtt>% 62 \fam@elt<cmm>\fam@elt<cmsy>\fam@elt<cmex>}
- つぎの二つのリストの初期値として、上記の値を用います。これらのファミリ名は、 和文でないこと、欧文でないことがはっきりしています。
- $63 \left(\frac{63 \left(\frac{1}{100} \right)}{100} \right)$
- $64 \left(\frac{64 \right)}{64 \right)$

5.1.5 支柱

行間の調整などに用いる支柱です。支柱のもととなるボックスの大きさは、フォントサイズが変更されるたびに、\set@fontsize コマンドによって更新されます。

コミュニティ版 pl $m PIEX 2_{\it E} 2017/04/08$ での変更:従来、横組ボックス用の支柱は \strutbox で、高さと深さが 7 対 3 となっていました。これは plm PIEX 単体では問題になりませんでしたが、海外製の lm PIEX パッケージを縦組で使用した場合に、意図しない幅や高さが取得されることがありました。この不都合を回避するため、コミュニティ版 plm PIEX では次の方法をとります。

- \ystrutbox (新設):高さと深さが7対3の横組用の支柱ボックスレジスタ
- \tstrutbox: 高さと深さが5対5の縦組用の支柱ボックスレジスタ
- \zstrutbox: 高さと深さが7対3の縦組用の支柱ボックスレジスタ
- \strutbox (仕様変更): 縦横のディレクションに応じて \tstrutbox または \ystrutbox に展開される**マクロ**

すなわち、従来の pIFTEX における \strutbox と同じ挙動を示すのが、新設された \ystrutbox ということになります。

\tstrutbox \tstrutbox は高さと深さが 5 対 5、\zstrutbox は高さと深さが 7 対 3 の支柱ボッ \zstrutbox クスとなります。これらは縦組ボックスの行間の調整などに使います。

- 65 \newbox\tstrutbox
- $66 \newbox\zstrutbox$

\ystrutbox \ystrutbox は高さと深さが7対3の横組用の支柱ボックスです。

- $67 \langle /plcore \rangle$
- 69 (platexrelease)
- {Add \ystrutbox}%
- $70 \langle *plcore \mid platexrelease \rangle$
- 71 \newbox\ystrutbox
- 72 (/plcore | platexrelease)
- $73 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease$
- 74 \(\rangle plane \) \(\rangle

```
{Add \ystrutbox}%
                                       75 (platexrelease)
                                       76 \(\rangle platexrelease \)\let\\ystrutbox\\@undefined
                                       \strutbox \strutbox は縦横両対応です。
                                      78 \ \langle platexrelease \rangle \ | \ lincludeInRelease \{ 2017/04/08 \} \{ \ \ trutbox \}
                                       79 (platexrelease)
                                                                                                                                                   {Macro definition of \strutbox}%
                                       80 (*plcore | platexrelease)
                                       81 \def\strutbox{\iftdir\tstrutbox\else\ystrutbox\fi}
                                       82 (/plcore | platexrelease)
                                       83 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                                       84 \partial place \
                                       85 (platexrelease)
                                                                                                                                                   {LaTeX2e original}%
                                       86 (platexrelease)\newbox\strutbox % emulation purpose only
                                       87 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
         \strut ディレクションに応じて \ystrutbox と \tstrutbox を使い分けます。オリジナル
                                    の \LaTeX では ltplain.dtx で定義されていますが、\LaTeX 2_{\varepsilon} 2019-10-01 以降では
                                     さらに ltdefns.dtx で \MakeRobust を前置されるため、robust になります。
                                       88 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{ 2019/10/01 \} \\ \strut \}
                                       89 (platexrelease)
                                                                                                                                                    {Make robust}%
                                       90 (*plcore | platexrelease)
                                      91 \DeclareRobustCommand\strut{\relax
                                                   \iftdir
                                                           \ifmmode\copy\tstrutbox\else\unhcopy\tstrutbox\fi
                                      93
                                      94
                                                          \ifmmode\copy\ystrutbox\else\unhcopy\ystrutbox\fi
                                      95
                                      96
                                                    \fi}
                                      97 (/plcore | platexrelease)
                                       98 \(\rangle plant = \rangle p
                                      99 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{ 2017/04/08 \} \\ \strut \}
                                     100 (platexrelease)
                                                                                                                                                    {Use \ystrutbox}%
                                    101 (platexrelease)\def\strut{\relax
                                    102 (platexrelease) \ifydir
                                                                                                  \verb|\ifnmode| copy\y strutbox \else \unhcopy\y strutbox \fi
                                    103 (platexrelease)
                                    104 (platexrelease) \else
                                    105 (platexrelease)
                                                                                                  \ifmmode\copy\tstrutbox\else\unhcopy\tstrutbox\fi
                                    106 (platexrelease) \fi}
                                    107 (platexrelease)\expandafter \let \csname strut \endcsname \@undefined
                                    108 \(\rangle platexrelease \)\(\rangle platexrelease \)
                                    109 \; \langle \texttt{platexrelease} \rangle \\ \texttt{plIncludeInRelease} \\ \{0000/00/00\} \\ \{\texttt{\trut}\}
                                    110 (platexrelease)
                                                                                                                                                    {ASCII Corporation original}%
                                    111 (platexrelease)\def\strut{\relax
                                    112 (platexrelease) \ifydir
                                    113 (platexrelease)
                                                                                                   \ifmmode\copy\strutbox\else\unhcopy\strutbox\fi
                                    114 (platexrelease)
                                    115 (platexrelease)
                                                                                                   \ifmmode\copy\tstrutbox\else\unhcopy\tstrutbox\fi
                                    116 (platexrelease)
                                                                                           \fi}
```

```
117 (platexrelease)\expandafter \let \csname strut \endcsname \@undefined
                                       118 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
\tstrut
\zstrut 119 \place\plIncludeInRelease{2019/10/01}{\tstrut}
                                       120 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                            {Make robust}%
                                       121 (*plcore | platexrelease)
                                       122 \verb|\DeclareRobustCommand\tstrut{\relax\hbox{\tate}}|
                                                                  \ifmmode\copy\tstrutbox\else\unhcopy\tstrutbox\fi}}
                                       124 \verb|\DeclareRobustCommand\zstrut{\relax\hbox{\tate}}|
                                                                  \ifmmode\copy\zstrutbox\else\unhcopy\zstrutbox\fi}}
                                       126 (/plcore | platexrelease)
                                       127 \ \langle {\tt platexrelease} \rangle \backslash {\tt plEndIncludeInRelease}
                                       128 \(\rangle plane \) \(\rangle
                                       129 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                            {ASCII Corporation original}%
                                       130 \langle platexrelease \rangle \langle tstrut{relax\hbox{tate}}
                                       133 ⟨platexrelease⟩ \ifmmode\copy\zstrutbox\else\unhcopy\zstrutbox\fi}}
                                       134 \langle platexrelease \rangle \setminus expandafter \setminus let \setminus csname tstrut \setminus endcsname \setminus cundefined
                                       135 \langle platexrelease \rangle \cdot expandafter \ let \ csname zstrut \ endcsname \ @undefined
                                       136 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
\ystrut
                                       137 \(\rangle plane = \rangle plinclude In Release \{ 2019/10/01 \} \\ \ystrut \}
                                       138 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                            {Make robust}%
                                       139 (*plcore | platexrelease)
                                       140 \DeclareRobustCommand\ystrut{\relax\hbox{\yoko}}
                                                                      \ifmmode\copy\ystrutbox\else\unhcopy\ystrutbox\fi}}
                                       142 (/plcore | platexrelease)
                                       143 \langle platexrelease \rangle \rangle 143 \langle platexrelease \rangle
                                       144 \ \langle platexrelease \rangle \ | lincludeInRelease \{ 2017/04/08 \} \{ \ vstrut \}
                                                                                                                                                                                            {Add \ystrut}%
                                       145 (platexrelease)
                                       146 \partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{\partit{
                                                                                                                \ifmmode\copy\ystrutbox\else\unhcopy\ystrutbox\fi}}
                                       147 (platexrelease)
                                       149 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                                       150 \(\rangle plane \) \(\rangle
                                       151 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                            {Add \ystrut}%
                                       152 (platexrelease)\let\ystrut\@undefined
                                       153 \langle platexrelease \rangle \cdot expandafter \ let \ csname \ ystrut \ endcsname \ @undefined
                                       154 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plEndIncludeInRelease \)
                                       155 (*plcore)
```

5.2 NFSS2 の拡張コマンド

NFSS2 の拡張コマンドを定義します。

5.2.1 エンコードの宣言

欧文エンコードを宣言するためのコマンドです。ltfssbas.dtx で定義されている \DeclareFontEncoding ものを、\fenc@listを作るように再定義をしています。 \DeclareFontEncoding@ 156 \def\DeclareFontEncoding{% \begingroup \nfss@catcodes 159 \expandafter\endgroup \DeclareFontEncoding@} 160 161 (/plcore) 162 \platexrelease\\plIncludeInRelease{2018/04/01}{\DeclareFontEncoding@} 163 (platexrelease) {UTF-8 Encoding}% 164 (*plcore | platexrelease) まず、 $ext{IAT}_{ ext{E}} ext{X} \, 2 \varepsilon \, 2017$ -04-15以前の場合のコードです。このコードは、\UseRawInputEncoding の内部でも使われます。 165 % for compatibility with LaTeX2e 2017-04-15 or earlier. 166 % this code is used if MLTeX is enabled 167 \def\DeclareFontEncoding@#1#2#3{% \expandafter 168 \ifx\csname T@#1\endcsname\relax 169 \def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}% 170 171 \xdef\cdp@list{\cdp@list\cdp@elt{#1}% {\default@family}{\default@series}% 173 {\default@shape}}% \expandafter\let\csname#1-cmd\endcsname\@changed@cmd 以下の 2 行が pIAT_EX 2ε による追加部分です。 \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}% \xdef\fenc@list{\fenc@list\enc@elt<#1>}% 176 \else 177 \@font@info{Redeclaring font encoding #1}% 178 179 \global\@namedef{T@#1}{#2}% 180 \global\@namedef{M@#1}{\default@M#3}% \xdef\LastDeclaredEncoding{#1}% $184 \verb|\let\DeclareFontEncoding@saved\Decla$ 次に、 \LaTeX 2018-04-01 以降の場合のコードです。 $185 \ifx\IeC\Qundefined\else$ $186\;\mbox{\%}$ for LaTeX2e with UTF-8 input. 187 \def\DeclareFontEncoding@#1#2#3{% 188 \expandafter \ifx\csname T@#1\endcsname\relax 189 190 \def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}% \xdef\cdp@list{\cdp@list\cdp@elt{#1}% 191

193

{\default@family}{\default@series}%

{\default@shape}}%

IFT_EX 2_{ε} 2018-04-01 で、既定の欧文入力エンコーディングが UTF-8 になりました。これは、latex.ltxがutf8.def(従来はIFT_EX ソースに \usepackage [utf8] {inputenc} と書いたときに読み込まれていたもの)を読み込むことで実現されています。utf8.def は \DeclareFontEncoding@ を再定義するので、これに合わせるためのコードを追加します。

```
195
         \begingroup
           \wlog{Now handling font encoding #1 ...}%
196
197
           \lowercase{%
             \InputIfFileExists{#1enc.dfu}}%
198
                {\boldsymbol{\omega}} {\wlog{... processing UTF-8 mapping file for font %
199
                            encoding #1}}%
200
201
                {\wlog{... no UTF-8 mapping file for font encoding #1}}%
202
         \endgroup
以下の 2 行が pLATEX 2_{\varepsilon} による追加部分です。
         \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}%
203
204
         \xdef\fenc@list{\fenc@list\enc@elt<#1>}%
205
     \else
206
        \@font@info{Redeclaring font encoding #1}%
207
208
     \left( T0#1 \right) = 1
     \global\@namedef{M@#1}{\default@M#3}%
209
     \xdef\LastDeclaredEncoding{#1}%
210
211
212 \fi
213 (/plcore | platexrelease)
215 \platexrelease\\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\DeclareFontEncoding@}
216 (platexrelease)
                                     {ASCII Corporation original}%
217 ⟨platexrelease⟩\def\DeclareFontEncoding@#1#2#3{%
218 \langle platexrelease \rangle
                  \expandafter
219 (platexrelease)
                  \ifx\csname T@#1\endcsname\relax
220 (platexrelease)
                      \def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}%
221 (platexrelease)
                      \xdef\cdp@list{\cdp@list\cdp@elt{#1}%
222 (platexrelease)
                                      {\default@family}{\default@series}%
223 (platexrelease)
                                      {\default@shape}}%
224 (platexrelease)
                      \expandafter\let\csname#1-cmd\endcsname\@changed@cmd
225 (platexrelease)
                      \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}%
226 (platexrelease)
                     \xdef\fenc@list{\fenc@list\enc@elt<#1>}%
227~\langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                  \else
228 (platexrelease)
                      \@font@info{Redeclaring font encoding #1}%
229 (platexrelease)
230 (platexrelease)
                  \left( T0#1 \right) = 1
231 (platexrelease)
                  \global\@namedef{M@#1}{\default@M#3}%
232 (platexrelease)
                  \xdef\LastDeclaredEncoding{#1}%
```

```
233 (platexrelease) }
                             234 (platexrelease)\let\DeclareFontEncoding@saved\@undefined
                             235 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                             236 (*plcore)
                            和文エンコードの宣言をするコマンドです。
     \DeclareKanjiEncoding
                             237 \def\DeclareKanjiEncoding#1{%
\DeclareYokoKanjiEncoding
                                  \@latex@warning{%
\DeclareYokoKanjiEncoding@
                                     The \string\DeclareKanjiEncoding\space is obsoleted command. Please use
                             239
\DeclareTateKanjiEncoding
                            240
                                     \MessageBreak
                                     the \string\DeclareTateKanjiEncoding\space for 'Tate-kumi' encoding, and
                             241
\DeclareTateKanjiEncoding@
                                     \MessageBreak
                             242
                                     the \string\DeclareYokoKanjiEncoding\space for 'Yoko-kumi' encoding.
                             243
                             244
                                     \MessageBreak
                                     I treat the '#1' encoding as 'Yoko-kumi'.}
                             245
                                  \DeclareYokoKanjiEncoding{#1}%
                             246
                             247 }
                             248 \def\DeclareYokoKanjiEncoding{%
                             ^{249}
                                  \begingroup
                             250
                                  \nfss@catcodes
                                  \expandafter\endgroup
                             251
                                  \DeclareYokoKanjiEncoding@}
                             252
                             253 %
                             254 \def\DeclareYokoKanjiEncoding@#1#2#3{%
                             255
                                  \expandafter
                                  \ifx\csname T@#1\endcsname\relax
                             256
                                    \def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}%
                             257
                                    \xdef\cdp@list{\cdp@list\cdp@elt{#1}%
                             258
                                                     {\default@k@family}{\default@k@series}%
                             259
                             260
                                                     {\default@k@shape}}%
                                    \expandafter\let\csname#1-cmd\endcsname\@changed@kcmd
                             261
                                    \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}%
                             262
                                    \xdef\kyenc@list{\kyenc@list\enc@elt<#1>}%
                             263
                                    \xdef\kenc@list{\kenc@list\enc@elt<#1>}\%
                             264
                             265
                                  \else
                             266
                                    \OfontOinfo{Redeclaring KANJI (yoko) font encoding #1}%
                             267
                                  \global\ensuremath{\mathchar`e}\T0#1\{\#2}\%
                                  \global\@namedef{M@#1}{\default@KM#3}%
                             270
                             271 %
                             272 \def\DeclareTateKanjiEncoding{%
                                  \begingroup
                                  \nfss@catcodes
                             274
                             275
                                  \expandafter\endgroup
                                  \DeclareTateKanjiEncoding@}
                             276
                             277 %
                             278 \def\DeclareTateKanjiEncoding@#1#2#3{%
                                  \expandafter
```

\ifx\csname T@#1\endcsname\relax

```
\xdef\cdp@list{\cdp@list\cdp@elt{#1}%
                                                                 282
                                                                                                                  {\default@k@family}{\default@k@series}%
                                                                 283
                                                                                                                  {\default@k@shape}}%
                                                                 284
                                                                                \expandafter\let\csname#1-cmd\endcsname\@changed@kcmd
                                                                 285
                                                                                \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}%
                                                                 286
                                                                                \xdef\ktenc@list{\ktenc@list\enc@elt<#1>}%
                                                                 287
                                                                                \xdef\kenc@list{\kenc@list\enc@elt<#1>}%
                                                                 288
                                                                 289
                                                                            \else
                                                                                \OfontOinfo{Redeclaring KANJI (tate) font encoding #1}%
                                                                 290
                                                                 291
                                                                            \global\ensuremath{\mbox{Qnamedef{T0#1}{\#2}}\%
                                                                 292
                                                                            \global\@namedef{M@#1}{\default@KM#3}%
                                                                 293
                                                                 294
                                                                 295 %
                                                                 296 \@onlypreamble\DeclareKanjiEncoding
                                                                 297 \@onlypreamble\DeclareYokoKanjiEncoding
                                                                 298 \@onlypreamble\DeclareYokoKanjiEncoding@
                                                                 {\tt 299 \ \ \ \ \ \ } \textbf{ Conlypreamble \ \ \ \ } \textbf{ DeclareTateKanjiEncoding}
                                                                 300 \@onlypreamble\DeclareTateKanjiEncoding@
                                                                 和文エンコードのデフォルト値を宣言するコマンドです。\DeclareFontEncodingDefaults
\DeclareKanjiEncodingDefaults
                                                                 に相当します。
                                                                 301 \def\DeclareKanjiEncodingDefaults#1#2{%
                                                                           \ifx\relax#1\else
                                                                 302
                                                                                \ifx\default@KT\@empty\else
                                                                 303
                                                                                     \OfontOinfo{Overwriting KANJI encoding scheme text defaults}%
                                                                 304
                                                                 305
                                                                                \fi
                                                                                \gdef\default@KT{#1}%
                                                                 306
                                                                 307
                                                                            \fi
                                                                            \ifx\relax#2\else
                                                                 308
                                                                                \ifx\default@KM\@empty\else
                                                                 310
                                                                                     \@font@info{Overwriting KANJI encoding scheme math defaults}%
                                                                 311
                                                                 312
                                                                                \gdef\default@KM{#2}%
                                                                 313
                                                                            fi
                                                                 314 \left( \text{default@KT} \right)
                                                                 315 \let\default@KM\@empty
                                                                 316 \Conlypreamble \DeclareKanji Encoding Defaults
                                                              和文の縦横のエンコーディングはそれぞれ対にして扱うため、セット化するための
                       \KanjiEncodingPair
                                                                  コマンドを定義します。第一引数が横組用、第二引数が縦組用です。
                                                                 317 \end{figure} 17 \end{fig
                                                                 横書きと縦書きのエンコーディングは必ず \KanjiEncodingPair でセット化しない
        \ensure@KanjiEncodingPair
                                                                  と使えません。もしセット化されていなければ、明快なエラーで知らせます。
                                                                 318 (/plcore)
                                                                 319 \(\rangle\) plincludeInRelease\(\rangle\) (\rangle\) (\rangle\) nsure\(\text{KanjiEncodingPair\)
                                                                 File b: plfonts.dtx Date: 2020/04/07 Version v1.7f
```

\def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}%

281

```
320 (platexrelease)
                                                                                                       {Check \KanjiEncodingPair}%
321 (*plcore | platexrelease)
322 \def\ensure@KanjiEncodingPair#1{%
               \label{lem:condingendesname} $$\encoding\endsname} % $$ \operatorname{loencoding\endsname} % $$ \encoding\endsname} % $$ \encoding\
               \edef\reserved@b{\csname c#1@encoding\endcsname}%
\reserved@a は、セット化が有効ならエンコードを表す文字トークン列、無効なら
\relax と同義の制御綴に展開されるマクロです。ここで、\ifcat(展開不能トー
クンが現れるまで展開してから比較)を使います。
               \ifcat\relax\reserved@a
                     \@latex@error
                           {KANJI Encoding pair for '\k@encoding' undefined}%
327
328
                            {Use \string\KanjiEncodingPair, falling back to '\reserved@b'...}%
                     \expandafter\edef\reserved@a{\reserved@b}%
329
               fi
330
331 (/plcore | platexrelease)
332 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
334 (platexrelease)
                                                                                                       {ASCII Corporation original}%
336 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
337 (*plcore)
```

5.2.2 ファミリの宣言

\DeclareFontFamily 欧文ファミリを宣言するためのコマンドです。\ffam@list を作るように再定義をします。

```
338 \def\DeclareFontFamily#1#2#3{%
339 \@ifundefined{T@#1}%
       {\@latex@error{Encoding scheme '#1' unknown}\@eha}%
340
       {\left(\frac{\#2}{\%}\right)}
341
342
        \expandafter\expandafter\expandafter
        \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ffam@list}%
343
344
        \ifin@ \else
            \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}%
346
            \xdef\ffam@list{\ffam@list\fam@elt<#2>}%
        \fi
347
        \def\reserved@a{#3}%
348
        \global
349
350
        \expandafter\let\csname #1+#2\expandafter\endcsname
                \ifx \reserved@a\@empty
351
                  \@emptv
352
353
                \else \reserved@a
354
                \fi
355
       }%
356 }
```

\DeclareKanjiFamily 和文ファミリを宣言するためのコマンドです。

```
357 \def\DeclareKanjiFamily#1#2#3{%
                                                                          \@ifundefined{T@#1}%
                                                                                  {\@latex@error{KANJI Encoding scheme '#1' unknown}\@eha}%
                                                                360
                                                                                  {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
                                                                                    \expandafter\expandafter\expandafter
                                                                361
                                                                                    \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kfam@list}%
                                                                362
                                                                363
                                                                                    \ifin@ \else
                                                                                            \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}%
                                                                364
                                                                                            \xdef\kfam@list{\kfam@list\fam@elt<#2>}%
                                                                365
                                                                                    \fi
                                                                366
                                                                                    \def\reserved@a{#3}%
                                                                367
                                                                368
                                                                                    \global
                                                                                    \expandafter\let\csname #1+#2\expandafter\endcsname
                                                                                                     \ifx \reserved@a\@empty
                                                                370
                                                                371
                                                                                                          \@empty
                                                                372
                                                                                                     \else \reserved@a
                                                                373
                                                                                                     \fi
                                                                374
                                                                                   }%
                                                                375 }
\DeclareKanjiSubstitution 目的の和文フォントが見つからなかったときに使う代用書体の宣言をするコマンド
                                                                です。\DeclareFontSubstitutionに相当します。
                                                                376 (/plcore)
                                                                377 \langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease \{2020/04/12\} \{\DeclareKanjiSubstitution\}
                                                                                                                                                  {Use \default@k@family etc.}%
                                                                378 (platexrelease)
                                                                379 (*plcore | platexrelease)
                                                                380 \def\DeclareKanjiSubstitution#1#2#3#4{%
                                                                             \expandafter\ifx\csname T@#1\endcsname\relax
                                                                                  \@latex@error{KANJI Encoding scheme '#1' unknown}\@eha
                                                                382
                                                                383
                                                                             \else
                                                                                  \begingroup
                                                                384
                                                                                         \def\reserved@a{\#1}%
                                                                385
                                                                                         \t 0{s@{}}%
                                                                386
                                                                                         \def\cdp@elt##1##2##3##4{%
                                                                387
                                                                                              \def\reserved@b{##1}%
                                                                388
                                                                                             \ifx\reserved@a\reserved@b
                                                                389
                                                                                                   391
                                                                392
                                                                                                   \label{local} $$ \addto@hook\toks@{\cdp@elt{##1}{##2}{##3}{##4}}% $$
                                                                393
                                                                                             fi}%
                                                                                         \cdp@list
                                                                394
                                                                                         395
                                                                396
                                                                                  \global\@namedef{D@#1}{\def\default@k@family{#2}% !!!
                                                                397
                                                                                                                                         \def\default@k@series{#3}% !!!
                                                                398
                                                                                                                                         \def\default@k@shape{#4}}% !!!
                                                                399
                                                                             \fi}
                                                                401 (/plcore | platexrelease)
```

```
404 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                                                    {ASCII Corporation original}%
                                                                                              405 ⟨platexrelease⟩\def\DeclareKanjiSubstitution#1#2#3#4{%
                                                                                              406 (platexrelease)
                                                                                                                                                               \expandafter\ifx\csname T@#1\endcsname\relax
                                                                                              407 (platexrelease)
                                                                                                                                                                         \@latex@error{KANJI Encoding scheme '#1' unknown}\@eha
                                                                                              408 (platexrelease)
                                                                                                                                                                 \else
                                                                                              409 (platexrelease)
                                                                                                                                                                         \begingroup
                                                                                              410 \langle platexrelease \rangle
                                                                                                                                                                                     \def\reserved@a{#1}%
                                                                                                                                                                                     \toks@{}%
                                                                                              411 (platexrelease)
                                                                                              412 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                     \def\cdp@elt##1##2##3##4{%
                                                                                              413 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                             \def\reserved@b{##1}%
                                                                                              414 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                            \ifx\reserved@a\reserved@b
                                                                                              415 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                    416 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                            \else
                                                                                              417 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                    \addto@hook\toks@{\cdp@elt{##1}{##2}{##3}{##4}}%
                                                                                              418 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                            fi}%
                                                                                              419 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                     \cdp@list
                                                                                              420 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                     \xdef\cdp@list{\the\toks@}%
                                                                                              421 \langle platexrelease \rangle
                                                                                                                                                                         \endgroup
                                                                                              422 (platexrelease)
                                                                                                                                                                         \label{local_enamedef} $$ \left(D@#1\right)_{\def\default@family{#2}\%} $$
                                                                                              423 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                                                                                   \def\default@series{#3}%
                                                                                              424 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                                                                                   \def\default@shape{#4}}%
                                                                                              425 (platexrelease) \fi}
                                                                                              426 \placetalendIncludeInRelease
                                                                                              427 (platexrelease)% !!! Special case BEGIN
                                                                                              428 \langle platexrelease \rangle \% required for any emulation date
                                                                                              429 (platexrelease)% copied from (u)pldefs.ltx
                                                                                              430 \(\rangle place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\place{\proce{\place{\proce{\place{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\proce{\pr
                                                                                              431 \label{lem:lemma:lemma:substitution} 431 \label{lem:lemma:lemma:substitution} 431 \label{lem:lemma:substitution} 43
                                                                                              432 \langle platexrelease \rangle \setminus MeclareKanjiSubstitution{JT1}{mc}{m}{n}
                                                                                              434 \langle platexrelease \rangle \DeclareKanjiSubstitution{JY2}{mc}{m}{n}
                                                                                              435 (platexrelease)\DeclareKanjiSubstitution{JT2}{mc}{m}{n}
                                                                                              436 <platexrelease \fi\fi
                                                                                              437 (platexrelease)% emulate execution of \enc@update in \selectfont
                                                                                              438 (platexrelease)% before (u)pldefs.ltx is loaded
                                                                                              439 (platexrelease)\csname D@\f@encoding\endcsname
                                                                                              440 \langle platexrelease \rangle \% emulate execution of \kenc@update in \selectfont
                                                                                              441 \langle platexrelease \rangle \% inside (u)pldefs.ltx
                                                                                              442 \langle platexrelease \rangle \csname D@\k@encoding\endcsname
                                                                                              443 \langle platexrelease \rangle \% !!! Special case END
                                                                                              444 (*plcore)
                                                                                              445 \@onlypreamble\DeclareKanjiSubstitution
                                                                                             \DeclareErrorFont に対応するコマンドです。代用書体で示された書体も見つから
\DeclareErrorKanjiFont
                                                                                              なかったときに最後の手段として使われるエラー書体を定義します。
                                                                                              446 (/plcore)
                                                                                              447 \(\rangle platexrelease \)\(\rangle \)\(\rangle platexrelease \)\(
                                                                                              448 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                                                    {No side effects please}%
```

403 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\DeclareKanjiSubstitution}

```
450 \def\DeclareErrorKanjiFont#1#2#3#4#5{%
                                                         \xdef\error@kfontshape{%
                                                               \noexpand\expandafter\noexpand\split@name\noexpand\string
                                            452
                                                               \ensuremath{\texttt{vexpandafter} \ensuremath{\texttt{noexpand} \ensuremath{\texttt{csname}}}1/\#2/\#3/\#4/\#5\endcsname}
                                            453
                                            454
                                                               \noexpand\@nil}%
                                                         \gdef\default@k@family{#2}%
                                            455
                                            456
                                                         \gdef\default@k@series{#3}%
                                                         \gdef\default@k@shape{#4}%
                                            457
                                                         }
                                            458
                                            459 (/plcore | platexrelease)
                                            460 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                                            461 \(\rangle\)plIncludeInRelease\(\rangle\)000/00\(\rangle\)DeclareErrorKanjiFont\)
                                            462 (platexrelease)
                                                                                                                   {ASCII Corporation original}%
                                            463 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle def \rangle DeclareError Kanji Font #1 #2 #3 #4 #5 \{ \( \lambda \)
                                            464 (platexrelease)
                                                                                  \xdef\error@kfontshape{%
                                                                                        \noexpand\expandafter\noexpand\split@name\noexpand\string
                                            465 (platexrelease)
                                            466 (platexrelease)
                                                                                        467 (platexrelease)
                                                                                        \noexpand\@nil}%
                                            468 (platexrelease)
                                                                                  \gdef\default@k@family{#2}%
                                            469 (platexrelease)
                                                                                  \gdef\default@k@series{#3}%
                                            470 (platexrelease)
                                                                                  \gdef\default@k@shape{#4}%
                                            471 (platexrelease)
                                                                                  \global\let\k@family\default@k@family
                                            472 (platexrelease)
                                                                                  \global\let\k@series\default@k@series
                                            473 (platexrelease)
                                                                                  \global\let\k@shape\default@k@shape
                                            474 (platexrelease)
                                                                                  \gdef\f@size{#5}%
                                            475 (platexrelease)
                                                                                  \gdef\f@baselineskip{#5pt}}
                                            477 \langle *plcore \rangle
                                            478 \@onlypreamble\DeclareErrorKanjiFont
                                            \wrong@fontshapeを和文対応にします。\DeclareKanjiSubstitutionで\default@k@...
      \wrong@fontshape
                                            を使用する改良と同時でなければなりません。
\wrong@al@fontshape
                                                オリジナルの LATEX の定義は、欧文用として使います。
\wrong@ja@fontshape
                                            479 (/plcore)
                                            480 \(\rangle\) \(p\lambda\) \(
                                            481 (platexrelease)
                                                                                                                   {Japanese \wrong@fontshape}%
                                            482 (*plcore | platexrelease)
                                            483 \def\wrong@al@fontshape{%
                                            484
                                                           \csname D@\f@encoding\endcsname
                                                                                                                                  % install defaults if in math
                                            485
                                                           \edef\reserved@a{\csname\curr@fontshape\endcsname}%
                                                      \verb|\ifx\last@fontshape\reserved@a|
                                            486
                                                             \errmessage{Corrupted NFSS tables}%
                                            487
                                                             \error@fontshape
                                            488
                                            489
                                                      \else
                                            490
                                                           \let\f@shape\default@shape
                                                           \expandafter\ifx\csname\curr@fontshape\endcsname\relax
                                            491
                                                                  \let\f@series\default@series
                                            492
                                            493
                                                                   \expandafter
```

449 (*plcore | platexrelease)

```
494
             \ifx\csname\curr@fontshape\endcsname\relax
              \let\f@family\default@family
495
496
              \begingroup
497
                  \try@load@fontshape
498
              \endgroup
           \fi \fi
499
     \fi
500
        \@font@warning{Font shape '\expandafter\string\reserved@a'
501
                         \expandafter\@gobble\string\@undefined\MessageBreak
502
                       using '\curr@fontshape' instead\@wrong@font@char}%
503
504
       \global\let\last@fontshape\reserved@a
       \gdef\@defaultsubs{%
505
         \@font@warning{Some font shapes were not available, defaults
506
                          substituted.\@gobbletwo}}%
507
508
       \global\expandafter\expandafter\expandafter\let
          \expandafter\reserved@a
509
              \csname\curr@fontshape\endcsname
510
       \xdef\font@name{%
511
         \csname\curr@fontshape/\f@size\endcsname}%
512
513
       \pickup@font}
和文用の定義です。
514 \def\wrong@ja@fontshape{%
                                          % install defaults if in math
       \csname D@\f@encoding\endcsname
515
       \edef\reserved@a{\csname\curr@fontshape\endcsname}%
516
     \ifx\last@fontshape\reserved@a
517
        \errmessage{Corrupted NFSS tables}%
518
        \error@fontshape
519
520
     \else
521
       \let\f@shape\default@k@shape % !!!
522
       \expandafter\ifx\csname\curr@fontshape\endcsname\relax
523
          \let\f@series\default@k@series % !!!
524
           \expandafter
             \ifx\csname\curr@fontshape\endcsname\relax
525
              \let\f@family\default@k@family % !!!
526
527
              \begingroup
                 \try@load@fontshape
528
529
              \endgroup
           \fi \fi
530
531
        \Ofont@warning{Font shape '\expandafter\string\reserved@a'
532
                         \expandafter\@gobble\string\@undefined\MessageBreak
533
                       using '\curr@fontshape' instead\@wrong@font@char}%
534
535
       \global\let\last@fontshape\reserved@a
536
       \gdef\@defaultsubs{%
         \@font@warning{Some font shapes were not available, defaults
537
                          substituted.\@gobbletwo}}%
538
       \global\expandafter\expandafter\expandafter\let
539
540
          \expandafter\reserved@a
              \csname\curr@fontshape\endcsname
541
```

```
542
        \xdef\font@name{%
          \csname\curr@fontshape/\f@size\endcsname}%
543
        \pickup@font}
544
そして、エンコーディングに応じて欧文用と和文用を使い分けます。
545 \def\wrong@fontshape{%
     \edef\tmp@item{{\f@encoding}}%
     \expandafter\expandafter\expandafter
547
     \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kenc@list}%
548
     \ifin@
550
        \wrong@ja@fontshape
551
     \else
        \wrong@al@fontshape
552
     \fi
553
554 }
555 (/plcore | platexrelease)
556 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
557 \ \langle platexrelease \rangle \ \ linclude In Release \{ 2015/01/01 \} \{ \ \ \ \ \ \ \ \} \} 
558 (platexrelease)
                                      {LaTeX2e original (2015)}%
559 (platexrelease)\def\wrong@fontshape{%
560 (platexrelease)
                     \csname D@\f@encoding\endcsname
                                                           % install defaults if in math
561 (platexrelease)
                     \edef\reserved@a{\csname\curr@fontshape\endcsname}%
562 (platexrelease)
                   \ifx\last@fontshape\reserved@a
563 (platexrelease)
                      \errmessage{Corrupted NFSS tables}%
564 (platexrelease)
                      \error@fontshape
565 (platexrelease)
                   \else
566 (platexrelease)
                     \let\f@shape\default@shape
567 (platexrelease)
                     \expandafter\ifx\csname\curr@fontshape\endcsname\relax
568 (platexrelease)
                         \let\f@series\default@series
569 (platexrelease)
                          \expandafter
570 (platexrelease)
                            \ifx\csname\curr@fontshape\endcsname\relax
571 (platexrelease)
                             \let\f@family\default@family
572 (platexrelease)
                             \begingroup
573 (platexrelease)
                                \try@load@fontshape
574 \; \langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                             \endgroup
575 \langle platexrelease \rangle
                          \fi \fi
                   \fi
576 (platexrelease)
577 (platexrelease)
                      \@font@warning{Font shape '\expandafter\string\reserved@a'
578 (platexrelease)
                                        \expandafter\@gobble\string\@undefined\MessageBreak
                                      using '\curr@fontshape' instead\@wrong@font@char}%
579 (platexrelease)
580 (platexrelease)
                     \global\let\last@fontshape\reserved@a
581 (platexrelease)
                     \gdef\@defaultsubs{%
582 (platexrelease)
                       \Ofont@warning{Some font shapes were not available, defaults
583 (platexrelease)
                                         substituted.\@gobbletwo}}%
584 (platexrelease)
                     \global\expandafter\expandafter\expandafter\let
585 (platexrelease)
                        \expandafter\reserved@a
586 (platexrelease)
                             \csname\curr@fontshape\endcsname
                     \xdef\font@name{%
587 (platexrelease)
588 (platexrelease)
                       \csname\curr@fontshape/\f@size\endcsname}%
```

\pickup@font}

589 (platexrelease)

```
592 \plEndIncludeInRelease
                                      593 \ \langle platexrelease \rangle \ volume In Release \{0000/00/00\} \{\ vong@fontshape\} \} 
                                                                                                            {LaTeX2e original (old)}%
                                      594 (platexrelease)
                                      595 (platexrelease)\def\wrong@fontshape{%
                                      596 (platexrelease)
                                                                             \csname D@\f@encoding\endcsname
                                      597 (platexrelease)
                                                                             \edef\reserved@a{\csname\curr@fontshape\endcsname}%
                                      598 (platexrelease)
                                                                         \ifx\last@fontshape\reserved@a
                                      599 (platexrelease)
                                                                               \errmessage{Corrupted NFSS tables}%
                                      600 (platexrelease)
                                                                               \error@fontshape
                                      601 (platexrelease)
                                                                         \else
                                      602 (platexrelease)
                                                                             \let\f@shape\default@shape
                                      603 (platexrelease)
                                                                             \expandafter\ifx\csname\curr@fontshape\endcsname\relax
                                      604 (platexrelease)
                                                                                    \let\f@series\default@series
                                      605 (platexrelease)
                                                                                      \expandafter
                                                                                         \ifx\csname\curr@fontshape\endcsname\relax
                                      606 (platexrelease)
                                      607 \langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                                                                                           \let\f@family\default@family
                                      608 (platexrelease)
                                                                                     \fi \fi
                                      609 (platexrelease)
                                                                         \fi
                                      610 (platexrelease)
                                                                               \@font@warning{Font shape
                                      611 (platexrelease)
                                                                                              '\expandafter\string\reserved@a'
                                                                                             \expandafter\@gobble\string\@undefined
                                      612 (platexrelease)
                                      613 (platexrelease)
                                                                                             using '\curr@fontshape' instead\@wrong@font@char}%
                                      614 (platexrelease)
                                      615 (platexrelease)
                                                                             \global\let\last@fontshape\reserved@a
                                      616 (platexrelease)
                                                                             \gdef\@defaultsubs{%
                                      617 (platexrelease)
                                                                                 \OfontOwarning{Some font shapes were not available,
                                      618 (platexrelease)
                                                                                                                   defaults substituted.\@gobbletwo}}%
                                      619 (platexrelease)
                                                                             \global\expandafter\expandafter\expandafter\let
                                      620 (platexrelease)
                                                                                   \expandafter\reserved@a
                                      621 (platexrelease)
                                                                                           \csname\curr@fontshape\endcsname
                                      622 (platexrelease)
                                                                             \xdef\font@name{%
                                      623 (platexrelease)
                                                                                 \csname\curr@fontshape/\f@size\endcsname}%
                                      624 (platexrelease)
                                                                             \pickup@font}
                                      625 (platexrelease)\let\wrong@al@fontshape\@undefined
                                      628 (*plcore)
                                      フォント名を宣言するコマンドです。エンコード/ファミリ/シリーズ/シェイプ
\DeclareFixedFont
                                      /サイズの5つの属性を一度に切り替えるためのコマンドを定義できます。
                                      629 \def\DeclareFixedFont#1#2#3#4#5#6{%
                                                   \begingroup
                                      630
                                      631
                                                         \let\afont\font
                                      632
                                                         \math@fontsfalse
                                                         \every@math@size{}%
                                      633
                                                         \int fontsize{#6}\z@
                                      634
                                      635
                                                         \egin{align*} \egin{align*}
```

590 (platexrelease)\let\wrong@al@fontshape\@undefined

```
\expandafter\expandafter\expandafter
                                                                                                                               636
                                                                                                                                                                    \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kyenc@list}%
                                                                                                                               637
                                                                                                                               638
                                                                                                                                                                            \usekanji{#2}{#3}{#4}{#5}%
                                                                                                                               639
                                                                                                                                                                            \let\font\jfont
                                                                                                                               640
                                                                                                                               641
                                                                                                                                                                     \else
                                                                                                                                                                            \expandafter\expandafter\expandafter
                                                                                                                               642
                                                                                                                                                                            \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ktenc@list}%
                                                                                                                               643
                                                                                                                               644
                                                                                                                                                                                     \usekanji{#2}{#3}{#4}{#5}%
                                                                                                                               645
                                                                                                                                                                                     \let\font\tfont
                                                                                                                               646
                                                                                                                               647
                                                                                                                                                                                     \useroman{#2}{#3}{#4}{#5}%
                                                                                                                               648
                                                                                                                                                                                     \let\font\afont
                                                                                                                               649
                                                                                                                               650
                                                                                                                                                                     \fi
                                                                                                                               651
                                                                                                                                                                     \global\expandafter\let\expandafter#1\the\font
                                                                                                                               652
                                                                                                                                                                    \let\font\afont
                                                                                                                               653
                                                                                                                               654
                                                                                                                                                        \endgroup
                                                                                                                               655
                                                                                                                              \font は欧文フォントを返すため、LATEX の元の \do@subst@correction は和文
                                       \do@subst@correction
                                                                                                                               フォントに対して使えませんので、和文に対応させます1。
                                                                                                                                        オリジナルの IATEX の定義は、欧文用として使います。
\pltx@do@subst@correction@tate
                                                                                                                              656 (/plcore)
                                                                                                                               657 \ \langle platexrelease \rangle \\ \ plIncludeInRelease \{2020/04/12\} \\ \ \langle platexrelease \rangle \\ \ \rho lIncludeInRelease \{2020/04/12\} \\ \ \langle platexrelease \rangle \\ \ \langle plate
                                                                                                                               658 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                                                                                       {Japanese font substitution}%
                                                                                                                               659 (*plcore | platexrelease)
                                                                                                                               660 \def\pltx@do@subst@correction@al{%
                                                                                                                                                                        \xdef\subst@correction{%
                                                                                                                               662
                                                                                                                                                                                   \font@name
                                                                                                                               663
                                                                                                                                                                                     \global\expandafter\font
                                                                                                                               664
                                                                                                                                                                                            \csname \curr@fontshape/\f@size\endcsname
                                                                                                                               665
                                                                                                                                                                                            \noexpand\fontname\font
                                                                                                                                                                                        \relax}%
                                                                                                                               666
                                                                                                                               667
                                                                                                                                                                        \aftergroup\subst@correction
                                                                                                                               668 }
```

和文横組用と和文縦組用の定義では、それぞれ\jfontと\tfontを使います。

669 \def\pltx@do@subst@correction@yoko{% 670 \xdef\subst@correction{%

\pltx@do@subst@correction@al

\pltx@do@subst@correction@yoko

 $^{^{1}\}mathrm{pIAT_{FX}}\,2arepsilon\,2020-04-12$ で対応。元のアスキー版の文書にも第5.1.3 節で $ackstyle{1}$ を日本語対応させた旨が書かれていましたが、実際にはこの命令は

^{• \}selectfont 内の \pickup@font から呼ばれる場合

^{• \}getanddefine@fonts 内の \pickup@font から呼ばれる場合

の2通りがあるようです。前者は \let\font\jfont によって対処できていましたが、後者は未対策だっ たため、例えば和文数式フォントを定義した状態で bm パッケージを使った場合に問題が起きていまし た (参考: texjporg/jsclasses#53)。

```
671
            \font@name
            \global\expandafter\jfont
672
              \csname \curr@fontshape/\f@size\endcsname
674
              \noexpand\fontname\jfont
675
             \relax}%
         \aftergroup\subst@correction
676
677 }
678 \def\pltx@do@subst@correction@tate{%
         \xdef\subst@correction{%
679
            \font@name
680
            \global\expandafter\tfont
681
              \csname \curr@fontshape/\f@size\endcsname
682
              \noexpand\fontname\tfont
             \relax}%
685
         \aftergroup\subst@correction
686 }
そして、エンコーディングに応じて3つの命令を使い分けます。
687 \def\do@subst@correction{%
    \edef\tmp@item{{\f@encoding}}%
    \expandafter\expandafter\expandafter
    \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kyenc@list}%
690
691
    \ifin@\pltx@do@subst@correction@yoko
692
      \expandafter\expandafter\expandafter
693
      \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ktenc@list}%
694
      \ifin@\pltx@do@subst@correction@tate\else
695
        \pltx@do@subst@correction@al
696
697
      \fi
698
    \fi
699 }
700 (/plcore | platexrelease)
701 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
703 (platexrelease)
                                {LaTeX2e original}%
704 \langle platexrelease \rangle \def\do@subst@correction{%}
                    \xdef\subst@correction{%
705 (platexrelease)
706 (platexrelease)
                       \font@name
                       \global\expandafter\font
707 (platexrelease)
                         \csname \curr@fontshape/\f@size\endcsname
708 (platexrelease)
709 (platexrelease)
                         \noexpand\fontname\font
710 (platexrelease)
                        \relax}%
711 (platexrelease)
                    \aftergroup\subst@correction
712 (platexrelease)}
715 (platexrelease)\let\pltx@do@subst@correction@tate\@undefined
716 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
717 (*plcore)
```

5.2.3 数式用フォント

\reDeclareMathAlphabet

数式モード内で、数式文字用の和欧文フォントを同時に切り替えるコマンドです。 $pIATEX 2\varepsilon$ には、本来の動作モードと 2.09 互換モードの二つがあり、両モードで数式文字を変更するコマンドや動作が異なります。本来の動作モードでは、\mathrm{...} のように \math??に引数を指定して使います。このときは引数にだけ影響します。 2.09 互換モードでは、\rm のような二文字コマンドを使います。このコマンドには引数を取らず、書体はグルーピングの範囲で反映されます。二文字コマンドは、ネイティブモードでも使えるようになっていて、動作も 2.09 互換モードのコマンドと同じです。

しかし、内部的には \math??という一つのコマンドがすべての動作を受け持ち、 \math??コマンドや \??コマンドから呼び出された状態に応じて、動作を変えています。したがって、欧文フォントと和文フォントの両方を一度に変更する、数式文字変更コマンドを作るとき、それぞれの状態に合った動作で動くようにフォント切り替えコマンドを実行させる必要があります。

使い方

usage: \reDeclareMathAlphabet{\mathAA}{\mathBB}{\mathCC}

欧文・和文両用の数式文字変更コマンド \mathAA を (再) 定義します。欧文用のコマンド \mathBB と、和文用の \mathCC を (p)IFTEX 標準の方法で定義しておいた後、上のように記述します。なお、{\mathBB}{\mathCC} の部分については {\@mathBB}{\@mathCC} のように @ をつけた記述をしてもかまいません (互換性のため)。上のような命令を発行すると、\mathAA が、欧文に対しては \mathBB、 和文に対しては \mathCC の意味を持つようになります。通常は、\reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm} \mathrm \one nように AA=BB として用います。また、\mathrm は IFTEX kernel において標準のコマンドとして既に定義されているので、この場合は \mathrm の再定義となります。native mode での \rm のような two letter command (old font command) に対しても同様なことが引きおこります。つまり、数式モードにおいて、新たな \rm は、IFTEX originalの \rm と \mc (正確に言えば \mathrm と \mathrm と \mathrm であるが) の意味を合わせ持つようになります。

補足

- \mathAA を再定義する他の命令 (\DeclareSymbolFontAlphabet を用いるパッケージの使用等) との衝突を避けるためには、\AtBeginDocument を併用するなどして展開位置の制御を行ってください。
- テキストモード時のエラー表示用に \mathBB のみを用いることを除いて、 \mathBB と \mathCC の順は実際には意味を持ちません。和文、欧文の順に定

義しても問題はありません。

- 第 2,3 引き数には {\@mathBB}{\@mathCC} のように @ をつけた記述も行えます。ただし、形式は統一してください。判断は第 2 引き数で行っているため、 {\@mathBB}{\mathCC} のような記述ではうまく動作しません。また、\makeatletter な状態で {\@mathBB }{\@mathCC } のような @ と余分なスペースをつけた場合には無限ループを引き起こすことがあります。このような記述は避けるようにして下さい。
- \reDeclareMathAlphabet を実行する際には、\mathBB, \mathCC が定義されている必要はありません。実際に \mathAA を用いる際にはこれらの \mathBB, \mathCC が (p)I4TFX 標準の方法で定義されている必要があります。
- 他の部分で \mathAA を全く定義しない場合を除き、\mathAA は \reDeclareMathAlphabet を実行する以前で (p)IATEX 標準の方法で定義されている必要があります (\mathrm や \mathbf の標準的なコマンドは、IATEX kernel で既に定義されています)。 \DeclareMathAlphabet の場合には、\reDeclareMathAlphabet よりも前で1度 \mathAA を定義してあれば、\reDeclareMathAlphabet の後ろで再度 \DeclareMathAlphabet を用いて \mathAA の内部の定義内容を変更することには問題ありません。 \DeclareSymbolFontAlphabet の場合、再定義においても \mathAA が直接定義されるので、\mathAA に対する最後の\DeclareSymbolFontAlphabet のさらに後で \reDeclareMathAlphabet を実行しなければ有効とはなりません。
- \documentstyle の互換モードの場合、\rm 等の two letter command (old font command) は、\reDeclareMathAlphabet とは関連することのない別個のコマンドとして定義されます。従って、この場合には \reDeclareMathAlphabet を用いても \rm 等は数式モードにおいて欧文・和文両用のものとはなりません。

```
718 \def\reDeclareMathAlphabet#1#2#3{%
    \edef#1{\noexpand\protect\expandafter\noexpand\csname%
719
      \expandafter\@gobble\string#1\space\endcsname}%
720
    \edef\@tempa{\expandafter\@gobble\string#2}%
721
    \edef\@tempb{\expandafter\@gobble\string#3}%
722
    \edef\@tempc{\string @\expandafter\@gobbletwo\string#2}%
723
    \ifx\@tempc\@tempa%
724
      \edef\@tempa{\expandafter\@gobbletwo\string#2}%
725
      \edef\@tempb{\expandafter\@gobbletwo\string#3}%
726
727
    \expandafter\edef\csname\expandafter\@gobble\string#1\space\space\endcsname%
728
729
      {\noexpand\DualLang@mathalph@bet%
730
        {\expandafter\noexpand\csname\@tempa\space\endcsname}%
        731
```

```
732
     }%
733 }
734 \@onlypreamble\reDeclareMathAlphabet
735 \def\DualLang@mathalph@bet#1#2{%
     \relax\ifmmode
737
       \ifx\math@bgroup\bgroup%
                                     2e normal style
                                                          (\mathrm{...})
         \bgroup\let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@standard
738
       \else
739
         \ifx\math@bgroup\relax%
740
                                     2e two letter style (\rm->\mathrm)
           \let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@oldstyle
741
742
           \ifx\math@bgroup\@empty% 2.09 oldlfont style ({\mathrm ...})
743
             \let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@oldlfont
744
                                     panic! assume 2e normal style
             \bgroup\let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@standard
746
           \fi
747
         \fi
748
       \fi
749
     \else
750
       \let\DualLang@Mfontsw\@firstoftwo
751
752
     \DualLang@Mfontsw{#1}{#2}%
753
755 \def\DLMfontsw@standard#1#2#3{#1{#2{#3}}\egroup}
756 \def\DLMfontsw@oldstyle#1#2{#1\relax\@fontswitch\relax{#2}}
757 \def\DLMfontsw@oldlfont#1#2{#1\relax#2\relax}
```

5.2.4 従属書体の宣言

\DeclareRelationFont \SetRelationFont

和文書体に対する従属書体を宣言するコマンドです。**従属書体**とは、ある和文書体とペアになる欧文書体のことです。主に多書体パッケージ skfonts を用いるための仕組みです

\DeclareRelationFont コマンドの最初の4つの引数の組が和文書体の属性、その後の4つの引数の組が従属書体の属性です。

```
\DeclareRelationFont{JY1}{mc}{m}{0T1}{cmr}{m}{n}
\DeclareRelationFont{JY1}{gt}{m}{0T1}{cmr}{bx}{n}
```

上記の例は、明朝体の従属書体としてコンピュータモダンローマン、ゴシック体の従属書体としてコンピュータモダンボールドを宣言しています。カレント和文書体が\JY1/mc/m/nとなると、自動的に欧文書体が\OT1/cmr/m/nになります。また、和文書体が\JY1/gt/m/nになったときは、欧文書体が\OT1/cmr/bx/nになります。和文書体のシェイプ指定を省略するとエンコード/ファミリ/シリーズの組合せで従属書体が使われます。このときは、\selectfontが呼び出された時点でのシェイプ(\f@shape)の値が使われます。

\DeclareRelationFont の設定値はグローバルに有効です。\SetRelationFont の設定値はローカルに有効です。フォント定義ファイルで宣言をする場合は、\DeclareRelationFont を使ってください。

758 $\def\all@shape{all}%$

```
759 \def\DeclareRelationFont#1#2#3#4#5#6#7#8{%
                 \def\rel@shape{#4}%
            761
                 \ifx\rel@shape\@empty
                    \global
            762
            763
                    \expandafter\def\csname rel@#1/#2/#3/all\endcsname{%
            764
                      \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
                      \romanseries{#7}}%
            765
            766
                    \global
            767
            768
                    \expandafter\def\csname rel@#1/#2/#3/#4\endcsname{%
                      \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
            769
                      \romanseries{#7}\romanshape{#8}}%
            770
                 \fi
            771
            772 }
            773 \def\SetRelationFont#1#2#3#4#5#6#7#8{%
            774
                 \def\rel@shape{#4}%
                 \ifx\rel@shape\@empty
            775
                    \expandafter\def\csname rel@#1/#2/#3/all\endcsname{%
            776
                      \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
            777
            778
                      \romanseries{#7}}%
            779
                \else
                    \expandafter\def\csname rel@#1/#2/#3/#4\endcsname{%
            780
                      \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
            781
                      \romanseries{#7}\romanshape{#8}}%
            782
                 \fi
            783
            784 }
\if@knjcmd \if@knjcmd は欧文書体を従属書体にするかどうかのフラグです。このフラグが真
            になると、欧文書体に従属書体が使われます。
            785 \newif\if@knjcmd
           \if@knjcmd フラグは \userelfont コマンドによって、真となります。そして
\userelfont
            \selectfont 実行後には偽に初期化されます。
            786 (/plcore)
            788 (platexrelease)
                                             {Make robust}%
            789 (*plcore | platexrelease)
            790 \DeclareRobustCommand\userelfont{\@knjcmdtrue}
            791 (/plcore | platexrelease)
            792 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
            793 \ \langle platexrelease \rangle \ \ | lincludeInRelease \{0000/00/00\} \{ \ \ \ \ \ \} \}
            794 (platexrelease)
                                             {ASCII Corporation original}%
            795 (platexrelease)\def\userelfont{\@knjcmdtrue}
```

```
796 \langle platexrelease \rangle \cdot \sqrt{platexrelease} \cdot \sqrt{plat
```

5.2.5 フォントの選択

\selectfont \selectfont のオリジナルからの変更部分は、次の3点です。

- 和文書体を変更する部分
- 従属書体に変更する部分
- 和欧文のベースラインを調整する部分

\selectfont コマンドは、まず、和文フォントを切り替えます。

```
799 (/plcore)
800 \langle platexrelease | trace \rangle \rangle 1  \langle platexrelease | trace \rangle 1 
                                                                                                                 {Check \KanjiEncodingPair}%
801 (platexrelease | trace)
802 (*plcore | platexrelease | trace)
803 \DeclareRobustCommand\selectfont{%
              \let\tmp@error@fontshape\error@fontshape
804
              \let\error@fontshape\error@kfontshape
805
              \edef\tmp@item{{\k@encoding}}%
806
807
              \expandafter\expandafter\expandafter
              \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kyenc@list}%
808
                    \let\cy@encoding\k@encoding
                    \ensure@KanjiEncodingPair{t}%
811
                    \verb|\edef\ct@encoding{\csname t@encolek@encoding\endcsname}|| % \csname t@encolek@encoding\endcsname|| % \csname t@encolek@encoding|| % \csname t@encolek@encoding|| % \csname t@encolek@encoding|| % \cs
812
813
                    \expandafter\expandafter\expandafter
814
                    \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ktenc@list}%
815
                    \ifin@
816
                          \let\ct@encoding\k@encoding
817
818
                          \ensure@KanjiEncodingPair{y}%
819
                          \edef\cy@encoding{\csname y@enc@\k@encoding\endcsname}%
820
                          \@latex@error{KANJI Encoding scheme '\k@encoding' unknown}\@eha
                    \fi
822
823
              \fi
824
              \let\font\tfont
825
              \let\k@encoding\ct@encoding
              \xdef\font@name{\csname\curr@kfontshape/\f@size\endcsname}%
826
827
              \pickup@font
             \font@name
828
829
             \let\font\jfont
            \let\k@encoding\cy@encoding
              \xdef\font@name{\csname\curr@kfontshape/\f@size\endcsname}%
              \pickup@font
```

```
\font@name
833
    \expandafter\def\expandafter\k@encoding\tmp@item
    \kenc@update
    \let\error@fontshape\tmp@error@fontshape
次に、\if@knjcmd が真の場合、欧文書体を現在の和文書体に関連付けされたフォ
ントに変えます。このフラグは \userelfont コマンドによって真となります。この
フラグはここで再び、偽に設定されます。
    \if@knjcmd \@knjcmdfalse
      \expandafter\ifx
838
      \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/\k@shape\endcsname\relax
839
840
        \expandafter\ifx
           \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/all\endcsname\relax
841
842
           \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/all\endcsname
844
        \fi
845
      \else
846
         \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/\k@shape\endcsname
      \fi
847
    \fi
848
そして、欧文フォントを切り替えます。
    \let\font\afont
    \xdef\font@name{\csname\curr@fontshape/\f@size\endcsname}%
850
851
    \pickup@font
852 \font@name
853 (trace)
          \ifnum \tracingfonts>\tw0
            \@font@info{Roman:Switching to \font@name}\fi
854 (trace)
    \enc@update
最後に、サイズが変更されていれば、ベースラインの調整などを行ないます。英語版
の \selectfont では最初に行なっていますが、pIPT_FX 2_{\varepsilon} ではベースラインシフト
の調整をするために、書体を確定しなければならないため、一番最後に行ないます
    \ifx\f@linespread\baselinestretch \else
856
857
      \set@fontsize\baselinestretch\f@size\f@baselineskip
858
    \fi
    \size@update}
860 (/plcore | platexrelease | trace)
861 \(\rangle platexrelease \| \text{trace} \\rangle plEndIncludeInRelease} \)
862 \(\rangle platexrelease \| \text{trace} \\rangle plincludeInRelease \{0000/00/00\} \\\ \selectfont \}
863 (platexrelease | trace)
                                      {ASCII Corporation original}%
865 (platexrelease | trace) \let\tmp@error@fontshape\error@fontshape
866 (platexrelease | trace)
                     \let\error@fontshape\error@kfontshape
                     \edef\tmp@item{{\k@encoding}}%
867 (platexrelease | trace)
868 (platexrelease | trace)
                     \expandafter\expandafter\expandafter
                     \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kyenc@list}%
869 (platexrelease | trace)
870 (platexrelease | trace)
                     \ifin@
871 (platexrelease | trace)
                       \let\cy@encoding\k@encoding
```

```
872 (platexrelease | trace)
                            \edef\ct@encoding{\csname t@enc@\k@encoding\endcsname}%
873 (platexrelease | trace)
874 (platexrelease | trace)
                            \expandafter\expandafter\expandafter
875 (platexrelease | trace)
                            \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ktenc@list}%
876 (platexrelease | trace)
877 (platexrelease | trace)
                               \let\ct@encoding\k@encoding
878 (platexrelease | trace)
                               \edef\cy@encoding{\csname y@enc@\k@encoding\endcsname}%
879 (platexrelease | trace)
                            \else
                               \@latex@error{KANJI Encoding scheme '\k@encoding' unknown}\@eha
880 (platexrelease | trace)
881 (platexrelease | trace)
                            \fi
882 (platexrelease | trace)
                          \fi
883 (platexrelease | trace)
                          \let\font\tfont
884 (platexrelease | trace)
                          \let\k@encoding\ct@encoding
885 (platexrelease | trace)
                          \xdef\font@name{\csname\curr@kfontshape/\f@size\endcsname}%
886 (platexrelease | trace)
                          \pickup@font
887 (platexrelease | trace)
                          \font@name
888 (platexrelease | trace)
                          \let\font\jfont
889 (platexrelease | trace)
                          \let\k@encoding\cy@encoding
                          \xdef\font@name{\csname\curr@kfontshape/\f@size\endcsname}%
890 (platexrelease | trace)
891 (platexrelease | trace)
                          \pickup@font
892 (platexrelease | trace)
                          \font@name
893 (platexrelease | trace)
                          \expandafter\def\expandafter\k@encoding\tmp@item
894 (platexrelease | trace)
                          \kenc@update
895 (platexrelease | trace)
                          \let\error@fontshape\tmp@error@fontshape
896 (platexrelease | trace)
                          \if@knjcmd \@knjcmdfalse
897 (platexrelease | trace)
                            \expandafter\ifx
898 (platexrelease | trace)
                            \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/\k@shape\endcsname\relax
899 (platexrelease | trace)
                               \expandafter\ifx
900 (platexrelease | trace)
                                  \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/all\endcsname\relax
901 (platexrelease | trace)
                               \else
902 (platexrelease | trace)
                                  \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/all\endcsname
903 (platexrelease | trace)
                               \fi
904 (platexrelease | trace)
                            \else
905 (platexrelease | trace)
                                \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/\k@shape\endcsname
906 (platexrelease | trace)
                            \fi
907 (platexrelease | trace)
                          \fi
908 (platexrelease | trace)
                          \let\font\afont
                          \xdef\font@name{\csname\curr@fontshape/\f@size\endcsname}%
909 (platexrelease | trace)
910 (platexrelease | trace)
                          \pickup@font
911 (platexrelease | trace)
                          \font@name
912 \langle *trace \rangle
913 (platexrelease | trace)
                          \ifnum \tracingfonts>\tw@
914 (platexrelease | trace)
                            \@font@info{Roman:Switching to \font@name}\fi
915 (/trace)
916 (platexrelease | trace)
                          \enc@update
917 (platexrelease | trace)
                          \ifx\f@linespread\baselinestretch \else
918 (platexrelease | trace)
                            \set@fontsize\baselinestretch\f@size\f@baselineskip
919 (platexrelease | trace)
                          \fi
920 (platexrelease | trace)
                         \size@update}
```

921 \(\rangle platexrelease \| trace \\\rangle plEndIncludeInRelease

```
\fontsize コマンドの内部形式です。ベースラインの設定と、支柱の設定を行ない
\set@fontsize
               ます。
               923 (/plcore)
               924 (platexrelease | trace)\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\set@fontsize}
               925 (platexrelease | trace)
                                                        {Construct \ystrutbox}%
               926 \langle *plcore \mid platexrelease \mid trace \rangle
               927 \def\set@fontsize#1#2#3{%
                       \@defaultunits\@tempdimb#2pt\relax\@nnil
               928
                       \edef\f@size{\strip@pt\@tempdimb}%
               929
               930
                       \@defaultunits\@tempskipa#3pt\relax\@nnil
                       \edef\f@baselineskip{\the\@tempskipa}%
               931
                       \edef\f@linespread{#1}%
               932
                       \let\baselinestretch\f@linespread
               933
               934
                       \def\size@update{%
               935
                         \baselineskip\f@baselineskip\relax
                         \baselineskip\f@linespread\baselineskip
               936
                         \normalbaselineskip\baselineskip
               937
               ここで、ベースラインシフトの調整と支柱を組み立てます。
                         \adjustbaseline
               939
                         \setbox\ystrutbox\hbox{\yoko
               940
                             \vrule\@width\z@
                                   \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%
               941
                         \setbox\tstrutbox\hbox{\tate
               942
                             \vrule\@width\z@
               943
                                   \@height.5\baselineskip \@depth.5\baselineskip}%
               944
                         \setbox\zstrutbox\hbox{\tate
               945
               946
                             \vrule\@width\z@
                                   \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%
               フォントサイズとベースラインに関する診断情報を出力します。
               948 (*trace)
                       \ifnum \tracingfonts>\tw@
               949
               950
                         \ifx\f@linespread\@empty
               951
                           \let\reserved@a\@empty
               952
                         \else
                           \def\reserved@a{\f@linespread x}%
               953
               954
                         \fi
               955
                         \@font@info{Changing size to\space
                               \f@size/\reserved@a \f@baselineskip}%
               956
                         \verb|\aftergroup| type@restoreinfo| \\
               957
               958
                       \fi
               959 (/trace)
                           \let\size@update\relax}}
               960
               961 \langle /plcore \mid platexrelease \mid trace \rangle
```

922 (*plcore)

963 \(\rangle platexrelease \| \text{trace} \plincludeInRelease{0000/00/00}{\set@fontsize}\)

962 ⟨platexrelease | trace⟩\plEndIncludeInRelease

```
964 (platexrelease | trace)
                                               {ASCII Corporation original}%
965 \(\rangle platexrelease | trace \) \(\def\\set@fontsize#1#2#3\){\(\hat{\general}\)
966 (platexrelease | trace)
                             \@defaultunits\@tempdimb#2pt\relax\@nnil
967 (platexrelease | trace)
                             \edef\f@size{\strip@pt\@tempdimb}%
968 (platexrelease | trace)
                             \@defaultunits\@tempskipa#3pt\relax\@nnil
969 (platexrelease | trace)
                             \edef\f@baselineskip{\the\@tempskipa}%
970 (platexrelease | trace)
                             \edef\f@linespread{#1}%
971 (platexrelease | trace)
                             \let\baselinestretch\f@linespread
972 (platexrelease | trace)
                             \def\size@update{%
973 (platexrelease | trace)
                                \baselineskip\f@baselineskip\relax
974 (platexrelease | trace)
                                \baselineskip\f@linespread\baselineskip
975 (platexrelease | trace)
                                \normalbaselineskip\baselineskip
976 (platexrelease | trace)
                                \adjustbaseline
977 (platexrelease | trace)
                                \setbox\strutbox\hbox{\yoko
978 (platexrelease | trace)
                                    \vrule\@width\z@
979 (platexrelease | trace)
                                            \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%
980 (platexrelease | trace)
                                \setbox\tstrutbox\hbox{\tate
981 (platexrelease | trace)
                                    \vrule\@width\z@
982 (platexrelease | trace)
                                            \Oheight.5\baselineskip \Odepth.5\baselineskip}%
983 (platexrelease | trace)
                                \setbox\zstrutbox\hbox{\tate
984 (platexrelease | trace)
                                     \vrule\@width\z@
                                            \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%
985 (platexrelease | trace)
986 (*trace)
987 (platexrelease | trace)
                              \ifnum \tracingfonts>\tw@
988 (platexrelease | trace)
                                \ifx\f@linespread\@empty
989 (platexrelease | trace)
                                  \let\reserved@a\@empty
990 (platexrelease | trace)
991 (platexrelease | trace)
                                  \def\reserved@a{\f@linespread x}%
992 (platexrelease | trace)
993 (platexrelease | trace)
                                \@font@info{Changing size to\space
994 (platexrelease | trace)
                                       \f@size/\reserved@a \f@baselineskip}%
995 (platexrelease | trace)
                                \aftergroup\type@restoreinfo
996 (platexrelease | trace)
997 (/trace)
998 (platexrelease | trace)
                                  \let\size@update\relax}}
999 \(\rangle platexrelease \) \(\rangle plEndIncludeInRelease \)
1000 (*plcore)
```

\adjustbaseline

現在の和文フォントの空白(EUC コード 0xA1A1)の中央に現在の欧文フォントの "/" の中央がくるようにベースラインシフトを設定します。

当初はまずベースラインシフト量をゼロにしていましたが、\tbaselineshiftを連続して変更した後に鈎括弧類を使うと余計なアキがでる問題が起こるため、\tbaselineshiftをゼロクリアする処理を削除しました。

しかし、それではベースラインシフトを調整済みの欧文ボックスと比較してしまうため、計算した値が大きくなってしまいます。そこで、このボックスの中でゼロにするようにしました。また、"/"と比較していたのを"M"にしました。

全角空白(EUC コード 0xA1A1) は JFM で特殊なタイプに分類される可能性が

```
あるため、和文書体の基準を「漢」(JIS コード 0x3441)へ変更しました。
1001 \newbox\adjust@box
1002 \newdimen\adjust@dimen
1003 (/plcore)
1004 \; \langle p | latexrelease \; | \; trace \rangle \\ \label{laternelease} \\ 1004 \; \langle p | latexrelease \; | \; trace \rangle \\ \label{laternelease} \\ 1004 \; \langle p | latexrelease \; | \; trace \rangle \\ \label{laternelease} \\ 1004 \; \langle p | latexrelease \; | \; trace \rangle \\ \label{laternelease} \\ 1004 \; \langle p | latexrelease \; | \; trace \rangle \\ \label{laternelease} \\ 1004 \; \langle p | latexrelease \; | \; trace \rangle \\ \label{laternelease} \\ 1004 \; \langle p | latexrelease \; | \; trace \rangle \\ \label{laternelease} \\ 1004 \; \langle p | latexrelease \; | \; trace \rangle \\ \label{laternelease} \\ 1004 \; \langle p | latexrelease \; | \; trace \rangle \\ \label{laternelease} \\ 1004 \; \langle p | latexrelease \; | \; trace \rangle \\ \label{laternelease} \\ 1004 \; \langle p | latexrelease \; | \; trace \rangle \\ \label{laternelease} \\ 1004 \; \langle p | latexrelease \; | \; trace \rangle \\ \label{laternelease} \\ 1004 \; \langle p | latexrelease \; | \; trace \rangle \\ \label{laternelease} \\ 1004 \; \langle p | latexrelease \; | \; trace \rangle \\ \label{laternelease} \\ 1004 \; \langle p | latexrelease \; | \; trace \rangle \\ \label{laternelease} \\ \label{late
1005 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                                                                                                        {Make robust}%
1006 (*plcore | platexrelease | trace)
1007 \DeclareRobustCommand\adjustbaseline{%
    和文フォントの基準値を設定します。
1008
                                          \setbox\adjust@box\hbox{\char\jis"3441}%"
1009
                                          \cht\ht\adjust@box
                                          \cdp\dp\adjust@box
1010
                                          \cwd\wd\adjust@box
1011
                                          \cvs\normalbaselineskip
1012
1013
                                          \chs\cwd
                                          \cHT\cht \advance\cHT\cdp
1014
```

基準となる欧文フォントの文字を含んだボックスを作成し、ベースラインシフト量の計算を行ないます。計算式は次のとおりです。

ベースラインシフト量 =
$$\{(漢の深さ) - (M \, o深さ)\}$$

$$-\frac{(漢の高さ + 深さ) - (M \, o高さ + 深さ)}{2}$$

```
1015
     \iftdir
        \setbox\adjust@box\hbox{\tbaselineshift\z@ M}%
1016
        \adjust@dimen\ht\adjust@box
1017
        \advance\adjust@dimen\dp\adjust@box
1018
        \advance\adjust@dimen-\cHT
1019
        \divide\adjust@dimen\tw@
1020
1021
        \advance\adjust@dimen\cdp
1022
        \advance\adjust@dimen-\dp\adjust@box
1023
        \tbaselineshift\adjust@dimen
1024 (trace)
              \ifnum \tracingfonts>\tw@
1025 (trace)
                \typeout{baselineshift:\the\tbaselineshift}%
1026 (trace)
              \fi
1027
      fi
1028 (/plcore | platexrelease | trace)
1029 \(\rangle platexrelease \rangle trace \rangle \rangle plEndIncludeInRelease \)
1031 (platexrelease | trace)
                                          {Change zenkaku reference}%
1032 (platexrelease | trace)\def\adjustbaseline{%
                          \setbox\adjust@box\hbox{\char\jis"3441}%"
1033 (platexrelease | trace)
1034 (platexrelease | trace)
                          \cht\ht\adjust@box
1035 (platexrelease | trace)
                          \cdp\dp\adjust@box
```

```
1036 (platexrelease | trace)
                                                              \cwd\wd\adjust@box
1037 (platexrelease | trace)
                                                              \cvs\normalbaselineskip
1038 (platexrelease | trace)
                                                              \chs\cwd
1039 (platexrelease | trace)
                                                              \cHT\cht \advance\cHT\cdp
1040 (platexrelease | trace)
                                                         \iftdir
1041 (platexrelease | trace)
                                                              \setbox\adjust@box\hbox{\tbaselineshift\z@ M}%
1042 (platexrelease | trace)
                                                              \adjust@dimen\ht\adjust@box
1043 (platexrelease | trace)
                                                              \advance\adjust@dimen\dp\adjust@box
_{1044} \langle platexrelease | trace \rangle
                                                              \advance\adjust@dimen-\cHT
1045 (platexrelease | trace)
                                                              \divide\adjust@dimen\tw@
1046 (platexrelease | trace)
                                                              \advance\adjust@dimen\cdp
                                                              \advance\adjust@dimen-\dp\adjust@box
1047 (platexrelease | trace)
1048 (platexrelease | trace)
                                                              \tbaselineshift\adjust@dimen
1049 (*trace)
1050 (platexrelease | trace)
                                                               \ifnum \tracingfonts>\tw@
1051 (platexrelease | trace)
                                                                    \typeout{baselineshift:\the\tbaselineshift}%
1052 (platexrelease | trace)
                                                               \fi
1053 (/trace)
1054 (platexrelease | trace) \fi}
1055 (platexrelease | trace)\expandafter \let \csname adjustbaseline \endcsname \@undefined
1056 \(\rangle platexrelease \| \text{trace} \plEndIncludeInRelease \]
1057 \langle platexrelease | trace \rangle \rangle 1057 \langle platexrelease | trace \rangle 1057 \langle platexrelease | trac
1058 (platexrelease | trace)
                                                                                                   {ASCII Corporation original}%
1059 (platexrelease | trace)\def\adjustbaseline{%
1060 (platexrelease | trace)
                                                              \setbox\adjust@box\hbox{\char\euc"A1A1}%"
1061 (platexrelease | trace)
                                                              \cht\ht\adjust@box
1062 (platexrelease | trace)
                                                              \cdp\dp\adjust@box
1063 (platexrelease | trace)
                                                              \cwd\wd\adjust@box
1064 (platexrelease | trace)
                                                              \cvs\normalbaselineskip
1065 (platexrelease | trace)
                                                              \chs\cwd
1066 (platexrelease | trace)
                                                              \cHT\cht \advance\cHT\cdp
1067 (platexrelease | trace)
                                                         \iftdir
1068 (platexrelease | trace)
                                                              \setbox\adjust@box\hbox{\tbaselineshift\z@ M}%
1069 (platexrelease | trace)
                                                              \adjust@dimen\ht\adjust@box
1070 (platexrelease | trace)
                                                              \advance\adjust@dimen\dp\adjust@box
1071 (platexrelease | trace)
                                                              \advance\adjust@dimen-\cHT
1072 (platexrelease | trace)
                                                              \divide\adjust@dimen\tw@
1073 (platexrelease | trace)
                                                              \advance\adjust@dimen\cdp
1074 \langle platexrelease \mid trace \rangle
                                                              \advance\adjust@dimen-\dp\adjust@box
_{1075} \langle platexrelease | trace \rangle
                                                              \tbaselineshift\adjust@dimen
1076 (*trace)
1077 (platexrelease | trace)
                                                               \ifnum \tracingfonts>\tw@
1078 (platexrelease | trace)
                                                                    \typeout{baselineshift:\the\tbaselineshift}
1079 (platexrelease | trace)
                                                               \fi
1080 (/trace)
1081 (platexrelease | trace) \fi}
1082 (platexrelease | trace) \ expandafter \ let \ csname adjustbaseline \ endcsname \ Qundefined
1083 (platexrelease | trace)\plEndIncludeInRelease
```

1084 (*plcore)

5.2.6 エンコードの指定

\romanencoding

書体のエンコードを指定するコマンドです。\fontencoding コマンドは和欧文のど \kanjiencoding ちらかに影響します。\DeclareKanjiEncodingで指定されたエンコードは和文エ \fontencoding ンコードとして、\DeclareFontEncoding で指定されたエンコードは欧文エンコー ドとして認識されます。

> \kanjiencoding と \romanencoding は与えられた引数が、エンコードとして登 録されているかどうかだけを確認し、それが和文か欧文かのチェックは行なってい ません。そのため、高速に動作をしますが、\kanjiencodingに欧文エンコードを 指定したり、逆に\romanencodingに和文エンコードを指定した場合はエラーとな ります。

```
1085 \DeclareRobustCommand\romanencoding[1] {%
        \expandafter\ifx\csname T@#1\endcsname\relax
1086
           \@latex@error{Encoding scheme '#1' unknown}\@eha
1087
1088
        \else
          \edef\f@encoding{#1}%
1089
          \ifx\cf@encoding\f@encoding
1090
1091
            \let\enc@update\relax
1092
           \else
1093
             \let\enc@update\@@enc@update
          \fi
1094
        \fi
1095
1096 }
1097 \DeclareRobustCommand\kanjiencoding[1] {%
        \expandafter\ifx\csname T@#1\endcsname\relax
1098
          \@latex@error{KANJI Encoding scheme '#1' unknown}\@eha
1099
1100
1101
          \edef\k@encoding{#1}%
1102
          \ifx\ck@encoding\k@encoding
1103
             \let\kenc@update\relax
1104
1105
              \let\kenc@update\@@kenc@update
1106
          \fi
        \fi
1107
1108 }
1109 \DeclareRobustCommand\fontencoding[1] {%
1110
      \edef\tmp@item{{#1}}%
      \expandafter\expandafter\expandafter
      \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kenc@list}%
1112
      \ifin@ \kanjiencoding{#1}\else\romanencoding{#1}\fi}
```

\kanjiencoding コマンドのコードからもわかるように、\ck@encoding と \k@encoding \@@kenc@update が異なる場合、\kenc@update コマンドは \@@kenc@update コマンドと等しくなり ます。

\@@kenc@update コマンドは、そのエンコードでのデフォルト値を設定するた

めのコマンドです。欧文用の \@enc@update コマンドでは、1115 行目と 1116 行目のような代入もしていますが、和文用にはコメントにしてあります。これらは \DeclareTextCommand や \ProvideTextCommand などでエンコードごとに設定されるコマンドを使うための仕組みです。しかし、和文エンコードに依存するようなコマンドやマクロを作成することは、現時点では、ないと思います。

```
1114 \def\@@kenc@update{%
               1115 % \expandafter\let\csname\ck@encoding -cmd\endcsname\@changed@kcmd
               1116 % \expandafter\let\csname\k@encoding-cmd\endcsname\@current@cmd
               1117
                     \default@KT
               1118
                     \csname T@\k@encoding\endcsname
               1119
                     \csname D@\k@encoding\endcsname
                     \let\kenc@update\relax
               1120
                     \let\ck@encoding\k@encoding
               1121
                     \edef\tmp@item{{\k@encoding}}%
               1122
                     \expandafter\expandafter\expandafter
               1123
               1124
                     \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kyenc@list}%
               1125
                     \ifin@ \let\cy@encoding\k@encoding
               1126
                       \expandafter\expandafter\expandafter
               1127
               1128
                       \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ktenc@list}%
               1129
                       \ifin@ \let\ct@encoding\k@encoding
               1130
                         \@latex@error{KANJI Encoding scheme '\k@encoding' unknown}\@eha
               1131
               1132
                       \fi
               1133
                    \fi
               1134 }
               1135 \let\kenc@update\relax
\@changed@kcmd \@changed@cmd の和文エンコーディングバージョン。
               1136 \def\@changed@kcmd#1#2{%
                      \ifx\protect\@typeset@protect
               1137
                         \@inmathwarn#1%
               1138
                         \expandafter\ifx\csname\ck@encoding\string#1\endcsname\relax
               1139
                            \expandafter\ifx\csname ?\string#1\endcsname\relax
               1140
                               \expandafter\def\csname ?\string#1\endcsname{%
               1141
               1142
                                   \TextSymbolUnavailable#1%
                               }%
                            \fi
               1144
                            \global\expandafter\let
               1145
                                  \csname\cf@encoding \string#1\expandafter\endcsname
               1146
                                  \csname ?\string#1\endcsname
               1147
                         \fi
               1148
                         \csname\ck@encoding\string#1%
               1149
                            \expandafter\endcsname
               1150
               1151
                      \else
               1152
                         \noexpand#1%
               1153
                      \fi}
```

5.2.7 ファミリの指定

\@notkfam \fontfamily コマンド内で使用するフラグです。@notkfam フラグは和文ファミリ\@notffam でなかったことを、@notffam フラグは欧文ファミリでなかったことを示します。

- 1154 \newif\if@notkfam
- 1155 \newif\if@notffam
- 1156 \newif\if@tempswz

\romanfamily 書体のファミリを指定するコマンドです。

\kanjifamily\kanjifamily と \romanfamily は与えられた引数が、和文あるいは欧文のファ\fontfamilyミリとして正しいかのチェックは行なっていません。そのため、高速に動作をしますが、\kanjifamily に欧文ファミリを指定したり、逆に \romanfamily に和文ファミリを指定したり、逆に \romanfamily に和文ファミリを指定した場合は、エラーとなり、代用フォントかエラーフォントが使われます。

- 1157 \DeclareRobustCommand\romanfamily[1]{\edef\f@family{#1}}
- 1158 \DeclareRobustCommand\kanjifamily[1] {\edef\k@family{#1}}

\fontfamily は、指定された値によって、和文ファミリか欧文ファミリ、**あるいは両方**のファミリを切り替えます。和欧文ともに無効なファミリ名が指定された場合は、和欧文ともに代替書体が使用されます。

引数が \rmfamily のような名前で与えられる可能性があるため、まず、これを展開したものを作ります。

また、和文ファミリと欧文ファミリのそれぞれになかったことを示すフラグを偽にセットします。

- 1159 \DeclareRobustCommand\fontfamily[1]{%
- 1160 \edef\tmp@item{{#1}}%
- 1161 \@notkfamfalse
- 1162 \Onotffamfalse

次に、この引数が \kfam@list に登録されているかどうかを調べます。登録されていれば、 \k@family にその値を入れます。

- 1163 \expandafter\expandafter\expandafter
- 1164 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kfam@list}%
- 1165 \ifin@ \edef\k@family{#1}%

そうでないときは、\notkfam@list に登録されているかどうかを調べます。登録されていれば、この引数は和文ファミリではありませんので、\@notkfam フラグを真にして、欧文ファミリのルーチンに移ります。

このとき、\ffam@listを調べるのではないことに注意をしてください。\ffam@listを調べ、これにないファミリを和文ファミリであるとすると、たとえば、欧文ナールファミリが定義されているけれども、和文ナールファミリが未定義の場合、\fontfamily{nar}という指定は、narが \ffam@listにだけ、登録されているため、和文書体をナールにすることができません。

逆に、\kfam@list に登録されていないからといって、\k@family に nar を設定すると、cmr のようなファミリも \k@family に設定される可能性があります。したがって、「欧文でない」を明示的に示す \notkfam@list を見る必要があります。

- 1166 \else
- 1167 \expandafter\expandafter\expandafter
- 1168 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\notkfam@list}%
- 1169 \ifin@ \@notkfamtrue

\notkfam@list に登録されていない場合は、フォント定義ファイルが存在するかどうかを調べます。ファイルが存在する場合は、\k@family を変更します。ファイルが存在しない場合は、\notkfam@list に登録します。

\kenc@list に登録されているエンコードと、指定された和文ファミリの組合せのフォント定義ファイルが存在する場合は、\k@family に指定された値を入れます。

- 1170 \else
 1171 \@tempswzfalse
- 1173 \message{(I search kanjifont definition file:}%

- 1176 \reserved@a{\@tempswztrue}{}\relax}%
- 1177 \kenc@list
- 1178 \message{)}%
- 1179 \if@tempswz
- 1180 \edef\k@family{#1}%

つぎの部分が実行されるのは、和文ファミリとして認識できなかった場合です。この場合は、\@notkfam フラグを真にして、\notkfam@list に登録します。

- 1181 \else
- 1182 \@notkfamtrue
- 1183 \xdef\notkfam@list{\notkfam@list\fam@elt<#1>}%
- 1184 \fi

\kfam@list と \notkfam@list に登録されているかどうかを調べた \ifin@を閉じます。

1185 \fi\fi

欧文ファミリの場合も、和文ファミリと同様の方法で確認をします。

- 1186 \expandafter\expandafter\expandafter
- 1187 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ffam@list}%
- 1188 \ifin@ \edef\f@family{#1}\else
- 1189 \expandafter\expandafter\expandafter
- 1190 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\notffam@list}%
- 1191 \ifin@ \@notffamtrue \else
- 1192 \@tempswzfalse
- 1193 \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}%
- 1194 \message{(I search font definition file:}%
- 1195 \def\enc@elt<##1>{\message{.}%

```
\edef\reserved@a{\lowercase{\noexpand\IfFileExists{##1#1.fd}}}%
1196
            \reserved@a{\@tempswztrue}{}\relax}%
1197
          \fenc@list
1198
1199
          \message{)}%
1200
          \if@tempswz
            \edef\f@family{#1}%
1201
1202
           \else
1203
            \@notffamtrue
            \xdef\notffam@list{\notffam@list\fam@elt<#1>}%
1204
           \fi
1205
1206
```

最後に、指定された文字列が、和文ファミリと欧文ファミリのいずれか、あるいは 両方として認識されたかどうかを確認します。

どちらとも認識されていない場合は、ファミリの指定ミスですので、代用フォン トを使うために、故意に指定された文字列をファミリに入れます。

```
\if@notkfam\if@notffam
          \edf\k@family{\#1}\edef\f@family{\#1}%
1208
      \fi\fi}
1209
1210 (/plcore)
```

5.2.8 シリーズの指定 (新 NFSS 対応)

\pltx@latex@level コミュニティ版 plfTrX 2 = 2020-02-02 での変更:ここから lfTrX 2 = 2020-02-02 で 拡張された新しい NFSS への対応コードが始まります。 $pIAT_{FX} 2_{\varepsilon}$ のコードを本家 LATEX 2_{ε} の機能に応じて切り替えます。

> \LaTeX 2ε 2020-02-02 のうち、patch level 2 には latex3/latex2e#277 のバグが あり、patch level 4には latex3/latex2e#293のバグがありました。さらに開発版 IATeX 2ε では latex3/latex2e#291 の対策も施されています。

```
1211 (*plcore | platexrelease)
                                           % old
1212 \fontseries force \Qundefined
            \def\pltx@latex@level{0}
1213
1214 \else
                                           % 2020-02-02
1215
     \ifx\@forced@seriestrue\@undefined
        \ifnum\patch@level<1\relax
                                                      % patch level 0
1216
1217
            \def\pltx@latex@level{1}% use \@reserveda
1218
        \else
                                                      % patch level 1, 2
            \def\pltx@latex@level{2}
1219
1220
        \fi
1221
      \else
        \ifx\series@maybe@drop@one@m\@undefined
                                                      % patch level 3, 4
1222
            \def\pltx@latex@level{3}
1223
        \else
1224
          \ifx\series@maybe@drop@one@m@x\@undefined % patch level 5
1225
            \def\pltx@latex@level{4}
1226
            % anticipating LaTeX2e 'develop' branch (after 23b7244)
1227
```

```
1228
                            % this temporary code will be removed in the future
                            %\let\series@maybe@drop@one@m@x\series@maybe@drop@one@m
                 1229
                            %\def\series@maybe@drop@one@m#1{%
                 1230
                            % \expandafter\series@maybe@drop@one@m@x\expandafter{#1}}
                 1231
                 1232
                          \else
                            \def\pltx@latex@level{5}
                 1233
                          \fi
                 1234
                 1235
                        \fi
                      \fi
                 1236
                 1237 \fi
                  ここでは、最低限どのバージョンの \LaTeX 2\varepsilon 上でもフォーマット生成が成功するよ
                  うに \catcode トリックを使います。現在の主要なコードは

    IAT<sub>E</sub>X 2<sub>€</sub> 2019-10-01 patch level 3 以前(従来の NFSS2)

                    ● IATEX 2<sub>€</sub> の開発版(最新の develop ブランチ)
                 向けに最適化しており、他のバージョンへの対処は後回しにします。
                 1238 \edef\pltx@reset@catcode@trick{\catcode'\noexpand\~=\the\catcode'\~\relax}
                 1239 \def\pltx@temp@catcode@ix{\catcode'\~=9\relax}
                 1240 \def\pltx@temp@catcode@xiv{\catcode'\~=14\relax}
                 1241 \ifnum\pltx@latex@level<3\relax
                 1242 \pltx@temp@catcode@xiv % hide if-tokens
                 1243 \else
                 1244
                     \pltx@temp@catcode@ix % reveal if-tokens
                 1245 \fi
                 1246 (/plcore | platexrelease)
                書体のシリーズを指定するコマンドです。\fontseries コマンドは和欧文の両方に
    \romanseries
                影響します。
    \kanjiseries
                   2019年までは無条件に指定されたとおりのシリーズを選択していましたが、
     \fontseries
                 IFT<sub>F</sub>X 2<sub>F</sub> 2020-02-02 以降では、\DeclareFontSeriesChangeRule によって宣言さ
                 れた「シリーズ更新規則」に基づきシリーズを選択します。
                 1247 (*plcore | platexrelease)
                 1248 \ifx\fontseriesforce\@undefined % old
                 1249 \DeclareRobustCommand\romanseries[1]{\edef\f@series{#1}}
                 1250 \DeclareRobustCommand\kanjiseries[1]{\edef\k@series{#1}}
                 1251 \DeclareRobustCommand\fontseries[1]{\kanjiseries{#1}\romanseries{#1}}
                                                    % 2020-02-02
                 1252 \else
                 1253 \DeclareRobustCommand\romanseries[1]{\@forced@seriesfalse\merge@font@series{#1}}
                 1254 \DeclareRobustCommand\kanjiseries[1]{\@forced@seriesfalse\merge@kanji@series{#1}}
                 1255 \DeclareRobustCommand\fontseries[1] {\kanjiseries{#1}\romanseries{#1}}
                 1256 \fi
\romanseriesforce 無条件にシリーズを変更します。
\kanjiseriesforce 1257 \ifx\fontseriesforce\@undefined % old
```

File b: plfonts.dtx Date: 2020/04/07 Version v1.7f

\fontseriesforce

```
1258 \let\romanseriesforce\@undefined
                        1259 \let\kanjiseriesforce\@undefined
                                                            % 2020-02-02
                        1261 \DeclareRobustCommand\romanseriesforce[1]{\@forced@seriestrue\edef\f@series{#1}}
                        1262 \DeclareRobustCommand\kanjiseriesforce[1]{\@forced@seriestrue\edef\k@series{#1}}
                        1263 \DeclareRobustCommand\fontseriesforce[1]{\kanjiseriesforce{#1}\romanseriesforce{#1}}
                        1264 \fi
                        \merge@font@series の和文版です。
    \merge@kanji@series
   \merge@kanji@series@ 1265 \ifx\fontseriesforce\@undefined % old
                        1266 \let\merge@kanji@series\@undefined
\set@target@series@kanji
                        1267 \let\merge@kanji@series@\@undefined
                        1268 \let\set@target@series@kanji\@undefined
                        1269 \else
                                                            % 2020-02-02
                        1270 \def\merge@kanji@series#1{%
                              \verb|\expandafter| expandafter| expandafter|
                        1271
                              \merge@kanji@series@
                        1272
                                \csname series@\k@series @#1\endcsname
                        1273
                        1274
                                {#1}%
                                \@nil
                        1275
                        1277 \def\merge@kanji@series@#1#2#3\@nil{%
                              \def\reserved@a{#3}%
                        1279
                              \ifx\reserved@a\@empty
                         シリーズ更新規則がない場合:#2が要求シリーズであり、これを使う。
                                \set@target@series@kanji{#2}%
                        1281
                              \else
                                \begingroup\let\f@encoding\k@encoding\let\f@family\k@family
                        1282
                        1283
                                  \maybe@load@fontshape\endgroup
                                \edef\reserved@a{\k@encoding /\k@family /#1/\k@shape}%
                        1284
                                 \ifcsname \reserved@a \endcsname
                        1285
                         シリーズ更新規則に基づく新シリーズ #1 が利用可能:
                                   \set@target@series@kanji{#1}%
                        1287
                                \else
                                   \ifcsname \k@encoding /\k@family /#2/\k@shape \endcsname
                        1288
                         シリーズ更新規則に基づく代替シリーズ #2 が利用可能:
                        1289
                                     \set@target@series@kanji{#2}%
                        1290
                                     {\let\curr@fontshape\curr@kfontshape\@font@shape@subst@warning}%
                        1291
                         いずれも利用不可:要求シリーズ #3 を使う。
                                     \set@target@series@kanji{#3}%
                        1292
                                     {\let\curr@fontshape\curr@kfontshape\@font@shape@subst@warning}%
                        1293
                        1294
                                   \fi
                                \fi
                        1295
                              \fi
                        1296
                        1297 }
```

```
1298 \def\set@target@series@kanji#1{%
        \edef\k@series{#1}%
        \series@maybe@drop@one@m\k@series\k@series
1301 }
1302 \fi
1303 (/plcore | platexrelease)
```

5.2.9 シェイプの指定 (新 NFSS 対応)

コミュニティ版 pIATeX 2ε 2020-04-12 での変更:従来は、\itshape などの命令を 実行すると

LaTeX Font Warning: Font shape 'JT1/mc/m/it' undefined using 'JT1/mc/m/n' instead on input line 4. LaTeX Font Warning: Font shape 'JY1/mc/m/it' undefined (Font) using 'JY1/mc/m/n' instead on input line 4.

のような警告を発していました。これは以下の理由によります。

- \LaTeX 2_{ε} が定義する \itshape などのシェイプ変更命令は内部で \fontshape を呼び出す。
- pIATeX 2ε では、\fontshape を欧文書体だけでなく和文書体も変更するよう に再定義する。
- しかし、和文書体のシェイプはほとんど "n" しか用いられず、\DeclareFontShape での定義も "n" しか与えられないことが多い。
- 結果的に、欧文書体のシェイプを変更するつもりでも「和文書体のシェイプ が未定義」という警告が出てしまう。

そこで、和文書体のシェイプが未定義の場合は \fontshape 及び \fontshapeforce が和文書体には影響せず、欧文書体のシェイプのみを変更するように改良します。

\if@shape@roman@kanji 和欧文の両方に影響しようとする \fontshape コマンド実行中に真になるフラグで す。\fontshapeforce は実装が単純なので、このフラグは使っていません。

> 1304 (*plcore | platexrelease) 1305 \newif\if@shape@roman@kanji 1306 (/plcore | platexrelease)

\romanshape 書体のシェイプを指定するコマンドです。\fontshape コマンドは和欧文の両方に 影響します。 \kanjishape

2019 年までは無条件に指定されたとおりのシェイプを選択していましたが、 \fontshape IATFX 2ε 2020-02-02 以降では、\DeclareFontShapeChangeRule によって宣言さ れた「シェイプ更新規則」に基づきシェイプを選択します。

File b: plfonts.dtx Date: 2020/04/07 Version v1.7f

```
1307 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2020/04/12}{\fontshape}
                1308 (platexrelease)
                                                 {No \k@shape update if unavailable}%
                1309 (*plcore | platexrelease)
                                                   % old
                1310 \ifx\fontshapeforce\@undefined
                1311 \DeclareRobustCommand\romanshape[1]{\edef\f@shape{#1}}
                1312 \DeclareRobustCommand\kanjishape[1] {\edef\k@shape{#1}}
                1313 \DeclareRobustCommand\fontshape[1] {%
                     \set@safe@kanji@shape{#1}{}%
                     \edef\f@shape{#1}%
                1315
                1316 }
                1317 \else
                                                   % 2020-02-02
                1318 \DeclareRobustCommand\romanshape[1] {\merge@font@shape{#1}}
                1319 \DeclareRobustCommand\kanjishape[1] {\merge@kanji@shape{#1}}
                1320 \DeclareRobustCommand\fontshape[1]{%
                     \@shape@roman@kanjitrue
                1322
                     \kanjishape{#1}\romanshape{#1}%
                     \@shape@roman@kanjifalse}
                1323
                1324 \fi
                1325 (/plcore | platexrelease)
                1326 <platexrelease <pre>\plEndIncludeInRelease
                1327 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\fontshape}
                1328 (platexrelease)
                                                 {ASCII Corporation / TeXJP original}%
                % old
                1330 \(\rangle platexrelease \)\text{DeclareRobustCommand\romanshape[1]{\edef\f@shape{#1}}}
                1332 \(\rangle platexrelease \)\text{DeclareRobustCommand\fontshape[1] {\kanjishape{#1}\romanshape{#1}}}
                                                              % 2020-02-02
                1333 (platexrelease)\else
                1336 (platexrelease)\DeclareRobustCommand\fontshape[1]{\kanjishape{#1}\romanshape{#1}}
                1337 (platexrelease)\fi
                1338 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
\romanshapeforce 無条件にシェイプを変更します。
\kanjishapeforce 1339 \(\rangle\)plIncludeInRelease{2020/04/12}{\fontshapeforce}
\fontshapeforce 1340~\langle platexrelease \rangle
                                                 {No \k@shape update if unavailable}%
                1341 (*plcore | platexrelease)
                1342 \ifx fontshape force \oundefined
                                                   % old
                1343 \let\romanshapeforce\@undefined
                1344 \let\kanjishapeforce\@undefined
                1345 \else
                                                   % 2020-02-02
                1346 \DeclareRobustCommand\romanshapeforce[1]{\edef\f@shape{#1}}
                1347 \DeclareRobustCommand\kanjishapeforce[1] {\edgh} = {1}
                1348 \DeclareRobustCommand\fontshapeforce[1]{%
                     \set@safe@kanji@shape{#1}{}%
                1350
                     \edef\f@shape{#1}%
                1351 }
                1352 \fi
                1353 (/plcore | platexrelease)
```

```
1354 \(\rangle platexrelease \)\(\rangle plendIncludeInRelease \)
                                                1355 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\fontshapeforce}
                                                1356 (platexrelease)
                                                                                                                                    {ASCII Corporation / TeXJP original}%
                                                1357 (platexrelease)\ifx\fontshapeforce\@undefined
                                                                                                                                                                      % old
                                                1358 (platexrelease)\let\romanshapeforce\@undefined
                                                1359 \langle platexrelease \rangle \land \
                                                                                                                                                                      % 2020-02-02
                                                1360 (platexrelease)\else
                                                1362 \(\rangle platexrelease \)\text{\DeclareRobustCommand\\kanjishapeforce[1]{\edef\k@shape{#1}}}\)
                                                1363 (platexrelease)\DeclareRobustCommand\fontshapeforce[1]{\kanjishapeforce{#1}\romanshapeforce{#1}
                                                1364 (platexrelease)\fi
                                                1365 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
                                                \merge@font@shape の和文版です。
  \merge@kanji@shape
\mbox{\mbox{$\mathbb{N}$}} = \mbox{\mbox{$\mathbb{N}$}}
                                                1367 (platexrelease)
                                                                                                                                    {No \k@shape update if unavailable}%
                                                1368 (*plcore | platexrelease)
                                                1369 \ifx\fontseriesforce\@undefined % old
                                                1370 \let\merge@kanji@shape\@undefined
                                                1371 \let\merge@kanji@shape@\@undefined
                                                                                                                                         % 2020-02-02
                                                1372 \else
                                                1373 \def\merge@kanji@shape#1{%
                                                              \expandafter\expandafter\expandafter
                                                1374
                                                               \merge@kanji@shape@
                                                1375
                                                                   \csname shape@\k@shape @#1\endcsname
                                                1376
                                                                    {#1}%
                                                1377
                                                1378
                                                                   \@nil
                                                1379 }
                                                1380 \end{arge@kanji@shape@#1#2#3\enii{%}}
                                                              \def\reserved@a{#3}%
                                                              \ifx\reserved@a\@empty
                                                  シェイプ更新規則がない場合:#2が要求シェイプである。
                                                  \fontshape の下請けなら、#2 が利用可能かどうか予めチェックする。
                                                  \kanjishape の下請けなら、#2を使う。
                                                1383
                                                                 \if@shape@roman@kanji
                                                                   \verb|\set@safe@kanji@shape{#2}{}|%
                                                1384
                                                1385
                                                                 \else
                                                1386
                                                                   \edef\k@shape{#2}%
                                                1387
                                                1388
                                                                   \begingroup\let\f@encoding\k@encoding\let\f@family\k@family
                                                1389
                                                1390
                                                                        \maybe@load@fontshape\endgroup
                                                                   \edef\reserved@a{\k@encoding /\k@family /\k@series/#1}%
                                                1391
                                                                      \ifcsname \reserved@a\endcsname
                                                1392
                                                   シェイプ更新規則に基づく新シェイプ #1 が利用可能:
                                                                           \edef\k@shape{#1}%
                                                1394
                                                                   \else
```

```
\ifcsname \k@encoding /\k@family /\k@series/#2\endcsname
    シェイプ更新規則に基づく代替シェイプ #2 が利用可能:
                                           \ensuremath{\mbox{def}\mbox{\mbox{$k@$shape{\#2}$}}\label{eq:lemmashape}}\
 1396
                                            {\let\curr@fontshape\curr@kfontshape\@font@shape@subst@warning}%
 1397
 1398
                                      \else
   いずれも利用不可:要求シェイプ #3 について
   \fontshape の下請けなら、#3が利用可能かどうか予めチェックする。
   \kanjishape の下請けなら、#3 を使う。
 1399
                                        \if@shape@roman@kanji
                                           \set@safe@kanji@shape{#3}%
 1400
 1401
                                           {{\let\curr@fontshape\curr@kfontshape\@font@shape@subst@warning}}%
 1402
                                         \else
                                            \edef\k@shape{#3}%
1404
                                           {\let\curr@fontshape\curr@kfontshape\@font@shape@subst@warning}%
 1405
                                        \fi
                                     \fi
1406
                           \fi
1407
                   \fi
1408
1409 }
1410 \fi
1411 (/plcore | platexrelease)
 1412 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
 1413 \(\rangle\) \
 1414 (platexrelease)
                                                                                                                     {ASCII Corporation / TeXJP original}%
 1415 (platexrelease)\ifx\fontseriesforce\@undefined % old
 1416 \(\rangle platexrelease \rangle \left\) merge@kanji@shape\@undefined
 1417 (platexrelease)\let\merge@kanji@shape@\@undefined
                                                                                                                                                                    % 2020-02-02
 1418 (platexrelease)\else
 1419 \ \langle platexrelease \rangle \ \ def\ \ merge@kanji@shape#1{\%}
 1420 (platexrelease)
                                                           \expandafter\expandafter\expandafter
 1421 (platexrelease)
                                                           \merge@kanji@shape@
 1422 (platexrelease)
                                                                   \csname shape@\k@shape @#1\endcsname
 1423 (platexrelease)
                                                                   {#1}%
 1424 (platexrelease)
                                                                   \@nil
1425 (platexrelease)}
1426 \(\rangle\) \
1427 \langle platexrelease \rangle
                                                           \def\reserved@a{#3}%
1428 (platexrelease)
                                                           \ifx\reserved@a\@empty
1429 (platexrelease)
                                                                   \edef\k@shape{#2}%
1430 (platexrelease)
                                                            \else
1431 (platexrelease)
                                                                   \begingroup\let\f@encoding\k@encoding\let\f@family\k@family
 1432 (platexrelease)
                                                                          \maybe@load@fontshape\endgroup
                                                                   \edef\reserved@a{\k@encoding /\k@family /\k@series/#1}%
1433 (platexrelease)
 1434 (platexrelease)
                                                                       \ifcsname \reserved@a\endcsname
 1435 (platexrelease)
                                                                             \ensuremath{\texttt{def}\k@shape{\#1}}\%
 1436 (platexrelease)
                                                                   \else
                                                                             \ifcsname \k@encoding /\k@family /\k@series/#2\endcsname
 1437 (platexrelease)
```

```
1438 (platexrelease)
                                                     \edef\k@shape{#2}%
                            1439 (platexrelease)
                                                     {\let\curr@fontshape\curr@kfontshape\@font@shape@subst@warning}%
                            1440 (platexrelease)
                            1441 (platexrelease)
                                                     \edef\k@shape{#3}%
                            1442 (platexrelease)
                                                     {\let\curr@fontshape\curr@kfontshape\@font@shape@subst@warning}%
                            1443 (platexrelease)
                                                   \fi
                            1444 (platexrelease)
                                                \fi
                                              \fi
                            1445 (platexrelease)
                            1446 \langle platexrelease \rangle \}
                            1447 (platexrelease)\fi
                            1448 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
                           和文シェープが利用可能かどうか予めチェックしてから設定します。
      \set@safe@kanji@shape
\@kanji@shape@nochange@info 1449 \platexrelease\\plIncludeInRelease{2020/04/12}{\set@safe@kanji@shape}
                            1450 (platexrelease)
                                                               {No \k@shape update if unavailable}%
                            1451 (*plcore | platexrelease)
                            1452 \def\set@safe@kanji@shape#1#2{%
                                  \edef\reserved@b{\k@encoding /\k@family /\k@series/#1}%
                                   \ifcsname \reserved@b\endcsname
                            1454
                                     \ensuremath{\texttt{def}\k@shape{\#1}}\%
                            1455
                                     #2%
                            1456
                                  \else
                            1457
                                    \@kanji@shape@nochange@info{\reserved@b}%
                            1458
                            1459
                            1460 }
                            1461 \def\@kanji@shape@nochange@info#1{%
                            1462
                                    \OfontOinfo{Kanji font shape '#1' undefined\MessageBreak
                            1463
                                                No change}%
                            1464 }
                            1465 (/plcore | platexrelease)
                            1466 \langle platexrelease \rangle \backslash plEndIncludeInRelease
                            1468 (platexrelease)
                                                               {ASCII Corporation original}%
                            1469 (platexrelease)\let\set@safe@kanji@shape\@undefined
                            1470 (platexrelease)\let\@kanji@shape@nochange@info\@undefined
                            1471 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                             5.2.10 書体の切り替え (新 NFSS 対応)
                            書体属性を一度に指定するコマンドです。和文書体には \usekanji を、欧文書体に
                  \usekanji
                             は \useroman を指定してください。
                  \useroman
                               \usefont コマンドは、第一引数で指定されるエンコードによって、和文または
                   \usefont
                             欧文フォントを切り替えます。
                            1472 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2020/02/02}{\usefont}
                            1473 (platexrelease)
                                                               {Don't call \fontseries or \fontshape}\%
                            1474 (*plcore | platexrelease)
                            1475 \DeclareRobustCommand\usekanji[4]{\kanjiencoding{#1}%
```

```
\edef\k@family{#2}%
1476
1477
               \edef\k@series{#3}%
               \edef\k@shape{#4}\selectfont
1478
               \ignorespaces}
1479
1480 \DeclareRobustCommand\useroman[4]{\romanencoding{#1}%
               \edef\f@family{#2}%
1481
               \edef\f@series{#3}%
1482
               \edef\f@shape{#4}\selectfont
1483
               \ignorespaces}
1484
1485 \DeclareRobustCommand\usefont[4]{%
           \edef\tmp@item{{#1}}%
1486
           \expandafter\expandafter\expandafter
1487
           \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kenc@list}%
1488
           \ifin@ \usekanji{#1}{#2}{#3}{#4}%
1489
           \left( \frac{\#1}{\#2} \right) 
1490
1491
           \fi}
1492 (/plcore | platexrelease)
1493 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1495 (platexrelease)
                                                                    {Make robust}%
1496 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle DeclareRobustCommand \rangle usekanji [4] \{\rangle \rangle \rangle platexrelease \rangle \rangle
                                       1497 (platexrelease)
1498 (platexrelease)
                                       \selectfont\ignorespaces}
1499 (platexrelease)\DeclareRobustCommand\useroman[4] {%
1500 (platexrelease)
                                       \romanencoding{#1}\romanfamily{#2}\romanseries{#3}\romanshape{#4}%
1501 (platexrelease)
                                       \selectfont\ignorespaces}
1502 (platexrelease)\DeclareRobustCommand\usefont[4]{%
1503 (platexrelease)
                                  \edef\tmp@item{{#1}}%
1504 (platexrelease)
                                  \expandafter\expandafter\expandafter
1505 (platexrelease)
                                  \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kenc@list}%
1506 (platexrelease)
                                  \ifin@ \usekanji{#1}{#2}{#3}{#4}%
1507 (platexrelease)
                                  \else\useroman{#1}{#2}{#3}{#4}%
1508 (platexrelease)
                                  \fi}
1509 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
1510 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\usefont}
1511 (platexrelease)
                                                                    {ASCII Corporation original}%
1512 (platexrelease)\def\usekanji#1#2#3#4{%
                                       \kanjiencoding{#1}\kanjifamily{#2}\kanjiseries{#3}\kanjishape{#4}%
1513 (platexrelease)
1514 \langle platexrelease \rangle
                                       \selectfont\ignorespaces}
1515 (platexrelease)\def\useroman#1#2#3#4{%
                                       \romanencoding{#1}\romanfamily{#2}\romanseries{#3}\romanshape{#4}%
1516 (platexrelease)
1517 (platexrelease)
                                       \selectfont\ignorespaces}
1518 (platexrelease)\def\usefont#1#2#3#4{%
1519 (platexrelease)
                                   \edef\tmp@item{{#1}}%
                                   \expandafter\expandafter\expandafter
1520 (platexrelease)
1521 (platexrelease)
                                  \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kenc@list}%
1522 (platexrelease)
                                  \ifin@ \usekanji{#1}{#2}{#3}{#4}%
1523 (platexrelease)
                                  \else\useroman{#1}{#2}{#3}{#4}%
1524 (platexrelease)
                                  \fi}
1525 \langle platexrelease \rangle \cdot expandafter \let \csname usekanji \endcsname \cundefined
```

\normalfont 書体をデフォルト値にするコマンドです。和文書体もデフォルト値になるように再定義 しています。ただし高速化のため、\usekanjiと \useroman を展開し、\selectfont を一度しか呼び出さないようにしています。

IATEX 2_{ε} 2020-02-02 patch level 2 で新設されたフック \@defaultfamilyhook を使うことで、元の定義を上書きする必要がなくなりました。(注意:アスキー版の末尾にあった \ignorespaces を削除することで、元の IATEX 2_{ε} と互換になりました。ltfssini.dtx 1995/10/16 v3.0f の変更も参考。)

```
1529 \(\rangle\)plincludeInRelease\(2020/04/12\)\(\lambda\)normalfont\}
1530 (platexrelease)
                                      {Use \@defaultfamilyhook}%
1531 (*plcore | platexrelease)
1532 \ifx\@defaultfamilyhook\@undefined % old
1533 \DeclareRobustCommand\normalfont{%
1534
        \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
1535
        \edef\k@family{\kanjifamilydefault}%
1536
        \edef\k@series{\kanjiseriesdefault}%
        \edef\k@shape{\kanjishapedefault}%
1537
        \romanencoding{\encodingdefault}%
1538
        \edef\f@family{\familydefault}%
1539
        \edef\f@series{\seriesdefault}%
1540
        \edef\f@shape{\shapedefault}%
1541
1542
        \selectfont}
                                            % 2020-02-02 PL2
1543 \else
1544 (platexrelease) \DeclareRobustCommand \normalfont {%
1545 (platexrelease)
                    \fontencoding\encodingdefault
1546 (platexrelease)
                    \edef\f@family{\familydefault}%
1547 (platexrelease)
                    \edef\f@series{\seriesdefault}%
1548 (platexrelease)
                    \edef\f@shape{\shapedefault}%
1549 (platexrelease)
                    \@defaultfamilyhook
1550 (platexrelease)
                    \selectfont}
1551 \g@addto@macro\@defaultfamilyhook{%
        \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
1552
1553
        \edef\k@family{\kanjifamilydefault}%
        \edef\k@series{\kanjiseriesdefault}%
1554
1555
        \edef\k@shape{\kanjishapedefault}%
1556 }
1557 \fi
1558 \adjustbaseline
1559 \let\reset@font\normalfont
1560 (/plcore | platexrelease)
1561 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
1562 \(\rangle plane = \plinclude InRelease \{2020/02/02\} \\normalfont\)
1563 (platexrelease)
                                      {Don't call \fontseries or \fontshape}\%
1564 (platexrelease)\DeclareRobustCommand\normalfont{%
```

```
1565 (platexrelease)
                                 \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
             1566 (platexrelease)
                                 \edef\k@family{\kanjifamilydefault}%
             1567 (platexrelease)
                                 \edef\k@series{\kanjiseriesdefault}%
             1568 (platexrelease)
                                 \edef\k@shape{\kanjishapedefault}%
             1569 (platexrelease)
                                 \romanencoding{\encodingdefault}%
                                 \edef\f@family{\familydefault}%
             1570 (platexrelease)
             1571 (platexrelease)
                                 \edef\f@series{\seriesdefault}%
                                 \edef\f@shape{\shapedefault}%
             1572 (platexrelease)
             1573 (platexrelease)
                                 \selectfont\ignorespaces}
             1574 (platexrelease)\adjustbaseline
             1575 (platexrelease)\let\reset@font\normalfont
             1576 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
             1577 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\normalfont}
             1578 (platexrelease)
                                                {ASCII Corporation original}%
             1579 (platexrelease)\DeclareRobustCommand\normalfont{%
             1580 (platexrelease)
                                 \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
             1581 \langle platexrelease \rangle
                                 \kanjifamily{\kanjifamilydefault}%
             1582 (platexrelease)
                                 \kanjiseries{\kanjiseriesdefault}%
             1583 (platexrelease)
                                 1584 (platexrelease)
                                 \romanencoding{\encodingdefault}%
             1585 (platexrelease)
                                 \romanfamily{\familydefault}%
             1586 (platexrelease)
                                 \romanseries{\seriesdefault}%
             1587 (platexrelease)
                                 \romanshape{\shapedefault}%
             1588 (platexrelease)
                                 \selectfont\ignorespaces}
             1589 (platexrelease)\adjustbaseline
             1590 (platexrelease)\let\reset@font\normalfont
             1591 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
            I	ext{MT}_{	ext{E}}X 2_{arepsilon} 2020-02-02 では、欧文フォントについて「ファミリごとの実際のシリーズ
\bfseries@mc
             値を設定できる」という機能が導入されました(元は mweights パッケージの機能)。
\bfseries@gt
             また、同時に「Computer Modern と Latin Modern の場合は互換性のため太字を
\mdseries@mc
            bx に、それ以外の欧文ファミリの場合は太字を b にする」という仕様変更も入りま
\mdseries@gt
              した。これに合わせて、pIATeX 2gの和文フォントにも同等の機能を追加し、和文
              ファミリの太字も bx ではなく b に変更しました。
             1592 (*plcore | platexrelease)
             1593 \ifx\bfseries@rm\@undefined % old
             1594 \let\bfseries@mc\@undefined
             1595 \let\bfseries@gt\@undefined
             1596 \let\mdseries@mc\@undefined
             1597 \let\mdseries@gt\@undefined
             1598 \else
                                              % 2020-02-02
             1599 \edef\bfseries@mc{\bfdefault}% b
             1600 \edef\bfseries@gt{\bfdefault}% b
             1601 \edef\mdseries@mc{\mddefault}% m
             1602 \edef\mdseries@gt{\mddefault}% m
             1603 \fi
```

\expand@font@defaults ファミリのデフォルトを完全展開します。まず、オリジナルの LATEX の定義(ltf-

```
ssini.dtx 2020/04/06 v3.1m 以降) を載せておきます。
         1604 %\def\expand@font@defaults{%
         1605 % \edef\rmdef@ult{\rmdefault}%
         1606 % \edef\sfdef@ult{\sfdefault}%
         1607 % \edef\ttdef@ult{\ttdefault}%
         1609 \% \quad \texttt{\scries@maybe@drop@one@m\mddefault\mddef@ult \% !! changed 2020/02/25 v3.1j}
         1610 % \edef\famdef@ult{\familydefault}%
         1611 % \@expandfontdefaultshook
                                                          % !! added 2020/04/06 v3.1m
         1612 %}
          pIATFX では、以下のコードを末尾に追加します。
         1613 \ifx\expand@font@defaults\@undefined\else % 2020-02-02
         1614 \g@addto@macro\expand@font@defaults{%
         1615
               \edef\mcdef@ult{\mcdefault}%
         1616
              \edef\gtdef@ult{\gtdefault}%
               1617
         1618 }
         1619 \fi
\bfseries ファミリごとの設定値を参照します。まず、オリジナルの LATeX の定義(ltfssini.dtx
\mdseries 2020/04/06 \text{ v}3.1\text{m} 以降)を載せておきます。
         1620 %\DeclareRobustCommand\bfseries{%
         1621 % \not@math@alphabet\bfseries\mathbf
         1622 % \expand@font@defaults
         1623 % \ifx\bfdefault\bfdefault@previous\else
         1624 %
                 \expandafter\def\expandafter\bfdefault
         1625 %
                                \expandafter{\bfdefault\@empty}%
         1626 %
                 \let\bfseries@previous\bfdefault
         1627 %
                  \let\bfseries@rm\bfdef@ult
         1628 %
                  \let\bfseries@sf\bfdef@ult
         1629 %
                  \let\bfseries@tt\bfdef@ult
         1630 %
                  \@setbfseriesdefaultshook % !! added 2020/04/06 v3.1m
         1631 % \fi
         1632 %
                  \ifx\f@family\rmdef@ult
                                             \fontseries\bfseries@rm
                  \else\ifx\f@family\sfdef@ult \fontseries\bfseries@sf
         1633 %
                  \else\ifx\f@family\ttdef@ult \fontseries\bfseries@tt
         1634 %
                                             \fontseries\bfdefault
         1635 %
                  \else
                  \fi\fi\fi
         1636 %
         1637 % \selectfont
         1638 %}
         1639 %\DeclareRobustCommand\mdseries{%
         1640 % \not@math@alphabet\mdseries\relax
         1641 % \expand@font@defaults
         1642 % \ifx\mddefault\mddefault@previous\else
         1643 %
                  \expandafter\def\expandafter\mddefault
         1644 %
                                 \expandafter{\mddefault\@empty}%
         1645 %
                  \let\mdseries@previous\mddefault
                  \let\mdseries@rm\mddef@ult
         1646 %
```

```
1647 %
         \let\mdseries@sf\mddef@ult
1648 %
         \let\mdseries@tt\mddef@ult
1649 %
         \@setmdseriesdefaultshook % !! added 2020/04/06 v3.1m
1650 % \fi
1651 %
         \ifx\f@family\rmdef@ult
                                       \fontseries\mdseries@rm
         \else\ifx\f@family\sfdef@ult \fontseries\mdseries@sf
1652 %
1653 %
         \else\ifx\f@family\ttdef@ult \fontseries\mdseries@tt
1654 %
         \else
                                       \fontseries\mddefault
1655 %
         \fi\fi\fi
1656 % \selectfont
1657 %}
以下で pIATeX 用に再定義します。
1658 \ifx\bfseries@rm\@undefined % old
1659 \let\pltx@fontseries@saved\@undefined
1660 \let\pltx@patch@bfseries\@undefined
1661 \let\pltx@patch@mdseries\@undefined
1662 \else
                                 % 2020-02-02
1663 \let\pltx@fontseries@saved\fontseries
1664 \def\pltx@patch@bfseries\not@math@alphabet#1#2#3\selectfont{%
1665 \long\expandafter\def\csname bfseries \endcsname{%
1666
     \not@math@alphabet#1#2% should be \bfseries\mathbf
1667
     % \fontseries of pLaTeX tries to change both Latin and Japanese;
     % here we want only Latin, so use \romanseries
1668
     \let\fontseries\romanseries
1669
     #3% contains \fontseries and \@setbfseriesdefaultshook
1670
     \let\fontseries\pltx@fontseries@saved % recover
1671
     % changed \fontseries -> \kanjiseries
1672
1673
        \ifx\k@family\mcdef@ult
                                     \kanjiseries\bfseries@mc
        \else\ifx\k@family\gtdef@ult \kanjiseries\bfseries@gt
1674
1675
        \else
                                      \kanjiseries\bfdefault
1676
        \fi\fi
1677
     \selectfont
1678 }%
1679 }
1680 \verb|\difx@setbfseriesdefaultshook@undefined\else|
1681 \g@addto@macro\@setbfseriesdefaultshook{%
        \let\bfseries@mc\bfdef@ult
1682
1683
        \let\bfseries@gt\bfdef@ult
1684 }
1685 \fi
1686 \expandafter\expandafter\expandafter
      \pltx@patch@bfseries\csname bfseries \endcsname
1688 \def\pltx@patch@mdseries\not@math@alphabet#1#2#3\selectfont{%
1689 \long\expandafter\def\csname mdseries \endcsname{%
1690
     \not@math@alphabet#1#2% should be \mdseries\relax
     % \fontseries of pLaTeX tries to change both Latin and Japanese;
1691
1692
     % here we want only Latin, so use \romanseries
1693
     \let\fontseries\romanseries
     #3% contains \fontseries and \@setmdseriesdefaultshook
```

```
% changed \fontseries -> \kanjiseries
                                                                                                    1696
                                                                                                                             \ifx\k@family\mcdef@ult
                                                                                                                                                                                                                          \kanjiseries\mdseries@mc
                                                                                                     1697
                                                                                                                             \else\ifx\k@family\gtdef@ult \kanjiseries\mdseries@gt
                                                                                                     1698
                                                                                                    1699
                                                                                                                             \else
                                                                                                                                                                                                                          \kanjiseries\mddefault
                                                                                                    1700
                                                                                                                             \fi\fi
                                                                                                                      \selectfont
                                                                                                    1701
                                                                                                   1702 }%
                                                                                                    1703 }
                                                                                                     1704 \ifx\@setmdseriesdefaultshook\@undefined\else
                                                                                                    1705 \g@addto@macro\@setmdseriesdefaultshook{%
                                                                                                                              \let\mdseries@mc\mddef@ult
                                                                                                    1706
                                                                                                                              \let\mdseries@gt\mddef@ult
                                                                                                    1707
                                                                                                    1708 }
                                                                                                    1709 \fi
                                                                                                    1710 \expandafter\expandafter\expandafter
                                                                                                    1711 \pltx@patch@mdseries\csname mdseries \endcsname
                                                                                                     1712 \fi
                                                                                                      \prepare@family@series@update の和文版です。
pare@family@series@update@kanji
                   \verb|\coloredge| 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \ | \ 1713 \
                                                                                                     1714 \verb|\let\prepare@family@series@update@kanji\@undefined
odate@series@target@value@kanji
                                                                                                    1715 \let\@meta@family@list@kanji\@undefined
                                                                                                    1716 \let\update@series@target@value@kanji\@undefined
                                                                                                    1717 \else
                                                                                                                                                                                                                                                                   % 2020-02-02
                                                                                                    1718 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} 1718 \ensuremath{\mbox{\mbox{$4$}}} 182{\ensuremath{\mbox{$4$}}} 180{\ensuremath{\mbox{$4$}}} 
                                                                                                    1719 ~\if@forced@series
                                                                                                    1720 (+debug) \series@change@debug{No series preparation (forced \f@series)\on@line}%
                                                                                                    1721 ~ \romanfamily#2%
                                                                                                                                                                                 % changed \fontfamily -> \romanfamily
                                                                                                    1722 ~\else
                                                                                                   1723 (+debug) \series@change@debug{Prepearing for switching to #1 (#2)\on@line}%
                                                                                                                          \expand@font@defaults
                                                                                                    1724
                                                                                                    1725
                                                                                                                          \let\target@series@value\@empty
                                                                                                                          \def\target@meta@family@value{#1}%
                                                                                                    1726
                                                                                                                          \expandafter\edef\csname ??def@ult\endcsname{\f@family}%
                                                                                                    1727
                                                                                                    1728
                                                                                                                          \let\@elt\update@series@target@value
                                                                                                    1729
                                                                                                                                    \@meta@family@list
                                                                                                    1730
                                                                                                                                    \@elt{??}%
                                                                                                     1731
                                                                                                                          \let\@elt\relax
                                                                                                                                                                                    % changed \fontfamily -> \romanfamily
                                                                                                    1732
                                                                                                                          \romanfamily#2%
                                                                                                    1733
                                                                                                                          \ifx\target@series@value\@empty
                                                                                                    1734 \langle +debug \rangle \series@change@debug{Target series still empty ...}%
                                                                                                   1735
                                                                                                                          \else
                                                                                                                                 \ifx \f@series\target@series@value
                                                                                                    1736
                                                                                                    1737 (+debug) \series@change@debug{Target series unchanged:
                                                                                                    1738 (+debug)
                                                                                                                                                                                                                 \f@series \space = \target@series@value}%
                                                                                                    1739
                                                                                                                                 \else
                                                                                                                                        \maybe@load@fontshape
                                                                                                    1741 (+debug) \series@change@debug{Target series:
                                                                                                     1742 (+debug)
                                                                                                                                                                                                                 \f@series \space -> \target@series@value}%
```

\let\fontseries\pltx@fontseries@saved % recover

1695

```
1743 %
                                 \let\f@series\target@series@value
                                 \series@maybe@drop@one@m\target@series@value\f@series
1744
                           \fi
1745
1746
                     \fi
1747 ~\fi
1748 }
1749 \def\prepare@family@series@update@kanji#1#2{%
1750 ~\if@forced@series
1751 \langle +debug \rangle \ series@change@debug{No series preparation (forced <math>\k@series) \on@line} \rangle
                    \kanjifamily#2%
1752
1753 ~\else
1754 \ \langle +debug \rangle \ \ series@change@debug\{Prepearing for switching to \#1 (\#2) \ \ \ \}\%
                     \expand@font@defaults
1755
                     \let\target@series@value\@empty
1756
1757
                     \def\target@meta@family@value{#1}%
                     1758
1759
                     \let\@elt\update@series@target@value@kanji
                              \@meta@family@list@kanji
1760
                              \@elt{??}%
1761
1762
                     \let\@elt\relax
1763
                     \kanjifamily#2%
                     \ifx\target@series@value\@empty
1764
1765 (+debug) \series@change@debug{Target series still empty ...}%
1766
1767
                           \ifx \k@series\target@series@value
1768 (+debug) \series@change@debug{Target series unchanged:
                                                                                                      \k@series \space = \target@series@value}%
1769 (+debug)
1770
                           \else
                                \begingroup\let\f@encoding\k@encoding\let\f@family\k@family
1771
                                       \verb|\maybe@load@fontshape| endgroup|
1772
1773 (+debug) \series@change@debug{Target series:
1774 \langle +debug \rangle
                                                                                                      \k@series \space -> \target@series@value}%
1775 %
                                \let\k@series\target@series@value
1776
                                 \series@maybe@drop@one@m\target@series@value\k@series
1777
1778
                     \fi
1779 ~\fi
1780 }
1781 \def\@meta@family@list@kanji{\@elt{mc}\@elt{gt}}
1782 \def\update@series@target@value@kanji#1{%
                 \def\reserved@a{#1}%
                  \ifx\target@meta@family@value\reserved@a
                                                                                                                                              % rm -> rm do nothing
1784
1785
                 \else
1786 \ \langle + \mathsf{debug} \rangle \ \texttt{\ \ } \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ } \texttt{
                                                                                                      \space = \k@family\space ?}%
1787 (+debug)
                        \expandafter\ifx\csname#1def@ult\endcsname\k@family
1788
1789
                              \let\@elt\@gobble
1790
                              \expandafter\let\expandafter\reserved@b
1791
                                                                              \csname mdseries@\target@meta@family@value\endcsname
                              \expandafter\let\expandafter\reserved@c
1792
```

```
1793
                                               \csname bfseries@\target@meta@family@value\endcsname
                    1794 \langle +debug \rangle \setminus series@change@debug\{Targets for mdseries and bfseries:
                                                       \reserved@b\space and \reserved@c}%
                    1795 (+debug)
                               \expandafter\series@maybe@drop@one@m
                    1796
                    1797
                                   \csname mdseries@#1\endcsname\reserved@d
                    1798
                               \ifx\reserved@d\k@series
                                    \series@change@debug{mdseries@#1 matched -> \reserved@b}%
                    1799 (+debug)
                                                                \let\target@series@value\reserved@b
                    1800
                    1801
                              \else
                                 \expandafter\series@maybe@drop@one@m
                    1802
                                    \csname bfseries@#1\endcsname\reserved@d
                    1803
                    1804
                                 \ifx\reserved@d\k@series
                    1805 \langle +debug \rangle \series@change@debug{bfseries@#1 matched -> \reserved@c}%
                                                                 \let\target@series@value\reserved@c
                    1806
                               \else\ifx\k@series\mddef@ult
                                                                \let\target@series@value\reserved@b
                    1807
                    1808 (+debug) \series@change@debug{mddef@ult matched -> \reserved@b}%
                    1809
                               \else\ifx\k@series\bfdef@ult
                                                                \let\target@series@value\reserved@c
                    1810 (+debug) \series@change@debug{bfdef@ult matched -> \reserved@c}%
                              \fi\fi\fi\fi
                    1811
                            \fi
                    1812
                    1813
                          \fi
                    1814 }
                    1815 \fi
\init@series@setup \begin{document}で実行される初期化です。まず、オリジナルの LATFX の定義を
                     載せておきます。
                    1816 %\def\init@series@setup{%
                    1817 % \ifx\bfseries@rm@kernel\bfseries@rm
                             \expandafter\in@\expandafter{\rmdefault}{cmr,cmss,cmtt,lcmss,lcmtt,lmr,lmss,lmtt}%
                    1818 %
                    1819 %
                             \ifin@ \else \def\bfseries@rm{b}\fi\fi
                    1820 % \ifx\bfseries@sf@kernel\bfseries@sf
                    1821 %
                             \expandafter\in@\expandafter{\sfdefault}{cmr,cmss,cmtt,lcmss,lcmtt,lmr,lmss,lmtt}%
                    1822 %
                             \ifin@ \else \def\bfseries@sf{b}\fi\fi
                    1823 % \ifx\bfseries@tt@kernel\bfseries@tt
                             \expandafter\in@\expandafter{\ttdefault}{cmr,cmss,cmtt,lcmss,lcmtt,lmr,lmss,lmtt}%
                    1824 %
                    1825 %
                             \ifin@ \else \def\bfseries@tt{b}\fi\fi
                    1826 %
                           \expand@font@defaults
                    1827 %
                           \ifx\famdef@ult\rmdef@ult
                                                            \rmfamily
                           \else\ifx\famdef@ult\sfdef@ult \sffamily
                    1828 %
                           \else\ifx\famdef@ult\ttdef@ult \ttfamily
                    1830 % \fi\fi\fi
                    1831 %}%
                     ここからが pIAT<sub>F</sub>X による追加コードです。

    IAT<sub>F</sub>X 2<sub>€</sub> 2019-10-01 以前:未定義

                        • 	ext{IAT}_{	ext{FX}} 	ext{2}_{arepsilon} 	ext{2020-02-02} 以降:上のとおりの定義
```

File b: plfonts.dtx Date: 2020/04/07 Version v1.7f

ただし、latexreleaseで巻き戻し:\relaxと同義

```
になることに注意します。
         1832 \expandafter\ifx\csname init@series@setup\endcsname\relax\else % 2020-02-02
         1833 \g@addto@macro\init@series@setup{%
               \ifx\kanjidef@ult\mcdef@ult
               \else\ifx\kanjidef@ult\gtdef@ult \gtfamily
         1836 \fi\fi
         1837 }%
         1838 \fi
\mcfamily 和文書体を明朝体にする \mcfamily とゴシック体にする \gtfamily を定義します。
\gtfamily これらは、\rmfamily などに対応します。\mathmc と \mathgt は数式内で用いると
          きのコマンド名です。
         1839 \ifx\prepare@family@series@update@kanji\@undefined % old
         1840 \DeclareRobustCommand\mcfamily
                    {\not@math@alphabet\mcfamily\mathmc
                     \kanjifamily\mcdefault\selectfont}
         1843 \DeclareRobustCommand\gtfamily
         1844
                    {\not@math@alphabet\gtfamily\mathgt
                     \kanjifamily\gtdefault\selectfont}
         1845
                                                              % 2020-02-02
         1846 \else
         1847 \DeclareRobustCommand\mcfamily
                 {\not@math@alphabet\mcfamily\mathmc
         1849
                  \prepare@family@series@update@kanji{mc}\mcdefault\selectfont}
         1850 \DeclareRobustCommand\gtfamily
                 {\not@math@alphabet\gtfamily\mathgt
                  \prepare@family@series@update@kanji{gt}\gtdefault\selectfont}
         1852
         1853 \fi
         1854 (/plcore | platexrelease)
 \textmc テキストファミリを切り替えるためのコマンドです。ltfntcmd.dtx で定義されて
 \textgt いる \textrm などに対応します。
         1855 (*plcore)
         1856 \DeclareTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
         1857 \DeclareTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
         1858 (/plcore)
            後回しにしていた他のバージョンへの対処です。ここで新 NFSS 対応コードが終
          わりますので、\catcode トリックを元に戻します。
         1859 (*plcore | platexrelease)
         1860 %%
         1861 \ifnum\pltx@latex@level>0\relax
                                                 % 2020-02-02
         1862 %
         1863 \ifnum\pltx@latex@level<3\relax
                                                 % 2020-02-02 patch level 0--2 (no flags)
         1864 \DeclareRobustCommand\romanseries[1]{\merge@font@series{#1}}
         1865 \DeclareRobustCommand\kanjiseries[1]{\merge@kanji@series{#1}}
         1866 \DeclareRobustCommand\fontseries[1] {\kanjiseries{#1}\romanseries{#1}}
         1867 \DeclareRobustCommand\romanseriesforce[1] {\edef\f@series{#1}}
```

```
1868 \DeclareRobustCommand\kanjiseriesforce[1]{\edef\k@series{#1}}
1869 \DeclareRobustCommand\fontseriesforce[1]{\kanjiseriesforce{#1}\romanseriesforce{#1}}
1870 \fi
1871 %
1872 \ifnum\pltx@latex@level=1\relax
                                                                                                  % 2020-02-02 patch level 0 (\@reserveda)
1873 \def\merge@kanji@series@#1#2#3\@nil{%
              \def\@reserveda{#3}%
1874
              \ifx\@reserveda\@empty
1875
                   \set@target@series@kanji{#2}%
1876
1877
              \else
                   \begingroup\let\f@encoding\k@encoding\let\f@family\k@family
1878
                        \maybe@load@fontshape\endgroup
1879
                   \edef\@reserveda{\k@encoding /\k@family /#1/\k@shape}%
1880
                     \ifcsname \@reserveda \endcsname
1881
                          \set@target@series@kanji{#1}%
1882
1883
                   \else
                          \ifcsname \k@encoding /\k@family /#2/\k@shape \endcsname
1884
                              \set@target@series@kanji{#2}%
1885
                              {\tt \{\label{thm:curr@fontshape\curr@kfontshape\curr@font@shape@subst@warning\}\%}}
1886
                          \else
1887
1888
                               \set@target@series@kanji{#3}%
                              {\let\curr@fontshape\curr@kfontshape\@font@shape@subst@warning}%
1889
1890
                          \fi
                   \fi
1891
1892
              \fi
1893 }
1894 \def\merge@kanji@shape@#1#2#3\@ni1{%
              \def\@reserveda{#3}%
1895
              \ifx\@reserveda\@empty
1896
                   \ensuremath{\texttt{def}\k@shape{\#2}}\%
1897
1898
              \else
                   \begingroup\let\f@encoding\k@encoding\let\f@family\k@family
1899
                        \maybe@load@fontshape\endgroup
1900
1901
                   \edef\@reserveda{\k@encoding /\k@family /\k@series/#1}%
1902
                     \ifcsname \@reserveda\endcsname
1903
                          \edef\k@shape{#1}%
1904
                   \else
                          \ifcsname \k@encoding /\k@family /\k@series/#2\endcsname
1905
1906
                               \egin{array}{l} \egin{array}
                              {\tt \{\label{thm:curr@fontshape\curr@kfontshape\curr@font@shape@subst@warning\}\%}}
1907
                          \else
1908
                               \edef\k@shape{#3}%
1909
                              {\let\curr@fontshape\curr@kfontshape\@font@shape@subst@warning}%
1910
1911
                          \fi
                   \fi
1912
1913
             \fi
1914 }
1915 \fi
1916 %
1917 \ifnum\pltx@latex@level<4\relax</pre>
                                                                                                  \% 2020-02-02 patch level 0--4 (drop m)
```

```
1918 \def\set@target@series@kanji#1{%
        \edef\k@series{#1}%
1919
        \edef\k@series{\expandafter\series@drop@one@m\k@series mm\series@drop@one@m}%
1921 }
1922 \else\ifnum\pltx@latex@level=4\relax % 2020-02-02 patch level 5 (old syntax)
1923 \def\set@target@series@kanji#1{%
        \edef\k@series{#1}%
1924
1925
        \expandafter\series@maybe@drop@one@m\expandafter{\k@series}\k@series
1926 }
1927 \fi\fi
1928 %
                                           % 2020-02-02 patch level 0--5
1929 \ifnum\pltx@latex@level<5\relax
1930 \def\prepare@family@series@update#1#2{%
1931 ~\if@forced@series
1932 \langle +debug \rangle \ \series@change@debug{No series preparation (forced \f@series)\on@line}\%
     \romanfamily#2% % changed \fontfamily -> \romanfamily
1933 1
1934 ~\else
1935 \langle +debug \rangle \series@change@debug{Prepearing for switching to #1 (#2)\on@line}%
       \expand@font@defaults
1936
       \let\target@series@value\@empty
1937
1938
       \def\target@meta@family@value{#1}%
       \expandafter\edef\csname ??def@ult\endcsname{\f@family}%
1939 ~
1940
       \let\@elt\update@series@target@value
          \@meta@family@list
1942 ~
          \@elt{??}%
1943
       \let\@elt\relax
                         % changed \fontfamily -> \romanfamily
1944
       \romanfamily#2%
       \ifx\target@series@value\@empty
1945
1946 \langle +debug \rangle \series@change@debug{Target series still empty ...}%
       \else
1947
         \ifx \f@series\target@series@value
1948
1949 (+debug) \series@change@debug{Target series unchanged:
1950 (+debug)
                                   \f@series \space = \target@series@value}%
1951
         \else
1952
           \maybe@load@fontshape
1953 (+debug) \series@change@debug{Target series:
                                   \f@series \space -> \target@series@value}%
1954 (+debug)
           \let\f@series\target@series@value
1955
1956
         \fi
       \fi
1957
1958 ~\fi
1959 }
1960 \def\prepare@family@series@update@kanji#1#2{%
1961 ~\if@forced@series
1963 ~ \kanjifamily#2%
1964 ~\else
1965 \langle + debug \rangle \ series@change@debug\{Prepearing for switching to #1 (#2) \setminus on@line}\%
1966
       \expand@font@defaults
       \let\target@series@value\@empty
```

1967

```
\def\target@meta@family@value{#1}%
1968
       \expandafter\edef\csname ??def@ult\endcsname{\k@family}%
1969 ~
       \let\@elt\update@series@target@value@kanji
1970
          \@meta@family@list@kanji
1971
1972
          \@elt{??}}%
1973
       \let\@elt\relax
       \mbox{\normalfamily#2}
1974
       \ifx\target@series@value\@empty
1975
1976 \langle +debug \rangle \series@change@debug{Target series still empty ...}%
1977
       \else
         \ifx \k@series\target@series@value
1978
1979 \langle +debug \rangle \series@change@debug{Target series unchanged:
                                   \k@series \space = \target@series@value}%
1980 (+debug)
1981
         \else
           \begingroup\let\f@encoding\k@encoding\let\f@family\k@family
1982
1983
             \maybe@load@fontshape\endgroup
1984 (+debug) \series@change@debug{Target series:
                                   \k@series \space -> \target@series@value}%
1985
    \langle +debug \rangle
           \let\k@series\target@series@value
1986
         \fi
1987
1988
       \fi
1989 ~\fi
1990 }
1991 \def\@meta@family@list@kanji{\@elt{mc}\@elt{gt}}
1992 \def\update@series@target@value@kanji#1{%
1993
      \def\reserved@a{#1}%
1994
      \ifx\target@meta@family@value\reserved@a
                                                  % rm -> rm do nothing
1995
      \else
1997 (+debug)
                                   \space = \k@family\space ?}%
        \expandafter\ifx\csname#1def@ult\endcsname\k@family
1998
          \let\@elt\@gobble
1999
2000
          \expandafter\let\expandafter\reserved@b
2001
                           \csname mdseries@\target@meta@family@value\endcsname
2002
          \expandafter\let\expandafter\reserved@c
                           \csname bfseries@\target@meta@family@value\endcsname
2004 (+debug)\series@change@debug{Targets for mdseries and bfseries:
                                  \reserved@b\space and \reserved@c}%
2005 (+debug)
          \expandafter\ifx\csname mdseries@#1\endcsname\k@series
2006
               \series@change@debug{mdseries@#1 matched -> \reserved@b}%
2007 (+debug)
                                           \let\target@series@value\reserved@b
2008
          \else\expandafter\ifx\csname bfseries@#1\endcsname\k@series
2009
2010 \langle +debug \rangle \series@change@debug{bfseries@#1 matched -> \reserved@c}%
2011
                                           \let\target@series@value\reserved@c
          \else\ifx\k@series\mddef@ult
                                           \let\target@series@value\reserved@b
2012
2013 (+debug) \series@change@debug{mddef@ult matched -> \reserved@b}%
          \else\ifx\k@series\bfdef@ult
                                           \let\target@series@value\reserved@c
2014
2015 (+debug) \series@change@debug{bfdef@ult matched -> \reserved@c}%
2016
          \fi\fi\fi\fi
        \fi
2017
```

```
2018
                         \fi
                   2019 }
                   2020 \fi
                   2021 %
                   2022 \fi
                   2023 %%
                   2024 \pltx@reset@catcode@trick
                   2025 \langle /plcore \mid platexrelease \rangle
\romanprocess@table 文書の先頭で、和文デフォルトフォントの変更が反映されないのを修正します。
\kanjiprocess@table 2026 (*plcore)
    2028 \def\kanjiprocess@table{%
                         \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
                         \kanjifamily{\kanjifamilydefault}%
                         \kanjiseries{\kanjiseriesdefault}%
                   2032
                         \kanjishape{\kanjishapedefault}%
                   2033 }
                   2034 \def\process@table{%
                   2035 \romanprocess@table
                         \kanjiprocess@table
                   2036
                   2037 }
                   2038 \@onlypreamble\romanprocess@table
                   2039 \Conlypreamble\kanjiprocessCtable
                   2040 \langle /plcore \rangle
                    5.3
                          強調書体
                   従来は \em, \emph で和文フォントの切り替えは行っていませんでしたが、和文フォ
                    ントも \gtfamily に切り替えるようにしました。
             \emph
                      [p \LaTeX 2\varepsilon \ 2016/04/17]  \LaTeX < 2015/01/01>で追加された \eminnershape も取
     \eminnershape
                    り入れ、強調コマンドを入れ子にする場合の書体を自由に再定義できるようになり
                      [pIPT_{E}X 2_{\varepsilon} 2020-02-02] IPT_{E}X < 2020-02-02 > で追加された \DeclareEmphSequence
                    をサポートしました。
                   2041 \ \langle platexrelease \rangle \ | \ DeclareEmphSequence \}
                   2042 \langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                                                                 {Nested emph}%
                   2043 (*plcore | platexrelease)
                   2044 \ifx\DeclareEmphSequence\@undefined % old
                   2045 \DeclareRobustCommand\em
                               {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
                   2046
                                             \eminnershape \else \gtfamily \itshape \fi}%
                   2047
                   2048 \ensuremath{\setminus} else
                                                          % 2020-02-02
                   2049 \DeclareRobustCommand\em{%
                   2050 \@nomath\em
```

2051 \ifx\emfontdeclare@clist\@empty

```
\ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
2052
2053
            \eminnershape \else \gtfamily \itshape \fi
2054
       \edef\em@currfont{\csname\curr@fontshape/\f@size\endcsname}%
2055
2056
         \expandafter\do@emfont@update\emfontdeclare@clist\do@emfont@update
2057
2058 }
2059 \fi
2060 \def\eminnershape{\mcfamily \upshape}%
2061 (/plcore | platexrelease)
2062 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
2063 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\DeclareEmphSequence}
2064 (platexrelease)
                                                       {Support \eminnershape}%
2065 (platexrelease)\DeclareRobustCommand\em
2066 (platexrelease)
                           {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
2067 (platexrelease)
                                              \eminnershape \else \gtfamily \itshape \fi}%
2068 \(\rangle platexrelease \) \(\def\eminnershape \) \(\mathreag{mcfamily \upshape}\) \(\% \)
2069 \langle platexrelease \rangle \backslash plEndIncludeInRelease
2070 \ \langle platexrelease \rangle \ \langle plincludeInRelease \{ 2015/01/01 \} \{ \ \ CareEmphSequence \} \} 
2071 \langle platexrelease \rangle
                                                       {Non-supported \eminnershape}%
2073 (platexrelease)
                            {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
                                             \mcfamily \upshape \else \gtfamily \itshape \fi}
2074 (platexrelease)
2075 (platexrelease)\def\eminnershape{\upshape}% defined by LaTeX, but not used by pLaTeX
2076 \( \text{platexrelease} \)\text{plEndIncludeInRelease}
2077 \ \langle platexrelease \rangle \ \langle plincludeInRelease \{0000/00/00\} \{\ \ \ \ \ \ \} \}
2078 (platexrelease)
                                                       {ASCII Corporation original}%
2079 (platexrelease)\DeclareRobustCommand\em
2080 (platexrelease)
                           {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
                                             \mcfamily \upshape \else \gtfamily \itshape \fi}
2081 (platexrelease)
2082 \langle platexrelease \rangle \land eminnershape \land @undefined
2083 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
```

5.4 下線マクロ

\textunderscore

このコマンドはテキストモードで指定された_の内部コマンドです。縦組での位置 を調整するように再定義をします。もとは ltoutenc.dtx で定義されています。

なお、_を数式モードで使うと\mathunderscoreが実行されます。

コミュニティ版では縦数式ディレクションでベースライン補正量が変だったのを 直しました。あわせて横ディレクションでもベースライン補正に追随するようにし ています。

```
\else\tbaselineshift\fi
2090
2091
                \else\ybaselineshift\fi
       \vbox{\hrule\@width.3em}}
2093 (/plcore | platexrelease)
2094 \ \langle \texttt{platexrelease} \rangle \backslash \texttt{plEndIncludeInRelease}
2095 \ \langle platexrelease \rangle \\ \ plincludeInRelease \{0000/00/00\} \\ \ \ textunderscore \}
                                            {ASCII Corporation original}%
2096 (platexrelease)
2097 (platexrelease) \DeclareTextCommandDefault{\textunderscore}{%
2098 (platexrelease) \leavevmode\kern.06em
2099 (platexrelease)
                      \iftdir\raise-\tbaselineshift\fi
2100 (platexrelease) \vbox{\hrule\@width.3em}}
2101 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
```

5.5 合成文字

I $m PT_{EX}$ 2_{ε} のカーネルのコードをそのまま使うと、 pT_{EX} のベースライン補正量がゼロでないときに合成文字がおかしくなっていたため、対策します。

```
\pltx@saved@oalign \b{...}, \c{...}, \d{...}, \k{...}などの合成文字を修正するため、ltplain.dtx
                 の \oalign を上書きします。
                 2102 (platexrelease)%\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\pltx@saved@oalign}
                 2103 (platexrelease)%
                                   {Special case! (This block is required for any emulation date)}%
                 2104 (*plcore | platexrelease)
                  まず、元の PTFX のコードをコピーしたものです。接頭辞 \pltx@saved... を付け
                 ておきます。
                 2105 \def\pltx@saved@oalign#1{\leavevmode\vtop{\baselineskip\z@skip \lineskip.25ex%
                 2106 \ialign{##\crcr#1\crcr}}}
                 2107 (/plcore | platexrelease)
                 \pltx@oalign 次に、pLPTEX の新しいコードです。
                 2109 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2018/07/28}{\pltx@oalign}
                 2110 (platexrelease)
                                                {Fix for non-zero baselineshift}%
```

```
2111 (*plcore | platexrelease)
2112 \def\pltx@oalign#1{\ifmmode
2113 \leavevmode\vtop{\baselineskip\z@skip \lineskip.25ex%
2114
          \ialign{##\crcr#1\crcr}}%
2115 \else
      \iftdir\ybaselineshift\tbaselineshift\fi
       \m@th$\hbox{\vtop{\baselineskip\z@skip \lineskip.25ex%
2117
          \ialign{##\crcr#1\crcr}}}$%
2118
2119 \fi}
2120 (/plcore | platexrelease)
2121 \(\rangle platexrelease \)\(\rangle \)\(\rangle platexrelease \)
{\tt 2122} \ \langle {\tt platexrelease} \rangle \\ {\tt plIncludeInRelease\{0000/00/00\}\{\pltx@oalign\}\}} \\
2123 (platexrelease)
                                          {Fix for non-zero baselineshift}%
```

```
2124 /pltx@oalign\@undefined
                                               2125 <platexrelease > \plEndIncludeInRelease
\pltx@saved@ltx@sh@ft \b{...}と \d{...}の合成文字を修正するため、ltplain.dtx の \ltx@sh@ft を上
                                                書きします。
                                              2126 \ \langle platexrelease \rangle \% \ plincludeInRelease \{0000/00/00\} \{ \ pltx@saved@ltx@sh@ft \} \} \ defined by the control of the co
                                               2127 (platexrelease)%
                                                                                           {Special case! (This block is required for any emulation date)}%
                                               2128 (*plcore | platexrelease)
                                                 まず、元の PTrX のコードをコピーしたものです。接頭辞 \pltx@saved... を付け
                                                ておきます。
                                              2129 \def\pltx@saved@ltx@sh@ft #1{%
                                              2130 \dimen@ #1%
                                                           \kern \strip@pt
                                              2131
                                                               \fontdimen1\font \dimen0
                                              2132
                                                           } % kern by #1 times the current slant
                                              2133
                                              2134 (/plcore | platexrelease)
                                              {\tt 2135}~ {\tt \langle platexrelease \rangle \% \backslash plEndIncludeInRelease}
            \pltx@ltx@sh@ft 次に、pl\TFX の新しいコードです。
                                              2137 \langle platexrelease \rangle
                                                                                                                         {Fix for non-zero baselineshift}%
                                              2138 \langle *plcore \mid platexrelease \rangle
                                              2139 \def\pltx@ltx@sh@ft #1{%
                                              2140 \ybaselineshift\z@
                                              2141
                                                           \dimen@ #1%
                                                           \kern \strip@pt
                                              2142
                                                              \fontdimen1\font \dimen0
                                                           } % kern by #1 times the current slant
                                              2145 (/plcore | platexrelease)
                                              2146 \langle platexrelease \rangle \backslash plEndIncludeInRelease
                                              2147 \label{linequation} $$2147 \place{0000/00/00}{\pltx@ltx@sh@ft}$
                                              2148 (platexrelease)
                                                                                                                          {Fix for non-zero baselineshift}%
                                              2149 \langle platexrelease \rangle \ | tx@ltx@sh@ft\@undefined
                                              2150 \ \langle {\tt platexrelease} \rangle \\ {\tt plEndIncludeInRelease}
              \g@tlastchart@ T<sub>F</sub>X Live 2015 で追加された \lastnodechar を利用して、「直前の文字」の符号位
                                                置を得るコードです。\lastnodechar が未定義の場合は -1 が返ります。
                                              2151 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/06/10}{\g@tlastchart@}
                                              2152 (platexrelease)
                                                                                                                         {Added \g@tlastchart@}%
                                              2153 (*plcore | platexrelease)
                                              {\tt 2154 \setminus g@tlastchart@\#1\{\#1\setminus fx\lastnodechar\setminus gundefined\setminus m@ne\else\lastnodechar\setminus fi\}}
                                              2155 (/plcore | platexrelease)
                                              2156 \(\rangle platexrelease \)\\rangle \Lambda \] \(\rangle platexrelease \)
                                               2157 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\g@tlastchart@}
                                                                                                                         {Added \g@tlastchart@}%
                                               2158 (platexrelease)
                                              2159 (platexrelease)\let\g@tlastchart@\@undefined
                                               2160 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
```

\pltx@isletter 第一引数のマクロ (#1) の置換テキストが、カテゴリコード 11 か 12 の文字トーク ン 1 文字であった場合に第二引数の内容に展開され、そうでない場合は第三引数の 内容に展開されます。

```
2161 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{ 2018/07/28 \} \{ \rangle pltx@isletter \}
2162 (platexrelease)
                                                                                          {Support PD1 encoding}%
2163 (*plcore | platexrelease)
2164 \def\pltx@mark{\pltx@mark@}
2165 \let\pltx@scanstop\relax
2166 \long\def\pltx@cond#1\fi{%
            #1\expandafter\@firstoftwo\else\expandafter\@secondoftwo\fi}
2167
2168 \def\pltx@pdfencA{PD1}
2169 \def\pltx@composite@chkenc{%
2170
              \ifx\pltx@pdfencA\f@encoding
                     \expandafter\@firstoftwo
2171
                \else
2172
                    \expandafter\@secondoftwo
2173
2174
               \fi}
2175 \long\def\pltx@isletter#1{%
{\tt 2176} \quad \texttt{\ \ } \texttt{\ \ }} \texttt{\ \ } \texttt{\ \ }} \texttt{\ \ } \texttt{\ \ }} \texttt{\ \ } \texttt{\ \ } \texttt{\ \ } \texttt{\ \ }} \texttt{\ \ } \texttt{\ \ } \texttt{\ \ }} \texttt{\ \ } \texttt{\ \ } \texttt{\ \ } \texttt{\ \ }} \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ }} \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ } \texttt{\ \  \ } \texttt{\ \ }} \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ }} \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ }} \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ }} \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ } \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ }} \texttt{\ \ \ \ }} \texttt{\ \ \ \ } \texttt{\ \ \ \ }} \texttt{\ \ \ \ }} \texttt{\ \ \ \ }} \texttt{\ \ \ \ \ }} \texttt{\ \ \ \ }} \texttt{\ \ \ \ }} \texttt{\ \ \ \ \ }} \texttt{\ \ \ \ }} 
2177 \long\def\pltx@isletter@i#1\pltx@scanstop{%
               \pltx@cond\ifx\pltx@mark#1\pltx@mark\fi{\@firstoftwo}%
2178
                     {\pltx@isletter@ii\pltx@scanstop#1\pltx@scanstop{}#1\pltx@mark}}
2180 \long\def\pltx@isletter@ii#1\pltx@scanstop#{%
               \pltx@cond\ifx\pltx@mark#1\pltx@mark\fi%
                     {\pltx@isletter@iii}{\pltx@isletter@iv}}
2183 \long\def\pltx@isletter@iii#1\pltx@mark{\@secondoftwo}
2184 \long\def\pltx@isletter@iv#1#2#3\pltx@mark{%
2185 \pltx@cond\ifx\pltx@mark#3\pltx@mark\fi{%
                     2186
                         {\@firstoftwo}{\pltx@composite@chkenc}%
2187
             }{\pltx@composite@chkenc}}
2188
2189 (/plcore | platexrelease)
2191 \(\rangle\) plincludeInRelease{2016/06/10}{\pltx@isletter}
2192 (platexrelease)
                                                                                          {Added \pltx@isletter}%
2193 (platexrelease)\def\pltx@mark{\pltx@mark@}
2194 (platexrelease)\let\pltx@scanstop\relax
2195 ⟨platexrelease⟩\long\def\pltx@cond#1\fi{%
2196 ⟨platexrelease⟩ #1\expandafter\@firstoftwo\else\expandafter\@secondoftwo\fi}
2197 (platexrelease)\long\def\pltx@isletter#1{%
2199 (platexrelease)\long\def\pltx@isletter@i#1\pltx@scanstop{%
2200 (platexrelease) \pltx@cond\ifx\pltx@mark#1\pltx@mark\fi{\@firstoftwo}%
2201 (platexrelease)
                                                   {\pltx@isletter@ii\pltx@scanstop#1\pltx@scanstop{}#1\pltx@mark}}
2202 (platexrelease)\long\def\pltx@isletter@ii#1\pltx@scanstop#{%
2203 (platexrelease) \pltx@cond\ifx\pltx@mark#1\pltx@mark\fi%
2204 (platexrelease)
                                                   {\pltx@isletter@iii}{\pltx@isletter@iv}}
2205 (platexrelease)\long\def\pltx@isletter@iii#1\pltx@mark{\@secondoftwo}
2206 (platexrelease)\long\def\pltx@isletter@iv#1#2#3\pltx@mark{%
```

```
\pltx@cond\ifx\pltx@mark#3\pltx@mark\fi{%
                                                                                     2207 (platexrelease)
                                                                                     2208 (platexrelease)
                                                                                                                                                \pltx@cond{\ifnum0\ifcat A\noexpand#21\fi\ifcat=\noexpand#21\fi>\z@}\fi
                                                                                     2209 (platexrelease)
                                                                                                                                                      {\@firstoftwo}{\@secondoftwo}%
                                                                                     2210 (platexrelease) }{\@secondoftwo}}
                                                                                     2211 \(\rangle platexrelease \)\\rangle \Lambda \] \(\rangle platexrelease \)
                                                                                     2212 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{ 0000/00/00 \} \\rangle pltx@isletter \}
                                                                                     2213 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                            {Added \pltx@isletter}%
                                                                                     2214 (platexrelease)\let\pltx@isletter\@undefined
                                                                                     2215 <platexrelease > \plEndIncludeInRelease
                                   \@text@composite 合成文字の内部命令です。v1.6a で誤って LAT<sub>F</sub>X の定義を上書きしてしまいました
                                                                                        が、v1.6cで外しました。
                                                                                     2216 \langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease \{2016/06/10\} \{\ensuremath{\tt QtextQcomposite}\}
                                                                                     2217 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                           {Fix for non-zero baselineshift (revert)}%
                                                                                     2218 \(\rangle platexrelease \) \(\def \\ \Qtext \\ \Qcomposite \) \(\def \\ \Qtext \\ \Qcomposite \) \(\def \\ \Qtext \\ \Qcomposite \) \(\def \\\ \Qcomposite \) \(\def \\ \Qcomposite \) \(\def \\\ \Qcomposite \) 
                                                                                     2219 (platexrelease)
                                                                                                                                             \expandafter\@text@composite@x
                                                                                     2220 (platexrelease)
                                                                                                                                                      \csname\string#1-\string#2\endcsname}
                                                                                     2221 \(\rangle platexrelease \)\\rangle \Lambda \] \(\rangle platexrelease \)
                                                                                     2222 \(\rangle platexrelease \)\rangle \)\rangle \(\lambda \) \rangle platexrelease \)\rangle \(\lambda \) \(\lambda \) \rangle \(\lambda \) \(\lambda \) \rangle \(\lambda \) \rangle \(\lambda \) \(\lambda \) \(\lambda \) \rangle \(\lambda \) \(\lambda
                                                                                     2223 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                           {Fix for non-zero baselineshift (wrong)}%
                                                                                     2224 \langle platexrelease \rangle \cdot \{0 text 0 composite #1 #2 #3 # { % } 
                                                                                     2225 (platexrelease) \begingroup
                                                                                     2226 (platexrelease)
                                                                                                                                         \setbox\z@=\hbox\bgroup%
                                                                                     2227 (platexrelease)
                                                                                                                                         \ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@
                                                                                     2228 (platexrelease)
                                                                                                                                         \expandafter\@text@composite@x
                                                                                     2229 (platexrelease)
                                                                                                                                        \csname\string#1-\string#2\endcsname}
                                                                                     2230 <platexrelease <pre>\plEndIncludeInRelease
                                                                                     2232 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                           {LaTeX2e original}%
                                                                                     2233 (platexrelease)\def\@text@composite#1#2#3\@text@composite{%
                                                                                     2234 (platexrelease)
                                                                                                                                             \expandafter\@text@composite@x
                                                                                     2235 \langle platexrelease \rangle
                                                                                                                                                     \csname\string#1-\string#2\endcsname}
                                                                                     2236 <platexrelease > \plEndIncludeInRelease
                                                                                      合成文字の内部命令 \@text@composite@x のために、2 通りの定義を準備します。
\pltx@saved@text@composite@x
                                                                                     2237 \(\rangle\)pltx@saved@text@composite@x\)
                                                                                     2238 (platexrelease)%
                                                                                                                                                   {Special case! (This block is required for any emulation date)}%
                                                                                     2239 (*plcore | platexrelease)
                                                                                         まず、元の PTFX のコードをコピーしたものです。接頭辞 \pltx@saved... を付け
                                                                                        ておきます。
                                                                                     2240 \def\pltx@saved@text@composite@x#1{%
                                                                                                          \ifx#1\relax
                                                                                     2241
                                                                                     2242
                                                                                                                   \expandafter\@secondoftwo
                                                                                     2243
                                                                                                          \else
                                                                                     2244
                                                                                                                   \expandafter\@firstoftwo
                                                                                                          \fi
                                                                                     2245
```

File b: plfonts.dtx Date: 2020/04/07 Version v1.7f

2246

#1}

```
2247 (/plcore | platexrelease)
                    2248 <platexrelease \%\plEndIncludeInRelease
\pltx@text@composite@x 次に、pLMTEX の新しいコードです。\g@tlastchart@と \pltx@isletter を使い
                     ます。
                    2249 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2018/07/28}{\pltx@text@composite@x}
                    2250 (platexrelease)
                                                   {Fix for non-zero baselineshift}%
                    2251 (*plcore | platexrelease)
                    2252 \def\pltx@text@composite@x#1#2{%
                         \int x#1\relax
                    2253
                           #2%
                    2254
                    2255
                         \else\pltx@isletter{#1}{#1}{%
                    2256
                           \begingroup
                     #1 を実際に組んでみて、符号位置の取得を試みます。結果は \@tempcntb に保存さ
                     れます。取得に失敗した場合は -1 です。
                    2257
                           \setbox\z@\hbox\bgroup
                             \ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@
                    2258
                    2259
                             #1%
                             \g@tlastchart@\@tempcntb
                    2260
                             \xdef\pltx@composite@temp{\noexpand\@tempcntb=\the\@tempcntb\relax}%
                    2261
                             \aftergroup\pltx@composite@temp
                    2262
                    2263
                           \egroup
                     アクセントが付く「本体の文字」が欧文文字と推測される場合には、一旦数式モー
                     ドに入ることによって \xkanjiskip が前後に入るようにします。ここでは、取得に
                     失敗した場合も欧文文字であると仮定しています。また、符号位置の取得に成功し
                     ていた場合は、その \xspcode の状態に応じて、数式モードの前後に \null を補っ
                     て \xkanjiskip の挿入を抑制します。
                    2264
                           \ifnum\@tempcntb<\@cclvi
                    2265
                             \ifnum\@tempcntb>\m@ne
                    2266
                               \ifodd\xspcode\@tempcntb\else\leavevmode\null\fi
                    2267
                             \begingroup\m@th$%
                    2268
                               \ifx\textbaselineshiftfactor\@undefined\else
                    2269
                                \textbaselineshiftfactor\z@\fi
                    2270
                               \box\z@
                    2271
                    2272
                             $\endgroup
                             \ifnum\@tempcntb>\m@ne
                    2273
                               \ifnum\xspcode\@tempcntb<2\null\fi
                    2274
                     アクセントが付く「本体の文字」が和文文字と推測される場合には、ベースライン
                     補正を行わずに出力します。
                           \else
                    2277
                             {\c {\c tbaselineshift z@tbaselineshift z@#1}\%}
                           \fi
                    2278
```

```
2279
         \endgroup}%
2280
      \fi
2281 }
2282 (/plcore | platexrelease)
2283 <platexrelease \plEndIncludeInRelease
2285 (platexrelease)
                                       {Fix for non-zero baselineshift}%
2287 (platexrelease)
                   \int x#1\relax
2288 (platexrelease)
                      #2%
2289 (platexrelease)
                    \else\pltx@isletter{#1}{#1}{%
2290 (platexrelease)
                      \begingroup
2291 (platexrelease)
                      \setbox\z@\hbox\bgroup%
2292 (platexrelease)
                        \ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@
2293 (platexrelease)
                        \g@tlastchart@\@tempcntb
2294 (platexrelease)
                        \xdef\pltx@composite@temp{\noexpand\@tempcntb=\the\@tempcntb\relax}%
2295 (platexrelease)
2296 (platexrelease)
                        \aftergroup\pltx@composite@temp
2297~\langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                      \egroup
2298 (platexrelease)
                      \ifnum\@tempcntb<\z@
                        \@tempdima=\iftdir
2299 (platexrelease)
2300 (platexrelease)
                             \ifmdir
                               \ifmmode\tbaselineshift\else\ybaselineshift\fi
2301 (platexrelease)
2302 (platexrelease)
2303 (platexrelease)
                               \tbaselineshift
                             \fi
2304 (platexrelease)
2305 (platexrelease)
                          \else
2306 (platexrelease)
                             \ybaselineshift
                          \fi
2307 (platexrelease)
2308 (platexrelease)
                        \@tempcntb=\@cclvi
2309 (platexrelease)
                      \ensuremath{\mbox{\mbox{else}\ensurema=\scale}}\
2310 (platexrelease)
2311 (platexrelease)
                      \ifnum\@tempcntb<\@cclvi
2312 (platexrelease)
                        \ifnum\@tempcntb>\m@ne\ifnum\@tempcntb<\@cclvi
2313 (platexrelease)
                          \ifodd\xspcode\@tempcntb\else\leavevmode\hbox{}\fi
2314 (platexrelease)
                        \fi\fi
2315 (platexrelease)
                        \begingroup\mathsurround\z@$%
2316 (platexrelease)
                          \ifx\textbaselineshiftfactor\@undefined\else
2317 (platexrelease)
                             \textbaselineshiftfactor\z@\fi
2318 \langle platexrelease \rangle
                          \box\z@
2319 (platexrelease)
                        $\endgroup%
                        \ifnum\@tempcntb>\m@ne\ifnum\@tempcntb<\@cclvi
2320 (platexrelease)
                          \ifnum\xspcode\@tempcntb<2\hbox{}\fi
2321 (platexrelease)
2322 (platexrelease)
                        \fi\fi
2323 (platexrelease)
                      \else
2324 (platexrelease)
                        \ifdim\@tempdima=\z@{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@#1}%
2325 (platexrelease)
                        \else\leavevmode\lower\@tempdima\box\z@\fi
2326 (platexrelease)
2327 (platexrelease)
                      \endgroup}%
2328 \langle platexrelease \rangle
```

```
2330 <platexrelease > \plEndIncludeInRelease
                                                                      2331 \(\frac{platexrelease}\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\pltx@text@composite@x}\)
                                                                      2332 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                     {Fix for non-zero baselineshift}%
                                                                      2333 \langle platexrelease \rangle \def pltx@text@composite@x#1#2{%}
                                                                      2334 (platexrelease)
                                                                                                                              \int x#1\relax
                                                                      2335 (platexrelease)
                                                                                                                                      \expandafter\@secondoftwo
                                                                      2336 (platexrelease)
                                                                      2337 (platexrelease)
                                                                                                                                      \expandafter\@firstoftwo
                                                                      2338 (platexrelease)
                                                                                                                               \fi
                                                                      2339 (platexrelease)
                                                                                                                               #1{#2}\egroup
                                                                      2340 (platexrelease)
                                                                                                                               \leavevmode
                                                                      2341 (platexrelease)
                                                                                                                               \expandafter\lower
                                                                      2342 (platexrelease)
                                                                                                                                     \iftdir
                                                                      2343 (platexrelease)
                                                                                                                                            \ifmdir
                                                                                                                                                  \ifmmode\tbaselineshift\else\ybaselineshift\fi
                                                                     2344 (platexrelease)
                                                                     2345 (platexrelease)
                                                                                                                                            \else
                                                                     2346 (platexrelease)
                                                                                                                                                  \tbaselineshift
                                                                     2347 (platexrelease)
                                                                                                                                           \fi
                                                                     2348 (platexrelease)
                                                                                                                                     \else
                                                                     2349 (platexrelease)
                                                                                                                                            \ybaselineshift
                                                                                                                                     \fi
                                                                     2350 (platexrelease)
                                                                      2351 (platexrelease)
                                                                                                                                     \box\z0
                                                                     2352 (platexrelease)
                                                                                                                              \endgroup}
                                                                      2353 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                                                                      2354 \ \langle platexrelease \rangle \ volume{$1$ IncludeInRelease (0000/00/00) {\ volume{$1$} in Release 
                                                                      2355 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                    {Fix for non-zero baselineshift}%
                                                                      2356 \langle platexrelease \rangle \ | tx@text@composite@x\\@undefined
                                                                      2357 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plEndIncludeInRelease \)
                                                                     上記2通りの定義のうち、本当は pLPTFX の定義を用いたいのですが、想定外の
      \fixcompositeaccent
                                                                       エラーが発生するのを防ぐため、デフォルトでは IATEX の定義のままとしておき
\nofixcompositeaccent
         \@text@composite@x ます。そして、\fixcompositeaccent が有効な時だけ pLATFX の定義を用います。
                                                                        \nofixcompositeaccent はこの否定です。
                                                                      2358 \(\rangle platexrelease \)\(\rangle plinclude In Release \)\(\lambda o 000 \) \(\lambda o 000 \)\(\lambda o 000 \)\
                                                                                                                                        {Special case! (This block is required for any emulation date)}%
                                                                      2359 (platexrelease)%
                                                                      2360 (*plcore | platexrelease)
                                                                     2361 \DeclareRobustCommand\fixcompositeaccent{%
                                                                                        \let\oalign\pltx@oalign
                                                                     2362
                                                                                        \let\ltx@sh@ft\pltx@ltx@sh@ft
                                                                     2363
                                                                                        \let\@text@composite@x\pltx@text@composite@x
                                                                     2364
                                                                     2365 }
                                                                     2366 \DeclareRobustCommand\nofixcompositeaccent{%
                                                                                         \let\oalign\pltx@saved@oalign
                                                                                        \let\ltx@sh@ft\pltx@saved@ltx@sh@ft
                                                                                        \let\@text@composite@x\pltx@saved@text@composite@x
                                                                     2369
                                                                     2370 }
                                                                     2371 \nofixcompositeaccent
```

2329 (platexrelease)}

```
2372 (/plcore | platexrelease)
                     2373 <platexrelease <pre>\%\plEndIncludeInRelease
\@text@composite@x エミュレーション専用のコードです。
                    2374 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2018/07/28}{\fixcompositeaccent}
                    2375 (platexrelease)
                                                           {Fix for non-zero baselineshift}%
                    2376 (platexrelease)\nofixcompositeaccent % force LaTeX original (conditional default)
                     2377 (platexrelease)% other commands are actually defined for pLaTeX2e 2018-07-28
                     2378 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                     2380 (platexrelease)
                                                           {Fix for non-zero baselineshift}%
                     2381 (platexrelease)\nofixcompositeaccent % force LaTeX original (always)
                     2382 ⟨platexrelease⟩\let\fixcompositeaccent\@undefined
                     2383 ⟨platexrelease⟩\let\nofixcompositeaccent\@undefined
                     2384 (platexrelease)\let\pltx@saved@oalign\@undefined
                     2385 (platexrelease)\let\pltx@oalign\@undefined
                     2386 \(\rangle platexrelease \rangle \left\pltx@saved@ltx@sh@ft\@undefined
                     2387 /platexrelease\let\pltx@ltx@sh@ft\@undefined
                    2388 \(\rangle platexrelease \)\let\pltx@saved@text@composite@x\@undefined
                    2389 \(\rangle platexrelease \)\let\\pltx@text@composite@x\\@undefined
                     2390 <platexrelease > \plEndIncludeInRelease
                     2391 \langle platexrelease \rangle \rangle 1 IncludeInRelease (2016/04/17) \{ fixcompositeaccent \}
                     2392 (platexrelease)
                                                           {Fix for non-zero baselineshift}%
                     2393 (platexrelease)\fixcompositeaccent % force pLaTeX definition (always)
                     2394 (platexrelease)\let\oalign\pltx@saved@oalign % no fix at that time
                     2395 (platexrelease)\let\ltx@sh@ft\pltx@saved@ltx@sh@ft % no fix at that time
                     2396 \(\rangle platexrelease \rangle \)\let\fixcompositeaccent\@undefined
                     2397 ⟨platexrelease⟩\let\nofixcompositeaccent\@undefined
                     2398 (platexrelease)\let\pltx@saved@oalign\@undefined
                     2399 (platexrelease)\let\pltx@oalign\@undefined
                     2400 \ \langle platexrelease \rangle \ | \ tx@saved@ltx@sh@ft\\@undefined
                     2401 \ \langle \verb|platexrelease| \rangle \verb|let| pltx@ltx@sh@ft| @undefined
                     2403 ⟨platexrelease⟩\let\pltx@text@composite@x\@undefined
                     2404 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
                     2405 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\fixcompositeaccent}
                     2406 (platexrelease)
                                                           {Fix for non-zero baselineshift}%
                     2407 (platexrelease)\nofixcompositeaccent % force LaTeX original (always)
                     2408 (platexrelease)\let\fixcompositeaccent\@undefined
                    2409 (platexrelease) \let\nofixcompositeaccent\@undefined
                    2410 (platexrelease)\let\pltx@saved@oalign\@undefined
                    2411 (platexrelease)\let\pltx@oalign\@undefined
                    2412 \langle platexrelease \rangle \ | tx@saved@ltx@sh@ft\@undefined
                     2413 \(\rangle platexrelease \)\let\\pltx@ltx@sh@ft\\@undefined
                     2414 (platexrelease)\let\pltx@saved@text@composite@x\@undefined
                     2415 \(\rangle platexrelease \)\let\\pltx@text@composite@x\\@undefined
```

2416 <platexrelease <pre>\plEndIncludeInRelease

5.6 イタリック補正と\xkanjiskip

\check@nocorr@

「あ \texttt{abc}い」としたとき、書体の変更を指定された欧文の左側に和欧文間スペースが入らないのを修正します。

コミュニティ版の修正: pT_EX のバージョン p3.1.11 以前は、イタリック補正(以下 \/と記す)と \xkanjiskip の挿入が衝突 2 し

- 1. 「欧文文字 → \/」の場合には \/を無視する(つまり後に \xkanjiskip 挿入可能)
- 2. 「和文文字 → \/」の場合にはこの後に \xkanjiskip は挿入できない

という挙動になっていました。p3.2(2010年)の修正で

• \xkanjiskip 挿入時にはいかなる場合も \/を無視する

という挙動に変更されました。pIFTEX カーネルの \check@nocorr@の修正は、p3.1.11 以前の 2. への対処でしたが、これは「\text...{}の左への \/挿入」を無効化しているので、\textit{f\textup{a}}で本来入るべきイタリック補正が入りませんでした。p3.2 以降では pTEX の \xkanjiskip 対策が不要になっていますので、コミュニティ版では削除しました。

```
2417 \(\rangle\)plIncludeInRelease{2017/10/28}{\check@nocorr@}
2418 (platexrelease)
                                                                                                                    {Italic correction before \textt...}%
2419 \(\rangle\) \
2420 (platexrelease) \let \check@icl \maybe@ic
2421 (platexrelease) \def \check@icr {\ifvmode \else \aftergroup \maybe@ic \fi}%
2422 (platexrelease) \def \reserved@a {\nocorr}%
2423 (platexrelease) \def \reserved@b {#1}%
2424 (platexrelease) \def \reserved@c {#3}%
2425 (platexrelease) \ifx \reserved@a \reserved@b
2426 (platexrelease)
                                                                  \ifx \reserved@c \@empty
2427 (platexrelease)
                                                                         \let \check@icl \@empty
2428 (platexrelease)
                                                                   \else
2429 (platexrelease)
                                                                         \let \check@icl \@empty
2430 (platexrelease)
                                                                         \let \check@icr \@empty
2431 (platexrelease)
                                                                  \fi
2432 (platexrelease)
                                                            \else
2433 \; \langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                                                                   \ifx \reserved@c \@empty
2434 (platexrelease)
                                                                   \else
2435 (platexrelease)
                                                                         \let \check@icr \@empty
2436 (platexrelease)
                                                                   \fi
2437 (platexrelease)
                                                           \fi
2438 (platexrelease)}
2439 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
```

File b: plfonts.dtx Date: 2020/04/07 Version v1.7f

⁻2和文のイタリック補正用 kern が、通常の explicit な (\kern による) kern と同じ扱いを受けていたため。

```
2440 \(\rangle platexrelease \)\rangle \)\rangle \(\rangle platexrelease \)\rangle \)\rangle \(\rangle platexrelease \)\rangle \(\rangle platexrelease \)\rangle \)\rangle \(\rangle platexrelease \)\rangle \(\ra
      2441 (platexrelease)
                                                                                 {ASCII Corporation original}%
      2442 \(\rangle platexrelease \) \(\def \) \(\check@nocorr@ #1#2\nocorr#3\@nil \{\%
      2443 (platexrelease)
                                            \let \check@icl \relax % changed from \maybe@ic
                                            \def \check@icr {\ifvmode \else \aftergroup \maybe@ic \fi}%
      2444 (platexrelease)
      2445 (platexrelease) \def \reserved@a {\nocorr}%
      2446 (platexrelease)
                                            \def \reserved@b {#1}%
      2447 (platexrelease)
                                            \def \reserved@c {#3}%
      2448 (platexrelease)
                                            \ifx \reserved@a \reserved@b
      2449 (platexrelease)
                                                 \ifx \reserved@c \@empty
      2450 (platexrelease)
                                                     \let \check@icl \@empty
      2451 (platexrelease)
                                                 \else
      2452 (platexrelease)
                                                     \let \check@icl \@empty
      2453 (platexrelease)
                                                     \let \check@icr \@empty
      2454 (platexrelease)
                                                 \fi
      2455 (platexrelease)
                                             \else
      2456 (platexrelease)
                                                 \ifx \reserved@c \@empty
      2457 \langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                                                 \else
      2458 (platexrelease)
                                                     \let \check@icr \@empty
      2459 (platexrelease)
                                                 \fi
      2460 (platexrelease)
                                            \fi
      2461 (platexrelease)}
      2462 <platexrelease <pre>\plEndIncludeInRelease
\ 最後に、\inhibitglueの簡略形を定義します。このコマンドは、和文フォントの
        メトリック情報から、自動的に挿入されるグルーの挿入を禁止します。
             2014年の pT<sub>E</sub>X の \inhibitglue のバグ修正に伴い、 \inhibitglue が垂直モー
         ドでは効かなくなりました。IATEXでは垂直モードと水平モードの区別が隠されて
        いますので、pIATeX の追加命令である \<は段落頭でも効くように修正します。
             \DeclareRobustCommandを使うと\protectの影響で前方の文字に対する\inhibitglue
        が効かなくなるので、e-TEX の \protected が必要です。
      2463 \ \langle \texttt{platexrelease} \rangle \texttt{plIncludeInRelease} \{ 2017/10/28 \} \{ \texttt{\chickless} \} 
                                                                                 {\inhibitglue in vertical mode}%
      2464 (platexrelease)
      2465 (*plcore | platexrelease)
      2466 \ifx\protected\Qundefined
      2467 \def \< \\inhibitglue \}
      2468 \ensuremath{\setminus} else
      2469 \protected\def\<{\ifvmode\leavevmode\fi\inhibitglue}
      2470 \fi
      2471 (/plcore | platexrelease)
      2472 \(\rangle platexrelease \)\(\rangle plEndIncludeInRelease \)
      2473 \langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease \{0000/00/00\} \{\<\}
      2474 (platexrelease)
                                                                                  {ASCII Corporation original}%
      2475 \langle platexrelease \rangle \def \< \{ \inhibitglue \}
      2476 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
```

5.7 デフォルト設定ファイルの読み込み

デフォルト設定ファイル pldefs.ltx は、もともと plcore.ltx の途中で読み込んでいましたが、2018 年以降の新しいコミュニティ版 pl Φ TeX では platex.ltx から読み込むことにしました。実際の中身については、第6節を参照してください。

6 デフォルト設定ファイル

ここでは、フォーマットファイルに読み込まれるデフォルト値を設定しています。この節での内容は pldefs.ltx に出力されます。このファイルの内容を plcore.ltx に含めてもよいのですが、デフォルトの設定を参照しやすいように、別ファイルにしてあります。

プリロードサイズは、DOCSTRIP プログラムのオプションで変更することができます。これ以外の設定を変更したい場合は、pldefs.ltx を直接、修正するのではなく、このファイルを pldefs.cfg という名前でコピーをして、そのファイルに対して修正を加えるようにしてください。

```
2477 \*pldefs\
2478 \ProvidesFile{pldefs.ltx}
2479 [2020/02/01 v1.6v pLaTeX Kernel (Default settings)]
2480 \( /pldefs \)
```

6.1 テキストフォント

テキストフォントのための属性やエラー書体などの宣言です。 $pIPT_EX$ のデフォルトの横組エンコードは JY1、縦組エンコードは JT1 とします。

縦横エンコード共通:

```
2481 (*pldefs)
2482 \DeclareKanjiEncodingDefaults{}{}
2483 \DeclareErrorKanjiFont{JY1}{mc}{m}{n}{10}
2484 \kanjifamily{mc}
2485 \kanjiseries{m}
2486 \kanjishape{n}
2487 \fontsize{10}{10}

横組エンコード:
2488 \DeclareYokoKanjiEncoding{JY1}{}{}
2489 \DeclareKanjiSubstitution{JY1}{mc}{m}{n}

縦組エンコード:
2490 \DeclareTateKanjiEncoding{JT1}{}
2491 \DeclareKanjiSubstitution{JT1}{mc}{m}{n}

縦横のエンコーディングのセット化:
2492 \KanjiEncodingPair{JY1}{JT1}
```

File b: plfonts.dtx Date: 2020/04/07 Version v1.7f

```
とに伴い、\shapedefault は明示的に"n"に設定されました。
2493 \mbox{ } \mbox{newcommand\mbox{mcdefault{mc}}}
2494 \newcommand\gtdefault{gt}
2495 \newcommand\kanjiencodingdefault{JY1}
2496 \verb|\newcommand\kanjifamilydefault{\mcdefault}|
2498 \newcommand\kanjishapedefault{n}% formerly \updefault
和文エンコードの指定:
2499 \kanjiencoding{JY1}
フォント定義:これらの具体的な内容は第7節を参照してください。
2500 \input{jy1mc.fd}
2501 \input{jy1gt.fd}
2502 \input{jt1mc.fd}
2503 \input{jt1gt.fd}
フォントを有効にします。
```

フォント属性のデフォルト値:IATrX 2 ~ 2019-10-01 までは\shapedefault は\updefault

6.2 プリロードフォント

2504 \fontencoding{JT1}\selectfont 2505 \fontencoding{JY1}\selectfont

あらかじめフォーマットファイルにロードされるフォントの宣言です。DOCSTRIP プログラムのオプションでロードされるフォントのサイズを変更することができます。plfmt.ins では xpt を指定しています。

```
2506 (*xpt)
2507 \DeclarePreloadSizes{JY1}{mc}{m}{n}{5,7,10,12}
2508 \DeclarePreloadSizes{JY1}{gt}{m}{n}{5,7,10,12}
2509 \DeclarePreloadSizes{JT1}{mc}{m}{n}{5,7,10,12}
2510 \DeclarePreloadSizes{JT1}{gt}{m}{n}{5,7,10,12}
2511 (/xpt)
2512 (*xipt)
2513 \DeclarePreloadSizes{JY1}{mc}{m}{n}{5,7,10.95,12}
2514 \DeclarePreloadSizes{JY1}{gt}{m}{n}{5,7,10.95,12}
2516 \DeclarePreloadSizes{JT1}{gt}{m}{n}{5,7,10.95,12}
2517 (/xipt)
2518 (*xiipt)
2519 \DeclarePreloadSizes{JY1}{mc}{m}{n}{7,9,12,14.4}
2520 \DeclarePreloadSizes{JY1}{gt}{m}{n}{7,9,12,14.4}
2521 \DeclarePreloadSizes{JT1}{mc}{m}{n}{7,9,12,14.4}
2522 \DeclarePreloadSizes{JT1}{gt}{m}{n}{7,9,12,14.4}
2523 (/xiipt)
2524 (*ori)
```

```
 \begin{array}{lll} 2525 & \begin{array}{lll} 2525 & \begin{array}{lll} 2526 & \begin{array}{lll} \{5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88\} \end{array} \\ 2527 & \begin{array}{llll} 2528 & \begin{array}{llll} \{5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88\} \end{array} \\ 2528 & \begin{array}{llll} \{5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88\} \end{array} \\ 2529 & \begin{array}{llll} \begin{array}{llll} 2520 & \begin{array}{llll} \{5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88\} \end{array} \\ 2530 & \begin{array}{llll} \{5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88\} \end{array} \\ 2531 & \begin{array}{llll} \begin{array}{llll} \begin{array}{llll} 2532 & \begin{array}{llll} \{5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88\} \end{array} \\ 2533 & \begin{array}{llll} \begin{array}{llll} \{5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88\} \end{array} \\ 2533 & \begin{array}{llll} \begin{array}{llll} \begin{array}{llll} \begin{array}{llll} 36,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88\} \end{array} \\ 2533 & \begin{array}{llll} \begin{array}{llll} \begin{array}{llll} 36,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88\} \end{array} \end{array} \\ \end{array} \end{array}
```

6.3 組版パラメータ

禁則パラメータや文字間へ挿入するスペースの設定などです。実際の各文字への禁 則パラメータおよびスペースの挿入の許可設定などは、kinsoku.tex で行なってい ます。具体的な設定については、kinsoku.dtx を参照してください。

組版パラメータの設定をします。\kanjiskip は、漢字と漢字の間に挿入される グルーです。\noautospacing で、挿入を中止することができます。デフォルトは \autospacing です。

```
2542 \times 542 = 0t minus .5pt 2543 = 0t minus .5pt 2543 = 0t minus .5pt
```

\xkanjiskip は、和欧文間に自動的に挿入されるグルーです。\noautoxspacing で、挿入を中止することができます。デフォルトは \autoxspacing です。

```
2544\xenjiskip=.25zw plus1pt minus1pt 2545\arrowvert autoxspacing
```

\jcharwidowpenalty は、パラグラフに対する禁則です。パラグラフの最後の行が 1文字だけにならないように調整するために使われます。

2546 \jcharwidowpenalty=500

ここまでが、pldefs.ltxの内容です。

 $2547 \langle /pldefs \rangle$

7 フォント定義ファイル

ここでは、フォント定義ファイルの設定をしています。フォント定義ファイルは、 LATEX のフォント属性を TEX フォントに置き換えるためのファイルです。記述方法 についての詳細は、fntguide.texを参照してください。

欧文書体の設定については、cmfonts.fdd や slides.fdd などを参照してください。skfonts.fdd には、写研代用書体を使うためのパッケージとフォント定義が記述されています。

横組用、縦組用ともに、明朝体のシリーズ bx がゴシック体となるように宣言しています。また、シリーズ b は同じ書体の bx と等価になるように宣言します。

pIAT_EX では従属書体に OT1 エンコーディングを指定しています。また、要求サイズ(指定されたフォントサイズ)が 10pt のとき、全角幅の実寸が 9.62216pt となるようにしますので、和文スケール値(1 zw÷要求サイズ)は 9.62216 pt/10 pt =0.962216 です。 min10 系のメトリックは全角幅が 9.62216pt でデザインされているので、これを 1 倍で読込みます。

```
2553 (*JY1mc)
 2554 \DeclareKanjiFamily{JY1}{mc}{}
2555 \ensuremath{\mbox{\sc N}} \{\mbox{\sc N}^{\mbox{\sc N}} = \mbox{\sc N}^{\mbox{\sc N}} \{\mbox{\sc N}^{\mbox{\sc N}} \} \{
2556 \DeclareRelationFont{JY1}{mc}{bx}{}{OT1}{cmr}{bx}{}
2557 \DeclareFontShape{JY1}{mc}{m}{n}{<5> <6> <7> <8> <9> <10> sgen*min
                                                      <10.95><12><14.4><17.28><20.74><24.88> min10
2558
                                                      <-> min10
2559
                                                     }{}
2560
2561 \DeclareFontShape{JY1}{mc}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
2562 \ensuremath{\texttt{DeclareFontShape\{JY1\}\{mc\}\{b\}\{n\}\{<->ssub*mc/bx/n\}\{\}\}}
2563 (/JY1mc)
 2564 (*JT1mc)
2565 \DeclareKanjiFamily{JT1}{mc}{}
2566 \ensuremath{\mbox{\sc NP}{\mbox{\sc NP}{\sc NP}{\mbox{\sc NP}{\mbox{\sc NP}{\mbox{\sc NP}{\sc NP}
2567 \DeclareRelationFont{JT1}{mc}{bx}{}{OT1}{cmr}{bx}{}
2568 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} 111{mc}{m}{n}{<5>$<6>$<7>$<8>$<9>$<10>$ sgen*tmin representation of the control of the c
2569
                                                      <10.95><12><14.4><17.28><20.74><24.88> tmin10
                                                      <-> tmin10
2570
                                                     }{}
2572 \DeclareFontShape{JT1}{mc}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
2573 \DeclareFontShape{JT1}{mc}{b}{n}{<->ssub*mc/bx/n}{}
2574 (/JT1mc)
2575 (*JY1gt)
2576 \DeclareKanjiFamily{JY1}{gt}{}
2577 \DeclareRelationFont{JY1}{gt}{m}{}{OT1}{cmr}{bx}{}
2578 \ensuremath{\mbox{PerlareFontShape{JY1}{gt}{m}{n}{<5} <6} <7> <8> <9> <10> sgen*goth
                                                     <10.95><12><14.4><17.28><20.74><24.88> goth10
2579
2580
                                                      <-> goth10
2581
                                                     }{}
```

```
2582 \ensuremath{\mbox{\sc Nape{JY1}{gt}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{{}}}}
2583 \ensuremath{\mbox{\sc lareFontShape{JY1}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{{}}{}} \\
2584 (/JY1gt)
2585 (*JT1gt)
2586 \verb|\DeclareKanjiFamily{JT1}{gt}{}\}
2588 \ensuremath{\texttt{DeclareFontShape{JT1}{gt}{m}{n}{<5}} <6> <7> <8> <9> <10> sgen*tgoth
       <10.95><12><14.4><17.28><20.74><24.88> tgoth10
2589
2590
       <-> tgoth10
       }{}
2591
2593 \ensuremath{\mbox{\sc hape{JT1}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{{}}}}
2594 (/JT1gt)
```

File c

plcore.dtx

概要 8

このファイルでは、つぎの機能の拡張や修正を行っています。詳細は、それぞれの 項目の説明を参照してください。

- プリアンブルコマンド
- 改ページ
- 改行
- オブジェクトの出力順序
- ・トンボ
- 脚注マクロ
- 相互参照
- 疑似タイプ入力
- tabbing 環境
- 用語集の出力
- 時分を示すカウンタ

コード

このファイルの内容は、pIPTEX 2ε のコア部分です。 1 (*plcore)

9.1 プリアンブルコマンド

文書ファイルが必要とするフォーマットファイルの指定をするコマンドを拡張し、 $pIAT_FX 2_{\varepsilon}$ フォーマットファイルも認識するようにします。

NeedsTeXFormat NeedsTeXFormats に "pLaTeX2e" を指定すると、"LaTeX2e" フォーマットを必要 \@needsPformat とする英語版のクラスファイルやパッケージファイルなどが使えなくなってしまう \OneedsPfOrmat ために再定義します。このコマンドはltclass.dtx で定義されています。

```
2 \def\NeedsTeXFormat#1{%
     \def\reserved@a{#1}%
     \ifx\reserved@a\pfmtname
       \expandafter\@needsPformat
5
6
7
       \ifx\reserved@a\fmtname
         \expandafter\expandafter\@needsformat
8
       \else
9
         \ClatexCerror{This file needs format '\reservedCa',%
10
            \MessageBreak but this is '\pfmtname'}{%
11
            The current input file will not be processed
12
            further,\MessageBreak
13
            because it was written for some other flavor of
            TeX.\MessageBreak\@ehd}%
         \endinput
16
       \fi
17
     \fi}
18
19 %
20 \def\@needsPformat{\@ifnextchar[\@needsPf@rmat{}}
21 %
22 \def\@needsPf@rmat[#1]{%
      \@ifl@t@r\pfmtversion{#1}{}%
^{24}
      {\@latex@warning@no@line
          {You have requested release '#1' of pLaTeX,\MessageBreak
25
           but only release '\pfmtversion' is available}}}
26
27 %
28 \@onlypreamble\@needsPformat
29 \@onlypreamble\@needsPf@rmat
```

\documentstyle

\documentclass の代わりに \documentstyle が使われると、 $\mbox{\it ET}_{\rm EX}$ 2.09 互換モードに入ります。このとき、オリジナルの $\mbox{\it ET}_{\rm EX}$ では latex209.def を読み込みますが、 $\mbox{\it pIAT}_{\rm EX}$ 2 $_{\varepsilon}$ では pl209.def を読み込みます。このコマンドは ltclass.dtx で定義されています。

```
30 \def\documentstyle{%
31 \makeatletter\input{pl209.def}\makeatother
32 \documentclass}
33 \langle/plcore\
```

9.2 直前の JFM 由来スペースの削除【コミュニティ版独自】

現状の pT_EX (T_EX Live 2017 時点)では、\inhibitglue プリミティブは「JFM 由来のスペース(グルー・カーン)挿入ルーチンを抑制する」働きをします。しかし、既に挿入されてしまった JFM グルーやカーンを削除することはできません。

\removejfmglue そこで、「最後のノードが JFM グルーであった場合にそれを削除する」というユーザ向け命令を定義します。この機能には e-pTEX 180226 以降の \lastnodesubtype

プリミティブが必要です。この命令はあくまで「\removejfmglue の展開時点で既に pT_EX によって挿入完了している JFM グルー」だけを削除し、「これから挿入されようとする JFM グルー」は抑制しません。例えば

始) \removejfmglue 中) \relax\removejfmglue 終

という入力からは

始)中)終

```
が得られます(最初の\removejfmglue は結果的に何もしていません)。
34 \ \langle \texttt{platexrelease} \rangle \texttt{plIncludeInRelease} \{ 2018/03/09 \} \%
35 (platexrelease)
                                        {\removejfmglue}{Macro added}%
36 (*plcore | platexrelease)
38 \let\removejfmglue\@undefined
39 \else
40 \setbox0\hbox{%
     \ifdefined\ucs %% upTeX check
41
          \finthermin=upjisr-h at 9.62216pt
42
        \else
43
          \jfont\tenmin=min10
44
        \fi\tenmin
 45
        \c \jis"214B\null\setbox0\lastbox
47
        \global\chardef\pltx@gluetype\lastnodetype
48
        \global\chardef\pltx@jfmgluesubtype\lastnodesubtype
49 }
     \setbox0=\box\voidb@x
50
     \protected\def\removejfmglue{%
51
        \ifnum\lastnodetype=\pltx@gluetype\relax
52
           \ifnum\lastnodesubtype=\pltx@jfmgluesubtype\relax
53
54
             \unskip
          \fi
55
        fi
56
57\fi
58 \; \langle / \mathsf{plcore} \; | \; \mathsf{platexrelease} \rangle
59 \ \langle {\tt platexrelease} \rangle \backslash {\tt plEndIncludeInRelease}
60 \(\rangle plane = \plinclude InRelease \{ 0000/00/00 \} \%
61 (platexrelease)
                                        {\removejfmglue}{Macro added}%
62~ \langle {\tt platexrelease} \rangle {\tt let} \\ {\tt removejfmglue} \backslash {\tt @undefined}
 63 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
```

9.3 改ページ

縦組のとき、改ページ後の内容が偶数ページ(右ページ)からはじまるようにしま す。横組のときには、奇数ページ(右ページ)からはじまります。 \cleardoublepage

このコマンドによって出力される、白ページのページスタイルを *empty* にし、ヘッダとフッタが入らないようにしています。ltoutput.dtx の定義を、縦組、横組に合わせて、定義しなおしたものです。

```
65 \def\cleardoublepage{\clearpage\if@twoside
    \ifodd\c@page
67
      \iftdir
        \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
68
        \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
69
70
      \fi
    \else
71
      \ifydir
72
        \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
73
        \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
      \fi
    fi\fi
```

9.4 改行

\@gnewline

日本語 T_EX の行頭禁則処理は、禁則対象文字の直前に、 \prebreakpenalty で指定されたペナルティの値を挿入することで行なっています。ところが、改行コマンドは負のペナルティの値を挿入することで改行を行ないます。そのために、禁則ペナルティの値が 10000 の文字の直後では、ペナルティの値が相殺され、改行することができません。

```
あいうえお \\
!かきくけこ
```

したがって、\newline マクロに \mbox{}を入れることによって、\newline マクロのペナルティ-10000 と行頭文字のペナルティ10000 が加算されないようにします。\\ は \newline マクロを呼び出しています。

なお、\newline マクロは ltspaces.dtx で定義されています。

IFT_EX <1996/12/01>で改行マクロが変更され、\\ が \newline を呼び出さなくなったため、変更された改行マクロに対応しました。\null の挿入位置は同じです。ltspace.dtx の定義を上記に合わせて、定義しなおしました。

日本語 TeX 開発コミュニティによる補足:アスキーによる pleteX では、行頭禁則文字の直前で \\ による強制改行を行えるようにするという目的で \null を \@gnewline マクロ内に挿入していました。しかし、これでは \\\par と書いた場合に Underfull 警告が出なくなっています(tests/newline_par.tex を latex と platex で処理してみてください)。

もし \null の代わりに \hskip\z@を挿入すれば、IFTEX と同様に Underfull 警告を出すことができます。ただし、\null を挿入した場合と異なり、強制改行後の行

頭に JFM グルーが入らなくなります。これはむしろ、奥村さんの jsclasses で行頭を天ツキに直しているのと同じですが、 $pIPT_EX$ としては挙動が変化してしまいますので、現時点では $\null \rightarrow \nskip\null > \null > \$

```
77 \def\@gnewline #1{%
78 \ifvmode
79 \@nolnerr
80 \else
81 \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
82 \ignorespaces
83 \fi}
84 \( / \ploore \)
```

\@no@lnbk 日本語 T_EX 開発コミュニティによる追加: さらに、\\だけでなく\linebreak についても同様の対処をします。 IFT_EX の定義のままではマクロによるペナルティ-10000 と行頭文字のペナルティ10000 が加算されてしまうため、\hskip\z@\relax を入れておきます。なお、\linebreak を発行して行分割が起きた場合、新しい行頭の JFM グル―は消えるという従来の pIFTEX の挙動も維持しています。

前回の \hskip\z@\relax の追加では、\nolinebreak の場合に \kanjiskip や\xkanjiskip が入らない問題が起きてしまいました。そこで、\penalty\z@\relax に変更しました。これは、明示的な \penalty プリミティブ同士の合算は行われないことを利用しています。

ところが、その変更によってそもそも \nolinebreak が効かない場合が生じたので、変更全体をいったんキャンセルして元に戻します。

```
85 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2017/10/28}{\@no@lnbk}
                                      {Break before prebreakpenalty (revert)}%
 86 (platexrelease)
 87 (platexrelease)\def\@no@lnbk #1[#2]{%
 88 (platexrelease) \ifvmode
 89 (platexrelease)
                    \@nolnerr
90 (platexrelease) \else
91 (platexrelease)
                     \@tempskipa\lastskip
92 (platexrelease)
                     \unskip
93 (platexrelease)
                     \penalty #1\@getpen{#2}%
94 (platexrelease)
                     \ifdim\@tempskipa>\z@
 95 (platexrelease)
                       \hskip\@tempskipa
96 (platexrelease)
                       \ignorespaces
                     \fi
97 (platexrelease)
98 \langle platexrelease \rangle \ \fi
99~ \langle {\tt platexrelease} \rangle \backslash {\tt plEndIncludeInRelease}
101 (platexrelease)
                                      {Break before prebreakpenalty (another)}%
102 (platexrelease)\def\@no@lnbk #1[#2]{%
103 (platexrelease)
                  \ifvmode
104 (platexrelease)
                     \@nolnerr
105 (platexrelease)
                  \else
106 (platexrelease)
                     \@tempskipa\lastskip
```

```
107 (platexrelease)
                      \unskip
108 (platexrelease)
                      \penalty #1\@getpen{#2}%
109 (platexrelease)
                      \penalty\z@\relax %% added (2017/08/25)
110 (platexrelease)
                      \ifdim\@tempskipa>\z@
111 (platexrelease)
                        \hskip\@tempskipa
112 (platexrelease)
                        \ignorespaces
113 (platexrelease)
                      \fi
114 (platexrelease)
                   \fi}
115 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
116 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2017/05/05}{\@no@lnbk}
117 (platexrelease)
                                        {Break before prebreakpenalty}%
118 \(\rangle platexrelease \rangle \def \OnoOlnbk #1[#2] \{\%\}
119 (platexrelease)
                   \ifvmode
120 (platexrelease)
                      \@nolnerr
121 (platexrelease)
                    \else
122 (platexrelease)
                      \@tempskipa\lastskip
123 (platexrelease)
                      \unskip
                      \penalty #1\@getpen{#2}%
124 (platexrelease)
                      \hskip\z@\relax %% added (2017/05/03)
125 (platexrelease)
126 (platexrelease)
                      \ifdim\@tempskipa>\z@
127 (platexrelease)
                        \hskip\@tempskipa
128 (platexrelease)
                        \ignorespaces
129 (platexrelease)
                      \fi
130 (platexrelease)
                   \fi}
131 \(\rangle platexrelease \)\(\rangle \)\(\rangle platexrelease \)
133 (platexrelease)
                                        {LaTeX2e original}%
134 \langle platexrelease \rangle \cdot def \cdot @no@lnbk #1[#2]{%}
135 (platexrelease)
                   \ifvmode
136 (platexrelease)
                      \@nolnerr
137 (platexrelease)
                   \else
138 (platexrelease)
                      \@tempskipa\lastskip
139 (platexrelease)
                      \unskip
140 (platexrelease)
                      \penalty #1\@getpen{#2}%
141 (platexrelease)
                      \ifdim\@tempskipa>\z@
142 (platexrelease)
                        \hskip\@tempskipa
143 (platexrelease)
                        \ignorespaces
144 (platexrelease)
                      \fi
145 (platexrelease)
                   \fi}
146 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
```

なお、 \LaTeX 用の命令である \\ と \linebreak には上記のような禁則文字への対策を入れていますが、plain \TeX 互換のシンプルな命令である \break や \nobreak には、対策を行いません。

9.5 オブジェクトの出力順序

オリジナルの LATEX は、トップフロート、本文、脚注、ボトムフロートの順番で出力しますけれども、日本語組版では、トップフロート、本文、ボトムフロート、脚注という順番の方が一般的ですので、このような順番になるよう修正をします。

したがって、文書ファイルによっては IATEX の組版結果と異なる場合がありますので、注意をしてください。

2014年にIPTEX に fltrace パッケージが追加されましたので、その pIPTEX 版として pfltrace パッケージを追加します。この pfltrace パッケージは IPTEX の fltrace パッケージに依存します。

```
147 \langle *fltrace \rangle
```

- 148 \NeedsTeXFormat{pLaTeX2e}
- 149 \ProvidesPackage{pfltrace}
- [2016/05/20 v1.2e Standard pLaTeX package (float tracing)]
- 151 \RequirePackageWithOptions{fltrace}
- 152 (/fltrace)

\@makecol このマクロが組み立てる部分の中心となります。ltoutput.dtx で定義されているものです。

```
153 \langle platexrelease \rangle plincludeInRelease \{2017/04/08\} \{ 0makecol \}
```

154 (platexrelease)

{Take into account depth of footnote}%

- 155 (*plcore | platexrelease)
- 156 \gdef\@makecol{%
- 157 \setbox\@outputbox\box\@cclv%
- 158 \let\@elt\relax % added on LaTeX (ltoutput.dtx 2003/12/16 v1.2k)
- 159 \xdef\@freelist{\@freelist\@midlist}%
- 160 \global \let \@midlist \@empty
- 161 \@combinefloats

オリジナルの IèTeX は、トップフロート、本文、脚注、ボトムフロートの順番で出力します。一方 pIeTeX は、トップフロート、本文、ボトムフロート、脚注の順番で出力します。ところが、アスキー版のコードは順番を入れ替えるだけでなく、脚注のあるページの版面全体の垂直位置が(特に縦組で顕著に)ずれてしまっていました。これは補正量 \dp\@outputbox の取得を**脚注挿入より前**に行っていたためで、コミュニティ版 pIeTeX ではこの問題に対処してあります。結果的に、fnpos パッケージ (yafoot) の \makeFNbottom かつ \makeFNbelow な状態と完全に等価になりました。

```
162 \let\pltx@textbottom\@textbottom \% save (pLaTeX 2017/02/25)
```

- 163 \ifvoid\footins\else % changed (pLaTeX 2017/02/25)
- 164 \setbox\@outputbox \vbox {%
- 165 \boxmaxdepth \@maxdepth
- 166 \unvbox \@outputbox
- 167 \Otextbottom % inserted here (pLaTeX 2017/02/25)
- 168 \vskip \skip\footins

```
\color@begingroup
169
170
             \normalcolor
            \footnoterule
172
            \unvbox \footins
173
          \color@endgroup
174
          }%
          \let\@textbottom\relax % disable temporarily (pLaTeX 2017/02/25)
175
176
      \fi
177
      \ifvbox\@kludgeins
        \@makespecialcolbox
178
179
        \setbox\@outputbox \vbox to\@colht {%
180
          %\boxmaxdepth \@maxdepth
                                        % comment out on LaTeX 1997/12/01
           \@texttop
182
183
          \dimen@ \dp\@outputbox
          \unvbox \@outputbox
184
```

縦組の際に \@outputbox の内容が空のボックスだけの場合に、\wd\@outputbox が 0pt になってしまい、結果としてフッタの位置がくるってしまっていた。0の \hskip を発生させると \wd\@outputbox の値が期待したものとなるので、縦組の場合はその方法で対処する。

ただし、0 の \hskip を発生させるとき、水平モードに入ってしまうと、たとえば longtable パッケージを使用して表組途中で改ページするときに \par -> {\vskip} の無限ループが起きてしまいます。そこで、\vbox の中で発生させます。

```
\iftdir\vbox{\hskip\z@}\fi
           \vskip -\dimen@
186
           \@textbottom
187
188
           }%
      \fi
189
      \let\@textbottom\pltx@textbottom % restore (pLaTeX 2017/02/25)
190
      \global \maxdepth \@maxdepth
191
192 }
193  (/plcore | platexrelease)
194 \plEndIncludeInRelease
195 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/09/03}{\@makecol}
196 (platexrelease)
                                      {Avoid infinite loop}%
197 (platexrelease)\gdef\@makecol{%
198 (platexrelease)
                    \setbox\@outputbox\box\@cclv%
199 (platexrelease)
                    \xdef\@freelist{\@freelist\@midlist}%
200 (platexrelease)
                    \global \let \@midlist \@empty
201 (platexrelease)
                    \@combinefloats
202 \langle platexrelease \rangle
                    \ifvbox\@kludgeins
203 (platexrelease)
                      \@makespecialcolbox
204 (platexrelease)
                    \else
                      \setbox\@outputbox \vbox to\@colht {%
205 (platexrelease)
                        %\boxmaxdepth \@maxdepth
                                                       % comment out on LaTeX 1997/12/01
206 (platexrelease)
207 (platexrelease)
                        \@texttop
208 (platexrelease)
                        \dimen@ \dp\@outputbox
```

```
209 (platexrelease)
                                                                             \unvbox \@outputbox
210 (platexrelease)
                                                                             \iftdir\vbox{\hskip\z@}\fi
211 (platexrelease)
                                                                             \vskip -\dimen@
212 (platexrelease)
                                                                             \@textbottom
213 (platexrelease)
                                                                             \ifvoid\footins\else % for pLaTeX
214 (platexrelease)
                                                                                    \vskip \skip\footins
215 \langle platexrelease \rangle
                                                                                    \color@begingroup
216 \langle platexrelease \rangle
                                                                                               \normalcolor
217 (platexrelease)
                                                                                               \footnoterule
218 (platexrelease)
                                                                                               \unvbox \footins
219 (platexrelease)
                                                                                    \color@endgroup
220 (platexrelease)
                                                                             \fi
221 (platexrelease)
                                                                             }%
222 (platexrelease)
                                                               \fi
223 (platexrelease)
                                                               \global \maxdepth \@maxdepth
224 (platexrelease)}
225 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
226 \langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease \{2016/04/17\} \{\column{2}{c} | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 
227 (platexrelease)
                                                                                                                       {Adjust for \dp\@outputbox in tate mode}%
228 \langle platexrelease \rangle \gdef \@makecol{%}
229 (platexrelease)
                                                               \setbox\@outputbox\box\@cclv%
230 (platexrelease)
                                                               \xdef\@freelist{\@freelist\@midlist}%
231 (platexrelease)
                                                               \global \let \@midlist \@empty
232 (platexrelease)
                                                               \@combinefloats
233 (platexrelease)
                                                               \ifvbox\@kludgeins
234 (platexrelease)
                                                                       \@makespecialcolbox
235 (platexrelease)
236 (platexrelease)
                                                                       \setbox\@outputbox \vbox to\@colht {%
237 (platexrelease)
                                                                             %\boxmaxdepth \@maxdepth
                                                                                                                                                                               % comment out on LaTeX 1997/12/01
238 (platexrelease)
                                                                              \@texttop
239 (platexrelease)
                                                                             \dimen@ \dp\@outputbox
240 (platexrelease)
                                                                             \unvbox \@outputbox
241 (platexrelease)
                                                                             \iftdir\hskip\z@\fi
242 (platexrelease)
                                                                             \vskip -\dimen@
243 (platexrelease)
                                                                              \@textbottom
244 (platexrelease)
                                                                             \ifvoid\footins\else % for pLaTeX
245 (platexrelease)
                                                                                    \vskip \skip\footins
                                                                                    \color@begingroup
246 (platexrelease)
247 (platexrelease)
                                                                                               \normalcolor
                                                                                               \footnoterule
248 (platexrelease)
                                                                                               \unvbox \footins
249 (platexrelease)
250 (platexrelease)
                                                                                    \color@endgroup
                                                                             \fi
251 (platexrelease)
252 (platexrelease)
                                                                             }%
253 (platexrelease)
                                                               \fi
254 (platexrelease)
                                                               \global \maxdepth \@maxdepth
255 (platexrelease)}
256 \ \langle {\tt platexrelease} \rangle \backslash {\tt plEndIncludeInRelease}
257 \langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease \{0000/00/00\} \{\column{2}{c} \column{2}{c} 
258 (platexrelease)
                                                                                                                       {ASCII Corporation original}%
```

```
259 \langle platexrelease \rangle \gdef \@makecol{%}
260 (platexrelease)
                    \setbox\@outputbox\box\@cclv%
261 (platexrelease)
                    \xdef\@freelist{\@freelist\@midlist}%
262 (platexrelease)
                    \global \let \@midlist \@empty
263 (platexrelease)
                    \@combinefloats
264 (platexrelease)
                    \ifvbox\@kludgeins
265 (platexrelease)
                       \@makespecialcolbox
266 (platexrelease)
                    \else
267 (platexrelease)
                       \setbox\@outputbox \vbox to\@colht {%
268 (platexrelease)
                         %\boxmaxdepth \@maxdepth
                                                          % comment out on LaTeX 1997/12/01
269 (platexrelease)
                         \@texttop
270 (platexrelease)
                         \dimen@ \dp\@outputbox
271 (platexrelease)
                         \unvbox \@outputbox
272 (platexrelease)
                         \iftdir\hskip\z@
273 (platexrelease)
                         \else\vskip -\dimen@\fi
274 (platexrelease)
                         \@textbottom
275 (platexrelease)
                         \ifvoid\footins\else % for pLaTeX
276 (platexrelease)
                           \vskip \skip\footins
277 (platexrelease)
                           \color@begingroup
278 (platexrelease)
                               \normalcolor
279 (platexrelease)
                               \footnoterule
280 (platexrelease)
                               \unvbox \footins
281 (platexrelease)
                           \color@endgroup
282 (platexrelease)
                         \fi
283 (platexrelease)
                         }%
284 (platexrelease)
                    \fi
                     \global \maxdepth \@maxdepth
285 (platexrelease)
286 (platexrelease)}
287 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
```

\@makespecialcolbox

本文(あるいはボトムフロート)と脚注の間に \@textbottom を入れたいので、 \@makespecialcolbox コマンドも修正をします。やはり、ltoutput.dtx で定義されているものです。

このマクロは、\enlargethispage が使われたときに、\@makecol マクロから呼び出されます。

日本語 T_{EX} 開発コミュニティによる補足 (2017/02/25): 2016/11/29 以前の pIFT_{EX} では、\@makecol はボトムフロートを挿入した後、すぐに \@kludgeins が空かどうか判定し

- 空の場合は、残りすべての処理を \@makespecialcolbox に任せる
- 空でない場合は、\@makecol 自身で残りすべての処理を行う

としていました。しかし 2017/04/08 以降の pI Δ TeX では、\@makecol はボトムフロートと脚注を挿入してから \@kludgeins の判定に移るようにしています。したがって、新しい \@makecol から以下に記す \@makespecialcolbox が呼び出される

場合は、\ifvoid\footins(二箇所)の判定は常に真となるはずです。要するに「つぎの部分が $pIPT_{EX}$ 用の修正です。」という二箇所のコードは実質的に不要となりました。

しかし、だからといって消してしまうと、古い pI $\stackrel{\text{IM}}{\text{LEX}}$ の \@makecol をベースに作られた外部パッケージから \@makespecialcolbox が呼び出される場合に脚注が消滅するおそれがあります。このため、\@makespecialcolbox は従来のコードのまま維持してあります(害はありません)。

```
288 \langle *plcore | fltrace \rangle
289 \gdef\@makespecialcolbox{%
290 (*trace)
291
      292
                           dp \the\dp\@kludgeins\space
                           wd \the\wd\@kludgeins}%
293
294 (/trace)
      \setbox\@outputbox \vbox {%
295
        \@texttop
297
        \dimen@ \dp\@outputbox
298
        \unvbox\@outputbox
299
        \vskip-\dimen@
        }%
300
      \@tempdima \@colht
301
      \ifdim \wd\@kludgeins>\z@
302
        \advance \@tempdima -\ht\@outputbox
303
        \advance \@tempdima \pageshrink
304
305 ⟨*trace⟩
        \fl@trace {Natural ht of col: \the\ht\@outputbox}%
306
307
        \fl@trace {\string \@colht: \the\@colht}%
        \fl@trace {Pageshrink added: \the\pageshrink}%
308
309
        \fl@trace {Hence, space added: \the\@tempdima}%
310 \langle / trace \rangle
311
        \setbox\@outputbox \vbox to \@colht {%
312 %
           \boxmaxdepth \maxdepth
313
          \unvbox\@outputbox
314
          \vskip \@tempdima
          \@textbottom
315
つぎの部分が pLAT<sub>F</sub>X 用の修正です。
          \ifvoid\footins\else % for pLaTeX
316
317
            \vskip\skip\footins
318
            \color@begingroup
319
               \normalcolor
320
                \footnoterule
               \unvbox \footins
321
            \color@endgroup
322
323
          \fi
        }%
324
325
      \else
326
        \advance \@tempdima -\ht\@kludgeins
```

```
327 (*trace)
                     \fl@trace {Natural ht of col: \the\ht\@outputbox}%
             328
                     \fl@trace {\string \@colht: \the\@colht}%
             329
             330
                     \fl@trace {Extra size added: -\the \ht \@kludgeins}%
                     \fl@trace {Hence, height of inner box: \the\@tempdima}%
             331
                     \fl@trace {Max? pageshrink available: \the\pageshrink}%
             332
             333~\langle/\text{trace}\rangle
                     \setbox \@outputbox \vbox to \@colht {%
             334
                       \vbox to \@tempdima {%
             335
             336
                         \unvbox\@outputbox
             337
                         \@textbottom
             つぎの部分が plaTeX 用の修正です。脚注があれば、ここでそれを出力します。
                         \ifvoid\footins\else % for pLaTeX
             338
                           \vskip\skip\footins
             339
             340
                           \color@begingroup
             341
                              \normalcolor
             342
                              \footnoterule
                              \unvbox \footins
             343
             344
                           \color@endgroup
             345
                         \fi
             346
                       }\vss}%
                   \fi
             347
                   {\setbox \@tempboxa \box \@kludgeins}%
             348
             349 \langle *trace \rangle
                     \fl@trace {kludgeins box made void}%
             350
            _{351}\;\langle/\text{trace}\rangle
             352 }
             353 (/plcore | fltrace)
            このマクロは、\@specialoutput マクロから呼び出されます。ボックス footins が
\@reinserts
             組み立てられたモードに合わせて縦モードか横モードで \unvbox をします。
             354 (*plcore)
             355 \def\@reinserts{%
             356
                  \ifvoid\footins\else\insert\footins{%
             357
                    \iftbox\footins\tate\else\yoko\fi
             358
                    \unvbox\footins}\fi
                  \ifvbox\@kludgeins\insert\@kludgeins{\unvbox\@kludgeins}\fi
             359
             360 }
                    トンボ
             9.6
             ここではトンボを出力するためのマクロを定義しています。
```

\iftombow \iftombow はトンボを出力するかどうか、\iftombowdate は DVI を作成した日付 \iftombowdate をトンボの脇に出力するかどうかを示すために用います。

 $361 \mbox{ } \mbox{$

362 \newif\iftombowdate \tombowdatetrue

```
\@tombowwidth \@tombowwidth には、トンボ用罫線の太さを指定します。デフォルトは 0.1 ポイン
                               トです。この値を変更し、\maketombowbox コマンドを実行することにより、トンボ
                              の罫線太さを変更して出力することができます。通常の使い方では、トンボの罫線
                               を変更する必要はありません。DVI をフィルムに面付け出力するとき、トンボをつ
                              けずに位置はそのままにする必要があるときに、この太さをゼロポイントにします。
                              363 \newdimen\@tombowwidth
                              364 \ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{
\@tombowbleed \@tombowbleed は、bleed 幅を指定します。デフォルトは 3mm です。
                              365 (/plcore)
                              366 \langle platexrelease \rangle plincludeInRelease \{2018/05/20\} \{\ensuremath{\mbox{\sc Macro}} added} \%
                              367 (*plcore | platexrelease)
                              368 \def\@tombowbleed{3mm}
                              369  /plcore | platexrelease
                              370 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
                              371 \platexrelease\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@tombowbleed}{Macro added}%
                              373 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                              374 (*plcore)
\@tombowcolor \@tombowcolor は、トンボの色です。デフォルトは \normalcolor です。
                              375 (/plcore)
                              376 \platexrelease\plIncludeInRelease{2018/05/20}{\@tombowcolor}{Macro added}%
                              377 (*plcore | platexrelease)
                              378 \def\@tombowcolor{\normalcolor}
                              379 (/plcore | platexrelease)
                              380 <platexrelease \plEndIncludeInRelease
                              381 \platexrelease\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@tombowcolor}{Macro added}%
                              382 \ \langle {\tt platexrelease} \rangle {\tt let} \ ({\tt Qtombowcolor} \ ({\tt Qundefined} \ )
                              383 <platexrelease \plEndIncludeInRelease
                              384 (*plcore)
                                   トンボ用の罫線を定義します。
                  \@TL \@TLと\@T1 はページ上部の左側、\@TC はページ上部の中央、\@TR と\@Tr はペー
                  \@T1 ジ上部の左側のトンボとなるボックスです。
                  \@TC 385 \newbox\@TL\newbox\@Tl
                              386 \newbox\@TC
                  \@TR
                              387 \newbox\@TR\newbox\@Tr
                  \@Tr
                  \@BL \@BL と \@B1 はページ下部の左側、\@BC はページ下部の中央、\@BR と \@Br はペー
                  \@B1 ジ下部の左側のトンボとなるボックスです。
                  \@BC 388 \newbox\@BL\newbox\@B1
                              389 \newbox\@BC
                  \@BR
                              390 \newbox\@BR\newbox\@Br
                  \@Br
```

```
\@CL \@CL はページ左側の中央、\@CR はページ右側の中央のトンボとなるボックスです。
         \@CR 391 \newbox\@CL
              392 \newbox\CR
 \@bannertoken \@bannertoken トークンは、トンボの横に出力する文字列を入れます。デフォルト
 \@bannerfont では何も出力しません。\@bannerfont フォントは、その文字列を出力するための
              フォントです。9ポイントのタイプライタ体としています。
              393 \font\@bannerfont=cmtt9
              394 \newtoks\@bannertoken
              395 \@bannertoken{}
\maketombowbox \maketombowbox コマンドは、トンボとなるボックスを作るために用います。この
              コマンドは、トンボとなるボックスを作るだけで、それらのボックスを出力するの
              ではないことに注意をしてください。
              396 (/plcore)
              397 \langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease \{2018/05/20\} \{\maketombowbox\}
              398 (platexrelease)
                                                         {Use \@tombowbleed}%
              399 (*plcore | platexrelease)
              400 \ensuremath{\mbox{\mbowbox}}\
                   \setbox\@TL\hbox to\z@{\yoko\hss
                       \vrule width\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax height\@tombowwidth depth\z@
              402
              403
                       \vrule height10mm width\@tombowwidth depth\z@
              404
                       \iftombowdate
                        405
              406
                   \setbox\@Tl\hbox to\z@{\yoko\hss
              407
              408
                       \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@
                       \vrule height\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax width\@tombowwidth depth\z@}%
              409
              410
                   \setbox\@TC\hbox{\yoko
                       \verb|\vrule| width 10mm| height \@tombowwidth| depth \| z@
              411
                       \vrule height10mm width\@tombowwidth depth\z@
              412
                       \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@}%
              413
                   \setbox\@TR\hbox to\z@{\yoko
              414
                       \vrule height10mm width\@tombowwidth depth\z@
              415
                       \vrule width\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax height\@tombowwidth depth\z@\hss}%
              417
                   \setbox\@Tr\hbox to\z@{\yoko
              418
                       \vrule height\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax width\@tombowwidth depth\z@
              419
                       \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@\hss}%
              420 %
                   \setbox\@BL\hbox to\z@{\yoko\hss
              421
                       \vrule width\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax depth\@tombowwidth height\z@
              422
                       \vrule depth10mm width\@tombowwidth height\z@}%
              423
                   \setbox\@Bl\hbox to\z@{\yoko\hss
              424
              425
                       \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@
                       \vrule depth\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax width\@tombowwidth height\z@}%
              426
                   \setbox\@BC\hbox{\yoko
              428
                       \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@
```

```
\vrule depth10mm width\@tombowwidth height\z@
429
430
         \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@}%
     \setbox\@BR\hbox to\z@{\yoko
431
         \vrule depth10mm width\@tombowwidth height\z@
432
433
         \vrule width\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax depth\@tombowwidth height\z@\hss}%
434
     \setbox\@Br\hbox to\z@{\yoko
         \vrule depth\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax width\@tombowwidth height\z@
435
         \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@\hss}%
436
437 %
438
     \setbox\@CL\hbox to\z@{\yoko\hss
         \vrule width10mm height.5\@tombowwidth depth.5\@tombowwidth
439
         \vrule height10mm depth10mm width\@tombowwidth}%
440
     \setbox\@CR\hbox to\z@{\yoko
441
         \vrule height10mm depth10mm width\@tombowwidth
         \vrule height.5\@tombowwidth depth.5\@tombowwidth width10mm\hss}%
443
444 }
445 (/plcore | platexrelease)
446 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
448 (platexrelease)
                                               {ASCII Corporation original}%
449 (platexrelease)\def\maketombowbox{%
450 (platexrelease)
                 \setbox\@TL\hbox to\z@{\yoko\hss
451 (platexrelease)
                     \vrule width13mm height\@tombowwidth depth\z@
452 (platexrelease)
                     \vrule height10mm width\@tombowwidth depth\z@
453 (platexrelease)
454 (platexrelease)
                       \raise4pt\hbox to\z@{\hskip5mm\@bannerfont\the\@bannertoken\hss}%
455 (platexrelease)
                     \fi}%
456 (platexrelease)
                 \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@
457 (platexrelease)
                     \vrule height13mm width\@tombowwidth depth\z@}%
458 (platexrelease)
459 (platexrelease)
                 \setbox\@TC\hbox{\yoko
460 (platexrelease)
                     \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@
461 (platexrelease)
                     \vrule height10mm width\@tombowwidth depth\z@
462 (platexrelease)
                     \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@}%
463 (platexrelease)
                 \c \TR\hbox to\z \C\yoko
464 (platexrelease)
                     \vrule height10mm width\@tombowwidth depth\z@
465 (platexrelease)
                     \vrule width13mm height\@tombowwidth depth\z@\hss}%
466 (platexrelease)
                 \setbox\@Tr\hbox to\z@{\yoko
                     \vrule height13mm width\@tombowwidth depth\z@
467 (platexrelease)
468 (platexrelease)
                     \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@\hss}%
469 (platexrelease)
                 \vrule width13mm depth\@tombowwidth height\z@
470 (platexrelease)
471 (platexrelease)
                     \vrule depth10mm width\@tombowwidth height\z@}%
472 (platexrelease)
                 \setbox\@Bl\hbox to\z@{\yoko\hss
473 (platexrelease)
                     \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@
474 (platexrelease)
                     \vrule depth13mm width\@tombowwidth height\z@}%
475 (platexrelease)
                 \setbox\@BC\hbox{\yoko
476 (platexrelease)
                     \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@
477 (platexrelease)
                     \vrule depth10mm width\@tombowwidth height\z@
478 (platexrelease)
```

\vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@}%

```
479 (platexrelease)
                                 \setbox\@BR\hbox to\z@{\yoko
                480 (platexrelease)
                                      \vrule depth10mm width\@tombowwidth height\z@
                481 (platexrelease)
                                      \vrule width13mm depth\@tombowwidth height\z@\hss}%
                482 (platexrelease)
                                 \setbox\@Br\hbox to\z@{\yoko
                                      \vrule depth13mm width\@tombowwidth height\z@
                483 (platexrelease)
                484 (platexrelease)
                                      \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@\hss}%
                485 \langle platexrelease \rangle \ \setbox\CL\hbox to\z@{\yoko\hss}
                486 (platexrelease)
                                      \vrule width10mm height.5\@tombowwidth depth.5\@tombowwidth
                487 (platexrelease)
                                      \vrule height10mm depth10mm width\@tombowwidth}%
                488 (platexrelease)
                                 \setbox\@CR\hbox to\z@{\yoko
                489 (platexrelease)
                                      \vrule height10mm depth10mm width\@tombowwidth
                490 (platexrelease)
                                      \vrule height.5\@tombowwidth depth.5\@tombowwidth width10mm\hss}%
                491 (platexrelease)}
                492 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                493 (*plcore)
               \@outputtombow コマンドは、トンボを出力するのに用います。コミュニティ版で
\@outputtombow
                は、「色付きテキストの途中で改ページが起きた場合に、トンボにも色が付いてしま
                う」という現象を防ぎ、さらにトンボの色を簡単に変えられるよう、\@tombowcolor
                というマクロに切り出しています。
                494 (/plcore)
                495 \langle platexrelease \rangle \\ plincludeInRelease \{ 2018/05/20 \} \{ @outputtombow \} \}
                                                   {Use \@tombowcolor and \@tombowbleed}%
                496 (platexrelease)
                497 (*plcore | platexrelease)
                498 \def\@outputtombow{%
                     \iftombow
                500
                     \vbox to\z@{\kern-\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax\relax
                501
                       \boxmaxdepth\maxdimen
                       \moveleft\@tombowbleed \vbox to\@@paperheight{%
                502
                       \color@begingroup
                503
                         \@tombowcolor
                504
                         \hbox to\@@paperwidth{\hskip\@tombowbleed\relax
                505
                             \copy\@TL\hfill\copy\@TC\hfill\copy\@TR\hskip\@tombowbleed}%
                506
                507
                          \kern-10mm
                         \hbox to\@@paperwidth{\copy\@Tl\hfill\copy\@Tr}%
                508
                          \vfill
                509
                          \hbox to\@@paperwidth{\copy\@CL\hfill\copy\@CR}%
                510
                         \vfill
                511
                         \hbox to\@@paperwidth{\copy\@Bl\hfill\copy\@Br}%
                512
                513
                         \hbox to\@@paperwidth{\hskip\@tombowbleed\relax
                514
                            \copy\@BL\hfill\copy\@BC\hfill\copy\@BR\hskip\@tombowbleed}%
                515
                       \color@endgroup
                516
                517
                       }\vss
                     }%
                518
                519
                     \fi
                520 }
                521 (/plcore | platexrelease)
```

```
525 \platexrelease \def \@outputtombow{%
                                  526 (platexrelease)
                                                                      \iftombow
                                  527 (platexrelease)
                                                                       \vbox to\z@{\kern-13mm\relax
                                  528 (platexrelease)
                                                                            \boxmaxdepth\maxdimen
                                  529 (platexrelease)
                                                                            \moveleft3mm\vbox to\@@paperheight{%
                                  530~\langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                                                                                \hbox to\@@paperwidth{\hskip3mm\relax
                                  531 (platexrelease)
                                                                                      \copy\@TL\hfill\copy\@TC\hfill\copy\@TR\hskip3mm}%
                                  532 (platexrelease)
                                                                                \kern-10mm
                                  533 (platexrelease)
                                                                                \hbox to\@@paperwidth{\copy\@Tl\hfill\copy\@Tr}%
                                  534 (platexrelease)
                                                                                \vfill
                                  535 (platexrelease)
                                                                                \hbox to\@@paperwidth{\copy\@CL\hfill\copy\@CR}%
                                  536 (platexrelease)
                                                                                \vfill
                                                                                \hbox to\@@paperwidth{\copy\@B1\hfill\copy\@Br}%
                                  537 (platexrelease)
                                  538 (platexrelease)
                                                                                \kern-10mm
                                                                                \hbox to\@@paperwidth{\hskip3mm\relax
                                  539 (platexrelease)
                                  540 (platexrelease)
                                                                                      \copy\@BL\hfill\copy\@BC\hfill\copy\@BR\hskip3mm}%
                                  541 (platexrelease)
                                                                           }\vss
                                  542 (platexrelease)
                                                                      }%
                                  543 (platexrelease)
                                                                       \fi
                                  544 (platexrelease)}
                                  545 <platexrelease \plEndIncludeInRelease
                                  546 \(\rangle plane = \plinclude InRelease \{ 0000/00/00 \} \\ \\@outputtombow \}
                                  547 (platexrelease)
                                                                                                            {ASCII Corporation original}%
                                  548 \(\rangle platexrelease \) \(\def \\\ Qoutputtombow \{\%\)
                                  549 (platexrelease)
                                                                      \iftombow
                                  550 (platexrelease)
                                                                      \vbox to\z@{\kern-13mm\relax
                                                                           \moveleft3mm\vbox to\@@paperheight{%
                                  551 (platexrelease)
                                  552 (platexrelease)
                                                                                \hbox to\@@paperwidth{\hskip3mm\relax
                                  553 (platexrelease)
                                                                                      \copy\@TL\hfill\copy\@TR\hskip3mm}%
                                  554 (platexrelease)
                                                                                \kern-10mm
                                  555 (platexrelease)
                                                                                \hbox to\@@paperwidth{\copy\@Tl\hfill\copy\@Tr}%
                                  556 (platexrelease)
                                  557 (platexrelease)
                                                                                \hbox to\@@paperwidth{\copy\@CL\hfill\copy\@CR}%
                                  558 (platexrelease)
                                                                                \vfill
                                                                                \hbox to\@@paperwidth{\copy\@B1\hfill\copy\@Br}%
                                  559 (platexrelease)
                                  560 (platexrelease)
                                                                                \kern-10mm
                                                                                \hbox to\@@paperwidth{\hskip3mm\relax
                                  561 (platexrelease)
                                                                                      \label{lem:copyQBC\hfill\copy\QBR\hskip3mm} % % The copy\QBC\hfill\copy\QBR\hskip3mm \end{substitute} % % % The copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\Cop\QBC\hfil
                                  562 (platexrelease)
                                                                           }\vss
                                  563 (platexrelease)
                                                                      }%
                                  564 (platexrelease)
                                  565 (platexrelease)
                                                                       \fi
                                  566 (platexrelease)}
                                  568 (*plcore)
                                  \@@paperheight は、用紙の縦の長さにトンボの長さを加えた長さになります。
\@@paperheight
  \@@paperwidth
    \@@topmargin
                                  File c: plcore.dtx Date: 2020/03/05 Version v1.3e
                                                                                                                                                                                                96
```

522 \platexrelease \plEndIncludeInRelease

524 (platexrelease)

{Safe \boxmaxdepth}%

```
\@@paperwidth は、用紙の横の長さにトンボの長さを加えた長さになります。 \@@topmargin は、現在のトップマージンに 1 インチ加えた長さになります。
```

- $569 \mbox{ \newdimen\@@paperheight}$
- 570 \newdimen\@@paperwidth
- 571 \newdimen\@@topmargin

\@tombowreset@@paper

トンボ出力オプションが指定されている場合に用紙サイズを再設定する命令です。 \@outputpage へ加える変更を簡潔にするため、分離した上で \@tombowbleed を使 うようにしました。

```
572 (/plcore)
573 \(\rangle plane = \plinclude InRelease \{ 2018/05/20 \} \{ \quad \text{tombowreset @qpaper} \}
574 (platexrelease)
                                   {Macro separated}%
575 (*plcore | platexrelease)
576 \def\@tombowreset@@paper{%
        \@@topmargin\topmargin
577
        \iftombow
578
          \@@paperwidth\paperwidth
579
580
          \advance\@@paperwidth 2\dimexpr\@tombowbleed\relax
          \@@paperheight\paperheight \advance\@@paperheight 10mm\relax
581
582
          \advance\@@paperheight 2\dimexpr\@tombowbleed\relax
          \advance\@@topmargin 1in\relax \advance\@themargin 1in\relax
584
        \fi
585 }
586 (/plcore | platexrelease)
587 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
589 (platexrelease)
                                   {Macro separated}%
590 \ \langle \verb|platexrelease| \rangle \verb|let| @tombowreset@paper| @undefined
591 /plEndIncludeInRelease
592 (*plcore)
```

\@shipoutsetup

\@outputpage 内に挿入したので削除しました。

\@outputpage

\textwidth と \textheight の交換は、\@shipoutsetup 内では行ないません。なぜなら、\@shipoutsetup マクロが実行されるときは、\shipout される vbox の中であり、このときは横組モードですので、つねに \iftdir は偽と判断され、縦と横のサイズを交換できないからです。

なお、この変更をローカルなものにするために、\begingroup と \endgroup で 囲みます。

```
600 \dimen\z@\textwidth\textwidth\textheight\\dimen\z@
601 \fi
602 \let \protect \noexpand
```

 $\mbox{FT}_{\mbox{EX}} 2_{\varepsilon}$ 2017-04-15 では verbatim 環境内でハイフネーションが起きないように修正されましたが、verbatim 環境の途中で改ページが起きた場合にヘッダでハイフネーションが抑制されるのは正しくないので、\language を \begin{document}での値にリセットします(参考:latex2e svn r1407)。プリアンブルで特別に設定されればその値、設定されなければ 0 です(万が一 \document の定義が古い場合 3 は-1 になりますが、これは 0 と同じはたらきをするので問題は起きません)。

```
\language\document@default@language
    \@resetactivechars
605
    \global\let\@@if@newlist\if@newlist
    \global\@newlistfalse
606
    \@parboxrestore
607
    \shipout\vbox{\yoko
608
      \set@typeset@protect
609
610
      \aftergroup\endgroup
611
      \aftergroup\set@typeset@protect
ここから \@shipoutsetup の内容。
       \if@specialpage
612
         613
614
       \if@twoside
         \ifodd\count\z@ \let\@thehead\@oddhead \let\@thefoot\@oddfoot
            \iftdir\let\@themargin\evensidemargin
618
            \else\let\@themargin\oddsidemargin\fi
619
         \else \let\@thehead\@evenhead
            \let\@thefoot\@evenfoot
620
             \iftdir\let\@themargin\oddsidemargin
621
622
             \else\let\@themargin\evensidemargin\fi
```

トンボ出力オプションが指定されている場合、ここで用紙サイズを再設定します。 TeX の加える左と上部の1インチは、トンボの内側に入ります。

 $^{^3\}text{IAT}_{\rm E}$ X 2ε 2017/01/01 以前を使って pIATeX 2ε のフォーマットを作成した場合や、dinbrief.cls のように独自の再定義を行うクラスやパッケージを使った場合に起こるかもしれません。

```
ここまでが \@shipoutsetup の内容。
        \@begindvi
633
        \@outputtombow
634
        \vskip \@@topmargin
635
        \moveright\@themargin\vbox{%
          \setbox\@tempboxa \vbox to\headheight{%
636
            \vfil
637
            \color@hbox
638
               \normalcolor
639
640
               \hb@xt@\textwidth{\@thehead}%
641
            \color@endbox
          }%
                                       %% 22 Feb 87
643
          \dp\@tempboxa \z@
          \box\@tempboxa
644
645
          \vskip \headsep
646
          \box\@outputbox
647
          \baselineskip \footskip
          \color@hbox
648
            \normalcolor
649
650
            \hb@xt@\textwidth{\@thefoot}%
651
          \color@endbox
652
654 \% \endgroup now inserted by \aftergroup
\if@newlist を初期化。
     \global\let\if@newlist\@@if@newlist
     \global \@colht \textheight
657
     \stepcounter{page}%
     \let\firstmark\botmark
658
659 }
660 (/plcore | platexrelease)
661\ \langle {\tt platexrelease} \rangle {\tt \plEndIncludeInRelease}
662 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\@outputpage}
663 (platexrelease)
                                      {Reset language for hyphenation}%
664 (platexrelease)\def\@outputpage{%
665 \langle platexrelease \rangle \backslash begingroup % the \endgroup is put in by \aftergroup
666 (platexrelease)
                  \iftdir
667 (platexrelease)
                     \dimen\z@\textwidth \textwidth\textheight \textheight\dimen\z@
668 (platexrelease)
                  \fi
                  \let \protect \noexpand
669 (platexrelease)
670 (platexrelease)
                  \language\document@default@language
                   \@resetactivechars
671 (platexrelease)
                  \global\let\@@if@newlist\if@newlist
672 (platexrelease)
673 (platexrelease)
                   \global\@newlistfalse
674 (platexrelease)
                   \@parboxrestore
675 (platexrelease)
                  \shipout\vbox{\yoko
676 (platexrelease)
                     \set@typeset@protect
677 (platexrelease)
                     \aftergroup\endgroup
678 (platexrelease)
                     \aftergroup\set@typeset@protect
```

```
679 (platexrelease)
                       \if@specialpage
                         \global\@specialpagefalse\@nameuse{ps@\@specialstyle}%
680 (platexrelease)
681 (platexrelease)
682 (platexrelease)
                       \if@twoside
683 (platexrelease)
                         \ifodd\count\z@ \let\@thehead\@oddhead \let\@thefoot\@oddfoot
684 (platexrelease)
                             \iftdir\let\@themargin\evensidemargin
685 (platexrelease)
                             \else\let\@themargin\oddsidemargin\fi
686 (platexrelease)
                         \else \let\@thehead\@evenhead
687 (platexrelease)
                             \let\@thefoot\@evenfoot
688 (platexrelease)
                              \iftdir\let\@themargin\oddsidemargin
689 (platexrelease)
                              \else\let\@themargin\evensidemargin\fi
690 (platexrelease)
                       \fi\fi
691 (platexrelease)
                       \@@topmargin\topmargin
692 (platexrelease)
                       \iftombow
693 (platexrelease)
                          \@@paperwidth\paperwidth \advance\@@paperwidth 6mm\relax
                         \@@paperheight\paperheight \advance\@@paperheight 16mm\relax
694 (platexrelease)
695 (platexrelease)
                         \advance\@@topmargin 1in\relax \advance\@themargin 1in\relax
                       \fi
696 (platexrelease)
697 (platexrelease)
                       \reset@font
698 (platexrelease)
                       \normalsize
699 (platexrelease)
                       \normalsfcodes
700 (platexrelease)
                       \let\label\@gobble
701 (platexrelease)
                       \let\index\@gobble
702 (platexrelease)
                       \let\glossary\@gobble
703 (platexrelease)
                       \baselineskip\z@skip \lineskip\z@skip \lineskiplimit\z@
704 (platexrelease)
                      \@begindvi
705 (platexrelease)
                      \@outputtombow
706 \langle platexrelease \rangle
                      \vskip \@@topmargin
707 (platexrelease)
                      \moveright\@themargin\vbox{%
708 (platexrelease)
                        \setbox\@tempboxa \vbox to\headheight{%
709 (platexrelease)
                          \vfil
710 (platexrelease)
                          \color@hbox
711 (platexrelease)
                             \normalcolor
712 (platexrelease)
                             \hb@xt@\textwidth{\@thehead}%
713 (platexrelease)
                          \color@endbox
                        }%
                                                      %% 22 Feb 87
714 (platexrelease)
715 (platexrelease)
                        \dp\@tempboxa \z@
716 \langle platexrelease \rangle
                        \box\@tempboxa
                        \vskip \headsep
717 (platexrelease)
718 (platexrelease)
                        \box\@outputbox
719 \langle platexrelease \rangle
                        \baselineskip \footskip
720 (platexrelease)
                        \color@hbox
721 (platexrelease)
                           \normalcolor
722 (platexrelease)
                          \hb@xt@\textwidth{\@thefoot}%
723 (platexrelease)
                        \color@endbox
724 (platexrelease)
                      }%
725 (platexrelease)
                   }%
726 (platexrelease)
                   \global\let\if@newlist\@@if@newlist
727 (platexrelease)
                   \global \@colht \textheight
728 (platexrelease)
                   \stepcounter{page}%
```

```
729 (platexrelease) \let\firstmark\botmark
730 (platexrelease)}
731 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
732 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plincludeInRelease \{ 0000/00/00 \} \\ \(\cent{Qoutputpage} \)
733 (platexrelease)
                                       {ASCII Corporation original}%
734 (platexrelease)\def\@outputpage{%
735 (platexrelease)\begingroup % the \endgroup is put in by \aftergroup
736 (platexrelease)
                   \iftdir
737 (platexrelease)
                      \dimen\z@\textwidth \textwidth\textheight \textheight\dimen\z@
738 (platexrelease)
                   \fi
739 (platexrelease)
                   \let \protect \noexpand
740 (platexrelease)
                   \@resetactivechars
741 (platexrelease)
                   \global\let\@@if@newlist\if@newlist
742 (platexrelease)
                   \global\@newlistfalse
743 (platexrelease)
                   \@parboxrestore
744 (platexrelease)
                   \shipout\vbox{\yoko
745 (platexrelease)
                      \set@typeset@protect
746 (platexrelease)
                      \aftergroup\endgroup
747 \; \langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                      \aftergroup\set@typeset@protect
748 (platexrelease)
                       \if@specialpage
749 (platexrelease)
                         \global\@specialpagefalse\@nameuse{ps@\@specialstyle}%
                       \fi
750 (platexrelease)
751 (platexrelease)
                       \if@twoside
752 (platexrelease)
                         \ifodd\count\z@ \let\@thehead\@oddhead \let\@thefoot\@oddfoot
753 (platexrelease)
                             \iftdir\let\@themargin\evensidemargin
754 (platexrelease)
                             \else\let\@themargin\oddsidemargin\fi
755 (platexrelease)
                         \else \let\@thehead\@evenhead
756 (platexrelease)
                             \let\@thefoot\@evenfoot
757 (platexrelease)
                              \iftdir\let\@themargin\oddsidemargin
_{758}\;\langle \mathsf{platexrelease}\rangle
                              \else\let\@themargin\evensidemargin\fi
759 (platexrelease)
                       \fi\fi
760 (platexrelease)
                       \@@topmargin\topmargin
761 (platexrelease)
                       \iftombow
762 (platexrelease)
                          \@@paperwidth\paperwidth \advance\@@paperwidth 6mm\relax
763 (platexrelease)
                         \@@paperheight\paperheight \advance\@@paperheight 16mm\relax
764 (platexrelease)
                          \advance\@@topmargin 1in\relax \advance\@themargin 1in\relax
                       \fi
765 (platexrelease)
                       \reset@font
766 (platexrelease)
767 (platexrelease)
                       \normalsize
                       \normalsfcodes
768 (platexrelease)
769 (platexrelease)
                       \let\label\@gobble
770 (platexrelease)
                       \let\index\@gobble
771 (platexrelease)
                       \let\glossary\@gobble
772 (platexrelease)
                       \baselineskip\z@skip \lineskip\z@skip \lineskiplimit\z@
773 (platexrelease)
                      \@begindvi
774 (platexrelease)
                      \@outputtombow
775 (platexrelease)
                      \vskip \@@topmargin
776 (platexrelease)
                      \moveright\@themargin\vbox{%
777 (platexrelease)
                        \setbox\@tempboxa \vbox to\headheight{%
778 (platexrelease)
                           \vfil
```

```
779 (platexrelease)
                           \color@hbox
780 (platexrelease)
                             \normalcolor
781 (platexrelease)
                             \hb@xt@\textwidth{\@thehead}%
782 (platexrelease)
                           \color@endbox
                                                       %% 22 Feb 87
783 (platexrelease)
                        }%
784 (platexrelease)
                        785 (platexrelease)
                        \box\@tempboxa
786 \langle platexrelease \rangle
                        \vskip \headsep
787 (platexrelease)
                        \box\@outputbox
788 (platexrelease)
                        \baselineskip \footskip
789 (platexrelease)
                        \color@hbox
790 (platexrelease)
                           \normalcolor
791 (platexrelease)
                           \hb@xt@\textwidth{\@thefoot}%
792 (platexrelease)
                        \color@endbox
793 (platexrelease)
                      }%
794 (platexrelease)
                   }%
795 (platexrelease)
                    \global\let\if@newlist\@@if@newlist
796 (platexrelease)
                    \global \@colht \textheight
797 \langle platexrelease \rangle
                    \stepcounter{page}%
798 (platexrelease)
                    \let\firstmark\botmark
799 (platexrelease)}
800 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
801 (*plcore)
```

\AtBeginDvi pLATEX の出力ルーチンの \@outputpage では、\shipout する vbox の中身に \yoko を指定しています。このため、\AtBeginDocument{\AtBeginDvi{}}というコード を書くと Incompatible direction list can't be unboxed. というエラーが出 てしまいます。

> そこで、コミュニティ版 pI₄TrX では「\shipout で \yoko が指定されている」こ とを根拠として

\@begindvibox は(空でない限り)常に横組でなければならない

と仮定します。この仮定に従い、\AtBeginDvi を再定義します。

```
802 (/plcore)
803 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2019/10/01}{\AtBeginDvi}
804 (platexrelease)
                                    {Make robust}%
805 (*plcore | platexrelease)
806 \DeclareRobustCommand \AtBeginDvi [1] {%
     \global \setbox \@begindvibox
807
       \vbox{\yoko \unvbox \@begindvibox #1}%
808
809 }
810   /plcore | platexrelease
812 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/07/01}{\AtBeginDvi}
813 (platexrelease)
                                    {Fix for incompatible direction}%
814 \(\rangle platexrelease \) \(\def \AtBeginDvi #1\{\%\)
815 (platexrelease) \global \setbox \@begindvibox
```

```
817 (platexrelease)}
                                 818 (platexrelease)\expandafter \let \csname AtBeginDvi \endcsname \@undefined
                                 820 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\AtBeginDvi}
                                 821 (platexrelease)
                                                                                                        {LaTeX2e original}%
                                 822 (platexrelease)\def \AtBeginDvi #1{%
                                 823 (platexrelease) \global \setbox \@begindvibox
                                 824 (platexrelease)
                                                                        \vbox{\unvbox \@begindvibox #1}%
                                 825 (platexrelease)}
                                 826 \platexrelease\\expandafter \let \csname AtBeginDvi \endcsname \@undefined
                                 827 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                                 828 (*plcore)
                                              脚注マクロ
                                 9.7
                                 脚注を組み立てる部分のマクロを再定義します。主な修正点は、縦組モードでの動
                                 作の追加です。
                                      これらのマクロは、1tfloat.dtx で定義されていたものです。
            \thempfn 本文で使われる脚注記号です。
                                     \Ofootnotemark で縦横の判断をするようにしたため、削除。
                                 829 %\def\thempfn{%
                                 830 % \ifydir\thefootnote\else\hbox{\yoko\thefootnote}\fi}
\thempfootnote minipage環境で使われる脚注記号です。
                                 831 %\def\thempfootnote{%
                                 832 % \ifydir\alph{mpfootnote}\else\hbox{\yoko\alph{mpfootnote}}\fi}
   \@makefnmark 脚注記号を作成するマクロです。
                                 833 (/plcore)
                                 834 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{2016/04/17\} \\ \Omakefnmark\)
                                 835 (platexrelease)
                                                                                                       {Remove extra \xkanjiskip}%
                                 836 (*plcore | platexrelease)
                                 837 \renewcommand\@makefnmark{%
                                           \else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}\fi}
                                 840 (/plcore | platexrelease)
                                 841 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                                 843 (platexrelease)
                                                                                                       {ASCII Corporation original}%
                                 844 \(\rangle platexrelease \)\renewcommand \(\rangle makefnmark \)\\\\\\\
                                 845 (platexrelease) \ifydir \@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}%
                                 846 \(\rightarrow\) \(\rightar
```

\vbox{\yoko \unvbox \@begindvibox #1}%

816 (platexrelease)

847 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease

```
開き括弧類の直後に \footnotetext が続いた場合、\footnotetext の前での改行
\pltx@foot@penalty
                   は望ましくありません。このような場合に対処するために、\pltx@foot@penalty
                   というカウンタを用意しました。\footnotetext の最初で「直前のペナルティ値」
                   としてこのカウンタが初期化されます。\footnotemark, \footnote では使わない
                   ので0に設定しています。
                   848 \langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease{2016/09/03}{\pltx@foot@penalty}
                   849 (platexrelease)
                                                   {Add new counter \pltx@foot@penalty}%
                   850 (*plcore | platexrelease)
                   851 \ifx\@undefined\pltx@foot@penalty \newcount\pltx@foot@penalty \fi
                   852 \pltx@foot@penalty\z@
                   853 (/plcore | platexrelease)
                   854 <platexrelease <pre>\plEndIncludeInRelease
                   855 \platexrelease\\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\pltx@foot@penalty}
                   856 (platexrelease)
                                                   {Add new counter \pltx@foot@penalty}%
                   857 (platexrelease)\let\pltx@foot@penalty\@undefined
                   858 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                  また、合印の前の文字と合印の間は原則ベタ組です(但し、JIS X 4051 には例外有り)。
    \footnotemark
        \footnote そのため、合印を出力する \footnotemark, \footnote の最初で \inhibitglue を
                   実行しておくことにします(\@makefnmarkの中に置いても効力がありません)。
                   859 \(\rangle\)plincludeInRelease\(\rangle\)09/03\(\rangle\)footnote\
                   860 (platexrelease)
                                                   {Append \inhibitglue in \footnotemark}%
                   861 (*plcore | platexrelease)
                   862 \def\footnote{\inhibitglue
                           \@ifnextchar[\@xfootnote{\stepcounter\@mpfn
                           \protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
                   864
                           \@footnotemark\@footnotetext}}
                   866 \def\final (\nhibitglue)
                        \@ifnextchar[\@xfootnotemark
                   868
                           {\stepcounter{footnote}%
                            \protected@xdef\@thefnmark{\thefootnote}%
                   869
                           \@footnotemark}}
                   870
                   871 (/plcore | platexrelease)
                   872 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                   873 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{ 0000/00/00 \} \\ footnote \}
                   874 (platexrelease)
                                                   {LaTeX2e original}%
                   876 (platexrelease)
                                     \protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
                   877 (platexrelease)
                                      \@footnotemark\@footnotetext}}
                   878 (platexrelease)\def\footnotemark{%
                   879 (platexrelease)
                                   \@ifnextchar[\@xfootnotemark
                   880 (platexrelease)
                                      {\stepcounter{footnote}%
                   881 (platexrelease)
                                       \protected@xdef\@thefnmark{\thefootnote}%
                   882 (platexrelease)
                                       \@footnotemark}}
```

883 <platexrelease <pre>\plEndIncludeInRelease

```
\footnotetext \footnotetext の直前のペナルティ値を保持します。
                884 \langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease \{2016/09/03\} \{\footnotetext\}
                885 (platexrelease)
                                                  {Preserve penalty before \footnotetext}%
                886 (*plcore | platexrelease)
                887 \def\footnotetext{%
                     \ifhmode\pltx@foot@penalty\lastpenalty\unpenalty\fi%
                     \@ifnextchar [\@xfootnotenext
                       {\protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
                        \@footnotetext}}
                892 (/plcore | platexrelease)
                893 \plEndIncludeInRelease
                894 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{ 0000/00/00 \} \footnotetext \}
                895 (platexrelease)
                                                   {LaTeX2e original}%
                896 \(\rangle platexrelease \rangle \)\def\\footnotetext{\%
                897 (platexrelease)
                                    \@ifnextchar [\@xfootnotenext
                898 (platexrelease)
                                      {\protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
                899 (platexrelease)
                                   \@footnotetext}}
                900 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
               インサートボックス \footins に脚注のテキストを入れます。コミュニティ版 pIATeX
\@footnotetext
                では \footnotetext, \footnote の直後で改行を可能にします。jsclasses ではこの
                変更に加え、脚注で\verbが使えるように再定義されます。
                901 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/09/08}{\@footnotetext}
                902 (platexrelease)
                                                  {Allow break after \footnote (more fix)}%
                903 (*plcore | platexrelease)
                904 \long\def\@footnotetext#1{%
                     906
                     \insert\footins{\@tempa%
                       \reset@font\footnotesize
                907
                       \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty
                908
                       \splittopskip\footnotesep
                909
                       \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM
                910
                       \hsize\columnwidth \@parboxrestore
                911
                       \protected@edef\@currentlabel{%
                912
                913
                          \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark
                       }%
                914
                915
                       \color@begingroup
                         \@makefntext{%
                916
                           \rule\z@\footnotesep\ignorespaces#1\@finalstrut\strutbox}%
```

 pT_{EX} では \insert の直後に和文文字が来た場合、そこでの改行は許されないという挙動になっています。このため、従来は脚注番号(合印)の直後の改行が抑制されていました。しかし、\hbox の直後に和文文字が来た場合は、そこでの改行は許されますから、最後に \null を追加します。また、\pltx@foot@penaltyの値が0ではなかった場合、脚注の前にペナルティがあったということですから、復活させておきます。

```
\color@endgroup}\ifhmode\null\fi
918
                      \ifnum\pltx@foot@penalty=\z@\else
919
                             \penalty\pltx@foot@penalty
920
921
                             \pltx@foot@penalty\z@
                      \fi}
922
923 \langle /plcore \mid platexrelease \rangle
924 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
925 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/09/03}{\@footnotetext}
926 (platexrelease)
                                                                                                          {Allow break after \footnote}%
927 (platexrelease)\long\def\@footnotetext#1{%
928 \langle platexrelease \rangle
                                                    \ifydir\def\@tempa{\yoko}\else\def\@tempa{\tate}\fi
929 (platexrelease)
                                                    \insert\footins{\@tempa%
930 (platexrelease)
                                                            \reset@font\footnotesize
931 (platexrelease)
                                                            \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty
932 (platexrelease)
                                                            \splittopskip\footnotesep
                                                            \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM
933 (platexrelease)
934 (platexrelease)
                                                            \hsize\columnwidth \@parboxrestore
935 (platexrelease)
                                                           \protected@edef\@currentlabel{%
936 (platexrelease)
                                                                     \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark
937 (platexrelease)
938 (platexrelease)
                                                           \color@begingroup
939 (platexrelease)
                                                                  \@makefntext{%
940 (platexrelease)
                                                                        \rule\z@\footnotesep\ignorespaces#1\@finalstrut\strutbox}%
941 (platexrelease)
                                                           \color@endgroup}\null
942 (platexrelease)
                                                           \ifnum\pltx@foot@penalty=\z@\else
943 (platexrelease)
                                                                  \penalty\pltx@foot@penalty
944 (platexrelease)
                                                                  \pltx@foot@penalty\z@
945 (platexrelease)
                                                           \fi}
946 \langle platexrelease \rangle \rangle 1 EndIncludeInRelease
947 \(\rangle place \) \(place \)
948 (platexrelease)
                                                                                                          {ASCII Corporation original}%
949 \(\rangle\) \(
950 (platexrelease)
                                                    \ifydir\def\@tempa{\yoko}\else\def\@tempa{\tate}\fi
951 (platexrelease)
                                                     \insert\footins{\@tempa%
952 (platexrelease)
                                                            \reset@font\footnotesize
953 (platexrelease)
                                                            \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty
954 (platexrelease)
                                                            \splittopskip\footnotesep
                                                            \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM
955 (platexrelease)
956 (platexrelease)
                                                           \hsize\columnwidth \@parboxrestore
957 (platexrelease)
                                                           \protected@edef\@currentlabel{%
958 (platexrelease)
                                                                     \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark
959 (platexrelease)
960 (platexrelease)
                                                           \color@begingroup
961 (platexrelease)
                                                                  \@makefntext{%
                                                                        \rule\z@\footnotesep\ignorespaces#1\@finalstrut\strutbox}%
962 (platexrelease)
963 (platexrelease)
                                                           \color@endgroup}}
964 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
```

965 (*plcore)

```
\@footnotemark 脚注記号を出力します。
```

```
966 \def\@footnotemark{\leavevmode
   \ifhmode\edef\@x@sf{\the\spacefactor}\nobreak\fi
   \ifydir\@makefnmark
```

\ifhmode\spacefactor\@x@sf\fi\relax}

9.8 相互参照

\Osetref \ref コマンドや \pageref コマンドで参照したとき、これらのコマンドによって 出力された番号と続く2バイト文字との間に\xkanjiskipが入りません。これは、 \null が \hbox{}と定義されているためです。そこで \null を取り除きます。この コマンドは、ltxref.dtx で定義されているものです。

> しかし、単に \null を \relax に置き換えるだけでは、\section のような「動 く引数」で \ref などを使った場合に、目次で後ろの空白が消えてしまいます。そ こで、\relax のあとに{}を追加しました。従来も \protect\ref のように使えば 問題ありませんでしたが、IATeX では展開されても問題が起きない robust な実装に なっていますので、これに従います。

> さらに、例えば "see Appendix A." のような記述が文末にあり、かつ "A" を相互 参照で取得した場合のスペースファクターを補正するため、\spacefactor\@m{}に 修正しました。これで、"A." の後のスペースが文末として扱われます。「IATEX 2ϵ マクロ&クラス プログラミング実践解説」のコードを参考にしましたが、数式モー ド内でもエラーにならないように改良しています。

```
971 (/plcore)
972 \(\rangle plane = \plinclude InRelease \{ 2017/10/28 \} \\ \Qsetref \}
                                     {Space factor after \ref}%
973 (platexrelease)
974 (*plcore | platexrelease)
975 \def\@setref#1#2#3{%
     \int x#1\relax
976
        \protect\G@refundefinedtrue
        \nfss@text{\reset@font\bfseries ??}%
       \@latex@warning{Reference '#3' on page \thepage \space
                   undefined}%
980
981
982
       \expandafter#2#1\protect\@setref@{}% change \null to \protect\@setref@{}
983
     \fi}
984 \def\@setref@{\ifhmode\spacefactor\@m\fi}
985 (/plcore | platexrelease)
986 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
987 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\@setref}
                                     {Spacing after \ref in moving arguments}%
988 (platexrelease)
989 \platexrelease \def \@setref #1#2#3{%
990 (platexrelease) \ifx#1\relax
991 (platexrelease)
                    \protect\G@refundefinedtrue
```

```
992 (platexrelease)
                                                                  \nfss@text{\reset@font\bfseries ??}%
  993 (platexrelease)
                                                                  \@latex@warning{Reference '#3' on page \thepage \space
  994 (platexrelease)
                                                                                                    undefined}%
  995 (platexrelease)
                                                           \else
                                                                  \expandafter#2#1\relax{}% change \null to \relax{}
  996 (platexrelease)
  997 (platexrelease)
                                                          \fi}
  998 (platexrelease)\let\@setref@\@undefined
  999 \plEndIncludeInRelease
1000 \langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease \{0000/00/00\} \{\colored \plane \pla
1001 (platexrelease)
                                                                                                                     {ASCII Corporation original}%
1002 (platexrelease)\def\@setref#1#2#3{%
1003 (platexrelease)
                                                          \int x#1\relax
1004 (platexrelease)
                                                                   \protect\G@refundefinedtrue
1005 (platexrelease)
                                                                   \nfss@text{\reset@font\bfseries ??}%
1006 (platexrelease)
                                                                   \@latex@warning{Reference '#3' on page \thepage \space
1007 (platexrelease)
                                                                                                    undefined}%
1008 (platexrelease)
                                                           \else
1009 (platexrelease)
                                                                  \expandafter#2#1\relax% change \null to \relax
1010 \langle platexrelease \rangle
                                                          \fi}
1011 (platexrelease)\let\@setref@\@undefined
1012 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1013 (*plcore)
```

9.9 疑似タイプ入力

| Verb IFTEX の \verb コマンドでは、数式モードでないときは、\leavevmode で水平モードに入ったあと、\null を出力しています。マクロ \null は \hbox{}として定義されていますので、ここには和欧文間スペース(\xkanjiskip)が入りません。

しかし、単に \null を除いてしまうと、今度は \verb+ abc+のように \verb の冒頭に半角空白がある場合にこれが消えてしまいます (TeX.SX 170245)。そこで、pIATpX では \null の代わりに

- 1. 和欧文間スペースの挿入処理は透過する
- 2. 行分割時に消える (discardable) ノードではない

の両条件を満たすノードを挿入します。ここでは \vadjust{}としました。 このマクロは、ltmiscen.dtx で定義されています。

```
1014 \(/plcore\)
1015 \( platexrelease\) \( plIncludeInRelease{2017/10/28} \) \( \text{Verb} \)
1016 \( \text{platexrelease} \) \( \text{Preserve beginning space characters} \) \( \text{1017} \) \( \text{*plcore} \) \( platexrelease \)
1018 \( \text{if@compatibility} \) \( else \)
1019 \( \text{def} \) \( \text{verb} \) \( \text{relax} \) \( ifmode \) \( \text{bgroup} \)
1021 \( \text{verb@eol@error} \ let \) \( \text{do} \) \( \text{cmakeother} \) \( \text{dospecials} \)
1022 \( \text{verbatim@font} \) \( \text{onoligs} \)
```

IMTEX 2ε 2017-04-15 に追随して、\verb の途中でハイフネーションが起きないように \language を設定します(参考:latex2e svn r1405)。

```
1023
                        \language\l@nohyphenation
1024
                         \@ifstar\@sverb\@verb}
1025 \fi
1026 (/plcore | platexrelease)
1027 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1028 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\verb}
1029 (platexrelease)
                                                                                                           {Disable hyphenation in verb}%
1030 ⟨platexrelease⟩\if@compatibility\else
1031 \partition{The lambda limits of the lambda l
1032 \langle platexrelease \rangle \setminus bgroup
1033 (platexrelease)
                                                            \verb@eol@error \let\do\@makeother \dospecials
1034 (platexrelease)
                                                            \verbatim@font\@noligs
1035 (platexrelease)
                                                            \language\l@nohyphenation
1036 (platexrelease)
                                                             \@ifstar\@sverb\@verb}
1037 (platexrelease)\fi
1038 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
1039 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\verb}
1040 (platexrelease)
                                                                                                           {ASCII Corporation original}%
1041 (platexrelease)\if@compatibility\else
1042 \(\relax\)ifmmode\\box\else\\leavevmode\fi
1043 \langle platexrelease \rangle \setminus bgroup
                                                             \verb@eol@error \let\do\@makeother \dospecials
1044 \langle platexrelease \rangle
1045 (platexrelease)
                                                            \verbatim@font\@noligs
1046 (platexrelease)
                                                            \@ifstar\@sverb\@verb}
1047 (platexrelease)\fi
1048 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1049 (*plcore)
```

\do@noligs >などの一部の文字について、\xspcode'\>=3 としたときに \texttt{>}では前後に \xkanjiskip 由来のアキが入るのに、\verb+>+では後ろにしかアキが入らないという現象に対処します。

元の定義は ltmiscen.dtx を参照してください。pIAT_EX では、\kern\z@を\vadjust{}に置き換えることで「合字処理を抑止」かつ「和欧文間スペースの挿入処理は透過」を実現します。(Issue #87)

```
1050 (/plcore)
1051 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2020/04/12}{\do@noligs}
1052 (platexrelease)
                                      {Allow \xkanjiskip while avoiding ligature}%
1053 (*plcore | platexrelease)
1054 \def\do@noligs#1{%
1055
      \catcode'#1\active
1056
      \begingroup
          \lccode'\~'#1\relax
1057
          \lowercase{\endgroup\def~{\leavevmode\vadjust{}\char'#1}}}
1058
1059 (/plcore | platexrelease)
1060 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
```

9.10 tabbing 環境

\@startline tabbing 環境の行で、中身が始め括弧類などで始まる場合、最初の項目だけ JFM グルーが消えない現象に対処します。

```
1070 (/plcore)
1071 \langle platexrelease \rangle \plIncludeInRelease \{2017/10/28\} \{\color=1071 \langle platexrelease \rangle \plIncludeInRelease \} \}
1072 (platexrelease)
                                                                            {Inhibit JFM glue at the beginning}%
1073 (*plcore | platexrelease)
1074 \gdef\@startline{%
                   \ifnum \@nxttabmar >\@hightab
1075
1076
                        \@badtab
                        \global\@nxttabmar \@hightab
1077
1078
                   \global\@curtabmar \@nxttabmar
1079
                   \global\@curtab \@curtabmar
1080
1081
                   \global\setbox\@curline \hbox {}%
                   \@startfield
1082
                   \strut\inhibitglue}
1083
1084 (/plcore | platexrelease)
1085 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
1086 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@startline}
1087 (platexrelease)
                                                                            {LaTeX2e original}%
1088 ⟨platexrelease⟩\gdef\@startline{%
1089 (platexrelease)
                                             \ifnum \@nxttabmar >\@hightab
1090 (platexrelease)
                                                  \@badtab
1091 (platexrelease)
                                                  \global\@nxttabmar \@hightab
1092 (platexrelease)
                                             \fi
1093 (platexrelease)
                                             \global\@curtabmar \@nxttabmar
1094 (platexrelease)
                                             \global\@curtab \@curtabmar
1095 (platexrelease)
                                             \global\setbox\@curline \hbox {}%
1096 (platexrelease)
                                             \@startfield
1097 (platexrelease)
                                             \strut}
1098 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1099 (*plcore)
```

\@stopfield 相互参照や疑似タイプ入力では、和欧文間スペースが入らないので、\null を取り 除きましたが、tabbing 環境では、逆に \null がないため、和欧文間スペースが 入ってしまうので、それを追加します。lttab.dtx で定義されているものです。

1100 \gdef\@stopfield{\null\color@endgroup\egroup}

用語集の出力 9.11

IATEX には、なぜか用語集を出力するためのコマンドがありませんので、追加をし

\printglossary \printglossary コマンドは、単に拡張子が gls のファイルを読み込むだけです。 このファイルの生成には、mendex などを用います。

1101 \newcommand\printglossary{\@input@{\jobname.gls}}

9.12 時分を示すカウンタ

TrX には、年月日を示す数値を保持しているカウンタとして、それぞれ \year, \month, \day がプリミティブとして存在します。しかし、時分については、深夜の零 時からの経過時間を示す \time カウンタしか存在していません。そこで、 $pIMT_{PX} 2_{\varepsilon}$ では、時分を示すためのカウンタ \hour と \minute を作成しています。

\hour 何時か(\hour)を得るには、\timeを60で割った商をそのまま用います。何分か \minute (\minute) は、\hour に 60 を掛けた値を \time から引いて算出します。ここでは カウンタを宣言するだけです。実際の計算は、クラスやパッケージの中で行なって います。

 $1102 \newcount\hour$

1103 \newcount\minute

9.13 tabular 環境

LATEX カーネル (lttab.dtx) の命令群を修正します。

\@tabclassz IfTrX カーネルは、アラインメント文字&の周囲に半角空白を書いたかどうかにかか わらず余分なスペースを出力しないように、\ignorespaces と \unskip を発行し ています (lttab.dtx)。しかし、これだけでは JFM グルーが消えずに残ってしまう ので、pIAT_FX では追加の対処を入れます。

> まず、1, c, r の場合です。2017/09/26 の修正では「セルの要素を \mbox に入れ、 その最初で \inhibitglue を発行する」という方針でしたが、2018/03/09 の修正 では「\removejfmglueマクロが定義されている場合は最初に \inhibitglue を発 行し、最後に \removejfmglue を発行する」という方針にします。こうすれば少々 IATEX との互換性が向上します。

1104 (/plcore)

1105 \(\rangle plane = \plinclude InRelease \{ 2018/03/09 \} \\ \text{\$\detabclassz} \)

1106 (platexrelease)

{Inhibit JFM glue in tabular cells (better)}%

```
1107 (*plcore | platexrelease)
1108 \ifx\removejfmglue\@undefined
1109 \def\@tabclassz{%
      \ifcase\@lastchclass
        \@acolampacol
1111
1112
     \or
        \@ampacol
1113
1114
      \or
1115
      \or
1116
      \or
        \@addamp
1117
1118
      \or
1119
        \@acolampacol
1120
        \@firstampfalse\@acol
1121
1122
      \edef\@preamble{%
1123
        \@preamble{%
1124
          \ifcase\@chnum
1125
            1126
1127
            \hskip1sp\mbox{\inhibitglue\ignorespaces\@sharp\unskip}\hfil % 1
1128
1129
1130
            \hfil\hskip1sp\mbox{\inhibitglue\ignorespaces\@sharp\unskip}% % r
1131
1132 \else
1133 \def\@tabclassz{%
     \ifcase\@lastchclass
1134
        \@acolampacol
1135
     \or
1136
1137
        \@ampacol
1138
      \or
1139
      \or
1140
      \or
1141
        \@addamp
1142
      \or
1143
        \@acolampacol
1144
      \or
        \@firstampfalse\@acol
1145
      \fi
1146
      \edef\@preamble{%
1147
        \@preamble{%
1148
          \ifcase\@chnum
1149
            \hfil\hskip1sp\inhibitglue
1150
1151
            \ignorespaces\@sharp\unskip\removejfmglue\hfil % c
1152
1153
            \hskip1sp\inhibitglue
1154
            \ignorespaces\@sharp\unskip\removejfmglue\hfil % 1
1155
          \or
            \hfil\hskip1sp\inhibitglue
1156
```

```
1157
              \ignorespaces\@sharp\unskip\removejfmglue % r
1158
            \fi}}}
1159 \fi
1160 (/plcore | platexrelease)
1161 \( platexrelease \) \( \planta \) IncludeInRelease
1162 \langle platexrelease \rangle \\ plIncludeInRelease \{2017/09/26\} \{ \ ctabclassz \}
1163 (platexrelease)
                                          {Inhibit JFM glue in tabular cells}%
1164 (platexrelease)\def\@tabclassz{%
1165 (platexrelease)
                     \ifcase\@lastchclass
1166 (platexrelease)
                        \@acolampacol
1167 (platexrelease)
                     \or
1168 (platexrelease)
                        \@ampacol
1169 (platexrelease)
1170 (platexrelease)
                     \or
1171 (platexrelease)
1172 (platexrelease)
                        \@addamp
1173 (platexrelease)
                     \or
1174 (platexrelease)
                        \@acolampacol
1175 (platexrelease)
1176 (platexrelease)
                        \@firstampfalse\@acol
1177 (platexrelease)
1178 (platexrelease)
                     \edef\@preamble{%
1179 (platexrelease)
                        \@preamble{%
1180 (platexrelease)
                          \ifcase\@chnum
1181 (platexrelease)
                            \hfil\mbox{\inhibitglue
                               \ignorespaces\@sharp\unskip}\hfil % c
1182 (platexrelease)
1183 (platexrelease)
                          \or
1184 (platexrelease)
                             \hskip1sp\mbox{\inhibitglue
                               \ignorespaces\@sharp\unskip}\hfil % 1
1185 (platexrelease)
1186 (platexrelease)
                          \or
1187 (platexrelease)
                            \hfil\hskip1sp\mbox{\inhibitglue
1188 (platexrelease)
                               \ignorespaces\@sharp\unskip}% % r
1189 (platexrelease)
                          \fi}}}
1190 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1191 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2017/07/29}{\@tabclassz}
1192 (platexrelease)
                                          {Inhibit JFM glue in tabular cells (wrong)}%
1193 (platexrelease)\def\@tabclassz{%
1194 (platexrelease)
                     \ifcase\@lastchclass
1195 (platexrelease)
                        \@acolampacol
1196 (platexrelease)
                     \or
1197 (platexrelease)
                       \@ampacol
1198 (platexrelease)
                     \or
1199 (platexrelease)
                     \or
1200 (platexrelease)
                     \or
1201 (platexrelease)
                        \@addamp
1202 (platexrelease)
1203 (platexrelease)
                        \@acolampacol
1204 (platexrelease)
1205 (platexrelease)
                        \@firstampfalse\@acol
1206 (platexrelease)
                     \fi
```

```
1208 (platexrelease)
                      \@preamble{%
1209 (platexrelease)
                        \ifcase\@chnum
1210 (platexrelease)
                          \hfil\inhibitglue
                          \ignorespaces\@sharp\unskip\unskip\hfil % c
1211 (platexrelease)
1212 (platexrelease)
                        \or
1213 (platexrelease)
                          \hskip1sp\inhibitglue
1214 (platexrelease)
                          \ignorespaces\@sharp\unskip\unskip\hfil % 1
1215 (platexrelease)
1216 (platexrelease)
                          \hfil\hskip1sp\inhibitglue
1217 (platexrelease)
                          \ignorespaces\@sharp\unskip\unskip % r
1218 (platexrelease)
                        \fi}}}
1219 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1220 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@tabclassz}
1221 (platexrelease)
                                       {LaTeX2e original}%
1222 (platexrelease)\def\@tabclassz{%
1223 (platexrelease)
                    \ifcase\@lastchclass
_{1224} \; \langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                      \@acolampacol
1225 (platexrelease)
                      \@ampacol
1226 (platexrelease)
1227 (platexrelease)
                    \or
1228 (platexrelease)
                    \or
1229 (platexrelease)
                    \or
1230 (platexrelease)
                      \@addamp
1231 (platexrelease)
1232 (platexrelease)
                      \@acolampacol
1233 (platexrelease)
1234 (platexrelease)
                      \@firstampfalse\@acol
1235 (platexrelease)
1236 (platexrelease)
                    \edef\@preamble{%
                      \@preamble{%
1237 (platexrelease)
1238 (platexrelease)
                        \ifcase\@chnum
1239 (platexrelease)
                          \hfil\ignorespaces\@sharp\unskip\hfil
1240 (platexrelease)
1241 (platexrelease)
                          \hskip1sp\ignorespaces\@sharp\unskip\hfil
1242 (platexrelease)
                          \hfil\hskip1sp\ignorespaces\@sharp\unskip
1243 (platexrelease)
1244 (platexrelease)
                        \fi}}}
1245 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
次に、pの場合です。2017/07/29の修正では \mbox{}\inhibitglue と \unskip を
 追加していましたが、以下のように p 指定のセルの最初で \par として改段落を発
 行すると、一行空いてしまうという症状が起きてしまいます (platex/#63)。
  \begin{tabular}{p{5cm}}
  //A
  \relax\par
  \end{tabular}
```

\edef\@preamble{%

1207 (platexrelease)

```
ここでは、2017/07/29 の修正から方針を改め、\everypar 内に \inhibitglue を
                                                                                                                                        仕込むという方針で対応します。
                                                                                                                                    1246 \(\rangle\)plincludeInRelease\(2018/03/09\)\(\lambde\)classv\
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        {Inhibit JFM glue in tabular cells (better)}%
                                                                                                                                   1247 (platexrelease)
                                                                                                                                   1248 (*plcore | platexrelease)
                                                                                                                                   1250 \@sharp\unskip\@endpbox}}
                                                                                                                                   1251 (/plcore | platexrelease)
                                                                                                                                   1252 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                                                                                                                                   1253 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2017/07/29}{\@classv}
                                                                                                                                   1254 \langle platexrelease \rangle
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      {Inhibit JFM glue in tabular cells}%
                                                                                                                                   1255 $$ \rho e^{\c} \end{constraint} $$ 1255 $$ \rho e^{\c} \end{constraint} \end{constraint} $$ 1255 $$ \rho e^{\c} \end{constraint} $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1255 $$ 1
                                                                                                                                   1256 (platexrelease)\@sharp\unskip\@endpbox}}
                                                                                                                                   1257 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                                                                                                                                   1258 \(\rangle\)plIncludeInRelease\(\rangle\)000/00/\(\rangle\)classv\
                                                                                                                                    1259 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        {LaTeX2e original}%
                                                                                                                                   1260 $$\langle platexrelease \land def \classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv{\classv
                                                                                                                                    1261 (platexrelease)\@sharp\@endpbox}}
                                                                                                                                    1262 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
\pltx@next@inhibitglue 水平モードであればそのまま \inhibitglue を発行し、それ以外であれば \everypar
                                                                                                                                        内に \inhibitglue を仕込みます。
                                                                                                                                   1263 \(\rangle place \) \(\rangl
                                                                                                                                   1264 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        {Add \pltx@next@inhibitglue}%
                                                                                                                                   1265 \langle *plcore \mid platexrelease \rangle
                                                                                                                                  1266 \protected\def\pltx@next@inhibitglue{%
                                                                                                                                                                  \ifhmode\inhibitglue\else
                                                                                                                                  1268
                                                                                                                                                                \edef\@tempa{\everypar{%
                                                                                                                                                                                \everypar{\unexpanded\expandafter{\the\everypar}}%
                                                                                                                                   1270
                                                                                                                                                                                \unexpanded\expandafter{\the\everypar}\inhibitglue}}%
                                                                                                                                  1271
                                                                                                                                                                \@tempa\fi}
                                                                                                                                  1272 (/plcore | platexrelease)
                                                                                                                                   1273 \(\rangle place | \rangle plEndIncludeInRelease \)
                                                                                                                                   1274 \ \langle platexrelease \rangle \ | plincludeInRelease \{0000/00/00\} \{ pltx@next@inhibitglue \} \} | plincludeInRelease \{0000/00/00\} \{ pltx@next@inhibitglue \} | plincludeInRelease \{0000/00/00\} \{ pltx@next@inhibitglue \} | plincludeInRelease \{0000/00/00\} \{ pltx@next@inhibitglue \} | plincludeInRelease \{ plincludeInRelease \} | plincludeInRelease \} | plincludeInRelease \{ plincludeInRelease \} | plincludeInRelease \} | plincludeInRelease \{ plincludeInRelease \} | plinclud
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        {Add \pltx@next@inhibitglue}%
                                                                                                                                   1275 (platexrelease)
                                                                                                                                    1276 (platexrelease)\let\pltx@next@inhibitglue\@undefined
                                                                                                                                    1277 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
```

10 2013年以降の新しい pT_EX 対応

I $otin T_{E}X 2_{\varepsilon}$ のカーネルのコードをそのまま使うと、2013 年以降の $pT_{E}X$ では \xkanjiskip 由来のアキが前後に入ってしまうことがありました。そうした命令にパッチをあてます。なお、既に出てきた \footnote の内部命令(\@makefnmark)には同様のパッチがもうあててあります。

\Otabular tabular 環境の内部命令です。もとは lttab.dtx で定義されています。

```
1278 \left| \text{platexrelease} \right| \text{plIncludeInRelease} \left| \text{2016/04/17} \right| \left| \text{0tabular} \right|
                                          1279 (platexrelease)
                                                                                                                                                        {Remove extra \xkanjiskip}%
                                          1280 (*plcore | platexrelease)
                                          1281 \def\@tabular{\leavevmode \null\hbox \bgroup $\let\@acol\@tabacol
                                                                \let\@classz\@tabclassz
                                         1282
                                                                \let\\Classiv\\Otabclassiv \let\\\Otabularcr\\Otabarray}
                                         1283
                                         1284 (/plcore | platexrelease)
                                          1285 \langle platexrelease \rangle \backslash plEndIncludeInRelease
                                          1286 \langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease \{0000/00/00\} \{\c abular\}
                                          1287 (platexrelease)
                                                                                                                                                        {LaTeX2e original}%
                                          1288 (platexrelease)\def\@tabular{\leavevmode \hbox \bgroup $\let\@acol\@tabacol
                                                                                                    \let\@classz\@tabclassz
                                          1289 (platexrelease)
                                          1290 (platexrelease)
                                                                                                     \let\\Oclassiv\Otabclassiv \let\\\Otabularcr\Otabarray}
                                          1291 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
    \endtabular
\verb|\endtabular*| 1292 \langle platexrelease \rangle \\ | plincludeInRelease \{ 2016/04/17 \} \{ endtabular \} \\ | endtabular \} | endtabular \} | endtabular \} | endtabular \} | endtabular | endtabular
                                         1293 (platexrelease)
                                                                                                                                                      {Remove extra \xkanjiskip}%
                                         1294 (*plcore | platexrelease)
                                         1295 \verb|\def| endtabular{\crcr| egroup| egroup $\egroup| null}
                                         1296 \expandafter \let \csname endtabular*\endcsname = \endtabular
                                         1297 (/plcore | platexrelease)
                                         1298 \(\rangle platexrelease \)\(\rangle \)\(\rangle platexrelease \)
                                          1299 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\endtabular}
                                          1300 (platexrelease)
                                                                                                                                                        {LaTeX2e original}%
                                          1302 \( platexrelease \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) and \( \) endcsname = \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \) \( \
                                          1303 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
   \@iiiparbox \parbox の内部命令です。もとは ltboxes.dtx で定義されています。
                                          1304 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\@iiiparbox}
                                          1305 (platexrelease)
                                                                                                                                                        {Remove extra \xkanjiskip}%
                                          1306 (*plcore | platexrelease)
                                          1307 \let\@parboxto\@empty
                                          1308 \long\def\@iiiparbox#1#2[#3]#4#5{%
                                          1309
                                                            \leavevmode
                                          1310
                                                            \@pboxswfalse
                                          1311
                                                             \setlength\@tempdima{#4}%
                                         1312
                                                            \@begin@tempboxa\vbox{\hsize\@tempdima\@parboxrestore#5\@@par}%
                                         1313
                                                                   \ifx\relax#2\else
                                                                         \setlength\@tempdimb{#2}%
                                         1314
                                         1315
                                                                         \edef\@parboxto{to\the\@tempdimb}%
                                                                   \fi
                                         1316
                                                                   \if#1b\vbox
                                         1317
                                                                   \else\if #1t\vtop
                                         1318
                                         1319
                                                                   \else\ifmmode\vcenter
                                                                   \else\@pboxswtrue\null$\vcenter% !!!
                                         1320
                                                                   \fi\fi\fi
                                          1321
                                          1322
                                                                   \@parboxto{\let\hss\vss\let\unhbox\unvbox
```

```
1323
                         \csname bm@#3\endcsname}%
                      \if@pboxsw \m@th$\null\fi% !!!
            1324
                   \@end@tempboxa}
             1325
             1326 (/plcore | platexrelease)
             1327 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
             1328 \ \langle \texttt{platexrelease} \rangle \texttt{plIncludeInRelease} \{0000/00/00\} \{\texttt{\ciiiparbox}\}
             1329 (platexrelease)
                                                     {LaTeX2e original}%
             1330 (platexrelease)\let\@parboxto\@empty
             1331 (platexrelease)\long\def\@iiiparbox#1#2[#3]#4#5{%
             1332 (platexrelease)
                                 \leavevmode
             1333 (platexrelease)
                                 \@pboxswfalse
             1334 (platexrelease)
                                 \setlength\@tempdima{#4}%
             1335 (platexrelease)
                                 \@begin@tempboxa\vbox{\hsize\@tempdima\@parboxrestore#5\@@par}%
             1336 (platexrelease)
                                    \int x^{\pi} x^{2} else
                                      \setlength\@tempdimb{#2}%
             1337 (platexrelease)
            1338 (platexrelease)
                                      \edef\@parboxto{to\the\@tempdimb}%
             1339 \langle platexrelease \rangle
                                   \fi
             1340 (platexrelease)
                                    \if#1b\vbox
            1341 \langle platexrelease \rangle
                                    \else\if #1t\vtop
             1342 (platexrelease)
                                    \else\ifmmode\vcenter
             1343 (platexrelease)
                                    \else\@pboxswtrue $\vcenter
             1344 (platexrelease)
                                    \fi\fi\fi
             1345 (platexrelease)
                                    \@parboxto{\let\hss\vss\let\unhbox\unvbox
             1346 (platexrelease)
                                       \csname bm@#3\endcsname}%
             1347 (platexrelease)
                                   \if@pboxsw \m@th$\fi
             1348 (platexrelease)
                                 \@end@tempboxa}
            1349 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
\underline 下線を引く命令です。もとは ltboxes.dtx で定義されています。
            1350 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{ 2019/10/01 \} \\ \underline \}
             1351 (platexrelease)
                                                     {Make robust}%
             1352 (*plcore | platexrelease)
            1353 \DeclareRobustCommand\underline[1]{%
            1354
                   \ifmmode\@@underline{#1}%
            1355
                   \else \leavevmode\null$\@@underline{\hbox{#1}}\m@th$\null\relax\fi}
             1357 (/plcore | platexrelease)
             1358 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
             1359 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\underline}
             1360 (platexrelease)
                                                     {Remove extra \xkanjiskip}%
             1361 \langle platexrelease \rangle \setminus def \setminus underline#1{%}
             1363 (platexrelease)
                                 \ifmmode\@@underline{#1}%
             1364 (platexrelease) \else \leavevmode\null$\@@underline{\hbox{#1}}\m@th$\null\relax\fi}
             1365 (platexrelease)\expandafter \let \csname underline \endcsname \@undefined
             1366 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
             1367 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\underline}
             1368 (platexrelease)
                                                     {LaTeX2e original}%
             1369 ⟨platexrelease⟩\def\underline#1{%
```

11 e-pT_FX での FAM256 パッチの利用

```
\e@alloc@chardef 	ext{LAT}_{	ext{EX}} 2_{arepsilon} 2015/01/01 以降、拡張レジスタがあれば利用するようになっていますの
    \eQallocQtop で、e-pTFX の拡張レジスタを利用できるように設定します。
                  1375 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2019/10/01}%
                  1376 \langle platexrelease \rangle
                                                       {\e@alloc@chardef}{Extended Allocation (FAM256)}%
                  1377 (*plcore | platexrelease)
                  1378 \ifx\widowpenalties\@undefined
                   オリジナルの TeX の場合(拡張なしのアスキー pTeX の場合)。
                           \mathchardef\e@alloc@top=255
                  1379
                           \let\e@alloc@chardef\chardef
                  1380
                  1381 \else
                        \ifx\omathchar\@undefined
                   e-TrX 拡張で 2^{15} 個のレジスタが利用できます。
                  1383
                           \mathchardef\e@alloc@top=32767
                           \let\e@alloc@chardef\mathchardef
                  1384
                   FAM256 パッチが適用された e-pT<sub>F</sub>X の場合は、2^{16} 個のレジスタが利用できます。
                           \omathchardef\e@alloc@top=65535
                  1386
                           \let\e@alloc@chardef\omathchardef
                  1387
                        \fi
                  1388
                  1389 \fi
                  1390 (/plcore | platexrelease)
                  1391 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                  1392 \ \langle platexrelease \rangle \backslash plIncludeInRelease \{ 2018/03/09 \} \%
                                                       {\e@alloc@chardef}{Extended Allocation (FAM256)}%
                  1393 (platexrelease)
                  1394 ⟨platexrelease⟩\ifx\omathchar\@undefined
                  1395 (platexrelease) \ifx\widowpenalties\@undefined
                  1396 (platexrelease)
                                       \mathchardef\e@alloc@top=255
                  1397 (platexrelease)
                                       \let\e@alloc@chardef\chardef
                  1398 (platexrelease)
                  1399 (platexrelease)
                                        \mathchardef\e@alloc@top=32767
                  1400 (platexrelease)
                                        \let\e@alloc@chardef\mathchardef
                  1401 (platexrelease)
                                     \fi
                  1402 (platexrelease)\else
                  1403 (platexrelease)
                                        \omathchardef\e@alloc@top=65535
                  1404 (platexrelease)
                                        \let\e@alloc@chardef\omathchardef
                  1405 (platexrelease)\fi
```

```
1406 \(\rangle platexrelease \)\(\rangle plantle platexrelease \)
                   1407 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/11/29}%
                   1408 (platexrelease)
                                                          {\e@alloc@chardef}{Extended Allocation (FAM256)}%
                   1409 (platexrelease)\ifx\omathchar\@undefined
                   1410 (platexrelease) \ifx\widowpenalties\@undefined
                   1411 (platexrelease)
                                         \mathchardef\e@alloc@top=255
                   1412 (platexrelease)
                                         \let\e@alloc@chardef\chardef
                   1413 (platexrelease)
                                       \else
                                         \mathchardef\e@alloc@top=32767
                   1414 (platexrelease)
                   1415 (platexrelease)
                                         \let\e@alloc@chardef\mathchardef
                   1416 (platexrelease)
                                       \fi
                   1417 (platexrelease)\else
                   1418 (platexrelease)
                                       \ifx\enablecjktoken\@undefined % pTeX
                   1419 (platexrelease)
                                         \omathchardef\e@alloc@top=65535
                   1420 (platexrelease)
                                         \let\e@alloc@chardef\omathchardef
                   1421 (platexrelease)
                                       \else
                                                                          % upTeX
                   1422 (platexrelease)
                                         \chardef\e@alloc@top=65535
                   1423 \langle platexrelease \rangle
                                         \let\e@alloc@chardef\chardef
                   1424 \langle platexrelease \rangle
                                       \fi
                   1425 (platexrelease)\fi
                   1426 <platexrelease \plEndIncludeInRelease
                   1427 \; \langle \texttt{platexrelease} \rangle \texttt{\plIncludeInRelease} \{ 2015/01/01 \} \%
                   1428 (platexrelease)
                                                          {\e@alloc@chardef}{LaTeX2e original}%
                   1429 (platexrelease)\ifx\widowpenalties\@undefined
                   1430 (platexrelease) \mathchardef\e@alloc@top=255
                   1431 (platexrelease) \let\e@alloc@chardef\chardef
                   1432 (platexrelease)\else
                   1433 (platexrelease) \mathchardef\e@alloc@top=32767
                   1434 (platexrelease) \let\e@alloc@chardef\mathchardef
                   1435 (platexrelease)\fi
                   1436 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
                   1437 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}%
                   1438 (platexrelease)
                                                          {\e@alloc@chardef}{LaTeX2e original}%
                   1439 (platexrelease)\let\e@alloc@top\@undefined
                   1440 \(\rangle platexrelease \)\let\e@alloc@chardef\@undefined
                   1441 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
    \float@count \newcount や \newdimen で使われます。
                   1442 (*plcore | platexrelease)
                   1443 \let\float@count\e@alloc@top
                   1444 (/plcore | platexrelease)
                   2015/01/01 以降の IstrX 2。カーネルは、XeTrX と LuaTrX に対して数式 fam の
\e@mathgroup@top
                    上限を 16 から 256 に増やしています (\Umathcode で判定)。FAM256 パッチが適
                    用された e-pT<sub>E</sub>X でも同様に上限を 16 から 256 に増やします。これで
                      ! LaTeX Error: Too many math alphabets used in version normal.
                    が出にくくなるはずです。
```

```
1445 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{2016/11/29\}\)\"
1446 (platexrelease)
                                             {\e@mathgroup@top}{Extended Allocation (FAM256)}%
1447 (*plcore | platexrelease)
1448 \ifx\omathchar\@undefined
1449 \chardef\e@mathgroup@top=16 % LaTeX2e kernel standard
1450 \ensuremath{\setminus} \texttt{else}
1451 \mathchardef\e@mathgroup@top=256 % for e-pTeX FAM256 patched
1452 \fi
1453 (/plcore | platexrelease)
1454 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
1455 \ \langle \texttt{platexrelease} \rangle \texttt{\plincludeInRelease} \{ 2015/01/01 \} \%
                                             {\e@mathgroup@top}{LaTeX2e original}%
1456 (platexrelease)
1457 (platexrelease)\chardef\e@mathgroup@top=16
1458~\langle {\tt platexrelease} \rangle {\tt \plEndIncludeInRelease}
1459 \ \langle platexrelease \rangle \ | plincludeInRelease \{0000/00/00\}\%
1460 (platexrelease)
                                             {\e@mathgroup@top}{LaTeX2e original}%
1461 \(\rangle\) let\e@mathgroup@top\@undefined
1462 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
```

12 $\operatorname{IMT}_{F}X 2_{\varepsilon}$ と $\operatorname{pIMT}_{F}X 2_{\varepsilon}$ の更新タイミングずれ対策

\1@nohyphenation

通常は Babel のハイフネーション定義により提供されるパラメータです。しかし、 I $ext{FT}_{ ext{E}}$ X 2_{ε} 2017-04-15 以降・ $ext{pI}$ 4TEX 2_{ε} 2017-04-08 以降では、\verb の途中でハイフネーションが起きないようにするために必須のものとなりました。 $ext{I}$ 4TEX 2_{ε} は特殊な状況も想定して ltfinal.dtx で対策しているようですので、 $ext{pI}$ 4TEX 2_{ε} も念のためここで対策します(参考:latex2e svn r1405)。

\document@default@language

IFTEX 2_{ε} 2017-04-15 で導入されたパラメータですが、これに先立ち pIFTEX 2_{ε} 2017-04-08 でも使用しています。verbatim 環境の途中で改ページが起きた場合にヘッダでハイフネーションが抑制されないように、\@outputpage で \language をリセットするときに使われます(参考:latex2e svn r1407)。

```
トするときに使われます(参考:latex2e svn r1407)。

1468 ⟨platexrelease⟩ \plIncludeInRelease{2017/04/08}{\document@default@language}%

1469 ⟨platexrelease⟩ {Save language for hyphenation}%

1470 ⟨*plcore| platexrelease⟩

1471 \ifx\document@default@language \@undefined

1472 \let\document@default@language\m@ne

1473 \fi

1474 ⟨/plcore| platexrelease⟩

1475 ⟨platexrelease⟩ \plEndIncludeInRelease
```

```
1476~{\tt platexrelease} \verb|\plincludeInRelease{0000/00/00}{\tt (\document@default@language)\%} |
```

¹⁴⁷⁷ $\langle platexrelease \rangle$ {Save language for hyphenation}%

^{1478 (}platexrelease)\let\document@default@language\@undefined

 $^{1479~{\}tt \langle platexrelease \rangle \backslash plEndIncludeInRelease}$

File d plext.dtx

13 概要

このパッケージは、以下の項目に関する機能を拡張するものです。

- 表組環境
- フロートとキャプションの出力位置
- 段落ボックス環境
- 作図環境
- 連数字、漢数字、傍点、下線
- 参照番号

このパッケージは縦組用クラス(tarticle, tbook, treport)のときには、自動的に 読み込まれます。横組用クラス(jarticle, jbook, jreport)で拡張機能を使いたい場 合は、文書ファイルのプリアンブルに以下の一行を記述してください。

\usepackage{plext}

14 組方向オプションについて

つぎの環境やコマンドは、組方向オプションが追加され、拡張されています。

- tabular 環境、array 環境
- \layoutcaption コマンド
- minipage 環境、\parbox コマンド、\pbox コマンド
- picture 環境

組方向オプションは、コマンド名や環境の後ろで<と>で囲って、"y", "t", "z" のいずれかを指定します。それぞれのオプションの意味はつぎのとおりです。デフォルトの組み方向は、横組のときは"y"、縦組のときは"t"です。

オプション	意味
У	横組で出力(横組モードでは何もしない)
t	縦組で出力(縦組モードでは何もしない)
z	90 度回転して出力(横組モードでは何もしない)

組方向オプションを用いたサンプルを図1に示します。左から、"y", "t", "z" オプションを指定してあります。

たとえば、これはいったい何、いったいどうして、などと思えるようなことが世の中にはたくさんあります。	たくさんあります?たい何、いったいどうたい何、いったいどうたいだと思えるよたが世の中には	たとえば、これはいったい何、いったいどう して、などと思えるようなことが世の中には たへさんあります!
---	--	---

Figure 1: 組方向オプションの使用例

15 コード

\if@rotsw このスイッチは、縦組モードで90度回転させるかどうかを示すのに使います。

- 1 (*package)
- 2 \newif\if@rotsw

15.1 表組環境

tabular 環境と array 環境は、組方向を指定するオプションを追加しました。これらのコマンドは、lttab.dtx で定義されています。

\array array 環境と tabular 環境を開始するコマンドです。tabular 環境にはアスタリスク \tabular 形式があります。

\tabular*

- ${\tt 3 \ def\ array{\ let\ @acol\ @arrayacol\ let\ @classz\ @arrayclassz}$
- 4 \let\@classiv\@arrayclassiv
- 5 \let\\\@arraycr\let\@halignto\@empty\X@tabarray}
- 6 **%**
- 7 \def\tabular{\let\@halignto\@empty\X@tabular}
- 8 \@namedef{tabular*}{\@ifnextchar<%>
- 9 {\p@stabular}{\p@stabular<Z>}}

\XCtabarray 組方向オプションを調べます。

\X@tabular 10 \def\X@tabarray{\@ifnextchar<%>

File d: plext.dtx

```
{\p@tabarray}{\p@tabarray<Z>}}
             12 \def\X@tabular{\@ifnextchar<%>
                   {\p@tabular}{\p@tabular<Z>}}
            アスタリスク形式の場合は、組方向オプションの後ろに幅を指定します。
\p@stabular
             14 \def\p@stabular<#1>#2{%
 \p@tabular
                   \setlength\dimen@{#2}%
                   \edef\@halignto{to\the\dimen@}\p@tabular<#1>}
             17 \def\p@tabular<#1>{\leavevmode \null\hbox \bgroup $\let\@acol\@tabacol
                   \let\@classz\@tabclassz
                   \let\@classiv\@tabclassiv \let\\\@tabularcr\p@tabarray<#1>}
            位置オプションを調べます。
\p@tabarray
             20 \def\p@tabarray<#1>{\m@th\@ifnextchar[%]
                   {\p@array<#1>}{\p@array<#1>[c]}}
            tabular 環境と array 環境の内部形式です。
             22 \def\p@array<#1>[#2]#3{%
                 \fork@array@option<#1>[#2]\@begin@alignbox
                 \bgroup\box@dir\adjustbaseline
                 \setbox\@arstrutbox\hbox{%
             26
                 \iftdir
             27
                   \if #1v\relax\voko
                      \vrule\@height\arraystretch\ht\strutbox
             28
                            \@depth\arraystretch\dp\strutbox \@width\z@
             29
                   \else\if #1z\relax\@rotswtrue
             31
                      \vrule\@height\arraystretch\ht\zstrutbox
             32
                            \verb|\depth\arraystretch\dp\zstrutbox \@width\z@
             33
             34
                      \vrule\@height\arraystretch\ht\tstrutbox
                            \@depth\arraystretch\dp\tstrutbox \@width\z@
             35
                   \fi\fi
             36
             37
                 \else
                   \if #1t\relax\tate
             38
                      \vrule\@height\arraystretch\ht\tstrutbox
             39
                             \@depth\arraystretch\dp\tstrutbox \@width\z@
             40
             41
             42
                      \vrule\@height\arraystretch\ht\strutbox
             43
                             \@depth\arraystretch\dp\strutbox \@width\z@
                   \fi
             44
                 \fi}%
             45
                  \@mkpream{#3}\edef\@preamble{\ialign \noexpand\@halignto
                  \bgroup \tabskip\z@skip \@arstrut \@preamble \tabskip\z@skip \cr}%
             47
                  \let\@startpbox\@@startpbox \let\@endpbox\@@endpbox
             48
                 \let\tabularnewline\\%
             49
                   \let\par\@empty
             50
                   \let\@sharp##%
                   \set@typeset@protect
             52
```

\lineskip\z@skip\baselineskip\z@skip

53

- \ifhmode \@preamerr\z@ \@@par\fi
- \@preamble}

\endarray array 環境と tabular 環境の終了コマンドです。 \@end@alignbox は \p@array から 呼び出される\fork@array@optionによって設定されます。 \endtabular

- 56 \def\endarray{\crcr\egroup\egroup\@end@alignbox}
- 57 \def\endtabular{\crcr\egroup\egroup\@end@alignbox \$\egroup\null}
- 58 \expandafter \let \csname endtabular*\endcsname = \endtabular

\fork@array@option array 環境と tabular 環境で与えられた第一引数と第二引数の組合せの分岐を行ない ます。

> コミュニティ版では、アスキー版で不自然だった表組(array 環境および tabular 環境)と周囲の本文との揃え位置を修正し、以下のように設計しました。

- 周囲の組方向が横組かつ組方向が<y>, <z>指定の場合
 - [t] 指定のとき 一行目のベースラインが周囲のそれと一致(罫線の場合は和文ベースラ インの位置)
 - [c] 指定のとき 表組の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
 - [b] 指定のとき 最終行のベースラインが周囲のそれと一致(罫線の場合は和文ベースラ インの位置)
- 周囲の組方向が横組かつ組方向が<t>指定の場合
 - [t] 指定のとき 表組の上端が周囲の和文ベースラインと一致
 - [c] 指定のとき 表組の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
 - [b] 指定のとき 表組の下端が周囲の和文ベースラインと一致
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<y>指定の場合
 - [t] 指定のとき 表組の上端が周囲の和文ベースラインと一致
 - [c] 指定のとき 表組の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)

File d: plext.dtx

- [b] 指定のとき 表組の下端が周囲の和文ベースラインと一致
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<t>指定の場合
 - [t] 指定のとき
 一行目のベースラインが周囲のそれと一致(罫線の場合は和文ベースラインの位置)
 - [c] 指定のとき 表組の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
 - [b] 指定のとき 最終行のベースラインが周囲のそれと一致(罫線の場合は和文ベースラ インの位置)
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<z>指定の場合

59 \def\fork@array@option<#1>[#2]{%

- [t] 指定のとき 一行目の欧文ベースラインが周囲のそれと一致
- [c] 指定のとき 表組の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
- [b] 指定のとき 最終行の欧文ベースラインが周囲のそれと一致

```
60 \@rotswfalse
縦組モードのとき:
61 \iftdir
62 \if #1y\relax\let\box@dir\yoko
    64
        \def\@begin@alignbox{%
65
           \@tempdima=\tbaselineshift
66
           \advance\@tempdima-\ybaselineshift
67
           \raise\@tempdima\vtop\bgroup\kern\z@\vtop}%
       \let\@end@alignbox\egroup
68
    \else\if #2b\relax
69
70
       \def\@begin@alignbox{%
71
            \@tempdima=\tbaselineshift
           \advance\@tempdima-\ybaselineshift
72
            \raise\@tempdima\vbox\bgroup\vbox}%
74
       \def\@end@alignbox{\kern\z@\egroup}%
75
```

\let\@begin@alignbox\vcenter

76

```
77
        \let\@end@alignbox\relax
    \fi\fi
78
79 \else\if #1z\relax\let\box@dir\relax\@rotswtrue
    \def\@begin@alignbox{%
81
            \@tempdima=\tbaselineshift
82
            \advance\@tempdima-\ybaselineshift
83
            \advance\@tempdima\ht\tstrutbox
84
            \raise\arraystretch\@tempdima\vtop\bgroup\kern\z@\vtop}%
85
        \let\@end@alignbox\egroup
86
     \else\if #2b\relax
87
        \def\@begin@alignbox{%
88
            \@tempdima=\tbaselineshift
89
            \advance\@tempdima-\ybaselineshift
90
            \advance\@tempdima-\dp\tstrutbox
91
            \raise\arraystretch\@tempdima\vbox\bgroup\vbox}%
92
        \def\@end@alignbox{\kern\z@\egroup}%
93
94
     \else
        \let\@begin@alignbox\vcenter
95
        \let\@end@alignbox\relax
96
97
    \fi\fi
98 \else\let\box@dir\tate
    99
        \let\@begin@alignbox\vtop
100
101
        \let\@end@alignbox\relax
102
    \else\if #2b\relax
        \let\@begin@alignbox\vbox
103
        \let\@end@alignbox\relax
104
105
    \else
        \let\@begin@alignbox\vcenter
106
        \let\@end@alignbox\relax
107
108
    \fi\fi
109 \fi\fi
横組モードのとき:
110 \else
111 \if #1t\relax\let\box@dir\tate
    112
        \def\@begin@alignbox{\vtop\bgroup\kern\z@\vbox}%
113
        \let\@end@alignbox\egroup
114
    \else\if #2b\relax
        \def\@begin@alignbox{\vbox\bgroup\vbox}%
117
        \def\@end@alignbox{\kern\z@\egroup}%
118
119
        \let\@begin@alignbox\vcenter
        \let\@end@alignbox\relax
120
121
    \fi\fi
122 \else\let\box@dir\yoko
123
    \if #2t\relax
        \let\@begin@alignbox\vtop
```

```
125 \let\@end@alignbox\relax
126 \else\if #2b\relax
127 \let\@begin@alignbox\vbox
128 \let\@end@alignbox\relax
129 \else
130 \let\@begin@alignbox\vcenter
131 \let\@end@alignbox\relax
132 \fi\fi
133 \fi\fi}
```

15.2 フロートとキャプションの出力位置

キャプションとフロートは、出力位置の指定や大きさの指定などができるように拡張しています。詳細は、『日本語 $\begin{subarray}{c} \begin{subarray}{c} \begin{su$

\layoutfloat コマンドで作られるボックスです。

134 \newbox\@floatbox

フロートオブジェクトの幅と高さです。

- $135 \newdimen\floatwidth$
- $136 \mbox{ }\mbox{\ensuremath{\text{loatheight}}}$

フロートオブジェクトのまわりに引かれる罫線の太さです。

137 \newdimen\floatruletick \floatruletick=0.4pt

フロートオブジェクトとキャプションの間のアキです。

 $138 \verb|\captionfloatsep| \verb|\captionfloatsep=10pt|$

\caption@dir には、キャプションを組む方向を示すオプションが格納されます。 \captiondir は \caption@dir の値と現在の組み方向によって、\yoko, \tate, \relax のいずれかに設定されます。

- 139 \def\caption@dir{Z}
- 140 \let\captiondir\relax

キャプションの幅です。

141 \newdimen\captionwidth \captionwidth\z@

キャプションを付ける位置を指定します。

- 142 \def\caption@posa{Z}
- 143 \def\caption@posb{Z}

組み立てられたキャプションが格納されるボックスです。

144 \newbox\@captionbox

キャプションに使われる文字です。

 $145 \ensuremath{\mbox{\sc hormalfont}\mbox{\sc hormalsize}}$

\layoutfloat \X@layoutfloat \@layoutfloat \layoutfloat は図表類の大きさと位置を指定するのに使います。大きさを省略するか、負の値を指定すると、そのオブジェクトの自然な長さになります。このとき

File d: plext.dtx

は、罫が引かれません。正の大きさを指定すると、\floatruletickの太さの罫で囲まれます。

位置指定を省略した場合、中央揃えになるようにしています。

```
146 \def\layoutfloat{\@ifnextchar(%)
      {X@layoutfloat}_{X@layoutfloat(-5\p@,-5\p@)}
148 %
149 \def\X@layoutfloat(#1,#2) {\@ifnextchar[%]
      {\c (\#1,\#2)}{\c (\#1,\#2)[c]}
150
151 %
152 \long\def\@layoutfloat(#1,#2)[#3]#4{%}
    \setbox\z@\hbox{#4}%
     \floatwidth=#1 \floatheight=#2 \edef\float@pos{#3}%
     \ifdim\floatwidth<\z0
        \floatwidth\wd\z@\floatruletick\z@
157
    \fi
158
    \ifdim\floatheight<\z@
        \floatheight\ht\z@\advance\floatheight\dp\z@\relax
159
        \floatruletick\z@
160
161
    \setbox\@floatbox\vbox to\floatheight{\offinterlineskip
162
163
       \hrule width\floatwidth height\floatruletick depth\z@
164
       \vss\hbox to\floatwidth{%
         \vrule width\floatruletick height\floatheight depth\z@
         \hss\vbox to\floatheight{\hsize\floatwidth\vss#4\vss}\hss
166
167
         \vrule width\floatruletick height\floatheight depth\z@
       }\hrule width\floatwidth height\floatruletick depth\z@}}
```

\DeclareLayoutCaption

\DeclareLayoutCaption コマンドは、キャプションの組方向、付ける位置や幅のデフォルトをフロートのタイプごとに設定することができます。このコマンドでデフォルト値が設定されていないと、\pcaption コマンドでエラーが発せられます。このコマンドはプリアンブルでのみ、使用できます。

 $\verb|\DeclareLayoutCaption| \langle type \rangle < \langle dir \rangle > (\langle width \rangle) [\langle pos1 \rangle \langle pos2 \rangle]$

コマンド引数を省略することはできません。 $\langle dir \rangle$ には、'y', 't', 'z', 'n' のいずれかを指定します。'n' と指定をすると、本文の組み方向と同じ方向でキャプションが組まれます。これがデフォルトです。(補足:2018/09/20 v1.2j までは、この説明に反して実際のコードは'y' がデフォルトになっており、「日本語 $\text{IAT}_{EX} 2_{\varepsilon}$ ブック」にも'y' と書かれていましたが、後述の \bigstar のバグ修正に合わせ、2018/10/07 v1.2k で'n' に直しました。)

 $\langle width \rangle$ には、キャプションを折り返す長さを指定します。'(12zw)' と指定をすると、漢字 12 文字分の長さで折り返されます。デフォルトは (.8\linewidth) です。なお、キャプションの幅をフロートオブジェクトの幅に合わせる場合は'(\floatwidth)' と指定し、高さに合わせる場合は'(\floatheight)' と指定します。

 $\langle pos1 \rangle$ と $\langle pos2 \rangle$ には、キャプションを出力する位置を指定します。 $\langle pos1 \rangle$ は、'c',

```
figure タイプが 'cd'、table タイプは 'cu' です。
                                      169 \def\DeclareLayoutCaption#1<#2>(#3) [#4#5] {%
                                               \expandafter
                                      171
                                                \ifx\csname #1@layoutc@ption\endcsname\relax \else
                                                    \@latex@info{Redeclaring capiton layout setting of '#1'}%
                                      173
                                               \expandafter
                                      174
                                                \gdef\csname #1@layoutc@ption\endcsname{%
                                      176
                                                      \if Z\caption@dir\def\caption@dir{#2}\fi
                                                      \ifdim\captionwidth=\z@ \captionwidth=#3\relax\fi
                                      177
                                                      \if Z\caption@posa\def\caption@posa{#4}\fi
                                      178
                                                      \label{lem:caption@posb} $$ \left( \sum_{s=0}^{posb} f(s) \right) $$
                                      180 \@onlypreamble\DeclareLayoutCaption
                                      181 \DeclareLayoutCaption{figure}<n>(.8\linewidth)[cd]
                                      182 \DeclareLayoutCaption{table}<n>(.8\linewidth)[cu]
                                     \DeclareLayoutCaption コマンドで設定をした、デフォルト値とは異なる設定で
      \layoutcaption
                                     組みたい場合は、\layoutcaption コマンドを使用します。
 \X@layoutcaption
                                          \langle dir \rangle (\langle width \rangle) [\langle pos \rangle]
  \@ilayoutcaption
                                          なお、\layoutcaption に組み方向オプションを付けましたので、\captiondir
\@iilayoutcaption
                                      で組み方向を指定する必要はありません。また、\captiondirで指定をしても、そ
                                      の値は無視されます。
                                      183 \def\layoutcaption{\def\caption@dir{Z}\captionwidth\z@lef} \def\caption@dir{Z}\captionwidth\z@lef} \def\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\
                                               \def\caption@posa{Z}\def\caption@posb{Z}%
                                      185
                                                \@ifnextchar<\X@layoutcaption{%
                                      186
                                                    \@ifnextchar(\@ilayoutcaption{%
                                                        \@ifnextchar[\@iilayoutcaption\relax}}}
                                      187
                                      188 %
                                      189 \def\X@layoutcaption<#1>{\def\caption@dir{#1}%
                                               \@ifnextchar(\@ilayoutcaption{%
                                                    \@ifnextchar[\@iilayoutcaption\relax}}
                                      191
                                      192 %
                                      193 \def\@ilayoutcaption(#1){\setlength\captionwidth{#1}%
                                      194 \@ifnextchar[{\@iilayoutcaption}{\relax}}
                                      195 %
                                      196 \def\@iilayoutcaption[#1#2]{%
                                               \def\caption@posa{#1}\def\caption@posb{#2}}
                                    キャプションを図表類の天地左右の指定箇所に付けるには \pcaption コマンドで指定
                                     をします。位置の指定は \layoutcaption コマンドで行ないます。 \layoutcaption
              \@pcaption
                                      コマンドが省略された場合は、\DeclareLayoutCaption コマンドで設定されてい
                                      るデフォルト値が使われます。
                                      198 \def\pcaption{%
                                                  \ifx\@captype\@undefined
```

(t', b') のいずれかです。 $\langle pos2 \rangle$ は、(u', b') (a', (t') (b') のいずれかです。デフォルトは、

File d: plext.dtx

```
200
       \@latex@error{\noexpand\pcaption outside float}\@ehd
       \expandafter\@gobble
201
202
203
       \refstepcounter\@captype
       \expandafter\@firstofone
204
205
     {\@dblarg{\@pcaption\@captype}}%
206
207 }
208 %
209 \long\def\@pcaption#1[#2]#3{%
210
    \addcontentsline{\csname ext@#1\endcsname}{#1}{%
      \protect\numberline{\csname the#1\endcsname}{\ignorespaces#2}}%
211
212
       \@latex@error{Use \noexpand\pcaption with '\string\layoutfloat'}\@eha
213
214
    \fi
215
    \make@pcaptionbox{#3}%
    \@pboxswfalse
216
    \setbox\@tempboxa\vbox{\hbox to\hsize{\if 1\float@pos\else\hss\fi
217
      \if 1\caption@posb\box\@captionbox\kern\captionfloatsep\fi
218
219
      \if t\caption@posa\vtop
220
      \else\if b\caption@posa\vbox
221
      \else\@pboxswtrue $\vcenter \fi\fi
      222
       \unvbox\@floatbox
223
224
       \if d\caption@posb\kern\captionfloatsep\box\@captionbox\fi}%
225
      \if@pboxsw \m@th$\fi
      226
      \if r\float@pos\else\hss\fi}}%
227
    \par\vskip.25\baselineskip
228
    \box\@tempboxa}
229
```

\make@pcaptionbox

キャプションを組み立て、\@captionbox を作成します。

230 \def\make@pcaptionbox#1{%

まず、デフォルトの設定がされているかを確認します。設定されていない場合は、 警告メッセージを出力し、現在の組モードでのデフォルト値を使用します。設定されていれば、そのデフォルト値にします。

```
231 \expandafter
232 \ifx\csname\@captype @layoutc@ption\endcsname\relax
233 \@latex@warning{Default caption layout of '\@captype' unknown}%
234 \def\caption@dir{Z}\captionwidth\z@
235 \def\caption@posa{Z}\def\caption@posb{Z}%
236 \else
237 \csname \@captype @layoutc@ption\endcsname
238 \fi
```

次に、組み方向を設定します。基本組の組み方向とキャプションの組み方向を変える場合には、\@tempswaを真とします。文字を回転させるときは\@rotswを真にし

ます。

- 239 \@rotswfalse \@tempswafalse
 240 \iftdir\if y\caption@dir \let\captiondir\yoko \@tempswatrue
 241 \else\if z\caption@dir \let\captiondir\relax \@rotswtrue
 242 \else\let\captiondir\tate\fi\fi
 243 \else\if t\caption@dir\let\captiondir\tate \@tempswatrue
 244 \else\let\captiondir\yoko\fi
 245 \fi
- キャプションを組み立てる前に、まず、キャプション文字列がどの程度の長さを持っているのかを確認するために、\hbox に入れます。
- 247 \captionfontsetup\parindent\z@\inhibitglue
- csname fnum@\@captype\endcsname\char\euc"A1A1\relax#1}%
- 249 \if@rotsw \m@th\$\fi}%

キャプションの幅に合わせるため、再び、ボックスを組み立てます。

キャプションを折り返さなくてもよい場合、\@tempdimaをキャプションの長さにします。ただし、キャプションの組み方向が基本組の組み方向と異なる場合(\@tempswaが真)は、ボックス 0 の幅ではなく、高さに設定をします(pT_EX では同じボックスでも、組方向によって \wd と \ht+\wd の返す寸法が異なることに注意)。 \captionwidthの値が、キャプションの幅よりも長い場合、折り返さなくてはなりませんので、\@tempdimaを \captionwidthにします。

日本語 T_{EX} 開発コミュニティによる修正:2018/09/20 v1.2j までは、キャプション の組方向が基本組の組み方向と直交する場合に深さを考慮するのを忘れていたため に、本来は折り返さずに済むはずの短いキャプションが、必ず折り返されてしまう というバグ (\bigstar) がありました。2018/10/07 v1.2k でこのバグを修正したため、組 版結果が大きく変わる場合があります。

- 250 \if@tempswa \@tempdima\ht0 \advance\@tempdima\dp0
- 251 \else \@tempdima\wd0 \fi
- ${\tt 252} \qquad \verb|\dim|@tempdima>| captionwidth \dim| {\tt 0tempdima}| captionwidth \dim| {\tt 152}| {\tt 152}|$
- 253 \@pboxswfalse
- 254 \setbox0\hbox{\if@rotsw \$\fi
- 255 \if u\caption@posb\vbox
- 256 \else\if d\caption@posb\vbox
- 257 \else\if t\caption@posa\vtop
- 258 \else\if b\caption@posa\vbox
- 259 \else\ifmmode\vcenter\else\@pboxswtrue \$\vcenter\fi
- 260 \fi\fi\fi\fi
- 261 {\hsize\@tempdima\kern\z@
- 262 \vbox{\captiondir\hsize\@tempdima
- 263 \captionfontsetup\parindent\z@\inhibitglue
- 264 \csname fnum@\@captype\endcsname\char\euc"A1A1\relax#1}\kern\z@
- 265 }\if@pboxsw \m@th\$\fi \if@rotsw \m@th\$\fi}%

最後に \@captionbox を組み立てます。

位置 2 オプションが 'u' か 'd' の場合、このボックスの幅をフロートオブジェクトの幅と同じ長さにし、位置 1 オプションでの揃えに組み立てます。

位置2オプションが'1'か'r'の場合は、キャプションの幅です。このときの位置 1オプションの揃えは、この前の段階で準備をしておき、\@pcaptionで最終的に フロートオブジェクトと組み合わせるときになされます。

```
266 \let\to@captionboxwidth\relax
```

- 267 \if l\caption@posb \else\if r\caption@posb\else
- 268 \def\to@captionboxwidth{to\floatwidth}\fi\fi
- 269 \setbox\@captionbox\hbox\to@captionboxwidth{%
- 270 \if t\caption@posa\else\hss\fi
- 271 \unhbox0\relax
- 272 \if b\caption@posa\else\hss\fi}}

15.3 段落ボックス環境

minipage 環境と \parbox コマンドも、tabular 環境と同じように、組方向を指定するオプションを追加してあります。これらのコマンドは、ltboxes.dtx で定義されています。

\parbox コマンドは幅だけでなく高さも指定できるようになっています。新しい \parbox コマンドについての詳細は、usrguide.tex を参照してください。

minipage 環境

\minipage 組方向オプションを調べます。

273 \def\minipage{\@ifnextchar<%>
274 {\X@minipage}{\X@minipage<Z>}}

\X@minipage 位置オプションを調べます。

275 \def\X@minipage<#1>{\@ifnextchar[%]

276 {\@iminipage<#1>}{\@iiiminipage<#1>{c}\relax[s]}}

\@iminipage 高さオプションを調べます。

277 \def\@iminipage<#1>[#2]{\@ifnextchar[%]

278 {\@iiminipage<#1>{#2}}{\@iiminipage<#1>{#2}\relax[s]}}

\@iiminipage 内部位置オプションを調べます。

279 $\def\@iiminipage<#1>#2[#3]{<math>\def\@ifnextchar[\%]$ }

 $280 \qquad \{\@iiminipage<\#1>\{\#2\}\{\#3\}\}\\ \{\@iiminipage<\#1>\{\#2\}\{\#3\}\}\\ \#2]\}\}$

\@iiminipage minipage 環境の内部形式です。\leavevmode の後の \bgroup は、回転オプションが指定されたときのフラグ \if@rotswが、このマクロの内部だけで有効になるようにするためです。この括弧は、\endminipage コマンドで閉じます。

281 \def\@iiiminipage<#1>#2#3[#4]#5{%

```
282
                   \leavevmode\bgroup
                   \setlength\@tempdima{#5}%
              283
                   \def\@mpargs{<#1>{#2}{#3}[#4]{#5}}%
              285
                   \@rotswfalse
                   \iftdir
              286
                     \if #1y\relax\let\box@dir\yoko
              287
                     \else\if #1z\relax\@rotswtrue \let\box@dir\relax
              288
              289
                     \else\let\box@dir\tate
              290
                     \fi\fi
                   \else
              291
                     \if #1t\relax\let\box@dir\tate
              292
                     \else\let\box@dir\yoko
              293
              294
              295
                   \fi
                   \setbox\@tempboxa\vbox\bgroup\box@dir
              296
                     \if@rotsw \hsize\@tempdima\hbox\bgroup$\vbox\bgroup\fi
              297
                     \adjustbaseline
              298
                     \color@begingroup
              299
              300
                       \hsize\@tempdima
              301
                       \textwidth\hsize \columnwidth\hsize
              302
                       \@parboxrestore
              303
                       \def\@mpfn{mpfootnote}\def\thempfn{\thempfootnote}%
              304
                       \c@mpfootnote\z@
                       \let\@footnotetext\@mpfootnotetext
              305
                       \let\@listdepth\@mplistdepth\z@
              306
                       \@minipagerestore
              307
                       \@setminipage}
              308
             minipage 環境の終了コマンドです。
\endminipage
              309 \def\endminipage{%
              310
                     \par
              311
                     \unskip
              312
                     \ifvoid\@mpfootins\else
                       \vskip\skip\@mpfootins
              313
             314
                       \normalcolor
              315
                       \footnoterule
              316
                       \unvbox\@mpfootins
              317
                     \fi
                     \@minipagefalse
              318
                                       %% added 24 May 89
                   \color@endgroup
                   \if@rotsw \egroup\m@th$\egroup\fi
              \@iiiminipage で開始したグループを閉じるための \egroup です。
                   \egroup
              321
                   \expandafter\@iiiparbox\@mpargs{\unvbox\@tempboxa}\egroup}
```

\parbox コマンド

```
\parbox 組方向オプションを調べます。
                                                     323 \DeclareRobustCommand\parbox{\@ifnextchar<%>
                                                                              {\X@parbox}{\X@parbox<Z>}}
                                                位置オプションを調べます。
        \X@parbox
                                                     325 \def\X@parbox<#1>{\@ifnextchar[%]
                                                                              {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
        \@iparbox 高さオプションを調べます。
                                                     327 \def\@iparbox<#1>[#2] {\@ifnextchar[%]
                                                                              \label{limits} $$ (\input) $
    \@iiparbox 内部位置オプションを調べます。
                                                     329 \def\@iiparbox<#1>#2[#3]{\@ifnextchar[%]%
                                                                              {\@iiiparbox<#1>{#2}{#3}}{\@iiiparbox<#1>{#2}{#3}[#2]}}
\@iiiparbox parbox の内部形式です。 minipage 環境と同じようにグルーピングをします。この
                                                     括弧と対になるのは、このマクロの最後の\egroupです。
                                                     331 \long\def\@iiiparbox<#1>#2#3[#4]#5#6{%
                                                                        \leavevmode\null\bgroup
                                                     333
                                                                         \setlength\@tempdima{#5}%
                                                     334
                                                                       \fork@parbox@option<#1>[#2]%
                                                     335 \if@rotsw
                                                                         \@begin@tempboxa\vbox{\box@dir\hsize\@tempdima
                                                                                  337
                                                     338 \else
                                                     339
                                                                        \@begin@tempboxa\vbox{\box@dir
                                                                                  \hsize\@tempdima\@parboxrestore\adjustbaseline#6\@@par}%
                                                     340
                                                     341 \fi
                                                                                  \ifx\relax#3\relax\else
                                                     342
                                                     343
                                                                                           \setlength\@tempdimb{#3}%
                                                     344
                                                                                           \edef\@parboxto{to\the\@tempdimb}%
                                                     345
                                                     346
                                                                                  \@begin@parbox\@parboxto{\box@dir\adjustbaseline
                                                                                               \let\hss\vss\let\unhbox\unvbox
                                                                                               \csname bm@#4\endcsname}\@end@parbox
                                                                         \@end@tempboxa\egroup\null}
                                                     349
```

\fork@parbox@option \parbox で与えられた第一引数と第二引数の組合せの分岐を行ないます。
 コミュニティ版では、アスキー版で不自然だった \parbox の箱と周囲の本文との
揃え位置を修正し、以下のように設計しました。

• 周囲の組方向が横組かつ組方向が<y>, <z>指定の場合

- [t] 指定のとき一行目のベースラインが周囲のそれと一致
- [c] 指定のとき 箱の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
- [b] 指定のとき 最終行のベースラインが周囲のそれと一致
- 周囲の組方向が横組かつ組方向が<t>指定の場合
 - [t] 指定のとき 箱の上端が周囲の和文文字の高さと一致
 - [c] 指定のとき 箱の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
 - [b] 指定のとき 箱の下端が周囲の和文文字の深さと一致
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<y>指定の場合
 - [t] 指定のとき 箱の上端が周囲の和文文字の高さと一致
 - [c] 指定のとき 箱の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
 - [b] 指定のとき 箱の下端が周囲の和文文字の深さと一致
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<t>指定の場合
 - [t] 指定のとき一行目のベースラインが周囲のそれと一致
 - [c] 指定のとき 箱の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
 - [b] 指定のとき最終行のベースラインが周囲のそれと一致
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<z>指定の場合
 - [t] 指定のとき 箱の上端が周囲の和文文字の高さと一致

- [c] 指定のとき 箱の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
- [b] 指定のとき 箱の下端が周囲の和文文字の深さと一致

```
350 \def\fork@parbox@option<#1>[#2]{%
351 \@rotswfalse
縦組モードのとき:
352 \iftdir
353 \if #1y\relax\let\box@dir\yoko
      \if #2t\relax
         \def\@begin@parbox{\raise\cht\vtop\bgroup\kern\z@\vtop}%
355
         \let\@end@parbox\egroup
356
      \else\if #2b\relax
357
         \def\@begin@parbox{\lower\cdp\vbox\bgroup\vbox}%
358
         \def\@end@parbox{\kern\z@\egroup}%
359
360
      \else\ifmmode
361
         \let\@begin@parbox\vcenter
362
         \let\@end@parbox\relax
363
364
         \def\@begin@parbox{$\vcenter}%
         \def\@end@parbox{\m@th$}%
365
      fi\fi
366
367 \le \ \#1z\ #1z\relax\@rotswtrue \let\box@dir\relax
      368
         \def\@begin@parbox{\raise\cht\vtop\bgroup\kern\z@\vtop}%
369
370
         \let\@end@parbox\egroup
      \else\if #2b\relax
371
         \def\@begin@parbox{\lower\cdp\vbox\bgroup\vbox}%
372
         \def\@end@parbox{\kern\z@\egroup}%
373
374
      \else\ifmmode
375
         \let\@begin@parbox\vcenter
376
         \let\@end@parbox\relax
377
      \else
378
         \def\@begin@parbox{$\vcenter}%
         379
      \fi\fi\fi
380
381 \else\let\box@dir\tate
      \if #2t\relax
382
         \let\@begin@parbox\vtop
383
         \let\@end@parbox\relax
384
385
      \else\if #2b\relax
386
         \let\@begin@parbox\vbox
         \let\@end@parbox\relax
387
      \else\ifmmode
388
         \let\@begin@parbox\vcenter
389
         \let\@end@parbox\relax
390
```

```
\def\@begin@parbox{$\vcenter}%
                                 392
                                 393
                                                         \def\@end@parbox{\m@th$}%
                                 394
                                                  \fi\fi\fi
                                 395 \fi\fi
                                 横組モードのとき:
                                 396 \else
                                 397 \if #1t\relax\let\box@dir\tate
                                                  398
                                                         399
                                                         \let\@end@parbox\egroup
                                 400
                                 401
                                                  \else\if #2b\relax
                                                         \def\@begin@parbox{\lower\cdp\vbox\bgroup\vbox}%
                                 402
                                                         \def\@end@parbox{\kern\z@\egroup}%
                                 403
                                                  \else\ifmmode
                                 404
                                 405
                                                         \let\@begin@parbox\vcenter
                                 406
                                                         \let\@end@parbox\relax
                                 407
                                                         \def\@begin@parbox{$\vcenter}%
                                 408
                                                         409
                                                  \fi\fi\fi
                                 410
                                 411 \else\let\box@dir\yoko
                                                 412
                                 413
                                                         \let\@begin@parbox\vtop
                                 414
                                                         \let\@end@parbox\relax
                                 415
                                                 \else\if #2b\relax
                                 416
                                                         \let\@begin@parbox\vbox
                                 417
                                                         \let\@end@parbox\relax
                                 418
                                                  \else\ifmmode
                                                         \let\@begin@parbox\vcenter
                                 419
                                                         \let\@end@parbox\relax
                                 420
                                 421
                                                  \else
                                 422
                                                         \def\@begin@parbox{$\vcenter}%
                                                         \def\@end@parbox{\m@th$}%
                                 423
                                                  \fi\fi\fi
                                 425 \fi\fi
                                 \pbox コマンド
                                 \pbox は組み方向を指定できるボックスコマンドです。次のような構文となってい
                                  ます。
                                       \pbox オプションを調べます。
                                 426 \end{The properties of the properties of t
\X@makepbox
\@imakepbox
                                 File d: plext.dtx
                                                                                                                                                                                                                             138
```

391

\else

```
427 \det X@makePbox<#1>{%}
                 429 %
            430 \def\@imakePbox<#1>[#2]{\@ifnextchar[%]}
                 {\@iimakePbox<#1>{#2}}{\@iimakePbox<#1>{#2}[c]}}
           \pbox の内部形式です。
\@iimakePbox
            432 \def\@iimakePbox<#1>#2[#3]#4{%
                 \bgroup \@rotswfalse \@pboxswfalse
                 \iftdir
            435
                   \if #1y\relax\let\box@dir\yoko
            436
                   \else\if #1z\relax\@rotswtrue \let\box@dir\relax
            437
                   \else\let\box@dir\tate
                   \fi\fi
            438
                 \else
            439
                   \if #1t\relax\let\box@dir\tate
            440
                   \else\let\box@dir\yoko
            441
            442
            443
                 \ifmmode\else\if@rotsw\@pboxswtrue\hbox\bgroup$\fi\fi
                   \left( \frac{42}{\%} \right)
            445
                   \  \ifdim\ensuremath{\color{conding}}\ \
            446
            447
                   \hb@xt@\@tempdima{\box@dir
            448
                             \if #31\relax\else\hss\fi
            449
                             #4\relax
                             \if #3r\relax\else\hss\fi}\fi
            450
                 451
            15.4 作図環境
            picture 環境も、組方向を指定するオプションを追加してあります。なお、これらの
             コマンドは、ltpictur.dtx で定義されています。
   \picture 組方向オプションを調べます。
            452 \ensuremath{\mbox{\local{local}}} 452 \ensuremath{\mbox{\local}}
                  {\X@picture}{\X@picture<Z>}}
            図形領域オプションを調べます。
  \X@picture
            454 \def\X@picture<#1>(#2,#3){\@ifnextchar(%)
                  {\@@picture<#1>(#2,#3)}{\@@picture<#1>(#2,#3)(0,0)}}
            picture 環境の内部ではベースラインシフトの値をゼロにします。以前に設定されて
 \@@picture
            いた値は、それぞれ保存され、終了時に、その値に戻されます。
            456 \mbox{ }\mbox{\ensuremath{\texttt{Newdimen}}\mbox{\ensuremath{\texttt{SaveQybaselineshift}}}
```

458 \newdimen\@picwd

 $457 \mbox{ }\mbox{newdimen}\mbox{save@tbaselineshift}$

```
\picture の内部形式です。3組目の引数は、原点座標です。
           459 \def\@@picture<#1>(#2,#3)(#4,#5){%
                \save@ybaselineshift\ybaselineshift
                \save@tbaselineshift\tbaselineshift
           462
                \iftdir
           463
                  \if#1y\let\box@dir\yoko
                   \@picwd=#3\unitlength \@picht=#2\unitlength
           464
                   \@tempdima=#5\unitlength \@tempdimb=#4\unitlength
           465
                  \else\let\box@dir\tate
           466
                   \@picwd=#2\unitlength \@picht=#3\unitlength
           467
                   \@tempdima=#4\unitlength \@tempdimb=#5\unitlength
           468
           469
                  \fi
           470
                \else
                  \if#1t\let\box@dir\tate
           471
                   \@picwd=#3\unitlength \@picht=#2\unitlength
           472
           473
                   \@tempdima=#5\unitlength \@tempdimb=#4\unitlength
           474
                  \else\let\box@dir\yoko
           475
                   \@picwd=#2\unitlength \@picht=#3\unitlength
           476
                   \@tempdima=#4\unitlength \@tempdimb=#5\unitlength
           477
                  \fi
           478
                \setbox\@picbox\hbox to\@picwd\bgroup\box@dir
           479
                \hskip-\@tempdima\lower\@tempdimb\hbox\bgroup
           480
                \ybaselineshift\z@ \tbaselineshift\z@
                \ignorespaces}
           図形領域の幅と高さを指定の大きさにしてから、出力をします。そして、最後にベー
\endpicture
           スラインシフトの値を元に戻します。
           483 \def\endpicture{%
                \egroup\hss\egroup
                \ht\@picbox\@picht \wd\@picbox\@picwd \dp\@picbox\z@
           485
           486
                \mbox{\box\@picbox}%
                \ybaselineshift\save@ybaselineshift
           487
                \tbaselineshift\save@tbaselineshift}
      \put picture 環境の内部で、フォントサイズ変更コマンドなどが使用された場合、ベース
     \line ラインシフト量が新たに設定されてしまうため、これらのコマンドがベースライン
   \vector シフトの影響を受けないように再定義をします。ベースラインシフトを有効にした
  \dashbox い場合は、\pbox コマンドを使用してください。
     \oval 489 \let\org@put\put
   \circle 490 \def\put{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@\org@put}
           491 %
           492 \let\org@line\line
           493 \left( \frac{y}{z} \right) = 1
           494 %
           495 \let\org@vector\vector
           496 \def\vector{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@\org@vector}
```

```
497 %
498 \let\org@dashbox\dashbox
499 \def\dashbox{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@\org@dashbox}
500 %
501 \let\org@oval\oval
502 \def\oval{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@\org@oval}
503 %
504 \let\org@circle\circle
505 \def\circle{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@\org@circle}
```

15.5 連数字/漢数字/傍点/下線

ここでは、連数字、漢数字、傍点、下線について説明をしています。

連数字と漢数字、および傍点と下線についての詳細は、『日本語 \LaTeX 2ε ブック』を参照してください。なお、傍点に使う文字は pldefs.ltx で定義されています。

なお、連数字コマンドは3種類ありましたが、\rensuji コマンド一つにまとめました。新しい連数字コマンドは次の構文となります。

```
\rensuji [\langle pos \rangle] \langle 横に並べる半角文字 \rangle \rensuji* [\langle pos \rangle] \langle 横に並べる半角文字 \rangle
```

アスタリスク形式の場合は、行間を連数字の幅に合わせて広げません。 $\langle pos \rangle$ は、連数字を揃える位置です。'c'(中央揃え)、'r'(右寄せ)、'1'(左寄せ)を指定できます。デフォルトでは、中央に揃えます。

次のフラグが真の場合には、連数字の幅に合わせて行間を広げ**ません**。アスタリスク形式の場合に真になります。

506 \newif\ifnot@advanceline

\rensujiskip は連数字の前後に入るアキです。デフォルトは、現在の文字の幅の4分の1を基準にしています。

```
507 \newskip\rensujiskip
```

 $508 \mbox{\ensuremath{\mbox{\sc ths}}}\mbox{\ensuremath{\mbox{\sc ths}}}$

連数字

\rensuji \rensuji は、*形式かどうかを調べます。\@rensuji は、位置オプションを調べま
\@rensuji す。\@@rensuji が \rensuji の内部形式です。
\@@rensuji 509 \DeclareRobustCommand\rensuji{%
510 \@ifstar{\not@advancelinetrue\@rensuji}{\@rensuji}}
511 \def\@rensuji{\@ifnextchar[{\@@rensuji}{\@@rensuji}c]}}
512 \def\@@rensuji[#1]#2{%

513 \ifvmode\leavevmode\fi

 $514 \left(\frac{\#2}{else} \right)$

515 \hskip\rensujiskip

```
\ifnot@advanceline\not@advancelinefalse\else
        516
              \sc \z@\hbox{\yoko#2}%
        517
              \@tempdima\ht\z@ \advance\@tempdima\dp\z@
              \if #1c\relax\vrule\@width\z@ \@height.5\@tempdima \@depth.5\@tempdima
        519
              520
              \else\vrule\@width\z@ \@height\@tempdima \@depth\z@
        521
              \fi\fi
        522
        523
            \fi
            \if #1c\relax\hbox to1zw{\yoko\hss#2\hss}%
        524
            \else\if #1r\relax\vbox{\hbox to1zw{\yoko\hss#2}}%
        526
             \else\vtop{\hbox to1zw{\yoko#2\hss}}%
        527
             \fi\fi
            \hskip\rensujiskip
        529 \left| \text{fi}else\hbox{#2}\right| 
        530 }
\Rensuji \Rensuji コマンドと \prensuji コマンドは、\rensuji コマンドで代用できます。
\prensuji 531 \let\Rensuji\rensuji
        532 \let\prensuji\rensuji
        漢数字
        \Kanji コマンドを定義します。\Kanji コマンドは \Alph と同じように、カウンタ
        に対してのみ使用することができます。
 \@Kanji
          \kanji コマンドは、後続の半角数字を漢数字にします。\kanji 1989 のように
  \kanji
        指定をします。ただし、横組モードのときには、何もしません。つねに漢数字にし
        たい場合は、\kansuji プリミティブを使ってください。
```

傍点

\boutenchar \bou は、傍点を付けるコマンドです。

534 \def\@Kanji#1{\kansuji #1}

\bou 傍点として出力する文字は \boutenchar に指定します。この文字は、いつでも、 横組用フォントが使われます。デフォルトは、EUC コード A1A2(、)です。

後続の数字まで漢数字になってしまうバグを修正しました (Issue #33)。

533 \def\Kanji#1{\expandafter\@Kanji\csname c@#1\endcsname}

535 \def\kanji{\iftdir\expandafter\kansuji\fi}

536 \def\boutenchar{\char\euc"A1A2}

```
537 \end{bou} [1] {\end} \end{bou} [2] {\end} \end{bou} [3] {\end} \end{bou} [4] {\end} \end{bou} [4] {\end} \end{bou} [4] \end{bou} [4] {\end} \end{bou} \e
```

 $538 \left(\frac{0}{2} \right)$

539 \ifx#1\end \let\next=\relax

540 \else

541 \iftdir\if@rotsw

 $\label{lem:condition} $$ 542 \qquad \hbox to\z@{\boxmaxdepth\maxdimen} $$$

```
543
           \vss\moveleft-0.2zw\hbox{\boutenchar}\nointerlineskip
           \hbox{\char\euc"A1A1}}\hss{\nobreak#1\relax}
544
545
546
         \hbox to\z@{\vbox to\z@{\boxmaxdepth\maxdimen
           \verb|\vss\moveleft0.2zw\hbox{\yoko\boutenchar}\nointerlineskip|
547
           \hbox{\char\euc"A1A1}}\hss{\nobreak#1\relax}
548
       fi\else
549
         \hbox to\z@{\vbox to\z@{%
550
           \vss\moveleft-0.2zw\hbox{\yoko\boutenchar}\nointerlineskip
551
           \hbox{\char\euc"A1A1}}\hss}\nobreak#1\relax
552
553
       \let\next=\@bou
554
     \fi\next}
```

下線

\kasen 下線を引くコマンドです。横組モードのときは、引数を \underline に渡します。 縦組モードでも、回転モードの \parbox などで使われたときには、やはり引数を \underline に渡します。これ以外の場合は、引数の上に直線を引きます。

```
556 \DeclareRobustCommand\kasen[1]{%
557   \ifydir\underline{#1}\%
558   \else\if@rotsw\underline{#1}\else
559   \setbox\z@\hbox{#1}\leavevmode\raise.7zw
560   \hbox to\z@{\vrule\@width\wd\z@ \@depth\z@ \@height.4\p@\hss}\%
561   \box\z@
562   \fi\fi}
```

15.6 参照番号

参照番号の類を連数字で出力するように再定義します。itemize 環境などのリスト型のラベルについては、jarticle などのパッケージで定義しています。詳細は、jclasses.dtx を参照してください。

\@eqnnum これらは\equationコマンドで作成された数式に付加される番号です。ltmath.dtx \@thecounter で定義されています。

```
563 \def\@eqnnum{{\reset@font\rmfamily \normalcolor}
564 \iftdir\raise.25zh\hbox{\yoko(\theequation)}%
565 \else (\theequation)\fi}}
566 \def\@thecounter#1{\noexpand\rensuji{\noexpand\arabic{#1}}}
```

\@thmcounter \newtheorem コマンドで作成した環境で参照されるラベルです。ltthm.dtx で定義されています。

```
567 \def\0thmcounter#1{\noexpand\rensuji{\noexpand\arabic{#1}}} 568 \langle \text{package} \rangle
```

File e

pl209.dtx

16 DOCSTRIP 用モジュール

DOCSTRIP で以下のモジュール名を指定することで、対象となる部分を取り出すことができます。

pl209.def ファイルを生成 pl209 oldfonts oldpfont.sty を生成 style jarticle.sty ファイルを生成 jarticle jbook.sty ファイルを生成 ibook jreport.sty ファイルを生成 jreport tarticle.sty ファイルを生成 tarticle tbook.sty ファイルを生成 tbook treport treport.sty ファイルを生成

17 2.09 互換マクロ

2.09 用のコマンド定義ファイルがロードされたとき、メッセージを出力します。また、IATFX の 2.09 コマンドマクロ定義をロードします。

- 1 (*pl209)
- 2 \typeout{Entering pLaTeX 2.09 compatibility mode.}
- 3 \input{latex209.def}
- 4 (/pl209)

フォント選択コマンドのトレースのために ptrace パッケージをロードします。

- 5 (oldfonts)\RequirePackage{oldlfont}

\Rensuji pIMTEX 2ε では、\Rensuji, \prensuji の動作を \rensuji コマンドがカバーして \prensuji います。

- 7 (*pl209)
- 8 \let\Rensuji\rensuji
- 9 \let\prensuji\rensuji
- 10 (/pl209)

\@footnotemark 脚注の印を出力するマクロを、組み方向に応じて、脚注の方向が変わるようにし \@makefnmark ます。

- 11 (*pl209)
- 12 \def\@footnotemark{\leavevmode

File e: pl209.dtx

```
\ifhmode\edef\@x@sf{\the\spacefactor}\fi
    \ifydir\@makefnmark
    \else\hbox to\z0{\hskip-.25zw\raise2\cht\@makefnmark\hss}\fi
16 \ifhmode\spacefactor\@x@sf\fi\relax}
17 \def\@makefnmark{\hbox{\ifydir $\m@th^{\@thefnmark}$
    \else\hbox{\yoko$\m@th^{\@thefnmark}$}\fi}}
19 (/pl209)
_{20}~\langle*\text{pl209}\rangle
21 \fontencoding{JY1}
22 \fontfamily{mc}
23 \fontsize{10}{15}
24 (/pl209)
25 \langle *pl209 \mid oldfonts \rangle
26 \DeclareSymbolFont{mincho}{JY1}{mc}{m}{n}
27 \DeclareSymbolFont{gothic}{JY1}{gt}{m}{n}
28 \DeclareSymbolFontAlphabet\mathmc{mincho}
29 \DeclareSymbolFontAlphabet\mathgt{gothic}
31 \jfam\symmincho
\mcと \gt は、和文フォントを変更しますが、欧文フォントには影響しません。
32 \DeclareRobustCommand\mc{%
      \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
33
       \kanjifamily{\mcdefault}%
34
35
      \kanjiseries{\kanjiseriesdefault}%
      \kanjishape{\kanjishapedefault}%
      \selectfont\mathgroup\symmincho}
38 \DeclareRobustCommand\gt{%
      \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
40
      \kanjifamily{\gtdefault}%
      \verb|\kanjiseries{\kanjiseriesdefault}||%
41
      \kanjishape{\kanjishapedefault}%
42
      \selectfont\mathgroup\symgothic}
\bf コマンドは、和文フォントをゴシックにし、欧文フォントをボールドにします。
44 \verb|\DeclareRobustCommand\bf{\normalfont\bfseries\mathgroup\symbold\jfam\symgothic}|
\rm, \sf, \sl, \sc, \it, \tt の各コマンドを、欧文ファミリだけをデフォルトフォン
トから属性を変更するようにし、和文フォントは影響を受けないように修正します。
45 \DeclareRobustCommand\roman@normal{%
      \romanencoding{\encodingdefault}%
46
47
      \romanfamily{\familydefault}%
48
      \romanseries{\seriesdefault}%
      \romanshape{\shapedefault}%
      \selectfont\ignorespaces}
51 \DeclareRobustCommand\rm{\roman@normal\rmfamily\mathgroup\symoperators}
52 \DeclareRobustCommand\sf{\roman@normal\sffamily\mathgroup\symsans}
53 \DeclareRobustCommand\s1{\roman@normal\slshape\mathgroup\symslanted}
```

```
54 \DeclareRobustCommand\sc{\roman@normal\scshape\mathgroup\symsmallcaps}
                55 \DeclareRobustCommand\it{\roman@normal\itshape\mathgroup\symitalic}
                56 \DeclareRobustCommand\tt{\roman@normal\ttfamily\mathgroup\symtypewriter}
\em \em コマンドで、和文フォントも \gt に切り替えるようにしました。
                57 \DeclareRobustCommand\em{%
                           \@nomath\em
                           \ifdim \fontdimen\@ne\font>\z@\mc\rm\else\gt\it\fi}
                60 (/pl209 | oldfonts)
                61 (*pl209)
                62 \let\mcfam\symmincho
                63 \let\gtfam\symgothic
                                                                            {\edef\f@size{\@vpt}\rm\mc}
                64 \renewcommand\vpt
                65 \label{lem:command_vipt} $$ \operatorname{\ensuremath{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathchar}{\mathcha
                66 \renewcommand\viipt {\edef\f@size{\@viipt}\rm\mc}
                67 \renewcommand\viiipt{\edef\f@size{\@viiipt}\rm\mc}
                68 \renewcommand\ixpt {\edef\f@size{\@ixpt}\rm\mc}
                69 \renewcommand\xpt
                                                                               {\edef\f@size{\@xpt}\rm\mc}
                70 \renewcommand\xipt {\edef\f@size{\@xipt}\rm\mc}
                71 \renewcommand\xiipt {\edef\f@size{\@xiipt}\rm\mc}
                72 \renewcommand\xivpt {\edef\f@size{\@xivpt}\rm\mc}
                73 \renewcommand\xviipt{\edef\f@size{\@xviipt}\rm\mc}
                75 \renewcommand\xxvpt {\edef\f@size{\@xxvpt}\rm\mc}
                76 (/pl209)
```

18 スタイルファイル

77 $\langle p|209\rangle \setminus InputIfFileExists\{p|209.cfg\}\{\}\{\}$

以下は、pIFIEX 2.09 での標準スタイルファイルです。pIFIEX 2_{ε} のクラスファイルをロードするようにしています。

そして、最後に p1209.cfg というファイルがあれば、それをロードします。

File e: pl209.dtx

```
92 \LoadClass{jbook}
93 \/jbook\
94 \*tbook\
95 \@obsoletefile{tbook.cls}{tbook.sty}
96 \LoadClass{tbook}
97 \/tbook\
98 \*jreport\
99 \@obsoletefile{jreport.cls}{jreport.sty}
100 \LoadClass{jreport}
101 \/jreport\
102 \*treport\
103 \@obsoletefile{treport.cls}{treport.sty}
104 \LoadClass{treport}
105 \/treport\
106 \/style\
```

File f

kinsoku.dtx

このファイルは、禁則と文字間スペースの設定について説明をしています。日本語 T_{EX} の機能についての詳細は、『日本語 T_{EX} テクニカルブック I』を参照してください。

なお、このファイルのコード部分は、以前のバージョンで配布された kinsoku.tex と同一です。

1 (*plcore)

19 禁則

ある文字を行頭禁則の対象にするには、\prebreakpenaltyに正の値を指定します。 ある文字を行末禁則の対象にするには、\postbreakpenaltyに正の値を指定しま す。数値が大きいほど、行頭、あるいは行末で改行されにくくなります。

19.1 半角文字に対する禁則

ここでは、半角文字に対する禁則の設定を行なっています。

- 2 \prebreakpenalty'!=10000
- 3 \prebreakpenalty' "=10000
- 4 \postbreakpenalty'\#=500
- 5 \postbreakpenalty'\\$=500
- 6 \prebreakpenalty'\%=500
- 7 \prebreakpenalty'\&=500
- $9 \verb|\prebreakpenalty", = 10000$
- 10 \prebreakpenalty')=10000
- 11 \postbreakpenalty'(=10000
- $12 \prebreakpenalty `*=500$
- 13 \prebreakpenalty'+=500
- 14 \prebreakpenalty'-=10000
- 15 \prebreakpenalty'.=10000
- $16 \prescript{\prescript{\prescript{16}}{\prescript{\$
- 17 \prebreakpenalty'/=500
- 18 \prebreakpenalty';=10000
- 19 \prebreakpenalty'?=10000
- 20 \prebreakpenalty':=10000
- $21 \prebreakpenalty']=10000$
- 22 \postbreakpenalty' [=10000

19.2 全角文字に対する禁則

ここでは、全角文字に対する禁則の設定を行なっています。

```
23 \text{ prebreakpenalty'}, =10000
24 \prebreakpenalty'_{\circ} = 10000
25 \prebreakpenalty', =10000
26 \prebreakpenalty'. =10000
27 \prebreakpenalty ' • =10000
28 \prebreakpenalty':=10000
29 \prebreakpenalty'; =10000
30 \prebreakpenalty `? = 10000
31 \prebreakpenalty' ! =10000
32 \prebreakpenalty\jis"212B=10000
33 \prebreakpenalty\jis"212C=10000
34 \prebreakpenalty\jis"212D=10000
35 \postbreakpenalty\jis"212E=10000
36 \prebreakpenalty\jis"2139=10000
37 \prebreakpenalty\jis"2144=250
38 \prebreakpenalty\jis"2145=250
39 \postbreakpenalty\jis"2146=10000
40 \prebreakpenalty\jis"2147=5000
41 \postbreakpenalty\jis"2148=5000
42 \verb|\prebreakpenalty | jis" 2149 = 5000
43 \prebreakpenalty') =10000
44 \postbreakpenalty' (=10000
45 \prebreakpenalty' = 10000
46 \postbreakpenalty' {=10000
47 \prebreakpenalty' =10000
48 \postbreakpenalty' [=10000
49 \postbreakpenalty' =10000
50 \prebreakpenalty' =10000
51 \postbreakpenalty\jis"214C=10000
52 \prebreakpenalty\jis"214D=10000
53 \postbreakpenalty\jis"2152=10000
54 \prebreakpenalty\jis"2153=10000
55 \postbreakpenalty\jis"2154=10000
56 \prebreakpenalty\jis"2155=10000
57 \postbreakpenalty\jis"2156=10000
58 \prebreakpenalty\jis"2157=10000
59 \postbreakpenalty\jis"2158=10000
60 \prebreakpenalty\jis"2159=10000
61 \postbreakpenalty\jis"215A=10000
62 \prebreakpenalty\jis"215B=10000
63 \prebreakpenalty '-=10000
64 \text{ \label{eq:64}} +=200
65 \text{ prebreakpenalty'} -=200
66 \prebreakpenalty'==200
67 \postbreakpenalty' #=200
68 \postbreakpenalty' $ =200
```

File f: kinsoku.dtx Date: 2017/08/05 Version v1.0b

```
69 \prebreakpenalty '%=200
70 \prebreakpenalty' &=200
71 \prebreakpenalty' 5 = 150
72 \prebreakpenalty' w=150
73 \prebreakpenalty' 5 =150
74 \prebreakpenalty'え=150
75 \prebreakpenalty' お=150
76 \prebreakpenalty' ⇒=150
77 \prebreakpenalty' ≈=150
78 \prebreakpenalty' ⋈=150
79 \prebreakpenalty' \sharp = 150
80 \prebreakpenalty\jis"246E=150
81 \prebreakpenalty' 7=150
83 \prebreakpenalty' \dot{p} =150
84 \prebreakpenalty' x=150
85 \prebreakpenalty'オ=150
86 \prebreakpenalty' y=150
87 \prebreakpenalty' \tau=150
88 \prebreakpenalty' = 150
89 \prebreakpenalty' = 150
90 \prebreakpenalty\jis"256E=150
91 \prebreakpenalty\jis"2575=150
92 \prebreakpenalty\jis"2576=150
```

20 文字間のスペース

ある英字の前後と、その文字に隣合う漢字に挿入されるスペースを制御するには、\xspcode を用います。

ある漢字の前後と、その文字に隣合う英字に挿入されるスペースを制御するには、 \inhibitxspcode を用います。

20.1 ある英字と前後の漢字の間の制御

ここでは、英字に対する設定を行なっています。 指定する数値とその意味は次のとおりです。

- 0 前後の漢字の間での処理を禁止する。
- 1 直前の漢字との間にのみ、スペースの挿入を許可する。
- 2 直後の漢字との間にのみ、スペースの挿入を許可する。
- 3 前後の漢字との間でのスペースの挿入を許可する。

```
93 \xspcode'(=1
94 \xspcode')=2
95 \xspcode'[=1
96 \xspcode']=2
```

File f: kinsoku.dtx Date: 2017/08/05 Version v1.0b

```
97 \xspcode' '=1

98 \xspcode' '=2

99 \xspcode' ;=2

100 \xspcode' ,=2

101 \xspcode' .=2
```

T1 などの 8 ビットフォントエンコーディングで 128–255 の文字は欧文文字ですので、周囲の和文文字との間に \xkanjiskip が挿入される必要があります。そこで、奥村さんの jsclasses や田中さんの upI Φ TeX と同等の対処をします。

```
102 \xspcode"80=3
103 \xspcode"81=3
104 \xspcode"82=3
105 \xspcode"83=3
106 \xspcode"84=3
107 \xspcode"85=3
108 \xspcode"86=3
109 \xspcode"87=3
110 \xspcode"88=3
111 \xspcode"89=3
112 \xspcode"8A=3
113 \xspcode"8B=3
114 \times c=3
115 \xspcode"8D=3
116 \xspcode"8E=3
117 \xspcode"8F=3
118 \xspcode"90=3
119 \xspcode"91=3
120 \xspcode"92=3
121 \xspcode"93=3
122 \xspcode"94=3
123 \xspcode"95=3
124 \xspcode"96=3
125 \xspcode"97=3
126 \xspcode"98=3
127 \xspcode"99=3
128 \xspcode"9A=3
129 \xspcode"9B=3
130 \species 9C=3
131 \times pcode"9D=3
132 \times 9E=3
133 \xspcode"9F=3
134 \times 2000
135 \xspcode"A1=3
136 \xspcode"A2=3
137 \xspcode"A3=3
138 \xspcode"A4=3
139 \xspcode"A5=3
140 \xspcode"A6=3
141 \xspcode"A7=3
```

File f: kinsoku.dtx Date: 2017/08/05 Version v1.0b

```
142 \xspcode"A8=3
143 \xspcode"A9=3
144 \xspcode"AA=3
145 \times B=3
146 \spcode"AC=3
147 \xspcode"AD=3
148 \times E=3
149 \xspcode"AF=3
150 \space "B0=3
151 \times B1=3
152 \xspcode"B2=3
153 \times B3=3
154 \times B4=3
155 \xspcode"B5=3
156 \xspcode"B6=3
157 \times B7=3
158 \xspcode"B8=3
159 \xspcode"B9=3
160 \space BA=3
161 \xspcode"BB=3
162 \xspcode"BC=3
163 \times BD=3
164 \xspcode"BE=3
165 \xspcode"BF=3
166 \xspcode"C0=3
167 \times C1=3
168 \space "C2=3
169 \xspcode"C3=3
170 \spcode"C4=3
171 \xspcode"C5=3
172 \spcode"C6=3
173 \xspcode"C7=3
174 \times code"C8=3
175 \xspcode"C9=3
176 \xspcode"CA=3
177 \xspcode"CB=3
178 \spcode"CC=3
179 \xspcode"CD=3
180 \xspcode"CE=3
181 \xspcode"CF=3
182 \times D0=3
183 \times D1=3
184 \times D2=3
185 \times D3=3
186 \times D4=3
187 \xspcode"D5=3
188 \times D6=3
189 \space"D7=3
190 \xspcode"D8=3
191 \xspcode"D9=3
```

File f: kinsoku.dtx Date: 2017/08/05 Version v1.0b

```
192 \xspcode"DA=3
193 \xspcode"DB=3
194 \xspcode"DC=3
195 \xspcode"DD=3
196 \xspcode"DE=3
197 \xspcode"DF=3
198 \xspcode"E0=3
199 \xspcode"E1=3
200 \space"E2=3
201 \times \text{Spcode}"E3=3
202 \xspcode"E4=3
203 \times E5=3
204 \spcode"E6=3
205 \space "E7=3
206 \xspcode"E8=3
207 \times 500
208 \xspcode"EA=3
209 \xspcode"EB=3
210 \xspcode"EC=3
211 \times ED=3
212 \xspcode"EE=3
213 \xspcode"EF=3
214 \spcode"F0=3
215 \sprace{1}{3}
216 \xspcode"F2=3
217 \times \text{pcode}"F3=3
218 \spcode"F4=3
219 \species F5=3
220 \xspcode"F6=3
221 \sprace{1}{221} = 3
222 \spcode"F8=3
223 \xspcode"F9=3
224 \spcode"FA=3
225 \times FB=3
226 \space "FC=3
227 \xspcode"FD=3
228 \xspcode"FE=3
229 \xspcode"FF=3
```

20.2 ある漢字と前後の英字の間の制御

ここでは、漢字に対する設定を行なっています。 指定する数値とその意味は次のとおりです。

- 0 前後の英字との間にスペースを挿入することを禁止する。
- 1 直前の英字との間にスペースを挿入することを禁止する。
- 2 直後の英字との間にスペースを挿入することを禁止する。
- 3 前後の英字との間でのスペースの挿入を許可する。

File f: kinsoku.dtx Date: 2017/08/05 Version v1.0b

```
230 \inhibitxspcode', =1
231 \inhibitxspcode'<sub>o</sub> =1
232 \inhibitxspcode', =1
233 \inhibitxspcode'. =1
234 \inhibitxspcode'; =1
235 \inhibitxspcode'?=1
236 \inhibitxspcode') =1
237 \in (=2
238 \inhibitxspcode'] =1
239 \inhibitxspcode' [=2
240 \inhibitxspcode' = 1
241 \inhibitxspcode' {=2
242 \inhibitxspcode' =2
243 \inhibitxspcode' '=1
244 \inhibitxspcode' =2
245 \in \text{inhibitxspcode'} = 1
246 \inhibitxspcode' [=2
247 \in 247 = 1
248 \inhibitxspcode' \langle =2
249 \inhibitxspcode'\rangle =1
250 \inhibitxspcode' \( = 2
251 \ \ ) = 1
252 \in 52 
253 \inhibitxspcode' =1
254 \in \mathbb{F}=2
255 \in 1 = 1
256 \in \texttt{I=}2
257 \inhibitxspcode' ] =1
_{259} \inhibitxspcode' \sim=0
260 \inhibitxspcode'...=0
261 \in \text{inhibitxspcode'} = 0
262 \in \text{inhibitxspcode'} = 1
263 \inhibitxspcode' =1
264 \inhibitxspcode' "=1
_{265} \langle /plcore \rangle
```

$egin{array}{l} egin{array}{l} egin{array}$

このファイルは、pI m^4T_EX 2_{ε} の標準クラスファイルです。 $m^4DOCSTRIP$ プログラムによって、横組用のクラスファイルと縦組用のクラスファイルを作成することができます。

次に DOCSTRIP プログラムのためのオプションを示します。

オプション	意味
article	article クラスを生成
report	report クラスを生成
book	book クラスを生成
$10 \mathrm{pt}$	10pt サイズの設定を生成
11pt	11pt サイズの設定を生成
12pt	12pt サイズの設定を生成
bk	book クラス用のサイズの設定を生成
tate	縦組用の設定を生成
yoko	横組用の設定を生成

21 オプションスイッチ

ここでは、後ほど使用するいくつかのコマンドやスイッチを定義しています。

\c@Opaper 用紙サイズを示すために使います。A4, A5, B4, B5 用紙はそれぞれ、1, 2, 3, 4 として表されます。

- $_{1}\left\langle \ast\mathsf{article}\mid\mathsf{report}\mid\mathsf{book}\right\rangle$
- 2 \newcounter{@paper}

\ifClandscape 用紙を横向きにするかどうかのスイッチです。デフォルトは、縦向きです。

3 \newif\if@landscape \@landscapefalse

\@ptsize 組版をするポイント数の一の位を保存するために使います。0, 1, 2 のいずれかです。 4 \newcommand{\@ptsize}{}

\if@restonecol 二段組時に用いるテンポラリスイッチです。

 $5 \neq 5$

\if@titlepage タイトルページやアブストラクト(概要)を独立したページにするかどうかのスイッチです。report と book スタイルのデフォルトでは、独立したページになります。
6 \newif\if@titlepage

7 (article)\@titlepagefalse 8 (report | book) \@titlepagetrue

\ifCopenright chapter レベルを右ページからはじめるかどうかのスイッチです。横組では奇数ペー ジ、縦組では偶数ページから始まることになります。report クラスのデフォルトは、 "no" です。book クラスのデフォルトは、"yes" です。

9 (!article) \newif \if@openright

\if@openleft chapter レベルを左ページからはじめるかどうかのスイッチです。日本語 TrX 開発 コミュニティ版で新たに追加されました。横組では偶数ページ、縦組では奇数ペー ジから始まることになります。report クラスと book クラスの両方で、デフォルト は "no" です。

10 (!article) \newif \if@openleft

\if@mainmatter スイッチ \@mainmatter が真の場合、本文を処理しています。このスイッチが偽の 場合は、\chapter コマンドは見出し番号を出力しません。

11 $\langle book \rangle \setminus f$ (mainmatter f)

\hour

\minute

- 12 \hour\time \divide\hour by 60\relax
- 13 \@tempcnta\hour \multiply\@tempcnta 60\relax
- 14 \minute\time \advance\minute-\@tempcnta

\if@stysize pI4TpX 2ε 2.09 互換モードで、スタイルオプションに a4j,a5p などが指定されたと きの動作をエミュレートするためのフラグです。

15 \newif\if@stysize \@stysizefalse

\if@enablejfam 日本語ファミリを宣言するために用いるフラグです。

16 \newif\if@enablejfam \@enablejfamtrue

和欧文両対応の数式文字コマンドを有効にするときに用いるフラグです。マクロの 展開順序が複雑になるのを避けるため、デフォルトでは false としてあります。

17 \newif\if@mathrmmc \@mathrmmcfalse

オプションの宣言 22

ここでは、クラスオプションの宣言を行なっています。

22.1 用紙オプション

```
用紙サイズを指定するオプションです。
18 \DeclareOption{a4paper}{\setcounter{@paper}{1}%
    \setlength\paperheight {297mm}%
20 \setlength\paperwidth {210mm}}
21 \DeclareOption{a5paper}{\setcounter{@paper}{2}%
22 \setlength\paperheight {210mm}
23 \setlength\paperwidth {148mm}}
24 \DeclareOption{b4paper}{\setcounter{@paper}{3}%
25 \setlength\paperheight {364mm}
26 \setlength\paperwidth {257mm}}
27 \DeclareOption{b5paper}{\setcounter{@paper}{4}%
   \setlength\paperheight {257mm}
   \setlength\paperwidth {182mm}}
ドキュメントクラスに、以下のオプションを指定すると、通常よりもテキストを組
み立てる領域の広いスタイルとすることができます。
31 \DeclareOption{a4j}{\setcounter{@paper}{1}\@stysizetrue}
    \setlength\paperheight {297mm}%
    \setlength\paperwidth {210mm}}
\setlength\paperheight {210mm}
    \setlength\paperwidth {148mm}}
\setlength\paperheight {364mm}
    \setlength\paperwidth {257mm}}
40 \DeclareOption{b5j}{\setcounter{@paper}{4}\@stysizetrue
    \setlength\paperheight {257mm}
42
    \setlength\paperwidth {182mm}}
43 %
44 \DeclareOption{a4p}{\setcounter{@paper}{1}\@stysizetrue}
45 \setlength\paperheight {297mm}%
    \setlength\paperwidth {210mm}}
47 \DeclareOption{a5p}{\setcounter{@paper}{2}\@stysizetrue
   \setlength\paperheight {210mm}
49 \setlength\paperwidth {148mm}}
50 \DeclareOption{b4p}{\setcounter{@paper}{3}\@stysizetrue
   \setlength\paperheight {364mm}
52 \setlength\paperwidth {257mm}}
53 \DeclareOption{b5p}{\setcounter{@paper}{4}\@stysizetrue
   \setlength\paperheight {257mm}
   \setlength\paperwidth {182mm}}
```

22.2 サイズオプション

基準となるフォントの大きさを指定するオプションです。

 $56 \setminus if@compatibility$

```
57 \renewcommand{\@ptsize}{0}
58 \else
59 \DeclareOption{10pt}{\renewcommand{\@ptsize}{0}}
60 \fi
61 \DeclareOption{11pt}{\renewcommand{\@ptsize}{1}}
62 \DeclareOption{12pt}{\renewcommand{\@ptsize}{2}}
```

22.3 横置きオプション

このオプションが指定されると、用紙の縦と横の長さを入れ換えます。

```
63 \DeclareOption{landscape}{\@landscapetrue
```

- 64 \setlength\@tempdima{\paperheight}%
- 65 \setlength\paperheight{\paperwidth}%
- 66 \setlength\paperwidth{\@tempdima}}

22.4 トンボオプション

tombow オプションが指定されると、用紙サイズに合わせてトンボを出力します。このとき、トンボの脇に DVI を作成した日付が出力されます。作成日付の出力を抑制するには、tombow ではなく、tombo と指定をします。

ジョブ情報の書式は元々filename: 2017/3/5(13:3)のような書式でしたが、jsclasses にあわせて桁数固定の filename (2017-03-05 13:03) に直しました。

- 71 \jobname\space(\number\year-\two@digits\month-\two@digits\day
- 72 \space\two@digits\hour:\two@digits\minute)}%
- 73 \maketombowbox}
- 74 \DeclareOption{tombo}{%
- 75 \tombowtrue \tombowdatefalse
- 76 \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
- 77 \maketombowbox}

22.5 面付けオプション

このオプションが指定されると、トンボオプションを指定したときと同じ位置に文章を出力します。作成した DVI をフィルムに面付け出力する場合などに指定をします。

78 \DeclareOption{mentuke}{%

- 79 \tombowtrue \tombowdatefalse
- 80 \setlength{\Qtombowwidth}{\zQ}\%
- 81 \maketombowbox}

22.6 組方向オプション

このオプションが指定されると、縦組で組版をします。

22.7 両面、片面オプション

twoside オプションが指定されると、両面印字出力に適した整形を行ないます。

```
86 \label{lem:conside} \begin{tabular}{l} \begin{
```

87 \DeclareOption{twoside}{\@twosidetrue}

22.8 二段組オプション

二段組にするかどうかのオプションです。

```
88 \DeclareOption{onecolumn}{\@twocolumnfalse}
```

89 \DeclareOption{twocolumn}{\@twocolumntrue}

22.9 表題ページオプション

Otitlepage が真の場合、表題を独立したページに出力します。

```
90 \DeclareOption{titlepage}{\@titlepagetrue}
```

91 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}

22.10 右左起こしオプション

chapter を右ページあるいは左ページからはじめるかどうかを指定するオプションです。openleft オプションは日本語 T_{PX} 開発コミュニティによって追加されました。

22.11 数式のオプション

leqno を指定すると、数式番号を数式の左側に出力します。fleqn を指定するとディスプレイ数式を左揃えで出力します。

```
99 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
100 \DeclareOption{fleqn}{\input{fleqn.clo}}
```

22.12 参考文献のオプション

参考文献一覧を"オープンスタイル"の書式で出力します。これは各ブロックが改行で区切られ、\bibindent のインデントが付く書式です。

101 \DeclareOption{openbib}{%

参考文献環境内の最初のいくつかのフックを満たします。

```
102 \AtEndOfPackage{%
103 \renewcommand\@openbib@code{%
104 \advance\leftmargin\bibindent
105 \itemindent -\bibindent
106 \listparindent \itemindent
107 \parsep \z@
108 }%
```

そして、\newblockを再定義します。

109 \renewcommand\newblock{\par}}}

22.13 日本語ファミリ宣言の抑制、和欧文両対応の数式文字

 $pIFT_EX 2_{\varepsilon}$ は、このあと、数式モードで直接、日本語を記述できるように数式ファミリを宣言します。しかし、 T_EX で扱える数式ファミリの数が 16 個なので、その他のパッケージと組み合わせた場合、数式ファミリを宣言する領域を超えてしまう場合があるかもしれません。そのときには、残念ですが、そのパッケージか、数式内に直接、日本語を記述するのか、どちらかを断念しなければなりません。このクラスオプションは、数式内に日本語を記述するのをあきらめる場合に用います。

disablejfam オプションを指定しても \textmc や \textgt などを用いて、数式内に日本語を記述することは可能です。

日本語 T_{EX} 開発コミュニティによる補足:コミュニティ版 pIFT_{EX} の 2016/11/29 以降の版では、 $e-pT_{EX}$ の拡張機能(通称「旧 FAM256 パッチ」)が利用可能な場合 に、IFT_{EX} の機能で宣言できる数式ファミリ(数式アルファベット)の上限を 256 個に増やしています。したがって、新しい環境では disable jfam を指定しなくても 上限を超えることが起きにくくなっています。

mathrmmc オプションは、\mathrm と \mathbf を和欧文両対応にするためのクラスオプションです。

```
110 \if@compatibility
111 \@mathrmmctrue
112 \else
113 \DeclareOption{disablejfam}{\@enablejfamfalse}
114 \DeclareOption{mathrmmc}{\@mathrmmctrue}
115 \fi
```

22.14 ドラフトオプション

draft オプションを指定すると、オーバフルボックスの起きた箇所に、5pt の罫線が引かれます。

117 \DeclareOption{final}{\setlength\overfullrule{Opt}}

118 (/article | report | book)

22.15 オプションの実行

```
オプションの実行、およびサイズクラスのロードを行ないます。
```

```
119 (*article | report | book)
```

- 120 (*article)
- 121 \(\tate\)\ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final,tate}
- 122 (yoko) \ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final}
- 123 (/article)
- 124 (*report)
- 125 (tate) \ExecuteOptions{a4paper, 10pt, oneside, onecolumn, final, openany, tate}
- 126 (yoko) \ExecuteOptions{a4paper, 10pt, oneside, onecolumn, final, openany}
- $127 \langle / \text{report} \rangle$
- $128 \langle *book \rangle$
- 129 (tate) \ExecuteOptions {a4paper, 10pt, twoside, one column, final, open right, tate}
- $130 \text{ (yoko)} \text{ } \text{ExecuteOptions } \{a4paper, 10pt, two side, one column, final, open right\}$
- 131 (/book)
- 132 \ProcessOptions\relax
- 133 (book & tate) \input{tbk1\@ptsize.clo}
- 134 $\langle !book \& tate \rangle \setminus [tsize1 \land @ptsize.clo \}$
- 135 $\langle book \& yoko \rangle \setminus input{jbk1 \setminus @ptsize.clo}$
- 136 (!book & yoko)\input{jsize1\@ptsize.clo}

縦組用クラスファイルの場合は、ここで plext.sty も読み込みます。

- 137 $\langle tate \rangle \setminus RequirePackage\{plext\}$
- 138 (/article | report | book)

23 フォント

ここでは、IFIEXのフォントサイズコマンドの定義をしています。フォントサイズコマンドの定義は、次のコマンドを用います。

 $\ensuremath{\texttt{Qsetfontsize}}\sl baselineskip \rangle$

〈font-size〉これから使用する、フォントの実際の大きさです。

 $\langle baselineskip \rangle$ 選択されるフォントサイズ用の通常の \baselineskip の値です (実際は、\baselinestretch * $\langle baselineskip \rangle$ の値です)。

数値コマンドは、次のように IATEX カーネルで定義されています。

\normalsize 基本サイズとするユーザレベルのコマンドは\normalsizeです。IFTEX の内部では \Cnormalsize \Cnormalsize を使用します。

\normalsize マクロは、\abovedisplayskip と \abovedisplayshortskip、および \belowdisplayshortskip の値も設定をします。\belowdisplayskip は、つねに \abovedisplayskip と同値です。

また、リスト環境のトップレベルのパラメータは、つねに \@listI で与えられます。

```
139 (*10pt | 11pt | 12pt)
140 \renewcommand{\normalsize}{%
141 (10pt & yoko)
                    \@setfontsize\normalsize\@xpt{15}%
142 (11pt & yoko)
                    \@setfontsize\normalsize\@xipt{15.5}%
143 (12pt & yoko)
                    \@setfontsize\normalsize\@xiipt{16.5}%
144 \langle 10pt \& tate \rangle
                    \@setfontsize\normalsize\@xpt{17}%
145 \langle 11pt \& tate \rangle
                    \@setfontsize\normalsize\@xipt{17}%
146 (12pt & tate)
                    \@setfontsize\normalsize\@xiipt{18}%
147 (*10pt)
     \abovedisplayskip 10\p0 \plus2\p0 \plus5\p0
     \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
     \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
151 (/10pt)
152 (*11pt)
     \abovedisplayskip 11\p@ \@plus3\p@ \@minus6\p@
153
     \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
     156 \langle/11pt\rangle
157 (*12pt)
     \abovedisplayskip 12\p0 \odorson \end{aboved} \abovedisplayskip 12\p0 \odorson \end{aboved} \abovedisplayskip 12\p0 \odorson \end{aboved}
     \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
     \belowdisplayshortskip 6.5\p@ \@plus3.5\p@ \@minus3\p@
160
161 (/12pt)
162
       \belowdisplayskip \abovedisplayskip
       \let\@listi\@listI}
```

ここで、ノーマルフォントを選択し、初期化をします。このとき、縦組モードならば、デフォルトのエンコードを変更します。

```
164 (tate)\def\kanjiencodingdefault{JT1}%
```

\normalsize を robust にします。すぐ上で \DeclareRobustCommand とせずに、 カーネルの定義を \renewcommand した後に \MakeRobust を使っている理由は、ログ

¹⁶⁵ $\langle tate \rangle \setminus kanjiencoding{\{kanjiencodingdefault\}}\%$

^{166 \}normalsize

```
に LaTeX Info: Redefining \normalsize on input line ... というメッセー
                          ジを出したくないからです。ただし、latexrelease パッケージで 2015/01/01 より昔
                         の日付に巻き戻っている場合は \MakeRobust が定義されていません。
                          167 \ifx\MakeRobust\@undefined \else
                          168 \MakeRobust\normalsize
                         169 \fi
       \Cht 基準となる長さの設定をします。これらのパラメータは plfonts.dtx で定義されて
       \Cdp います。基準とする文字を「全角空白」(EUC コード 0xA1A1) から「漢」(JIS コー
       \Cwd ド 0x3441) へ変更しました。
       \Cvs 170 \setbox0\hbox{\char\jis"3441}%
      \Chs 171 \setlength\Cht{\ht0}
                         172 \setlength\Cdp\{\dp0\}
                         173 \setlength\Cwd{\wd0}
                         174 \setlength\Cvs{\baselineskip}
                         175 \setlength\Chs{\wd0}
                         176 \setbox0=\box\voidb@x
\small \small コマンドの定義は、\normalsize に似ています。こちらはカーネルで未定
                         義なので、直接 \DeclareRobustCommand で定義します。
                         177 \DeclareRobustCommand{\small}{%
                         178 (*10pt)
                                        \@setfontsize\small\@ixpt{11}%
                         179
                                         \abovedisplayskip 8.5\p@ \@plus3\p@ \@minus4\p@
                                          181
                                          182
                                          \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
                         183
                                                                               \topsep 4\p@ \plus2\p@ \eminus2\p@
                         184
                         185
                                                                                \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
                         186
                                                                                \itemsep \parsep}%
                         187 (/10pt)
                         188 (*11pt)
                                         \@setfontsize\small\@xpt\@xiipt
                                          \label{local_problem} $$ \above displayskip 10 \leq \ensuremath{p@ \ensuremath{plus2\p@ \ensuremath{p@ \ensuremath{p@ \ensuremath{pm. \ensuremath{pm. \ensuremath{pm. \ensuremath{p. \ensur
                         190
                                          \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
                         191
                                          \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
                         192
                                          \label{leftmargin} $$ \def\@listi{\leftmargin} in $$ \def\@listi(\leftmargin) $$ is the sum of th
                         193
                                                                               \topsep 6\p@ \plus2\p@ \eminus2\p@
                         194
                                                                                \parsep 3\p0 \plus2\p0 \plus2\p0
                         195
                                                                                \itemsep \parsep}%
                         196
                         197 (/11pt)
                         198 (*12pt)
                                        \@setfontsize\small\@xipt{13.6}%
                         199
                                        200
                         201
                                       \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
                                         \belowdisplayshortskip 6.5\p@ \@plus3.5\p@ \@minus3\p@
                         202
                                         \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
```

```
topsep 9\\p@ \\p@ \\plus3\\p@ \\eminus5\\p@
              204
                              \parsep 4.5\p0 \plus2\p0 \plus2\p0
              205
                              \itemsep \parsep}%
              206
              207 (/12pt)
                  \belowdisplayskip \abovedisplayskip}
              208
             \footnotesize コマンドの定義は、\normalsize に似ています。こちらも直接
\footnotesize
              \DeclareRobustCommand で定義します。
              209 \DeclareRobustCommand{\footnotesize}{%
              210 (*10pt)
              211
                   \@setfontsize\footnotesize\@viiipt{9.5}%
              212
                   \abovedisplayskip 6\p@ \@plus2\p@ \@minus4\p@
                   \abovedisplayshortskip \z@ \@plus\p@
                   \belowdisplayshortskip 3\p@ \@plus\p@ \@minus2\p@
                   \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
              216
                              \topsep 3\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
                              \label{local_problem} $$ \operatorname{poly} 2\pi \ \Omega \ \Omega \ \Omega \ \Omega \ \ \Omega $$
              217
              218
                              \itemsep \parsep}%
              219 (/10pt)
              220 (*11pt)
              221
                  \@setfontsize\footnotesize\@ixpt{11}%
                   \abovedisplayskip 8\p@ \@plus2\p@ \@minus4\p@
              222
                   \above displays hortskip \z @ \plus \p @
              223
                   224
                   \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
              226
                              \topsep 4\p0 \plus2\p0 \plus2\p0
              227
                              \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
              228
                              \itemsep \parsep}%
              229 (/11pt)
              230 (*12pt)
              231
                  \@setfontsize\footnotesize\@xpt\@xiipt
                   232
                   \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
              233
                   \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
              234
                   \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
                              236
              237
                              \parsep 3\p0 \plus2\p0 \plus2\p0
              238
                              \itemsep \parsep}%
              _{239}~\langle/12pt\rangle
                  \belowdisplayskip \abovedisplayskip}
 \scriptsize これらは先ほどのマクロよりも簡単です。これらはフォントサイズを変更するだけ
       \tiny で、リスト環境とディスプレイ数式のパラメータは変更しません。
             241 (*10pt)
      \large
              242 \DeclareRobustCommand{\scriptsize}{\@setfontsize\scriptsize\@viipt\@viiipt}
      \Large
              243 \DeclareRobustCommand{\tiny}{\@setfontsize\tiny\@vpt\@vipt}
      \LARGE
              244 \DeclareRobustCommand{\large}{\@setfontsize\large\@xiipt{17}}
              245 \DeclareRobustCommand{\Large}{\@setfontsize\Large\@xivpt{21}}
       \huge
       \Huge
```

```
246 \DeclareRobustCommand{\LARGE}{\@setfontsize\LARGE\@xviipt{25}}
                                                                                                                                               247 \label{localize} \label{localize} \label{localize} \\ 247 \label{localize} \label{localize} \label{localize} \label{localize} \\ 247 \label{localize} \labe
                                                                                                                                               248 \ensuremath{\label{logelements} \ensuremath{\labelements} \ensuremath{\label
                                                                                                                                               249 (/10pt)
                                                                                                                                               250 (*11pt)
                                                                                                                                               251 \DeclareRobustCommand{\scriptsize}{\@setfontsize\scriptsize\@viiipt{9.5}}
                                                                                                                                               252 \ensuremath{\lower.pmand{\tiny}{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\
                                                                                                                                               253 \ensuremath{\large}{\command{\large}} \ensuremath{\large}{\comma
                                                                                                                                               254 \ensuremath{\large}{\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\lar
                                                                                                                                               256 \label{localize} $$ \end{\mathbf \def} \ \cline{28} $$ \end{\mathbf \def} $$ \end{\mathbf 
                                                                                                                                               257 \DeclareRobustCommand{\Huge}{\@setfontsize\Huge\@xxvpt{33}}
                                                                                                                                               258 (/11pt)
                                                                                                                                               259 (*12pt)
                                                                                                                                               261 \DeclareRobustCommand{\tiny}{\@setfontsize\tiny\@vipt\@vipt}
                                                                                                                                               262 \end{Command} \end{\large} {\tt Qsetfontsize} \end{\large} \end{Cxivpt} \end{\large} \end{Cxivpt} \end{Cx
                                                                                                                                               264 \label{large} \label{largee} \label{large
                                                                                                                                               265 \ensuremath{\label{logelength} \ensuremath{\labelength} \ensuremath} \ensuremath{\labelength} \ensuremath{\labelength} \en
                                                                                                                                               266 \let\Huge=\huge
                                                                                                                                               267 (/12pt)
                                                                                                                                               268 (/10pt | 11pt | 12pt)
                                                                                                                                       このクラスファイルが意図する和文スケール値(1zw÷要求サイズ)を表す実数値
\Cjascale
                                                                                                                                               マクロ \Cjascale を定義します。この pLATFX 2<sub>6</sub> の標準クラスでは、フォーマット
                                                                                                                                               作成時に読み込まれたフォント定義ファイル(jy1mc.fd / jy1gt.fd / jt1mc.fd /
                                                                                                                                               jt1gt.fd) での和文スケール値がそのまま有効ですので、これは 0.962216 です。
                                                                                                                                               269 (*article | report | book)
                                                                                                                                               270 \def\Cjascale{0.962216}
                                                                                                                                               271 \langle / article \mid report \mid book \rangle
```

24 レイアウト

24.1 用紙サイズの決定

```
\columnsep は、二段組のときの、左右(あるいは上下)の段間の幅です。このス
\columnseprule ペースの中央に \columnseprule の幅の罫線が引かれます。

272 ⟨*article | report | book⟩

273 \if@stysize

274 ⟨tate⟩ \setlength\columnsep{3\Cwd}

275 ⟨yoko⟩ \setlength\columnsep{2\Cwd}

276 \else

277 \setlength\columnsep{10\p0}

278 \fi

279 \setlength\columnseprule{0\p0}
```

24.2 段落の形

\lineskip これらの値は、行が近付き過ぎたときの TFX の動作を制御します。

\normallineskip 280 \setlength\lineskip{1\p0}

281 \setlength\normallineskip{1\p0}

\baselinestretch これは、\baselineskip の倍率を示すために使います。デフォルトでは、何もし

ません。このコマンドが "empty" でない場合、\baselineskip の指定の plus や

minus 部分は無視されることに注意してください。

282 \renewcommand{\baselinestretch}{}

\parskip \parskip は段落間に挿入される、縦方向の追加スペースです。\parindent は段落

\parindent の先頭の字下げ幅です。

283 \setlength\parskip{0\p0 \@plus \p0}

 $284 \verb|\setlength\parindent{1\Cwd}|$

\smallskipamount これら3つのパラメータの値は、IFTEX カーネルの中で設定されています。これら

\medskipamount はおそらく、サイズオプションの指定によって変えるべきです。しかし、LATeX 2.09

\bigskipamount や $ext{IAT}_{ ext{E}} ext{X}\,2_{arepsilon}$ の以前のリリースの両方との互換性を保つために、これらはまだ同じ値

としています。

285 (*10pt | 11pt | 12pt)

286 \setlength\smallskipamount{3\p0 \Oplus 1\p0 \Ominus 1\p0}

287 \setlength\medskipamount{6\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}

288 \setlength\bigskipamount{12\p0 \@plus 4\p0 \@minus 4\p0}

289 (/10pt | 11pt | 12pt)

\@lowpenalty \nopagebreak と \nolinebreak コマンドは、これらのコマンドが置かれた場所に、

\@medpenalty ペナルティを起いて、分割を制御します。置かれるペナルティは、コマンドの引数に

\Chighpenalty よって、\Clowpenalty, \Cmedpenalty, \Chighpenalty のいずれかが使われます。

290 \@lowpenalty 51

 $291 \mbox{\em 0medpenalty} 151$

292 \@highpenalty 301

293 (/article | report | book)

24.3 ページレイアウト

24.3.1 縦方向のスペース

\headheight \headheight は、ヘッダが入るボックスの高さです。\headsep は、ヘッダの下端

\headsep と本文領域との間の距離です。\topskip は、本文領域の上端と1行目のテキスト

\topskip のベースラインとの距離です。

294 (*10pt | 11pt | 12pt)

295 \setlength\headheight{12\p0}

296 (*tate)

File g: jclasses.dtx

```
297 \if@stysize
             298 \ifnum\c@@paper=2 % A5
                       \setlength\headsep{6mm}
             300
                   \else % A4, B4, B5 and other
                      \setlength\headsep{8mm}
             301
             302
             303 \else
                       \setlength\headsep{8mm}
             304
             305 \fi
             306 \langle / tate \rangle
             307 (*yoko)
             308 \langle !bk \rangle \setlength \headsep{25\p0}
             309 \langle 10pt \& bk \rangle \setminus setlength \setminus headsep\{.25in\}
             310 \langle 11pt \& bk \rangle \setminus setlength \setminus headsep \{.275in\}
             311 \langle 12pt \& bk \rangle \setminus setlength \setminus headsep \{.275in\}
             312 (/yoko)
             313 \setlength\topskip{1\Cht}
\footskip \footskip は、本文領域の下端とフッタの下端との距離です。フッタのボックスの
             高さを示す、\footheight は削除されました。
             314 <tate \setlength\footskip{14mm}
             315 (*yoko)
             316 \langle !bk \rangle \setlength footskip{30p@}
             317 (10pt & bk)\setlength\footskip{.35in}
             318 (11pt & bk)\setlength\footskip{.38in}
             319 \langle 12pt \& bk \rangle \setminus \{12pt \& bk \} \setminus \{30 \neq 0\}
```

\maxdepth T_{EX} のプリミティブレジスタ \maxdepth は、\topskip と同じような働きをします。 \@maxdepth レジスタは、つねに \maxdepth のコピーでなくてはいけません。これ は \begin{document}の内部で設定されます。 T_{EX} と \LaTeX 2.09 では、\maxdepth は 4pt に固定です。 \LaTeX では、\maxdepth+\topskip を基本サイズの 1.5 倍に したいので、\maxdepth を \topskip の半分の値で設定します。

```
321 \if@compatibility
322 \setlength\maxdepth{4\p@}
323 \else
324 \setlength\maxdepth{.5\topskip}
325 \fi
```

24.3.2 本文領域

320 (/yoko)

\textheight と \textwidth は、本文領域の通常の高さと幅を示します。縦組でも横組でも、"高さ" は行数を、"幅" は字詰めを意味します。後ほど、これらの長さに \topskip の値が加えられます。

\textwidth 基本組の字詰めです。

互換モードの場合: 326 \if@compatibility 互換モード:a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定: \if@stysize \ifnum\c@@paper=2 % A5 328 \if@landscape 330 (10pt & yoko) $\stingth\textwidth{47\Cwd}$ 331 (11pt & yoko) \setlength\textwidth{42\Cwd} 332 (12pt & yoko) \setlength\textwidth{40\Cwd} 333 (10pt & tate) $\stingth\textwidth{27\Cwd}$ $334~\langle 11 pt~\&~tate \rangle$ \setlength\textwidth{25\Cwd} $\stingth\textwidth{23\Cwd}$ 335 (12pt & tate) 336 \else 337 (10pt & yoko) \setlength\textwidth{28\Cwd} 338 (11pt & yoko) \setlength\textwidth{25\Cwd} 339 (12pt & yoko) \setlength\textwidth{24\Cwd} 340 **(10pt** & tate) $\stingth\textwidth{46\Cwd}$ 341 **(11pt** & tate) $\setlength\textwidth{42\Cwd}$ 342 (12pt & tate) $\stingth\textwidth{38\Cwd}$ 343 \fi \else\ifnum\c@@paper=3 % B4 344 \if@landscape 345 $\stitle for the large of the$ 346 (10pt & yoko) 347 (11pt & yoko) \setlength\textwidth{69\Cwd} 348 (12pt & yoko) \setlength\textwidth{63\Cwd} 349 (10pt & tate) \setlength\textwidth{53\Cwd} 350 (11pt & tate) \setlength\textwidth{49\Cwd} 351 **(12pt & tate)** $\stingth\textwidth{44\Cwd}$ 352 \else 353 (10pt & yoko) $\stingth\textwidth{60\Cwd}$ 354 (11pt & yoko) $\stingth\textwidth{55\Cwd}$ 355 (12pt & yoko) $\stingth\textwidth{50\Cwd}$ $356 \langle 10pt \& tate \rangle$ $\stingth\textwidth{85\Cwd}$ 357 (11pt & tate) \setlength\textwidth{76\Cwd} 358 (12pt & tate) $\stingth\textwidth{69\Cwd}$ 359 \fi \else\ifnum\c@@paper=4 % B5 \if@landscape 362 (10pt & yoko) $\stingth\textwidth{60\Cwd}$ 363 (11pt & yoko) \setlength\textwidth{55\Cwd} 364 (12pt & yoko) \setlength\textwidth{50\Cwd} 365 (10pt & tate) \setlength\textwidth{34\Cwd} $366 \langle 11pt \& tate \rangle$ \setlength\textwidth{31\Cwd} $_{367}$ $\langle 12pt \& tate \rangle$ \setlength\textwidth{28\Cwd} \else 368 369 (10pt & yoko) \setlength\textwidth{37\Cwd}

\setlength\textwidth{34\Cwd}

\setlength\textwidth{31\Cwd}

\setlength\textwidth{55\Cwd}

370 (11pt & yoko)

371 (12pt & yoko)

372 (10pt & tate)

```
373 (11pt & tate)
                       \setlength\textwidth{51\Cwd}
374 (12pt & tate)
                       \setlength\textwidth{47\Cwd}
         \fi
376
       \else % A4 ant other
377
         \if@landscape
378 (10pt & yoko)
                       \setlength\textwidth{73\Cwd}
379 (11pt & yoko)
                       \setlength\textwidth{68\Cwd}
380 (12pt & yoko)
                       \stingth\textwidth{61\Cwd}
381 \langle 10pt \& tate \rangle
                       \stingth\textwidth{41\Cwd}
382 \langle 11pt \& tate \rangle
                       \setlength\textwidth{38\Cwd}
383 (12pt & tate)
                       \setlength\textwidth{35\Cwd}
384
         \else
385 (10pt & yoko)
                       386 (11pt & yoko)
                       \setlength\textwidth{43\Cwd}
387 (12pt & yoko)
                       \stingth\textwidth{40\Cwd}
388 (10pt & tate)
                       \stingth\textwidth{67\Cwd}
389 (11pt & tate)
                       \setlength\textwidth{61\Cwd}
390 (12pt & tate)
                       \stingth\textwidth{57\Cwd}
         \fi
391
392
       \fi\fi\fi
393
     \else
互換モード:デフォルト設定
       \if@twocolumn
394
         \setlength\textwidth{52\Cwd}
395
       \else
396
397 (10pt&!bk & yoko)
                          \setlength\textwidth{327\p0}
398 (11pt&!bk & yoko)
                          \setlength\textwidth{342\p0}
399 (12pt&!bk & yoko)
                          \setlength\textwidth{372\p0}
400 (10pt & bk & yoko)
                          \setlength\textwidth{4.3in}
401 (11pt & bk & yoko)
                          \setlength\textwidth{4.8in}
402 (12pt & bk & yoko)
                          \setlength\textwidth{4.8in}
403 (10pt & tate)
                     \setlength\textwidth{67\Cwd}
404 (11pt & tate)
                     \setlength\textwidth{61\Cwd}
405 \langle 12pt \& tate \rangle
                     \stingth\textwidth{57\Cwd}
406
       \fi
     \fi
407
2e モードの場合:
408 \ensuremath{\setminus} else
2e モード: a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定: 二段組では用
紙サイズの8割、一段組では用紙サイズの7割を版面の幅として設定します。
     \if@stysize
409
       \if@twocolumn
410
411 (yoko)
               \setlength\textwidth{.8\paperwidth}
               \setlength\textwidth{.8\paperheight}
412 (tate)
       \else
414 (yoko)
               \setlength\textwidth{.7\paperwidth}
415 (tate)
              \setlength\textwidth{.7\paperheight}
```

```
416
                      \fi
              417
                   \else
              2e モード: デフォルト設定
                           \verb|\setlength|@tempdima{\paperheight}|
              418 (tate)
              419 \langle \mathsf{yoko} \rangle
                            \setlength\@tempdima{\paperwidth}
              420
                      \addtolength\@tempdima{-2in}
                           \addtolength\@tempdima{-1.3in}
              421 (tate)
              422 (yoko & 10pt)
                                   \setlength\@tempdimb{327\p@}
              423 (yoko & 11pt)
                                   \setlength\@tempdimb{342\p0}
              424 (yoko & 12pt)
                                   \setlength\@tempdimb{372\p0}
              425 (tate & 10pt)
                                  \setlength\@tempdimb{67\Cwd}
              426 (tate & 11pt)
                                  \stingth\@tempdimb{61\Cwd}
              427 \langle tate \& 12pt \rangle
                                  \setlength\@tempdimb{57\Cwd}
                      \if@twocolumn
              428
              429
                        \ifdim\@tempdima>2\@tempdimb\relax
              430
                          \setlength\textwidth{2\@tempdimb}
              431
                          \setlength\textwidth{\@tempdima}
              432
                        \fi
              433
                      \else
              434
              435
                        \ifdim\@tempdima>\@tempdimb\relax
                          \setlength\textwidth{\@tempdimb}
              436
              437
                          \setlength\textwidth{\@tempdima}
              438
                        \fi
              439
                      \fi
              440
              441
                    \fi
              442 \fi
              443 \@settopoint\textwidth
              基本組の行数です。
\textheight
                互換モードの場合:
              444 \if@compatibility
              互換モード: a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定:
                    \if@stysize
              445
                      \ifnum\c@@paper=2 % A5
              446
                        \if@landscape
              447
              448 (10pt & yoko)
                                       \setlength\textheight{17\Cvs}
              449 (11pt & yoko)
                                       \setlength\textheight{17\Cvs}
              450 (12pt & yoko)
                                       \setlength\textheight{16\Cvs}
              451 (10pt & tate)
                                       \setlength\textheight{26\Cvs}
              452 \langle 11pt \& tate \rangle
                                       \stingth\textheight{26\Cvs}
              453 (12pt & tate)
                                       \stingth\textheight{25\Cvs}
              454
                        \else
              455 \langle 10pt \& yoko \rangle
                                       \setlength\textheight{28\Cvs}
              456 \langle 11pt \& yoko \rangle
                                       \setlength\textheight{25\Cvs}
              457 (12pt & yoko)
                                       \setlength\textheight{24\Cvs}
```

```
458 (10pt & tate)
                        \setlength\textheight{16\Cvs}
459 (11pt & tate)
                        \setlength\textheight{16\Cvs}
460 (12pt & tate)
                        \setlength\textheight{15\Cvs}
461
          \fi
        \else\ifnum\c@@paper=3 % B4
462
463
          \if@landscape
464 (10pt & yoko)
                        \setlength\textheight{38\Cvs}
465 (11pt & yoko)
                        \stingth\textheight{36\Cvs}
466 (12pt & yoko)
                        \setlength\textheight{34\Cvs}
467 (10pt & tate)
                        \setlength\textheight{48\Cvs}
468 (11pt & tate)
                        \setlength\textheight{48\Cvs}
                        \stingth\textheight{45\Cvs}
469 (12pt & tate)
470
          \else
471 (10pt & yoko)
                        \setlength\textheight{57\Cvs}
472 (11pt & yoko)
                        \setlength\textheight{55\Cvs}
473 (12pt & yoko)
                        \stingth\textheight{52\Cvs}
474 (10pt & tate)
                        \setlength\textheight{33\Cvs}
475 (11pt & tate)
                        \setlength\textheight{33\Cvs}
476 (12pt & tate)
                        \stingth\textheight{31\Cvs}
477
          \fi
478
        \else\ifnum\c@@paper=4 % B5
          \if@landscape
480 (10pt & yoko)
                        \setlength\textheight{22\Cvs}
481 (11pt & yoko)
                        \setlength\textheight{21\Cvs}
482 (12pt & yoko)
                        \setlength\textheight{20\Cvs}
483 (10pt & tate)
                        \stingth\textheight{34\Cvs}
484 (11pt & tate)
                        \stingth\textheight{34\Cvs}
485 (12pt & tate)
                        \setlength\textheight{32\Cvs}
486
         \else
487 (10pt & yoko)
                        \setlength\textheight{35\Cvs}
488 (11pt & yoko)
                        \setlength\textheight{34\Cvs}
489 (12pt & yoko)
                        \setlength\textheight{32\Cvs}
490 (10pt & tate)
                        \setlength\textheight{21\Cvs}
491 (11pt & tate)
                        \setlength\textheight{21\Cvs}
492 (12pt & tate)
                        \setlength\textheight{20\Cvs}
493
          \fi
        \else % A4 and other
494
          \if@landscape
495
496 (10pt & yoko)
                        \stingth\textheight{27\Cvs}
497 (11pt & yoko)
                        \setlength\textheight{26\Cvs}
498 (12pt & yoko)
                        \setlength\textheight{25\Cvs}
499 (10pt & tate)
                        \setlength\textheight{41\Cvs}
500 (11pt & tate)
                        \setlength\textheight{41\Cvs}
501 (12pt & tate)
                        \setlength\textheight{38\Cvs}
          \else
502
503 (10pt & yoko)
                        \stingth\textheight{43\Cvs}
504 (11pt & yoko)
                        \stingth\textheight{42\Cvs}
505 (12pt & yoko)
                        \setlength\textheight{39\Cvs}
506 (10pt & tate)
                        \setlength\textheight{26\Cvs}
507 (11pt & tate)
                        \stingth\textheight{26\Cvs}
```

```
508 (12pt & tate)
                                                   \setlength\textheight{22\Cvs}
509
                     \fi
                \fi\fi\fi
511 (yoko)
                            \addtolength\textheight{\topskip}
                                       \addtolength\textheight{\baselineskip}
512 (bk & yoko)
                          \addtolength\textheight{\Cht}
513 (tate)
514 (tate)
                            \addtolength\textheight{\Cdp}
互換モード:デフォルト設定
515 \else
516 (10pt&!bk & yoko)
                                               \setlength\textheight{578\p0}
518 \langle 11pt \& yoko \rangle \quad \text{setlength} \quad \text{$18$ (11pt & yoko)}
520~\begin{tabular}{ll} 10pt \& tate \end{tabular} $$ \align{tabular}{ll} $$ \align{tabula
523 \fi
2e モードの場合:
524 \else
2e モード: a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定: 縦組では用紙サイ
ズの 70%(book) か 78%(article,report)、横組では 70%(book) か 75%(article,report)
 を版面の高さに設定します。
           \if@stysize
525
526 \langle \mathsf{tate} \& \mathsf{bk} \rangle
                                      \setlength\textheight{.75\paperwidth}
527 \langle tate \& !bk \rangle
                                     \setlength\textheight{.78\paperwidth}
528 \langle yoko \& bk \rangle
                                      \setlength\textheight{.70\paperheight}
529 (yoko&!bk)
                                      \setlength\textheight{.75\paperheight}
2e モード:デフォルト値
530 \else
531 \langle \mathsf{tate} \rangle
                            \setlength\@tempdima{\paperwidth}
532 \langle yoko \rangle
                            \setlength\@tempdima{\paperheight}
533
                \addtolength\@tempdima{-2in}
534 (yoko)
                             \addtolength\@tempdima{-1.5in}
                \divide\@tempdima\baselineskip
                \@tempcnta\@tempdima
537
                \setlength\textheight{\@tempcnta\baselineskip}
538 \fi
539 \fi
最後に、\textheightに \topskip の値を加えます。
540 \addtolength\textheight{\topskip}
541 \@settopoint\textheight
```

24.3.3 マージン

\topmargin \topmargin は、"印字可能領域"—用紙の上端から1インチ内側— の上端からヘッダ部分の上端までの距離です。

```
2.09 互換モードの場合:
542 \if@compatibility
543 \langle *yoko \rangle
544
     \if@stysize
       \setlength\topmargin{-.3in}
546
547 (!bk)
            \setlength\topmargin{27\p0}
                  \setlength\topmargin{.75in}
548 (10pt & bk)
549 (11pt & bk)
                  \setlength\topmargin{.73in}
550 (12pt & bk)
                  \setlength\topmargin{.73in}
551 \fi
552 \langle /\mathsf{yoko} \rangle
553 (*tate)
554
    \if@stysize
       \ifnum\c@@paper=2 % A5
555
          \setlength\topmargin{.8in}
556
       \else % A4, B4, B5 and other
558
         \setlength\topmargin{32mm}
559
       \fi
560
    \else
       \setlength\topmargin{32mm}
561
562
563
     \addtolength\topmargin{-1in}
     \addtolength\topmargin{-\headheight}
     \verb|\addtolength| topmargin{-|headsep|}
566 (/tate)
2e モードの場合:
567 \else
     \setlength\topmargin{\paperheight}
     \addtolength\topmargin{-\headheight}
     \addtolength\topmargin{-\headsep}
          \addtolength\topmargin{-\textwidth}
           \addtolength\topmargin{-\textheight}
     \addtolength\topmargin{-\footskip}
574
     \if@stysize
       \ifnum\c@@paper=2 % A5
575
576
          \addtolength\topmargin{-1.3in}
577
          \addtolength\topmargin{-2.0in}
578
       \fi
579
    \else
580
581 (yoko)
             \addtolength\topmargin{-2.0in}
582 (tate)
             \addtolength\topmargin{-2.8in}
```

```
583
                                                                                        \fi
                                                                                        \addtolength\topmargin{-.5\topmargin}
                                                                    584
                                                                    585 \fi
                                                                    586 \@settopoint\topmargin
                                                                    \marginparsep は、本文と傍注の間にあけるスペースの幅です。横組では本文の左
       \marginparsep
                                                                    (右)端と傍注、縦組では本文の下(上)端と傍注の間になります。\marginparpush
   \marginparpush
                                                                    は、傍注と傍注との間のスペースの幅です。
                                                                    587 \if@twocolumn
                                                                    588
                                                                                     \setlength\marginparsep{10\p0}
                                                                    589 \ensuremath{\setminus} \texttt{else}
                                                                    590 (tate)
                                                                                                            \setlength\marginparsep{15\p0}
                                                                                                             \setlength\marginparsep{10\p0}
                                                                    591 (yoko)
                                                                    592 \fi
                                                                    593 (tate)\setlength\marginparpush{7\p0}
                                                                    594 (*yoko)
                                                                    595 \langle 10pt \rangle \setminus 10pt \setminus
                                                                    596 \langle 11pt \rangle \setminus \{5 p@\}
                                                                    597 \langle 12pt \rangle \setminus \{12pt\} \setminus \{7 \neq 0\}
                                                                    598 (/yoko)
                                                                    まず、互換モードでの長さを示します。
   \oddsidemargin
                                                                             互換モード、縦組の場合:
\evensidemargin
                                                                    599 \if@compatibility
\marginparwidth
                                                                    600 (tate)
                                                                                                                 \setlength\oddsidemargin{0\p0}
                                                                    601 \langle tate \rangle
                                                                                                                 \sting 10 p0
                                                                    互換モード、横組、book クラスの場合:
                                                                    602 (*yoko)
                                                                    603 (*bk)
                                                                    604 (10pt)
                                                                                                                       \setlength\oddsidemargin
                                                                                                                                                                                                                                   {.5in}
                                                                    605 \langle 11pt \rangle
                                                                                                                       \setlength\oddsidemargin
                                                                                                                                                                                                                                 \{.25in\}
                                                                    606 (12pt)
                                                                                                                       \setlength\oddsidemargin
                                                                                                                                                                                                                                 \{.25in\}
                                                                    607 (10pt)
                                                                                                                       \setlength\evensidemargin {1.5in}
                                                                    608 (11pt)
                                                                                                                       \setlength\evensidemargin {1.25in}
                                                                    609 (12pt)
                                                                                                                       \setlength\evensidemargin {1.25in}
                                                                    610 (10pt)
                                                                                                                       \setlength\marginparwidth {.75in}
                                                                    611 (11pt)
                                                                                                                       \setlength\marginparwidth {1in}
                                                                    _{612}~\langle 12pt\rangle
                                                                                                                      \setlength\marginparwidth {1in}
                                                                    613 (/bk)
                                                                    互換モード、横組、report と article クラスの場合:
                                                                    614 (*!bk)
                                                                                                 \if@twoside
                                                                    615
                                                                    616 (10pt)
                                                                                                                              \setlength\oddsidemargin
                                                                                                                                                                                                                                            {44\p@}
                                                                    617 \langle 11pt \rangle
                                                                                                                              \setlength\oddsidemargin
                                                                                                                                                                                                                                            {36\p@}
                                                                    618 \langle 12pt \rangle
                                                                                                                              \setlength\oddsidemargin
                                                                                                                                                                                                                                            {21\p@}
```

```
619 (10pt)
               \setlength\evensidemargin
                                          {82\p@}
620 (11pt)
               \setlength\evensidemargin
                                          \{74 \ p0\}
621 (12pt)
               \setlength\evensidemargin
622 (10pt)
               \setlength\marginparwidth {107\p0}
               \still
623 (11pt)
624 (12pt)
               \stingth \margin par width \{85\p0\}
       \else
625
                                          {60\p@}
626 (10pt)
              \setlength\oddsidemargin
627 (11pt)
              \setlength\oddsidemargin
                                          {54\p@}
628 \langle 12pt \rangle
              \setlength\oddsidemargin
                                          {39.5 p@}
                                         {60\p@}
629 (10pt)
              \setlength\evensidemargin
630 (11pt)
                                          {54\p@}
              \setlength\evensidemargin
631 (12pt)
              \setlength\evensidemargin
                                          {39.5 p@}
632 (10pt)
              \setlength\marginparwidth
                                          {90\p@}
633 (11pt)
              \setlength\marginparwidth
                                          {83\p@}
634 (12pt)
              \setlength\marginparwidth
                                          {68\p@}
635
    \fi
636 (/!bk)
互換モード、横組、二段組の場合:
     \if@twocolumn
638
        \setlength\oddsidemargin {30\p@}
        \setlength\evensidemargin {30\p@}
639
        \setlength\marginparwidth {48\p0}
640
     \fi
641
642 (/yoko)
縦組、横組にかかわらず、スタイルオプション設定ではゼロです。
     \if@stysize
       \if@twocolumn\else
644
         \setlength\oddsidemargin{0\p0}
645
         \setlength\evensidemargin{0\p0}
646
       \fi
647
     \fi
648
  互換モードでない場合:
649 \else
     \setlength\@tempdima{\paperwidth}
          \addtolength\@tempdima{-\textheight}
651 (tate)
652 \langle \mathsf{yoko} \rangle
          \addtolength\@tempdima{-\textwidth}
  \oddsidemargin を計算します。
     \if@twoside
653
654 (tate)
            \setlength\oddsidemargin{.6\@tempdima}
655 (yoko)
             \setlength\oddsidemargin{.4\@tempdima}
656
     \else
       \setlength\oddsidemargin{.5\@tempdima}
657
658
     \addtolength\oddsidemargin{-1in}
659
```

```
\evensidemargin を計算します。
     \setlength\evensidemargin{\paperwidth}
     \addtolength\evensidemargin{-2in}
662 (tate) \addtolength\evensidemargin{-\textheight}
663 (yoko)
         \addtolength\evensidemargin{-\textwidth}
     \verb|\addtolength| evensidemargin{-|oddsidemargin|}
     \@settopoint\oddsidemargin % 1999.1.6
666
     \@settopoint\evensidemargin
                   を 計 算 し ま す。こ こ で 、\@tempdima
\marginparwidth
                                                                の値は、
\paperwidth - \textwidth です。
667 (*yoko)
     \if@twoside
       \setlength\marginparwidth{.6\@tempdima}
670
       \addtolength\marginparwidth{-.4in}
671
     \else
       \setlength\marginparwidth{.5\@tempdima}
672
       \addtolength\marginparwidth\{-.4in\}
673
674
     \fi
     675
       \setlength\marginparwidth{2in}
676
677
678 (/yoko)
  縦組の場合は、少し複雑です。
679 (*tate)
     \verb|\setlength|@tempdima{\paperheight}|
     \addtolength\@tempdima{-\textwidth}
681
     \addtolength\@tempdima{-\topmargin}
682
     \addtolength\@tempdima{-\headheight}
683
     \addtolength\@tempdima{-\headsep}
     \addtolength\@tempdima{-\footskip}
     \setlength\marginparwidth{.5\@tempdima}
687 (/tate)
    \@settopoint\marginparwidth
688
689 \fi
```

24.4 脚注

\footnotesep \footnotesep は、それぞれの脚注の先頭に置かれる"支柱"の高さです。このクラスでは、通常の \footnotesize の支柱と同じ長さですので、脚注間に余計な空白は入りません。

```
690~\langle 10 pt \rangle \setlength \footnotesep{6.65 p0} \\ 691~\langle 11 pt \rangle \setlength \footnotesep{7.7 p0} \\ 692~\langle 12 pt \rangle \setlength \footnotesep{8.4 p0}
```

\footins \skip\footins は、本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。

```
693~\langle 10 pt \rangle \ \( 2\p0 \@plus 4\p0 \@minus 2\p0 \\ 2\p0 \quad 2\p0 \\ 2\p0 \p0 \\ 2\p0 \\ 
694 \langle 11pt \rangle \cdot \{10pc \setminus 0plus 4pc \setminus 0plus 2pc \}
695 (12pt) \end{0.8p0 \end{0.8p0} \end{0.8p0} \end{0.8p0} \end{0.8p0} $$ (12pt) \end{0
```

24.5 フロート

すべてのフロートパラメータは、IATeX のカーネルでデフォルトが定義されていま す。そのため、カウンタ以外のパラメータは \renewcommand で設定する必要があ ります。

24.5.1 フロートパラメータ

\floatsep フロートオブジェクトが本文のあるページに置かれるとき、フロートとそのページ \textfloatsep にある別のオブジェクトの距離は、これらのパラメータで制御されます。これらの \intextsep パラメータは、一段組モードと二段組モードの段抜きでないフロートの両方で使わ れます。

> \floatsep は、ページ上部あるいは下部のフロート間の距離です。 \textfloatsep は、ページ上部あるいは下部のフロートと本文との距離です。 \intextsep は、本文の途中に出力されるフロートと本文との距離です。

```
696 (*10pt)
697 \setlength\floatsep
                           {12\p@ \ensuremath{\texttt{0}}\p@ \ensuremath{\texttt{0}}\p@ \ensuremath{\texttt{0}}\p@}
698 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
700~\langle/10pt\rangle
701 (*11pt)
702 \setlength\floatsep \{12\p0\ \p0\ 2\p0\ \p0\ 2\p0\}
703 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
704 \setlength\intextsep \{12\p0\ \p0\ 2\p0\ \p0\ 2\p0\}
705 (/11pt)
706 (*12pt)
                          {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
707 \setlength\floatsep
708 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
709 \setlength\intextsep \{14\p0\ \p0\ 4\p0\ \p0\ 4\p0\ \p0\}
710 (/12pt)
```

\dblfloatsep

二段組モードで、\textwidth の幅を持つ、段抜きのフロートオブジェクトが本 \dbltextfloatsep 文と同じページに置かれるとき、本文とフロートとの距離は、\dblfloatsep と \dbltextfloatsep によって制御されます。

> \dblfloatsep は、ページ上部あるいは下部のフロートと本文との距離です。 \dbltextfloatsep は、ページ上部あるいは下部のフロート間の距離です。

```
711 (*10pt)
712 \setlength\dblfloatsep
                             {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
713 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
714 (/10pt)
```

File g: jclasses.dtx

```
715 (*11pt)
                          716 \setlength\dblfloatsep
                                                                                          {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
                          717 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p0}
                          718 (/11pt)
                          719 (*12pt)
                          720 \setlength\dblfloatsep
                                                                                           {14\p0\ \ensuremath{\texttt{Oplus}\ 2\p0\ \ensuremath{\texttt{Ominus}\ 4\p0}}}
                          721 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
                          722 (/12pt)
                         フロートオブジェクトが、独立したページに置かれるとき、このページのレイアウ
                           トは、次のパラメータで制御されます。これらのパラメータは、一段組モードか、
      \@fpsep
                         二段組モードでの一段出力のフロートオブジェクトに対して使われます。
      \@fpbot
                               ページ上部では、\@fptopの伸縮長が挿入されます。ページ下部では、\@fpbot
                          の伸縮長が挿入されます。フロート間には \@fpsep が挿入されます。
                               なお、そのページを空白で満たすために、\@fptopと\@fpbotの少なくともどち
                           らか一方に、plus ...fil を含めてください。
                          723 (*10pt)
                          724 \setlength\@fptop{0\p@ \@plus 1fil}
                          725 \setlength\Ofpsep{8\p0 \Oplus 2fil}
                          726 \setlength\@fpbot{0\p@ \@plus 1fil}
                          727 \langle/10pt\rangle
                          728 (*11pt)
                          729 \setlength\@fptop{0\p@ \@plus 1fil}
                          730 \setlength\@fpsep{8\p@ \@plus 2fil}
                          731 \setlength\@fpbot\{0\p0\ \end{0plus} 1fil}
                          732 (/11pt)
                          733 (*12pt)
                          734 \setlength\@fptop\{0\p0\p0\p0\ 1fil}
                          735 \setlength\@fpsep{10\p@ \@plus 2fil}
                          736 \setlength\@fpbot{0\p@ \@plus 1fil}
                          737 (/12pt)
\@dblfptop 二段組モードでの二段抜きのフロートに対しては、これらのパラメータが使われ
\@dblfpsep ます。
\dot{0dblfpbot} 738 \dot{*10pt}
                          739 \setlength\@dblfptop\{0\polimits plus 1fil\}
                          740 \setlength\@dblfpsep{8\p0\ensuremath{0} \censuremath{plus} 2fil}
                          741 \setlength\@dblfpbot\{0\p0\end{0p0} \@plus 1fil}
                          742 (/10pt)
                          743 (*11pt)
                          744 \setlength\@dblfptop\{0\polimits plus 1fil\}
                          745 \setlength\@dblfpsep{8\p@ \@plus 2fil}
                          746 \setlength\@dblfpbot\{0\polenote{0p0}\ \polenote{0p0}\ \p
                          747 (/11pt)
                          748 (*12pt)
                          749 \setlength\@dblfptop\{0\polenotemark \center(0\polenotemark) \center(0)\polenotemark
```

750 \setlength\@dblfpsep{10\p@ \@plus 2fil}

751 \setlength\@dblfpbot $\{0\polenote{0p0}\ \polenote{0p0}\ \p$

752 (/12pt)

753 (/10pt | 11pt | 12pt)

24.5.2 フロートオブジェクトの上限値

\c@topnumber topnumber は、本文ページの上部に出力できるフロートの最大数です。

754 (*article | report | book)

755 \setcounter{topnumber}{2}

\c@bottomnumber bottomnumber は、本文ページの下部に出力できるフロートの最大数です。

756 \setcounter{bottomnumber}{1}

\c@totalnumber totalnumber は、本文ページに出力できるフロートの最大数です。

757 \setcounter{totalnumber}{3}

\c@dbltopnumber dbltopnumber は、二段組時における、本文ページの上部に出力できる段抜きのフ

ロートの最大数です。

758 \setcounter{dbltopnumber}{2}

\topfraction これは、本文ページの上部に出力されるフロートが占有できる最大の割り合いです。

759 \renewcommand{\topfraction}{.7}

\bottomfraction これは、本文ページの下部に出力されるフロートが占有できる最大の割り合いです。

760 \renewcommand{\bottomfraction}{.3}

\textfraction これは、本文ページに最低限、入らなくてはならない本文の割り合いです。

761 \renewcommand{\textfraction}{.2}

\floatpagefraction これは、フロートだけのページで最低限、入らなくてはならないフロートの割り合

いです。

762 \renewcommand{\floatpagefraction} $\{.5\}$

\dbltopfraction これは、2段組時における本文ページに、2段抜きのフロートが占めることができ

る最大の割り合いです。

763 \renewcommand{\dbltopfraction}{.7}

\dblfloatpagefraction これは、2段組時におけるフロートだけのページに最低限、入らなくてはならない

2段抜きのフロートの割り合いです。

764 \renewcommand{\dblfloatpagefraction}{.5}

25 改ページ(日本語 T_FX 開発コミュニティ版のみ)

\pltx@cleartorightpage
\pltx@cleartoleftpage
\pltx@cleartooddpage
\pltx@cleartoevenpage

\cleardoublepage 命令は、 $\c Ieardoublepage$ 命令は、 $\c Ieardoublepage$ 命令は、 $\c Ieardoublepage$ 命令は、 $\c Ieardoublepage$ 命令」として定義されています。しかし $\c pIeardoublepage$ カーネルでは、 $\c PZ$ キーの方針により「横組では奇数ページになるまで、縦組では偶数ページになるまでページを繰る命令」に再定義されています。すなわち、 $\c pIeardoublepage$ では縦組でも横組でも右ページになるまでページを繰ることになります。

pIATEX 標準クラスの book は、横組も縦組も openright がデフォルトになっていて、これは従来 pIATEX カーネルで定義された \cleardoublepage を利用していました。しかし、縦組で奇数ページ始まりの文書を作りたい場合もあるでしょうから、コミュニティ版クラスでは以下の(非ユーザ向け)命令を追加します。

- 1. \pltx@cleartorightpage: 右ページになるまでページを繰る命令
- 2. \pltx@cleartoleftpage: 左ページになるまでページを繰る命令
- 3. \pltx@cleartooddpage: 奇数ページになるまでページを繰る命令
- 4. \pltx@cleartoevenpage: 偶数ページになるまでページを繰る命令

```
765 \def\pltx@cleartorightpage{\clearpage\if@twoside
     \ifodd\c@page
       \iftdir
767
         \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
768
769
         \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
770
771
     \else
       \ifydir
         \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
773
774
         \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
775
       \fi
     fi\fi
776
777 \def\pltx@cleartoleftpage{\clearpage\if@twoside
     \ifodd\c@page
779
       \ifydir
         \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
780
781
         \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
       \fi
782
     \else
783
       \iftdir
784
         \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
785
786
         \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
787
       \fi
     \fi\fi}
788
```

\pltx@cleartooddpage は LATEX の \cleardoublepage に似ていますが、上の 2 つに合わせるため \thispagestyle{empty}を追加してあります。

```
789 \def\pltx@cleartooddpage{\clearpage\if@twoside
790 \ifodd\c@page\else
791 \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
792 \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
793 \fi\fi}
794 \def\pltx@cleartoevenpage{\clearpage\if@twoside
795 \ifodd\c@page
796 \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
797 \ifotwocolumn\hbox{}\newpage\fi
798 \fi\fi}
```

\cleardoublepage

そして report と book クラスの場合は、ユーザ向け命令である \cleardoublepage を、openright オプションが指定されている場合は \pltx@cleartorightpage に、openleft オプションが指定されている場合は \pltx@cleartoleftpage に、それ ぞれ \let します。openany の場合は pltxpx カーネルの定義のままです。

```
799 (*!article)
800 \if@openleft
801 \let\cleardoublepage\pltx@cleartoleftpage
802 \else\if@openright
803 \let\cleardoublepage\pltx@cleartorightpage
804 \fi\fi
805 (/!article)
```

26 ページスタイル

pl $m PT_EX \, 2_{\varepsilon}$ では、つぎの 6 種類のページスタイルを使用できます。empty は ltpage.dtx で定義されています。

```
empty ヘッダにもフッタにも出力しない plain フッタにページ番号のみを出力する headnombre ヘッダにページ番号のみを出力する footnombre フッタにページ番号のみを出力する headings ヘッダに見出しとページ番号を出力する bothstyle ヘッダに見出し、フッタにページ番号を出力するページスタイル foo は、\ps@foo コマンドとして定義されます。
```

\@evenhead これらは \ps@... から呼び出され、ヘッダとフッタを出力するマクロです。

```
\@oddhead\@oddhead奇数ページのヘッダを出力\@evenfoot\@oddfoot奇数ページのフッタを出力\@oddfoot(@evenhead偶数ページのヘッダを出力\@evenfoot偶数ページのフッタを出力
```

これらの内容は、横組の場合は \textwidth の幅を持つ \hbox に入れられ、縦組の場合は \textheight の幅を持つ \hbox に入れられます。

26.1 マークについて

へッダに入る章番号や章見出しは、見出しコマンドで実行されるマークコマンドで決定されます。ここでは、実行されるマークコマンドの定義を行なっています。これらのマークコマンドは、 T_{EX} の \mark 機能を用いて、'left' と 'right' の 2 種類のマークを生成するように定義しています。

\markboth{ $\langle LEFT \rangle$ }{ $\langle RIGHT \rangle$ }: 両方のマークに追加します。

\markright{⟨*RIGHT*⟩}: '右'マークに追加します。

\leftmark: \@oddhead, \@oddfoot, \@evenhead, \@evenfoot マクロで使われ、現在の "左" マークを出力します。\leftmark は T_{EX} の \botmark コマンドのような働きをします。初期値は空でなくてはいけません。

\rightmark: \@oddhead, \@oddfoot, \@evenhead, \@evenfoot マクロで使われ、現在の "右" マークを出力します。\rightmark は T_{EX} の \firstmark コマンドのような働きをします。初期値は空でなくてはいけません。

マークコマンドの動作は、左マークの'範囲内の' 右マークのために合理的になっています。たとえば、左マークは \chapter コマンドによって変更されます。そして右マークは \section コマンドによって変更されます。しかし、同一ページに複数の \markboth コマンドが現れたとき、おかしな結果となることがあります。

\tableofcontents のようなコマンドは、\@mkboth コマンドを用いて、あるページスタイルの中でマークを設定しなくてはなりません。\@mkboth は、\ps@...コマンドによって、\markboth (ヘッダを設定する)か、\@gobbletwo (何もしない)に \let されます。

26.2 plain ページスタイル

\ps@plain jpl@in に \let するために、ここで定義をします。

806 \def\ps@plain{\let\@mkboth\@gobbletwo

807 \let\ps@jpl@in\ps@plain

808 \let\@oddhead\@empty

809 \def\@oddfoot{\reset@font\hfil\thepage\hfil}%

810 \let\@evenhead\@empty

811 \let\@evenfoot\@oddfoot}

26.3 jpl@in ページスタイル

\ps@jpl@in *jpl@in* スタイルは、クラスファイル内部で使用するものです。IMT_EX では、book クラスを headings としています。しかし、\tableof contents コマンドの内部では plain として設定されるため、一つの文書でのページ番号の位置が上下に出力されることになります。

File g: jclasses.dtx

そこで、 $pIPTFX 2_{\varepsilon}$ では、\tableofcontents や \theindex のページスタイルを jpl@in にし、実際に出力される形式は、ほかのページスタイルで \let をしていま す。したがって、headingsのとき、目次ページのページ番号はヘッダ位置に出力さ れ、plainのときには、フッタ位置に出力されます。

ここで、定義をしているのは、その初期値です。

812 \let\ps@jpl@in\ps@plain

headnombre ページスタイル 26.4

\ps@headnombre headnombre スタイルは、ヘッダにページ番号のみを出力します。

813 \def\ps@headnombre{\let\@mkboth\@gobbletwo

\let\ps@jpl@in\ps@headnombre

815 (yoko) \def\@evenhead{\thepage\hfil}%

\def\@oddhead{\hfil\thepage}% 816 (yoko)

818 (tate) \def\@oddhead{\thepage\hfil}%

819 \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty}

footnombre ページスタイル 26.5

\ps@footnombre

footnombre スタイルは、フッタにページ番号のみを出力します。

820 \def\ps@footnombre{\let\@mkboth\@gobbletwo

\let\ps@jpl@in\ps@footnombre 821

822 (yoko) \def\@evenfoot{\thepage\hfil}%

823 (yoko) \def\@oddfoot{\hfil\thepage}%

 $824 \langle \mathsf{tate} \rangle$ \def\@evenfoot{\hfil\thepage}%

\let\@oddhead\@empty\let\@evenhead\@empty}

headings スタイル

headings スタイルは、ヘッダに見出しとページ番号を出力します。

\ps@headings

このスタイルは、両面印刷と片面印刷とで形式が異なります。

 $827 \footnotemark$ 827 \if@twoside

横組の場合は、奇数ページが右に、偶数ページが左にきます。縦組の場合は、奇数 ページが左に、偶数ページが右にきます。

\def\ps@headings{\let\ps@jpl@in\ps@headnombre

\let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty 829

830 (yoko) \def\@evenhead{\thepage\hfil\leftmark}%

831 (yoko) \def\@oddhead{{\rightmark}\hfil\thepage}%

\def\@evenhead{{\leftmark}\hfil\thepage}% 832 (tate)

833 (tate) \def\@oddhead{\thepage\hfil\rightmark}%

\let\@mkboth\markboth 834

```
835 (*article)
        \def\sectionmark##1{\markboth{%
836
           \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
838
           ##1}{}}%
        \def\subsectionmark##1{\markright{%
839
           \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection.\hskip1zw\fi
840
           ##1}}%
841
842 (/article)
843 (*report | book)
     \def\chaptermark##1{\markboth{%
844
         \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
845
                 \if@mainmatter
846 (book)
847
             \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw
848 (book)
849
         \fi
         ##1}{}}%
850
      \def\sectionmark##1{\markright{%
851
         \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
852
         ##1}}%
853
854 (/report | book)
855
片面印刷の場合:
856 \ensuremath{\,\backslash\,} else \% if not twoside
     \def\ps@headings{\let\ps@jpl@in\ps@headnombre
       \let\@oddfoot\@empty
858
             \def\@oddhead{{\rightmark}\hfil\thepage}%
859 (yoko)
860 (tate)
             \let\@mkboth\markboth
862 (*article)
     \def\sectionmark##1{\markright{%
864
         \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne \thesection.\hskip1zw\fi
865
         ##1}}%
866 (/article)
867 (*report | book)
868 \def\chaptermark#1{\markright{%}}
      \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
870 \langle \mathsf{book} \rangle
               \if@mainmatter
           \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw
871
872 (book)
      \fi
      ##1}}%
875 (/report | book)
876
     }
877 \fi
```

26.7 bothstyle スタイル

\ps@bothstyle bothstyle スタイルは、ヘッダに見出しを、フッタにページ番号を出力します。

```
このスタイルは、両面印刷と片面印刷とで形式が異なります。
878 \if@twoside
    \def\ps@bothstyle{\let\ps@jpl@in\ps@footnombre
880 (*yoko)
881
       \def\@evenhead{\leftmark\hfil}% right page
882
       \def\@evenfoot{\thepage\hfil}% right page
       \def\@oddhead{\hfil\rightmark}% left page
883
       \def\@oddfoot{\hfil\thepage}% left page
884
885 \langle /yoko \rangle
886 (*tate)
       \def\@evenhead{\hfil\leftmark}% right page
887
       888
889
       \def\@oddhead{\rightmark\hfil}% left page
       890
891 (/tate)
892
    \let\@mkboth\markboth
893 (*article)
894
     \def\sectionmark##1{\markboth{%
        \verb|\| \verb|\| \verb|\| c@secnumdepth > \verb|\| \verb|\| \verb|\| thesection. \verb|\| hskip1zw \verb|\| fi
895
        ##1}{}}%
896
     \def\subsectionmark##1{\markright{%
897
898
        \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection.\hskip1zw\fi
899
        ##1}}%
900 (/article)
901 (*report | book)
902 \def\chaptermark##1{\markboth{%}
903
        \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
904 \langle \mathsf{book} \rangle
                \if@mainmatter
905
            \verb|\dchapapp| the chapter | @chappos | hskip1zw|
906 (book)
                \fi
907
        \fi
        ##1}{}}%
908
     \def\sectionmark##1{\markright{%
909
        \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
910
        ##1}}%
911
912 (/report | book)
914 \else % if one column
915 \def\ps@bothstyle{\let\ps@jpl@in\ps@footnombre
            \def\@oddhead{\hfil\rightmark}%
916 (yoko)
917 (yoko)
            \def\@oddfoot{\hfil\thepage}%
918 (tate)
            \def\@oddhead{\rightmark\hfil}%
            919 (tate)
       \let\@mkboth\markboth
921 (*article)
     \def\sectionmark##1{\markright{%
        923
924
        ##1}}%
925 (/article)
```

```
926 (*report | book)
      \def\chaptermark##1{\markright{%
          \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
929 (book)
                    \if@mainmatter
               \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw
930
931 (book)
932
          \fi
          ##1}}%
933
934 \langle / \text{report} \mid \text{book} \rangle
935
     }
936 \fi
```

26.8 myheading スタイル

\ps@myheadings myheadings ページスタイルは簡潔に定義されています。ユーザがページスタイルを設計するときのヒナ型として使用することができます。

```
937 \def\ps@myheadings{\let\ps@jpl@in\ps@plain%
938 \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
939 \square\ps@\hfil\leftmark}%
940 \square\ps@\def\@oddhead{{\rightmark}\hfil\thepage}%
941 \tate\ \def\@ovenhead{{\leftmark}\hfil\thepage}%
942 \tate\ \def\@oddhead{\thepage\hfil\rightmark}%
943 \let\@mkboth\@gobbletwo
944 \let\end{\thepage\hfil\rightmark}%
\let\chaptermark\@gobble
945 \let\sectionmark\@gobble
946 \article\ \let\subsectionmark\@gobble
947 }
```

27 文書コマンド

27.1 表題

```
\title 文書のタイトル、著者、日付の情報のための、これらの3つのコマンドはltsect.dtx \author で提供されています。これらのコマンドは次のように定義されています。 \date 948 %\DeclareRobustCommand*{\title}[1]{\gdef\@title{#1}} 949 %\DeclareRobustCommand*{\author}[1]{\gdef\@author{#1}} 950 %\DeclareRobustCommand*{\date}[1]{\gdef\@date{#1}} \date マクロのデフォルトは、今日の日付です。 951 %\date{\today}
```

titlepage 通常の環境では、ページの最初と最後を除き、タイトルページ環境は何もしません。また、ページ番号の出力を抑制します。レポートスタイルでは、ページ番号を1にリセットし、そして最後で1に戻します。互換モードでは、ページ番号はゼロに設定されますが、右起こしページ用のページパラメータでは誤った結果になります。二段組スタイルでも一段組のページが作られます。

日本語 T_{EX} 開発コミュニティによる変更:上にあるのはアスキー版の説明です。改めてアスキー版の挙動を整理すると、以下のようになります。

- 1. アスキー版では、タイトルページの番号を必ず1にリセットしていましたが、これは正しくありません。これは、タイトルページが奇数ページ目か偶数ページ目かにかかわらず、レイアウトだけ奇数ページ用が適用されてしまうからです。さらに、タイトルの次のページも偶数のページ番号を持ってしまうため、両面印刷で奇数ページと偶数ページが交互に出なくなるという問題もあります。
- 2. アスキー版 book クラスは、タイトルページを必ず \cleardoublepage で始めていました。pIFTEX カーネルでの \cleardoublepage の定義から、縦組の既定ではタイトルが偶数ページ目に出ることになります。これ自体が正しくないと断定することはできませんが、タイトルのページ番号を1にリセットすることと合わさって、偶数ページに送ったタイトルに奇数ページ用レイアウトが適用されてしまうという結果は正しくありません。

そこで、コミュニティ版ではタイトルのレイアウトが必ず奇数ページ用になるという挙動を支持し、book クラスではタイトルページを奇数ページ目に送ることにしました。これでタイトルページが表紙らしく見えるようになります。また、report クラスのようなタイトルが成り行きに従って出る場合には

- 奇数ページ目に出る場合、ページ番号を1(奇数)にリセット
- 偶数ページ目に出る場合、ページ番号を0(偶数)にリセット

としました。

一つめの例を考えます。

\documentclass{tbook}
\title{タイトル}\author{著者}
\begin{document}
\maketitle
\chapter{チャプター}
\end{document}

アスキー版 tbook クラスでの結果は

1ページ目:空白(ページ番号1は非表示)

2ページ目:タイトル(奇数レイアウト、ページ番号1は非表示)

3ページ目:チャプター(偶数レイアウト、ページ番号2)

ですが、仮に最初の空白ページさえなければ

1ページ目:タイトルすなわち表紙(奇数レイアウト、ページ番号1は非表示)

2ページ目:チャプター(偶数レイアウト、ページ番号 2)

```
とみなせるため、コミュニティ版では空白ページを発生させないようにしました。
二つめの例を考えます。
```

```
\documentclass{tbook}
\title{タイトル}\author{著者}
\begin{document}
テスト文章
\maketitle
\chapter{チャプター}
\end{document}
```

アスキー版 thook クラスでの結果は

```
1ページ目:テスト文章(奇数レイアウト、ページ番号 1)
2ページ目:タイトル(奇数レイアウト、ページ番号 1 は非表示)
3ページ目:チャプター(偶数レイアウト、ページ番号 2)
```

ですが、これでは奇数と偶数のページ番号が交互になっていないので正しくありません。そこで、コミュニティ版では

```
1ページ目:テスト文章(奇数レイアウト、ページ番号 1)
2ページ目:空白ページ(ページ番号 2 は非表示)
3ページ目:タイトル(奇数レイアウト、ページ番号 1 は非表示)
4ページ目:チャプター(偶数レイアウト、ページ番号 2)
```

と直しました。

なお、pIATEX 2.09 互換モードはアスキー版のまま、すなわち「ページ番号をゼロに設定」としてあります。これは、横組の右起こしの挙動としては誤りですが、縦組の右起こしの挙動としては一応正しくなっているといえます。

最初に互換モードの定義を作ります。

```
952 \if@compatibility
953 \newenvironment{titlepage}
954
       {%
955 (book)
              \cleardoublepage
        \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
956
        \else\@restonecolfalse\newpage\fi
957
        \thispagestyle{empty}%
958
        \setcounter{page}\z@
959
960
       {\tt \{\forestonecol\twocolumn\else\newpage\fi}
  そして、IATeX ネイティブのための定義です。
963 \ensuremath{\setminus} else
964 \newenvironment{titlepage}
965
       {%
               \pltx@cleartooddpage %% 2017/02/15
966 (book)
         \if@twocolumn
967
968
           \@restonecoltrue\onecolumn
```

File g: jclasses.dtx

```
969
                  \else
          970
                   \@restonecolfalse\newpage
          971
          972
                 \thispagestyle{empty}%
                  \ifodd\c@page\setcounter{page}\@ne\else\setcounter{page}\z@\fi %% 2017/02/15
          973
          974
                {\if@restonecol\twocolumn \else \newpage \fi
          975
          両面モードでなければ、タイトルページの直後のページのページ番号も1にします。
                 \if@twoside\else
                   \setcounter{page}\@ne
          977
                \fi
          978
          979
                }
          980 \fi
         このコマンドは、表題を作成し、出力します。表題ページを独立させるかどうかに
\maketitle
          よって定義が異なります。report と book クラスのデフォルトは独立した表題です。
          article クラスはオプションで独立させることができます。
         縦組のときは、\thanks コマンドを \p@thanks に \let します。このコマンドは
\p@thanks
          \footnotetext を使わず、直接、文字を \@thanks に格納していきます。
           著者名の脇に表示される合印は直立した数字、注釈側は横に寝た数字となってい
          ましたが、不自然なので \hbox{\yoko ...}を追加し、両方とも直立するようにし
          ました。
          981 \def\p@thanks#1{\footnotemark
              \protected@xdef\@thanks{\@thanks
                \protect{\noindent\hbox{\yoko$\m@th^\thefootnote$}#1\protect\par}}}
          984 \if@titlepage
              \newcommand{\maketitle}{\begin{titlepage}%
              \let\footnotesize\small
              \let\footnoterule\relax
          \let\footnote\thanks
          990 (tate) \vbox to\textheight\bgroup\tate\hsize\textwidth
              \null\vfil
          992
              \vskip 60\p@
              \begin{center}%
          993
          994
                {\LARGE \@title \par}%
                \vskip 3em%
          995
                {\Large
          996
                \verb|\lineskip|.75em||
          997
                 \begin{tabular}[t]{c}%
          998
          999
                   \@author
                 \end{tabular}\par}%
         1000
                 \vskip 1.5em%
         1002
                {\large \@date \par}%
                                       % Set date in \large size.
```

```
1003
     \end{center}\par
          \vfil{\centering\@thanks}\vfil\null
1004 (tate)
1005 (tate)
          \egroup
1006 (yoko)
           \@thanks\vfil\null
     \end{titlepage}%
footnote カウンタをリセットし、\thanks と \maketitle コマンドを無効にし、い
 くつかの内部マクロを空にして格納領域を節約します。
      \setcounter{footnote}{0}%
1008
      \global\let\thanks\relax
1009
      \global\let\maketitle\relax
1010
      \global\let\p@thanks\relax
1011
      \global\let\@thanks\@empty
1012
1013
      \global\let\@author\@empty
      \global\let\@date\@empty
     \global\let\@title\@empty
タイトルが組版されたら、\title コマンドなどの宣言を無効にできます。\and の
定義は、\author の引数でのみ使用しますので、破棄します。
      \global\let\title\relax
1017
      \global\let\author\relax
1018
      \global\let\date\relax
     \global\let\and\relax
1019
1020
     }%
1021 \else
1022
     \newcommand{\maketitle}{\par
1023
      \begingroup
        \renewcommand{\thefootnote}{\fnsymbol{footnote}}%
1024
        \def\@makefnmark{\hbox{\ifydir $\m@th^{\@thefnmark}$
1025
          \end{area} $$ \operatorname{hbox}(\yoko\n@th^{\dthefnmark})_{i}}%
1026
1027 (*tate)
        \long\def\@makefntext##1{\parindent 1zw\noindent
1028
           \hb@xt@ 2zw{\hss\@makefnmark}##1}%
1029
1030 (/tate)
1031 (*yoko)
         \long\def\@makefntext##1{\parindent 1em\noindent
1032
1033
           \hb@xt@1.8em{\hss$\m@th^{\@thefnmark}$}##1}%
1034 (/yoko)
        \if@twocolumn
1035
          \ifnum \col@number=\@ne \@maketitle
1036
          \else \twocolumn[\@maketitle]%
1037
          \fi
1038
1039
        \else
1040
          \newpage
          \global\@topnum\z@
                              % Prevents figures from going at top of page.
1041
1042
          \@maketitle
1043
         \thispagestyle{jpl@in}\@thanks
1044
```

ここでグループを閉じ、footnote カウンタをリセットし、\thanks, \maketitle,

\@maketitle を無効にし、いくつかの内部マクロを空にして格納領域を節約します。

```
1045
                 \endgroup
                 \setcounter{footnote}{0}%
            1046
            1047
                 \global\let\thanks\relax
                 \global\let\maketitle\relax
            1048
                 \global\let\@maketitle\relax
            1050
                 \global\let\p@thanks\relax
            1051
                 \global\let\@thanks\@empty
                 \global\let\@author\@empty
            1052
                 \global\let\@date\@empty
            1053
            1054
                 \global\let\@title\@empty
            1055
                 \global\let\title\relax
            1056
                 \global\let\author\relax
            1057
                 \global\let\date\relax
            1058
                 \global\let\and\relax
            1059
            独立した表題ページを作らない場合の、表題の出力形式です。
\@maketitle
                 \def\@maketitle{%
                 \newpage\null
            1061
                 \vskip 2em%
            1062
                 \begin{center}%
            1064 \langle yoko \rangle \ | let footnote thanks
            {\LARGE \@title \par}%
            1066
            1067
                   \vskip 1.5em%
                   {\large
            1068
                     \lineskip .5em%
            1069
            1070
                     \begin{tabular}[t]{c}%
            1071
                       \@author
            1072
                     \end{tabular}\par}%
            1073
                   \vskip 1em%
            1074
                    {\large \@date}%
                 \end{center}%
                 \par\vskip 1.5em}
            1076
            1077 \fi
                    概要
            27.2
```

abstract 要約文のための環境です。book クラスでは使えません。report スタイルと、titlepage オプションを指定した article スタイルでは、独立したページに出力されます。

```
1078 (*article | report)
1079 \if@titlepage
1080 \newenvironment{abstract}{%}
1081 \titlepage
1082 \null\vfil
1083 \@beginparpenalty\@lowpenalty
```

```
1084
           \begin{center}%
             {\bfseries\abstractname}%
1085
             \@endparpenalty\@M
1086
1087
           \end{center}}%
           {\par\vfil\null\endtitlepage}
1088
1089 \else
      \verb|\newenvironment{abstract}{{\#}}|
1090
         \if@t.wocolumn
1091
           \section*{\abstractname}%
1092
         \else
1093
1094
           \small
           \begin{center}%
1095
             {\bfseries\abstractname\vspace{-.5em}\vspace{\z0}}\%
1096
           \end{center}%
1097
1098
           \quotation
         \fi}{\if@twocolumn\else\endquotation\fi}
1099
1100 \fi
1101 (/article | report)
```

27.3 章見出し

27.3.1 マークコマンド

```
\chaptermark \...mark コマンドを初期化します。これらのコマンドはページスタイルの定義で \sectionmark 使われます(第 26 節参照)。これらのたいていのコマンドは ltsect.dtx ですでに \subsubsectionmark 定義されています。
\subsubsectionmark 1102 ⟨!article⟩ \newcommand*{\chaptermark}[1]{}
\paragraphmark 1103 %\newcommand*{\sectionmark}[1]{}
\paragraphmark 1104 %\newcommand*{\subsectionmark}[1]{}
\subparagraphmark 1105 %\newcommand*{\subsectionmark}[1]{}
\1106 %\newcommand*{\subsubsectionmark}[1]{}
\1107 %\newcommand*{\subparagraphmark}[1]{}
```

27.3.2 カウンタの定義

```
1114 (/book | report)
                1115 (article) \newcounter{section}
                1116 \newcounter{subsection} [section]
                1117 \newcounter{subsubsection} [subsection]
                1118 \newcounter{paragraph}[subsubsection]
                1119 \newcounter{subparagraph} [paragraph]
                \theCTR が実際に出力される形式の定義です。
       \thepart
                  \arabic{COUNTER}は、COUNTERの値を算用数字で出力します。
     \thechapter
                  \roman{COUNTER}は、COUNTERの値を小文字のローマ数字で出力します。
     \thesection
                  \Roman{COUNTER}は、COUNTERの値を大文字のローマ数字で出力します。
  \thesubsection
                  \alph{COUNTER}は、COUNTERの値を 1 = a, 2 = b のようにして出力します。
\thesubsubsection
                  Alph\{COUNTER\}は、COUNTER の値を 1 = A, 2 = B のようにして出力し
   \theparagraph
\thesubparagraph
                ます。
                  \Kanji{COUNTER}は、COUNTERの値を漢数字で出力します。
                  \rensuji{\langle obj \rangle}は、\langle obj \rangle を横に並べて出力します。したがって、横組のときに
                は、何も影響しません。
                1120 (*tate)
                1121 \renewcommand{\thepart}{\rensuji{\QRoman\cQpart}}
                1123 (*report | book)
                1124 \renewcommand{\thechapter}{\rensuji{\@arabic\c@chapter}}
                1125 \ \texttt{\command{\thesection}{\thechapter \cdot \rensuji{\color:}}}
                1126 (/report | book)
                1127 \mbox{\thesubsection}{\thesection}\
                1128 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
                      \thesubsection • \rensuji{\@arabic\c@subsubsection}}
                1130 \renewcommand{\theparagraph}{%
                      \thesubsubsection • \rensuji{\@arabic\c@paragraph}}
                1132 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
                      \theparagraph • \rensuji{\@arabic\c@subparagraph}}
                1133
                1134 (/tate)
                1135 (*yoko)
                1136 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}
                1137 (article) \renewcommand{\thesection}{\@arabic\c@section}
                1138 (*report | book)
                1139 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}
                1140 \mbox{ } \mbox{command{\thesection}{\thechapter.\c@section}}
                1141 (/report | book)
                1142 \mbox{ renewcommand{\the subsection}{\the section.\c@subsection}}
                1143 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
                      \t \
                1144
                1145 \renewcommand{\theparagraph}{%
                      \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}
                1146
                1147 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
                      \theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}
```

1149 (/yoko)

\@chapappの初期値は'\prechaptername'です。 \@chapapp

\@chappos

\@chappos の初期値は '\postchaptername' です。

\appendix コマンドは \@chapapp を '\appendixname' に、\@chappos を空に再 定義します。

- 1150 (*report | book)
- 1151 \newcommand{\@chapapp}{\prechaptername}
- 1152 \newcommand{\@chappos}{\postchaptername}
- 1153 (/report | book)

前付け、本文、後付け 27.3.3

\frontmatter \backmatter

一冊の本は論理的に3つに分割されます。表題や目次や「はじめに」あるいは権利 \mainmatter などの前付け、そして本文、それから用語集や索引や奥付けなどの後付けです。

> 日本語 T_{EX} 開発コミュニティによる補足: PT_{EX} の classes.dtx は、1996/05/26(v1.3r) と 1998/05/05 (v1.3y) の計 2 回、\frontmatter と \mainmatter の定義を 修正しています。一回目はこれらの命令を openany オプションに応じて切り替え、 二回目はそれを元に戻しています。アスキーによる jclasses.dtx は、1997/01/15 に 一回目の修正に追随しましたが、二回目の修正には追随していません。コミュニティ 版では、一旦はアスキーによる仕様を維持しようと考えました (2016/11/22) が、以 下の理由により二回目の修正にも追随することにしました (2017/03/05)。

アスキー版での \frontmatter と \mainmatter の改ページ挙動は

openright なら \cleardoublepage、openany なら \clearpage を実行

というものでした。しかし、\frontmatter 及び \mainmatter はノンブルを1にリ セットしますから、改ページの結果が偶数ページ目になる場合4にノンブルが偶奇逆 転してしまいました。このままでは openany の場合に両面印刷がうまくいかないた め、新しいコミュニティ版では

必ず \pltx@cleartooddpage を実行

としました。これは両面印刷 (twoside) の場合は奇数ページに送り、片面印刷 (oneside) の場合は単に改ページとなります。(参考:latex/2754)

- 1155 \newcommand{\frontmatter}{%
- \pltx@cleartooddpage
- \@mainmatterfalse\pagenumbering{roman}}
- 1158 \newcommand{\mainmatter}{%

 $^{^4}$ 縦 tbook のデフォルト (openright) が該当するほか、横 jbook と縦 tbook の openany のときに は成り行き次第で該当する可能性があります。

```
1159 \pltx@cleartooddpage
1160 \@mainmattertrue\pagenumbering{arabic}}
1161 \newcommand{\backmatter}{%}
1162 \iff@openleft \cleardoublepage \else \clearpage \fi \fi
1163 \iff@openright \cleardoublepage \else \clearpage \fi \fi
```

1164 \@mainmatterfalse} 1165 $\langle /book \rangle$

27.3.4 ボックスの組み立て

クラスファイル定義の、この部分では、\@startsection と \secdef の二つの内部 マクロを使います。これらの構文を次に示します。

\@startsection マクロは6つの引数と1つのオプション引数 '*' を取ります。 \@startsection $\langle name \rangle \langle level \rangle \langle indent \rangle \langle beforeskip \rangle \langle afterskip \rangle \langle style \rangle$ optional * $[\langle altheading \rangle] \langle heading \rangle$

それぞれの引数の意味は、次のとおりです。

〈name〉レベルコマンドの名前です (例:section)。

 $\langle level \rangle$ 見出しの深さを示す数値です(chapter=1, section=2, ...)。" $\langle level \rangle <=$ カウンタ secnumdepth の値"のとき、見出し番号が出力されます。

〈indent〉見出しに対する、左マージンからのインデント量です。

〈**beforeskip**〉見出しの上に置かれる空白の絶対値です。負の場合は、見出しに続く テキストのインデントを抑制します。

〈afterskip〉正のとき、見出しの後の垂直方向のスペースとなります。負の場合は、 見出しの後の水平方向のスペースとなります。

〈style〉見出しのスタイルを設定するコマンドです。

(*) 見出し番号を付けないとき、対応するカウンタは増加します。

〈**heading**〉新しい見出しの文字列です。

見出しコマンドは通常、\@startsection と 6 つの引数で定義されています。 \secdef マクロは、見出しコマンドを \@startsection を用いないで定義すると きに使います。このマクロは、2 つの引数を持ちます。

 $\scalebox{secdef}\langle unstarcmds\rangle\langle starcmds\rangle$

〈unstarcmds〉 見出しコマンドの普通の形式で使われます。

 $\langle starcmds \rangle *$ 形式の見出しコマンドで使われます。

File g: jclasses.dtx

\secdef は次のようにして使うことができます。

27.3.5 part レベル

\part このコマンドは、新しいパート(部)をはじめます。

article クラスの場合は、簡単です。

新しい段落を開始し、小さな空白を入れ、段落後のインデントを行い、\secdef で作成します。(アスキーによる元のドキュメントには「段落後のインデントをしな いようにし」と書かれていましたが、実際のコードでは段落後のインデントを行っ ていました。そこで日本語 T_EX 開発コミュニティは、ドキュメントをコードに合わ せて「段落後のインデントを行い」へと修正しました。)

```
1166 \( \*\article \)
1167 \newcommand{\part}{%
1168 \ifOnoskipsec \leavevmode \fi
1169 \par\addvspace{4ex}%
1170 \Oafterindenttrue
1171 \secdef\Opart\Ospart\
1172 \( /\article \)
```

report と book スタイルの場合は、少し複雑です。

まず、右ページからはじまるように改ページをします。そして、部扉のページスタイルを empty にします。 2 段組の場合でも、1 段組で作成しますが、後ほど 2 段組に戻すために、empty にします。 empty にします。 empt

\@part このマクロが実際に部レベルの見出しを作成します。このマクロも文書クラスによって定義が異なります。

article クラスの場合は、secnumdepth が -1 よりも大きいとき、見出し番号を付けます。このカウンタが -1 以下の場合には付けません。

```
1182 (*article)
1183 \def\@part[#1]#2{%
1184 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1185 \refstepcounter{part}%
```

```
\addcontentsline{toc}{part}{%
       1186
                   \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1zw}#1}%
       1187
              \else
        1188
        1189
                \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
              \fi
       1190
              \markboth{}{}%
       1191
              {\parindent\z@\raggedright
        1192
              \verb|\interline penalty|@M\\|\\normalfont|
       1193
              \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
        1194
                 \Large\bfseries\prepartname\thepart\postpartname
        1195
                 \par\nobreak
        1196
        1197
               \huge\bfseries#2\par}%
        1198
              \nobreak\vskip3ex\@afterheading}
        1200 (/article)
          report と book クラスの場合は、secnumdepth が -2 よりも大きいときに、見出し
        番号を付けます。-2以下では付けません。
        1201 (*report | book)
        1202 \def\@part[#1]#2{%
              1203
        1204
                \refstepcounter{part}%
        1205
                \addcontentsline{toc}{part}{%
        1206
                   \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1em}#1}%
              \else
       1207
                \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
       1208
       1209
              \fi
              \markboth{}{}%
       1210
       1211
              {\centering
              \verb|\interline penalty|@M\\|\\normalfont|
       1212
               1213
        1214
                 \huge\bfseries\prepartname\thepart\postpartname
       1215
                 \par\vskip20\p@
       1216
               \fi
               \Huge\bfseries#2\par}%
       1217
              \@endpart}
       1218
       1219 (/report | book)
\@spart このマクロは、番号を付けないときの体裁です。
       1220 (*article)
        1221 \def\@spart#1{{%
              \parindent\z@\raggedright
        1222
              \interlinepenalty\@M\normalfont
        1223
              \huge\bfseries#1\par}%
        1224
              \nobreak\vskip3ex\@afterheading}
        1226 (/article)
        1227 (*report | book)
        1228 \def\@spart#1{{%
```

```
1229
      \centering
     \interlinepenalty\@M\normalfont
1230
      \Huge\bfseries#1\par}%
1232
     \@endpart}
1233 (/report | book)
```

\@part と \@spart の最後で実行されるマクロです。両面印刷モードのときは、白 ページを追加します。二段組モードのときには、これ以降のページを二段組に戻し ます。2016年12月から、openanyのときに白ページを追加するのをやめました。 このバグは IAT_FX では classes.dtx v1.4b (2000/05/19) で修正されていました。(参 考:latex/3155、texjporg/jsclasses#48)

```
1234 (*report | book)
1235 \def\@endpart{\vfil\newpage
      \if@twoside
1237
       \if@openleft %% \if@openleft added (2017/02/15)
1238
        \null\thispagestyle{empty}\newpage
       \else\if@openright %% \if@openright added (2016/12/18)
1239
        \null\thispagestyle{empty}\newpage
1240
       \fi\fi \% added (2016/12/18, 2017/02/15)
1241
1242
二段組文書のとき、スイッチを二段組モードに戻す必要があります。
```

```
\if@tempswa\twocolumn\fi}
1244 (/report | book)
```

27.3.6chapter レベル

章レベルは、必ずページの先頭から開始します。openright オプションが指定され ている場合は、右ページからはじまるように \cleardoublepage を呼び出します。 そうでなければ、\clearpage を呼び出します。なお、縦組の場合でも右ページから はじまるように、フォーマットファイルで \clerdoublepage が定義されています。

> 日本語 T_{eX} 開発コミュニティによる補足: コミュニティ版の実装では、openrightと openleft の場合に \cleardoublepage をクラスファイルの中で再々定義してい ます。25を参照してください。

> 章見出しが出力されるページのスタイルは、jpl@in になります。jpl@in は、headnomble か footnomble のいずれかです。詳細は、第26節を参照してください。

> また、\@topnum をゼロにして、章見出しの上にトップフロートが置かれないよ うにしています。

```
1245 (*report | book)
1246 \newcommand{\chapter}{%
      \if@openleft \cleardoublepage \else
     \if@openright \cleardoublepage \else \clearpage \fi \fi
     \thispagestyle{jpl@in}%
1250
    \global\@topnum\z@
```

```
1251 \@afterindenttrue
1252 \secdef\@chapter\@schapter}
```

\@chapter このマクロは、章見出しに番号を付けるときに呼び出されます。secnumdepthが -1 よりも大きく、\@mainmatterが真(book クラスの場合)のときに、番号を出力します。

日本語 T_{EX} 開発コミュニティによる補足:本家 LFT_{EX} の classes では、二段組のときチャプタータイトルは一段組に戻されますが、アスキーによる j classes では二段組のままにされています。したがって、チャプタータイトルより高い位置に右カラムの始点が来るという挙動になっていますが、コミュニティ版でもアスキー版の挙動を維持しています。

```
1253 \def\@chapter[#1]#2{%
                       \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                               \if@mainmatter
                 1256
                          \refstepcounter{chapter}%
                          \typeout{\@chapapp\space\thechapter\space\@chappos}%
                 1257
                          \addcontentsline{toc}{chapter}%
                 1258
                           {\bf \{\protect\numberline \{\qrapp\thechapter\qrapp\space{2chappos}\}\#1\}\%}
                 1259
                               \verb|\else| add contents line{toc}{chapter}{\#1} \\ | fi
                 1260 (book)
                 1261
                       \else
                 1262
                         \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
                 1263
                  1264
                       \chaptermark{#1}%
                        \addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\p0}}%
                 1266
                        \addtocontents{lot}{\protect\addvspace{10\p0}}%
                       \@makechapterhead{#2}\@afterheading}
                 1267
                  このマクロが実際に章見出しを組み立てます。
\@makechapterhead
                 1268 \def\@makechapterhead#1{\hbox{}%
                       \vskip2\Cvs
                 1269
                 1270
                       {\parindent\z@
                 1271
                        \raggedright
                 1272
                         \normalfont\huge\bfseries
                 1273
                         \leavevmode
                 1274
                         \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                 1275
                          \setlength\@tempdima{\linewidth}%
                 1276 (book)
                               \if@mainmatter
                          1277
                 1278
                           \addtolength\@tempdima{-\wd\z@}\%
                           1279
                 1280 (book)
                               \fi
                          \vtop{\hsize\@tempdima#1}%
                 1281
                 1282
                         \else
                          #1\relax
                         fi}\nobreak\vskip3\Cvs
```

\@schapter このマクロは、章見出しに番号を付けないときに呼び出されます。

```
日本語 TFX 開発コミュニティによる補足:やはり二段組でチャプタータイトルよ
り高い位置に右カラムの始点が来るという挙動を維持してあります。
```

1285 \def\@schapter#1{%

1286 \@makeschapterhead{#1}\@afterheading

1287 }

\@makeschapterhead 番号を付けない場合の形式です。

1288 \def\@makeschapterhead#1{\hbox{}%

\vskip2\Cvs 1289

{\parindent\z@ 1290

1291 \raggedright

1292 \normalfont\huge\bfseries

1293 \leavevmode

\setlength\@tempdima{\linewidth}% 1294

 $\displaystyle \vop{\hsize\@tempdima#1}}\vskip3\Cvs}$ 1295

1296 (/report | book)

27.3.7 下位レベルの見出し

\section 見出しの前後に空白を付け、\Large\bfseries で出力をします。

1297 \newcommand{\section}{\@startsection{section}{1}{\z@}%

 ${1.5\Cvs \Qplus.5\Cvs \Qminus.2\Cvs}$ %

1299 {.5\Cvs \@plus.3\Cvs}%

1300 {\normalfont\Large\bfseries}}

\subsection 見出しの前後に空白を付け、\large\bfseries で出力をします。

1301 \newcommand{\subsection}{\Qstartsection{subsection}{2}{\zQ}%

 ${1.5\Cvs \ensuremath{\Cvs \ensuremath{\Cvs \ensuremath{\Cvs}}\%}$

1303 ${.5\Cvs \ensuremath{\column{c} \cline{0.5}\Cvs}}$

{\normalfont\large\bfseries}} 1304

\subsubsection 見出しの前後に空白を付け、\normalsize\bfseries で出力をします。

1305 \newcommand{\subsubsection}{\Qstartsection{subsubsection}{3}{\zQ}%

1306 ${1.5\Cvs \ensuremath{\Cvs \ensuremath{\Cvs \ensuremath{\Cvs}}\%}$

 ${.5\Cvs \ensuremath{\column{c} \cline{0.5}\Cvs}}\%$ 1307

{\normalfont\normalsize\bfseries}} 1308

\paragraph 見出しの前に空白を付け、\normalsize\bfseries で出力をします。見出しの後ろ で改行されません。

1309 \newcommand{\paragraph}{\Qstartsection{paragraph}{4}{\zQ}\%

 ${3.25ex \mathbb{Q}plus 1ex \mathbb{Q}minus .2ex}$ % 1310

1311 $\{-1em\}\%$

{\normalfont\normalsize\bfseries}} 1312

\subparagraph 見出しの前に空白を付け、\normalsize\bfseries で出力をします。見出しの後ろ で改行されません。

27.3.8 付録

\appendix article クラスの場合、\appendix コマンドは次のことを行ないます。

- section と subsection カウンタをリセットする。
- \thesection を英小文字で出力するように再定義する。

```
 \begin{array}{lll} & 1317 & \\ & 1318 \\ & 1318 \\ & 1318 \\ & 1319 \\ & 1320 \\ & 1320 \\ & 1321 \\ & 1321 \\ & 1321 \\ & 1322 \\ & 1322 \\ & 1322 \\ & 1322 \\ & 1322 \\ & 1322 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\
```

report と book クラスの場合、\appendix コマンドは次のことを行ないます。

- chapter と section カウンタをリセットする。
- \@chapappを \appendixname に設定する。
- **\@chappos** を空にする。
- \thechapter を英小文字で出力するように再定義する。

27.4 リスト環境

ここではリスト環境について説明をしています。

リスト環境のデフォルトは次のように設定されます。

まず、\rigtmargin, \listparindent, \itemindent をゼロにします。そして、K番目のレベルのリストは \@listKで示されるマクロが呼び出されます。ここで

'K' は小文字のローマ数字で示されます。たとえば、3番目のレベルのリストとして \@listiii が呼び出されます。\@listK は \leftmargin を \leftmarginK に設定します。

\leftmargin 二段組モードのマージンは少しだけ小さく設定してあります。

```
\leftmargini 1333 \if@twocolumn
                1334
                    \setlength\leftmargini {2em}
   \leftmarginii
                1335 \else
  \leftmarginiii 1336
                     \setlength\leftmargini {2.5em}
   \leftmarginv 次の3つの値は、\labelsepとデフォルトラベル('(m)', 'vii.', 'M.') の幅の合計よ
   \leftmarginvi りも大きくしてあります。
                1338 \setlength\leftmarginii {2.2em}
                1339 \setlength\leftmarginiii {1.87em}
                1340 \setlength\leftmarginiv {1.7em}
                1341 \if@twocolumn
                     \setlength\leftmarginv {.5em}
                1342
                1343
                     \setlength\leftmarginvi{.5em}
                1344 \else
                1345 \setlength\leftmarginv {1em}
                1346 \setlength\leftmarginvi{1em}
                1347 \fi
       \labelsep \labelsep はラベルとテキストの項目の間の距離です。\labelwidth はラベルの幅
     \labelwidth です。
                1348 \setlength \labelsep {.5em}
                1349 \setlength \labelwidth{\leftmargini}
                1350 \addtolength\labelwidth{-\labelsep}
\@beginparpenalty これらのペナルティは、リストや段落環境の前後に挿入されます。
 \@endparpenalty
\@itempenalty
                このペナルティは、リスト項目の間に挿入されます。
                1351 \@beginparpenalty -\@lowpenalty
                1352 \@endparpenalty
                                   -\@lowpenalty
                1353 \@itempenalty
                                   -\@lowpenalty
                1354 (/article | report | book)
      \partopsep リスト環境の前に空行がある場合、\parskipと \topsepに \partopsep が加えら
                 れた値の縦方向の空白が取られます。
                1355 \langle 10pt \rangle \setlength\partopsep{2\p0 \@plus 1\p0 \@minus 1\p0}
                1356 \langle 11pt \rangle  \setlength\partopsep{3\p0 \@plus 1\p0 \@minus 1\p0}
                1357 \langle 12pt \rangle  \setlength\partopsep{3\p0 \@plus 2\p0 \@minus 2\p0}
         \@listi \@listi は、\leftmargin,\parsep,\topsep,\itemsep などのトップレベルの定
         \@listI 義をします。この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます(たとえ
                 ば、\small の中では "小さい" リストパラメータになります)。
```

```
\@listi のコピーを保存するように定義されています。
                                   1358 (*10pt | 11pt | 12pt)
                                  1359 \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
                                  1360 (*10pt)
                                                      \parsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
                                                    \topsep 8\p@ \@plus2\p@ \@minus4\p@
                                                     \itemsep4\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@}
                                  1364 (/10pt)
                                  1365 (*11pt)
                                                    \parsep 4.5\p0 \plus2\p0 \plus2\p0
                                  1366
                                                      \topsep 9\p@ \@plus3\p@ \@minus5\p@
                                  1367
                                                     \itemsep4.5\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@}
                                  1368
                                  1369 (/11pt)
                                  1370 (*12pt)
                                  1371
                                                      \parsep 5\p0 \plus 2.5\p0 \pl
                                                       \topsep 10\p0 \@plus4\p0 \@minus6\p0
                                                      $\left(\frac{p}{2.5}p^{0}\right)^{0} \end{plus}.
                                  1374 (/12pt)
                                  1375 \let\@listI\@listi
                                      ここで、パラメータを初期化しますが、厳密には必要ありません。
                                  1376 \@listi
   \@listii 下位レベルのリスト環境のパラメータの設定です。これらは保存用のバージョンを
\@listiii 持たないことと、フォントサイズコマンドによって変更されないことに注意をして
   \@listiv ください。言い換えれば、このクラスは、本文サイズが \normalsize で現れるリス
      \@listv トの入れ子についてだけ考えています。
   \@listvi 1377 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii
                                                         \labelwidth\leftmarginii \advance\labelwidth-\labelsep
                                  1378
                                  1379 (*10pt)
                                                           \topsep 4\p0 \plus2\p0 \plus2\p0
                                  1380
                                  1381
                                                           \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
                                  1382 (/10pt)
                                  1383 (*11pt)
                                                           \topsep 4.5\p0 \plus2\p0 \plus2\p0 \plus2\p0
                                                           \parsep 2\p0 \@plus\p0 \@minus\p0
                                  1385
                                  1386 (/11pt)
                                  1387 (*12pt)
                                  1388
                                                           persep 2.5\p@ \ensuremath{\mbox{\ensuremath{\mbox{$0$}}}\polemath{\mbox{\ensuremath{\mbox{$0$}}}\polemath{\mbox{\mbox{$0$}}}\polemath{\mbox{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\po
                                  1389
                                  1390 (/12pt)
                                  1391
                                                        \itemsep\parsep}
                                  1392 \def\@listiii{\leftmargin\leftmarginiii
                                                         \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep
                                  1394 (10pt)
                                                                             \topsep 2\p@ \@plus\p@\@minus\p@
                                  1395 (11pt)
                                                                             \topsep 2\p@ \@plus\p@\@minus\p@
                                  1396 (12pt)
                                                                            \topsep 2.5\p@\@plus\p@\@minus\p@
```

このため、\normalsize がすべてのパラメータを戻せるように、\@listI は

```
1397
       \parsep\z@
       \partopsep \p@ \@plus\z@ \@minus\p@
1398
       \itemsep\topsep}
1399
1400 \def\@listiv {\leftmargin\leftmarginiv
1401
                   \labelwidth\leftmarginiv
                   \advance\labelwidth-\labelsep}
1402
1403 \def\@listv
                  {\leftmargin\leftmarginv
1404
                   \labelwidth\leftmarginv
                   \advance\labelwidth-\labelsep}
1405
1406 \def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi
                   \labelwidth\leftmarginvi
1407
                   \advance\labelwidth-\labelsep}
1408
1409 (/10pt | 11pt | 12pt)
```

27.4.1 enumerate 環境

enumerate 環境は、カウンタ enumi, enumii, enumiii, enumiv を使います。enumN は N 番目のレベルの番号を制御します。

```
\theenumi 出力する番号の書式を設定します。これらは、すでに1tlists.dtxで定義されてい
   \theenumii ます。
  \theenumiii 1410 \langle *article | report | book \rangle
  \theenumiv ^{1411} \*tate\
              1412 \renewcommand{\theenumi}{\rensuji{\@arabic\c@enumi}}
              1413 \renewcommand{\theenumii}{\rensuji{(\@alph\c@enumii)}}
              1414 \renewcommand{\theenumiii}{\rensuji{\Croman\cCenumiii}}
              1415 \renewcommand{\theenumiv}{\rensuji{\QAlph\cQenumiv}}
              1416 (/tate)
              1417 (*yoko)
              1418 \renewcommand{\theenumi}{\Qarabic\cQenumi}
              1419 \renewcommand{\theenumii}{\Qalph\cQenumii}
              1420 \renewcommand{\theenumiii}{\@roman\c@enumiii}
              1421 \renewcommand{\theenumiv}{\@Alph\c@enumiv}
              1422 (/yoko)
 \labelenumi enumerate 環境のそれぞれの項目のラベルは、\labelenumi ... \labelenumiv で
\labelenumii 生成されます。
\labelenumiii 1423 \langle *tate \rangle
\verb|\labelenumiv| 1424 \verb|\newcommand{\labelenumi}{\labelenumi} 
              1425 \newcommand{\labelenumii}{\theenumii}
              1426 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii}
              1427 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv}
              1428 (/tate)
              1429 (*yoko)
              1430 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi.}
              1431 \newcommand{\labelenumii}{(\theenumii)}
              1432 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii.}
```

```
1433 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv.}
                             1434 (/yoko)
        \p@enumii \ref コマンドによって、enumerate 環境の N 番目のリスト項目が参照されるとき
      \p@enumiii の書式です。
        \p@enumiv 1435 \renewcommand{\p@enumii}{\theenumi}
                             1436 \renewcommand{\p@enumiii}{\theenumi(\theenumii)}
                             1437 \renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii\theenumiii}
        enumerate トップレベルで使われたときに、最初と最後に半行分のスペースを開けるように、
                               変更します。この環境は、ltlists.dtxで定義されています。
                             1438 \renewenvironment{enumerate}
                                         {\ifnum \@enumdepth >\thr@@\@toodeep\else
                                            \advance\@enumdepth\@ne
                             1441
                                            \edef\@enumctr{enum\romannumeral\the\@enumdepth}%
                             1442
                                            \expandafter \list \csname label\@enumctr\endcsname{%
                             1443
                                                  \iftdir
                                                        \ifnum \@listdepth=\@ne \topsep.5\normalbaselineskip
                             1444
                                                             \else\topsep\z@\fi
                             1445
                                                        \parskip\z@ \itemsep\z@ \parsep\z@
                             1446
                                                        \labelwidth1zw \labelsep.3zw
                             1447
                                                        \ifnum \@enumdepth=\@ne \leftmargin1zw\relax
                             1448
                                                             \else\leftmargin\leftskip\fi
                             1449
                                                         \advance\leftmargin 1zw
                             1450
                             1451
                                                  \fi
                             1452
                                                         \usecounter{\@enumctr}%
                                                         \label{lap{#1}} $$ \end{makelabel} $$ \operatorname{lap{\#1}}}% $$
                             1453
                                            \fi}{\endlist}
                             1454
                               27.4.2 itemize 環境
   \labelitemi itemize 環境のそれぞれの項目のラベルは、\labelenumi ... \labelenumiv で生成
 \labelitemii されます。
\verb|\labelitemiii| 1455 \verb|\newcommand{\labelitemi}{\labelitemfont \textbullet}|
 1457
                                         \iftdir
                                                {\labelitemfont \textcircled{~}}
                             1460
                                                {\labelitemfont \bfseries\textendash}
                             1461
                                         \fi
                             1462 }
                             1463 \verb|\newcommand{\labelitemiii}{\labelitemfont \verb|\textasteriskcentered}|
                             1464 \mbox{ \labelitemiv}{\labelitemfont \textperiodcentered}
                             1465 \mbox{ } \mbox{newcommand} \mbox{labelitemfont} \mbox{ } \mbox{normalfont} \mbox{ } \m
            itemize トップレベルで使われたときに、最初と最後に半行分のスペースを開けるように、
                               変更します。この環境は、ltlists.dtxで定義されています。
```

```
1466 \renewenvironment{itemize}
      {\ifnum \@itemdepth >\thr@@\@toodeep\else
1467
       \advance\@itemdepth\@ne
1469
       \edef\@itemitem{labelitem\romannumeral\the\@itemdepth}%
       \expandafter \list \csname \@itemitem\endcsname{%
1470
1471
          \iftdir
             \ifnum \@listdepth=\@ne \topsep.5\normalbaselineskip
1472
                \else\topsep\z@\fi
1473
             \parskip\z@ \itemsep\z@ \parsep\z@
1474
             \labelwidth1zw \labelsep.3zw
1475
             \ifnum \@itemdepth =\@ne \leftmargin1zw\relax
1476
1477
                \else\leftmargin\leftskip\fi
             \advance\leftmargin 1zw
1478
1479
1480
              \def\makelabel##1{\hss\llap{##1}}}%
       \fi}{\endlist}
1481
```

27.4.3 description 環境

description description 環境を定義します。縦組時には、インデントが3字分だけ深くなります。

```
1482 \newenvironment{description}
      {\left\langle \right\rangle } = \left\langle \right\rangle 
1483
       \iftdir
1484
         \leftmargin\leftskip \advance\leftmargin3\Cwd
1485
1486
         \rightmargin\rightskip
         \labelsep=1zw \itemsep\z@
1487
1488
         \listparindent\z@ \topskip\z@ \parskip\z@ \partopsep\z@
1489
       \fi
                \let\makelabel\descriptionlabel}}{\endlist}
1490
```

\descriptionlabel ラベルの形式を変更する必要がある場合は、\descriptionlabelを再定義してください。

```
1491 \newcommand{\descriptionlabel}[1]{%
1492 \hspace\labelsep\normalfont\bfseries #1}
```

27.4.4 verse 環境

verse verse 環境は、リスト環境のパラメータを使って定義されています。改行をするには \\ を用います。 \\ は \@centercr に \let されています。

```
1493 \newenvironment{verse}
1494 {\let\\\@centercr
1495 \list{}{\itemsep\z@ \itemindent -1.5em%
1496 \listparindent\itemindent
1497 \rightmargin\leftmargin \advance\leftmargin 1.5em}%
1498 \item\relax}{\endlist}
```

27.4.5 quotation 環境

quotation quotation 環境もまた、list 環境のパラメータを使用して定義されています。この環境の各行は、\textwidth よりも小さく設定されています。この環境における、段落の最初の行はインデントされます。

1499 \newenvironment{quotation}
1500 {\list{}{\listparindent 1.5em%}
1501 \itemindent\listparindent
1502 \rightmargin\leftmargin
1503 \parsep\z@ \@plus\p@}%
1504 \item\relax}{\endlist}

27.4.6 quote 環境

quote quote 環境は、段落がインデントされないことを除き、quotation 環境と同じです。

1505 \newenvironment{quote}

 $1506 \quad \{\text{\list}\{\text{\lightmargin}\ \text{\leftmargin}\} \%$

1507 \item\relax}{\endlist}

27.5 フロート

ltfloat.dtxでは、フロートオブジェクトを操作するためのツールしか定義していません。タイプが TYPE のフロートオブジェクトを扱うマクロを定義するには、次の変数が必要です。

\fps@TYPE タイプ TYPE のフロートを置くデフォルトの位置です。

\ftype@TYPE タイプ TYPE のフロートの番号です。各 TYPE には、一意な、2 の倍数の TYPE 番号を割り当てます。たとえば、図が番号 1 ならば、表は 2 です。次のタイプは 4 となります。

\extCTYPE タイプ TYPE のフロートの目次を出力するファイルの拡張子です。たとえば、\extCfigure は 'lot' です。

\fnum@TYPE キャプション用の図番号を生成するマクロです。たとえば、\fnum@figure は '図 \thefigure' を作ります。

27.5.1 figure 環境

ここでは、figure 環境を実装しています。

\c@figure 図番号です。

\thefigure $1508 \langle article \rangle \setminus figure$

1509 (report | book) \newcounter{figure} [chapter]

File g: jclasses.dtx

```
1510 (*tate)
            1511 \langle article \rangle \renewcommand{ \the figure } {\rensuji{ \coefigure }}
            1512 (*report | book)
            1513 \renewcommand{\thefigure}{%
            1514 \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter{} • \fi\rensuji{\@arabic\c@figure}}
            1515 (/report | book)
            1516 (/tate)
            1517 (*yoko)
            1518 (article)\renewcommand{\thefigure}{\@arabic\c@figure}
            1519 (*report | book)
            1520 \renewcommand{\thefigure}{%
            1521 \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter.\fi\@arabic\c@figure}
            1522 (/report | book)
            1523 (/yoko)
 \fps@figure フロートオブジェクトタイプ "figure" のためのパラメータです。
\ftype@figure 1524 \def\fps@figure{tbp}
 1528 (yoko) \def\fnum@figure{\figurename~\thefigure}
     figure *形式は2段抜きのフロートとなります。
     figure* 1529 \newenvironment{figure}
            1530
                            {\@float{figure}}
                            {\end@float}
            1532 \newenvironment{figure*}
                            {\@dblfloat{figure}}
            1534
                            {\end@dblfloat}
             27.5.2 table 環境
             ここでは、table 環境を実装しています。
    \c@table 表番号です。
   \thetable 1535 \( \article \) \newcounter{table}
            1536 (report | book) \newcounter{table} [chapter]
            1537 (*tate)
            1539 (*report | book)
            1540 \renewcommand{\thetable}{%
                 \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter{} · \fi\rensuji{\@arabic\c@table}}
            1541
            1542 (/report | book)
            1543 (/tate)
            1544 (*yoko)
            1546 (*report | book)
```

```
1547 \renewcommand{\thetable}{%
               1548 \quad \text{ifnum} \ cOchapter > \ zO \ the chapter. \ fi \ Carabic \ cOtable \}
               1549 (/report | book)
               1550 (/yoko)
      \fps@table フロートオブジェクトタイプ "table" のためのパラメータです。
    \ftype@table 1551 \def\fps@table{tbp}
               1552 \def\ftype@table{2}
      \ext@table
               1553 \def\ext@table{lot}
     1555 \langle yoko \rangle \def fnum@table{\tablename^{thetable}}
          table *形式は2段抜きのフロートとなります。
         table* 1556 \newenvironment{table}
               1557
                                {\@float{table}}
               1558
                                {\end@float}
               1559 \newenvironment{table*}
                                {\@dblfloat{table}}
               1561
                                {\end@dblfloat}
                27.6 キャプション
   \@makecaption \caption コマンドは、キャプションを組み立てるために \@mkcaption を呼出ます。
                このコマンドは二つの引数を取ります。一つは、〈number〉で、フロートオブジェク
                トの番号です。もう一つは、〈text〉でキャプション文字列です。〈number〉には通常、
                '図 3.2' のような文字列が入っています。このマクロは、\parbox の中で呼び出され
                ます。書体は\normalsizeです。
\abovecaptionskip これらの長さはキャプションの前後に挿入されるスペースです。
\verb|\belowcaptionskip| 1562 \verb|\newlength| above captionskip|
               1563 \newlength\belowcaptionskip
               1564 \setlength\abovecaptionskip{10\p@}
               1565 \setlength\belowcaptionskip{0\p@}
                  キャプション内で複数の段落を作成することができるように、このマクロは\long
                で定義をします。
               1566 \long\def\@makecaption#1#2{%
               1567
                    \vskip\abovecaptionskip
                    \iftdir\sbox\@tempboxa{#1\hskip1zw#2}%
               1568
                      \else\sbox\@tempboxa{#1: #2}%
               1569
               1570
                    \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
               1571
               1572
                      \iftdir #1\hskip1zw#2\relax\par
                        \else #1: #2\relax\par\fi
               1573
               1574
```

\global \@minipagefalse

1575

1576 \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%

1577 \fi

1578 \vskip\belowcaptionskip}

27.7 コマンドパラメータの設定

27.7.1 array と tabular 環境

\arraycolsep array 環境のカラムは 2\arraycolsep で分離されます。

1579 \setlength\arraycolsep{5\p0}

\tabcolsep tabular 環境のカラムは 2\tabcolsep で分離されます。

1580 \setlength\tabcolsep{6\p0}

\arrayrulewidth arrayとtabular環境内の罫線の幅です。

1581 \setlength\arrayrulewidth{.4\p0}

\doublerulesep array と tabular 環境内の罫線間を調整する空白です。

1582 \setlength\doublerulesep{2\p@}

27.7.2 tabbing 環境

\tabbingsep \',コマンドで置かれるスペースを制御します。

 $1583 \verb|\setlength\tabbingsep{\labelsep}|$

27.7.3 minipage 環境

(@mpfootins minipage にも脚注を付けることができます。\skip\@mpfootins は、通常の\skip\footins

と同じような動作をします。

 $1584 \ship\0mpfootins = \ship\footins$

27.7.4 framebox 環境

\fboxsep \fboxsep は、\fboxと\frameboxでの、テキストとボックスの間に入る空白です。

\fboxrule \fboxrule は \fbox と \framebox で作成される罫線の幅です。

 $1585 \text{\setlength\fboxsep{3\p0}}$

1586 \setlength\fboxrule{.4\p0}

27.7.5 equation と eqnarray 環境

\theequation equation カウンタは、新しい章の開始でリセットされます。また、equation 番号に は、章番号が付きます。

このコードは \chapter 定義の後、より正確には chapter カウンタの定義の後、でなくてはいけません。

28 フォントコマンド

disablejfam オプションが指定されていない場合には、以下の設定がなされます。まず、数式内に日本語を直接、記述するために数式記号用文字に "JY1/mc/m/n" を登録します。数式バージョンが bold の場合は、"JY1/gt/m/n" を用います。これらは、\mathmc, \mathgt として登録されます。また、日本語数式ファミリとして \symmincho がこの段階で設定されます。mathrmmc オプションが指定されていた場合には、これに引き続き \mathrm と \mathbf を和欧文両対応にするための作業がなされます。この際、他のマクロとの衝突を避けるため \AtBeginDocument を用いて展開順序を遅らせる必要があります。

disablejfam オプションが指定されていた場合には、\mathmc と \mathgt に対してエラーを出すだけのダミーの定義を与える設定のみが行われます。

変更

pIFT_EX 2.09 compatibility mode では和文数式フォント fam が 2 重定義されていたので、その部分を変更しました。

```
1593 \if@enablejfam
      \if@compatibility\else
1594
        \DeclareSymbolFont{mincho}{JY1}{mc}{m}{n}
1595
1596
        \DeclareSymbolFontAlphabet{\mathmc}{mincho}
        \SetSymbolFont{mincho}{bold}{JY1}{gt}{m}{n}
1597
        \jfam\symmincho
1598
        1599
1600
      \fi
      \if@mathrmmc
1601
1602
        \AtBeginDocument{%
        \label{thm} $$\operatorname{\mathbf{Mathrm}}_{\mathbf{Mathrm}}_{\mathbf{Mathrm}} $$
1603
        \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}}
1604
     }%
1605
1606
     \fi
1607 \else
      \DeclareRobustCommand{\mathmc}{%
        \@latex@error{Command \noexpand\mathmc invalid with\space
           'disablejfam' class option.}\@eha
1610
     }
1611
```

```
1612 \DeclareRobustCommand{\mathgt}{\%}
1613 \QlatexQerror{Command \noexpand\mathgt invalid with\space
1614 'disablejfam' class option.}\Qeha
1615 }
1616 \fi
```

ここでは \LaTeX 2.09 で一般的に使われていたコマンドを定義しています。これらのコマンドはテキストモードと数式モードの**どちらでも**動作します。これらは互換性のために提供をしますが、できるだけ \text... と \math... を使うようにしてください。

- \mc これらのコマンドはフォントファミリを変更します。互換モードの同名コマンドと
- \gt 異なり、すべてのコマンドがデフォルトフォントにリセットしてから、対応する属
- \rm 性を変更することに注意してください。
- \sf 1617 \DeclareOldFontCommand{\mc}{\normalfont\mcfamily}{\mathmc}
- \tt \lambda \DeclareOldFontCommand{\gt}{\normalfont\gtfamily}{\mathgt}
 - 1619 \DeclareOldFontCommand{\rm}{\normalfont\rmfamily}{\mathrm}
 - $1620 \verb|\DeclareOldFontCommand{\sf}{\normalfont\sffamily}{\mbox|\mbox|}$
 - $1621 \end{\text{\command} \rathth{\command{\rathth{\command{\rathth{\command}\command{\rathth{\command}\command{\rathth{\command}\command{\rathth{\command}\command{\rathth{\command}\command{\rathth{\command}\command{\rathth{\command}\command}\command{\rathth{\command}\command{\rathth{\command}\command}\command{\rathth{\command}\command}\command{\rathth{\command}\command}\command}\command{\rathth{\command}\command}\command}\command{\rathth{\command}\command}\command}\command}\command{\rathth{\command}\c$
- \bf このコマンドはボールド書体にします。ノーマル書体に変更するには、\mdseries と指定をします。
 - $1622 \verb|\DeclareOldFontCommand{\bf}{\normalfont\bfseries}{\mbox{\tt mathbf}}$
- \it これらのコマンドはフォントシェイプを切替えます。スラント体とスモールキャッ
- \sl プの数式アルファベットはありませんので、数式モードでは何もしませんが、警告
- \sc メッセージを出力します。\upshape コマンドで通常のシェイプにすることができます。
 - 1623 \DeclareOldFontCommand{\it}{\normalfont\itshape}{\mathit}

 - $1625 \verb|\DeclareOldFontCommand{\sc}{\normalfont\scshape}{\close{Command}\sc}|$
- \cal これらのコマンドは数式モードでだけ使うことができます。数式モード以外では何 \mit もしません。現在の NFSS は、これらのコマンドが警告を生成するように定義して いますので、'手ずから' 定義する必要があります。
 - 1626 \DeclareRobustCommand*{\cal}{\@fontswitch\relax\mathcal}
 1627 \DeclareRobustCommand*{\mit}{\@fontswitch\relax\mathnormal}

29 相互参照

29.1 目次

\section コマンドは、.toc ファイルに、次のような行を出力します。

\contentsline{section} $\{\langle title \rangle\}\{\langle page \rangle\}$

 $\langle title \rangle$ には項目が、 $\langle page \rangle$ にはページ番号が入ります。\section に見出し番号が付く場合は、 $\langle title \rangle$ は、\numberline{ $\langle num \rangle$ }{ $\langle heading \rangle$ }となります。 $\langle num \rangle$ は\thesection コマンドで生成された見出し番号です。 $\langle heading \rangle$ は見出し文字列です。この他の見出しコマンドも同様です。

figure 環境での \caption コマンドは、.lof ファイルに、次のような行を出力します。

\contentsline{figure}{\num\}{\langle (anum\)}{\langle (caption\)}}{\langle page\} \langle (num\) は、\thefigure コマンドで生成された図番号です。 $\langle caption \rangle$ は、キャプション文字列です。table 環境も同様です。

\contentsline $\{\langle name \rangle\}$ コマンドは、\ $10\langle name \rangle$ に展開されます。したがって、目次の体裁を記述するには、\10chapter,\10section などを定義します。図目次のためには \10figure です。これらの多くのコマンドは \100dottedtocline コマンドで定義されています。このコマンドは次のような書式となっています。

 $\verb|\dottedtocline|{\langle level\rangle}|{\langle indent\rangle}|{\langle numwidth\rangle}|{\langle title\rangle}|{\langle page\rangle}|$

 $\langle level \rangle$ " $\langle level \rangle$ <= tocdepth"のときにだけ、生成されます。\chapter はレベル 0 \section はレベル 1 、... です。

 $\langle indent \rangle$ 一番外側からの左マージンです。

 $\langle numwidth \rangle$ 見出し番号(\numberline コマンドの $\langle num \rangle$)が入るボックスの幅です。

\c@tocdepth tocdepth は、目次ページに出力をする見出しレベルです。

1628 \(\article\)\\setcounter\(\{\text{tocdepth}\}\{3\}\)
1629 \(\article\)\\\setcounter\(\{\text{tocdepth}\}\{2\}\)

また、目次を生成するために次のパラメータも使います。

\Opnumwidth ページ番号の入るボックスの幅です。

 $1630 \mbox{ \newcommand{\communitath}{1.55em}}$

\Otocrmarg 複数行にわたる場合の右マージンです。

1631 \newcommand{\@tocrmarg}{2.55em}

\@dotsep ドットの間隔 (mu 単位) です。2 や 1.7 のように指定をします。 1632 \newcommand{\@dotsep}{4.5}

\toclineskip この長さ変数は、目次項目の間に入るスペースの長さです。デフォルトはゼロとなっています。縦組のとき、スペースを少し広げます。

File g: jclasses.dtx

```
1634 (yoko)\setlength\toclineskip{\z@}
                                     1635 (tate)\setlength\toclineskip{2\p0}
          \numberline \numberline マクロの定義を示します。オリジナルの定義では、ボックスの幅を
          \@lnumwidth \@tempdima にしていますが、この変数はいろいろな箇所で使われますので、期待
                                        した値が入らない場合があります。
                                            フォント選択コマンドの後、あるいは \numberline マクロの中でフォントを切
                                       替えてもよいのですが、一時変数を意識したくないので、見出し番号の入るボック
                                        スを \@lnumwidth 変数を用いて組み立てるように \numberline マクロを再定義し
                                        ます。
                                     1636 \newdimen\@lnumwidth
                                     1637 \def\numberline#1{\hb@xt@\@lnumwidth{#1\hfil}}
  \@dottedtocline 目次の各行間に\toclineskipを入れるように変更します。このマクロは1tsect.dtx
                                       で定義されています。
                                     1638 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{%
                                                  \ifnum #1>\c@tocdepth \else
                                                       \vskip\toclineskip \@plus.2\p@
                                     1641
                                                       {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
                                     1642
                                                         \parindent #2\relax\@afterindenttrue
                                     1643
                                                         \interlinepenalty\@M
                                                        \leavevmode
                                     1644
                                                         \@lnumwidth #3\relax
                                     1645
                                                         \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
                                     1646
                                     1647
                                                         {#4}\nobreak
                                     1648
                                                         \leaders\hbox{$\m@th \mkern \@dotsep mu.\mkern \@dotsep mu$}%
                                     1649
                                                         \hfill\nobreak
                                                         \hb@xt@\@pnumwidth{\hss\normalfont \normalcolor #5}%
                                     1651
                                                         \par}%
                                     1652
                                                  \fi}
\addcontentsline 縦組の場合にページ番号を \rensuji で囲むように変更します。
                                            このマクロは ltsect.dtx で定義されています。
                                     1653 \providecommand*\protected@file@percent{}
                                     1654 \def\addcontentsline#1#2#3{%
                                     1655 \protected@write\@auxout
                                     1656
                                                       1657 (tate)
                                                                   \@temptokena{\rensuji{\thepage}}}%
                                     1658 (yoko)
                                                                    \@temptokena{\thepage}}%
                                                       {\string\@writefile{#1}%
                                     1659
                                                             {\bf \{\protect\contentsline{#2}{\#3}{\tt \{\the\contentsline{#2}}{\#3}{\tt \{\the\contentsline{#2}{\#3}}{\tt \{\the\contentsline{#2}{\#3}}{\tt \{\the\contentsline{#2}{\#3}}{\tt \{\the\contentsline{*2}{\#3}}{\tt \{\the\contentsline{*2}{\#3}}{
                                     1660
                                     1661
                                                               \protected@file@percent}}%
                                     1662 }
```

1633 \newdimen\toclineskip

29.1.1 本文目次

```
目次を生成します。
\tableofcontents
                                           1663 \newcommand{\tableofcontents}{%
                                           1664 (*report | book)
                                                         \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                                                         \else\@restonecolfalse\fi
                                           1666
                                           1667 (/report | book)
                                           1668 (article)
                                                                          \section*{\contentsname
                                                                          \chapter*{\contentsname
                                           1669 (!article)
                                             \tableofcontents では、\@mkboth は heading の中に入れてあります。ほかの命
                                             令 (\listoffigures など) については、\@mkboth は heading の外に出してありま
                                             す。これは IATFX の classes.dtx に合わせています。
                                                               \@mkboth{\contentsname}{\contentsname}%
                                                         }\@starttoc{toc}%
                                           1672 (report | book) \if@restonecol\twocolumn\fi
                       \1@part part レベルの目次です。
                                           1674 \newcommand*{\l@part}[2]{%
                                                       \ifnum \c@tocdepth >-2\relax
                                                                               \verb|\addpenalty{\@secpenalty}|| % \end{substitute} % \label{ty} % \end{substitute} % \end
                                           1676 (article)
                                           1677 (!article)
                                                                                 \addpenalty{-\@highpenalty}%
                                           1678
                                                               \addvspace{2.25em \@plus\p@}%
                                           1679
                                                               \begingroup
                                                               \parindent\z@\rightskip\@pnumwidth
                                           1680
                                           1681
                                                               \parfillskip-\@pnumwidth
                                                               {\leavevmode\large\bfseries
                                           1682
                                                                 \verb|\setlength@lnumwidth{4zw}|| %
                                           1683
                                           1684
                                                                 #1\hfil\nobreak
                                                                 \hb@xt@\@pnumwidth{\hss#2}}\par
                                           1685
                                                               \nobreak
                                           1686
                                           1687 (article)
                                                                               \if@compatibility
                                                               \global\@nobreaktrue
                                           1689
                                                               \everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}%
                                           1690 (article)
                                                                               \fi
                                           1691
                                                                 \endgroup
                                           1692
                                                         fi
               \l@chapter chapter レベルの目次です。
                                           1693 (*report | book)
                                           1694 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
                                                          \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
                                           1695
                                           1696
                                                                \addpenalty{-\@highpenalty}%
                                           1697
                                                                \addvspace{1.0em \@plus\p@}%
                                           1698
                                                                \begingroup
                                                                     \parindent\z@\rightskip\@pnumwidth\parfillskip-\rightskip
```

```
1700
                                                                  \leavevmode\bfseries
                                                                  \setlength\@lnumwidth{4zw}%
                                         1701
                                                                  \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
                                         1702
                                         1703
                                                                  $1\nobreak\hfil\nobreak\hb@xt@\pnumwidth{\hss#2}\par
                                         1704
                                                                  \penalty\@highpenalty
                                         1705
                                                              \endgroup
                                         1706
                                                        \{fi\}
                                         1707 \; \langle / \text{report} \mid \text{book} \rangle
              \l@section section レベルの目次です。
                                         1708 (*article)
                                         1709 \newcommand*{\l@section}[2]{%
                                                       \ifnum \c@tocdepth >\z@
                                         1710
                                         1711
                                                              \addpenalty{\@secpenalty}%
                                         1712
                                                              \addvspace{1.0em \@plus\p@}%
                                          1713
                                                              \begingroup
                                         1714
                                                                  \parindent\z@ \rightskip\@pnumwidth \parfillskip-\rightskip
                                         1715
                                                                   \leavevmode\bfseries
                                                                  \setlength\@lnumwidth{1.5em}%
                                         1716
                                                                  \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
                                         1717
                                                                  1718
                                         1719
                                                             \endgroup
                                         1720
                                                        \{fi\}
                                         1721 (/article)
                                          1722 (*report | book)
                                         1723 \langle tate \rangle \newcommand*{\l@section}{\cdottedtocline{1}{1zw}{4zw}}
                                         1724 \langle yoko \rangle \newcommand*{\l@dottedtocline{1}{1.5em}{2.3em}}
                                         1725 (/report | book)
       \l@subsection 下位レベルの目次項目の体裁です。
\l0subsubsection 1726 \langle *tate \rangle
         \l@paragraph ^{1727} \langle *article \rangle
                                         1728 \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                                                            {\@dottedtocline{2}{1zw}{4zw}}
  \verb|\label{loss-prop}| 1729 \verb|\label{loss-pr
                                         1730 \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                                                                             {\@dottedtocline{4}{3zw}{8zw}}
                                         1731 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{4zw}{9zw}}
                                         1732 (/article)
                                         1733 (*report | book)
                                         1734 \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                                                             {\@dottedtocline{2}{2zw}{6zw}}
                                         1735 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3zw}{8zw}}}
                                         1736 \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                                                                            {\dot{dottedtocline}{4}{4zw}{9zw}}
                                         1737 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{5zw}{10zw}}
                                         1738 (/report | book)
                                         1739 (/tate)
                                         1740 (*yoko)
                                         1741 (*article)
                                         1742 \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                                                             {\colored{0.3em}}{\colored{0.3em}}
                                         1743 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
```

```
1746 (/article)
                                       1747 (*report | book)
                                       1748 \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                                                              {\cline{2}{3.8em}{3.2em}}
                                       1749 \enskip 174
                                       1750 \mbox{\newcommand*{\l@paragraph}}
                                                                                                                              1751 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{12em}{6em}}
                                       1752 (/report | book)
                                       1753 (/yoko)
                                         29.1.2 図目次と表目次
\listoffigures 図の一覧を作成します。
                                      1754 \newcommand{\listoffigures}{%
                                       1755 (*report | book)
                                                     \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                                       1757
                                                      \else\@restonecolfalse\fi
                                       1758
                                                     \chapter*{\listfigurename}%
                                       1759 (/report | book)
                                                                            \section*{\listfigurename}%
                                       1760 (article)
                                       1761 \@mkboth{\listfigurename}{\listfigurename}%
                                       1762 \@starttoc{lof}%
                                       1763 \langle report \mid book \rangle \land if@restonecol \land twocolumn \land fi
                                       1764 }
             \l@figure 図目次の体裁です。
                                       1765 \langle tate \rangle \newcommand*{\l@figure}{\l@dottedtocline{1}{1zw}{4zw}}
                                       1766 \langle yoko \rangle \newcommand*{\l@figure}{\l@dottedtocline{1}{1.5em}{2.3em}}
  \listoftables 表の一覧を作成します。
                                      1767 \newcommand{\listoftables}{%
                                      1768 \langle *report \mid book \rangle
                                      1769
                                                     \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                                      1770
                                                     \else\@restonecolfalse\fi
                                       1771 \chapter*{\listtablename}%
                                       1772 (/report | book)
                                       1773 (article)
                                                                            \section*{\listtablename}%
                                                    \@mkboth{\listtablename}{\listtablename}%
                                                     \@starttoc{lot}%
                                       1776 (report | book) \if@restonecol\twocolumn\fi
                                      1777 }
               \lotable 表目次の体裁は、図目次と同じにします。
                                       1778 \let\l@table\l@figure
```

1745 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{10em}{5em}}

1744 \newcommand*{\l@paragraph}

29.2 参考文献

```
オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。
    \bibindent
             1779 \newdimen\bibindent
             1780 \setlength\bibindent{1.5em}
     \newblock \newblock のデフォルト定義は、小さなスペースを生成します。
             1781 \newcommand{\newblock}{\hskip .11em\@plus.33em\@minus.07em}
thebibliography 参考文献や関連図書のリストを作成します。
             1782 \newenvironment{thebibliography}[1]
             \list{\@biblabel{\@arabic\c@enumiv}}%
             1785
             1786
                        {\settowidth\labelwidth{\@biblabel{#1}}%
                         \leftmargin\labelwidth
             1787
                         \advance\leftmargin\labelsep
             1788
                         \@openbib@code
             1789
             1790
                         \usecounter{enumiv}%
             1791
                         \let\p@enumiv\@empty
                         \renewcommand\theenumiv{\@arabic\c@enumiv}}%
             1792
             1793
                   \sloppy
                   \clubpenalty4000
             1794
             1795
                   \@clubpenalty\clubpenalty
             1796
                   \widowpenalty4000%
              1797
                   \sfcode '\.\@m}
              1798
                   {\def\@noitemerr
                    {\@latex@warning{Empty 'thebibliography' environment}}%
             1799
             1800
              \@openbib@code のデフォルト定義は何もしません。この定義は、openbib オプショ
\@openbib@code
              ンによって変更されます。
             1801 \let\@openbib@code\@empty
    \@biblabel The label for a \bibitem[...] command is produced by this macro. The default
              from latex.dtx is used.
              1802 % \renewcommand*{\@biblabel}[1]{[#1]\hfill}
       \@cite The output of the \cite command is produced by this macro. The default from
              ltbibl.dtx is used.
              1803 % \renewcommand*{\@cite}[1]{[#1]}
```

29.3 索引

```
theindex 2段組の索引を作成します。索引の先頭のページのスタイルは jpl@in とします。し
                                たがって、headings と bothstyle に適した位置に出力されます。
                               1804 \newenvironment{theindex}
                                           {\if@twocolumn\@restonecolfalse\else\@restonecoltrue\fi
                               1806 (article)
                                                           \twocolumn[\section*{\indexname}]%
                                                                      \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}]%
                               1807 (report | book)
                                              \@mkboth{\indexname}{\indexname}%
                              1808
                                              \thispagestyle{jpl@in}\parindent\z@
                              1809
                                パラメータ \columnseprule と \columnsep の変更は、\twocolumn が実行された
                                後でなければなりません。そうしないと、索引の前のページにも影響してしまうた
                                めです。
                              1810
                                              \protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\pro
                                              \columnseprule\z@ \columnsep 35\p@
                              1811
                              1812
                                             \let\item\@idxitem}
                                           {\if@restonecol\onecolumn\else\clearpage\fi}
        \@idxitem 索引項目の字下げ幅です。\@idxitem は \item の項目の字下げ幅です。
          \subitem 1814 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 40\p@}
                             1815 \newcommand{\subitem}{\@idxitem \hspace*{20\p@}}
                              1816 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace*\{30\p0\}}
    \indexspace 索引の"文字"見出しの前に入るスペースです。
                               1817 \newcommand{\indexspace}{\par \vskip 10\p@ \@plus5\p@ \@minus3\p@\relax}
                                                 脚注
                                29.4
\footnoterule 本文と脚注の間に引かれる罫線です。
                              1818 \renewcommand{\footnoterule}{%
                                           \mbox{kern-3}p@
                              1820
                                           \hrule\@width.4\columnwidth
                              1821
                                           \mbox{kern2.6}p0
    \c@footnote report と book クラスでは、chapter レベルでリセットされます。
                              1822 \langle !article \rangle \setminus @addtoreset{footnote}{chapter}
  \@makefntext このマクロにしたがって脚注が組まれます。
                                     \@makefnmark は脚注記号を組み立てるマクロです。
                              1823 (*tate)
                              1824 \newcommand\@makefntext[1]{\parindent 1zw
                              1825 \noindent\hb@xt@ 2zw{\hss\@makefnmark}#1}
                               1826 (/tate)
                               1827 (*yoko)
```

1828 \newcommand \@makefntext[1] {\parindent 1em

```
1829 \noindent\hb@xt@ 1.8em{\hss\@makefnmark}#1}
1830 (/yoko)
```

30 今日の日付

組版時における現在の日付を出力します。

\if 西暦 \today コマンドの '年' を、西暦か和暦のどちらで出力するかを指定するコマンド \ 西暦 です。2018 年 7 月以降の日本語 $T_{\rm E}X$ 開発コミュニティ版 (v1.8) では、デフォルト \ 和暦 を和暦ではなく西暦に設定しています。

1831 \newif\if 西曆 \ 西曆 true 1832 \def\ 西曆{\ 西曆 true} 1833 \def\ 和曆{\ 西曆 false}

\heisei \today コマンドを \rightmark で指定したとき、\rightmark を出力する部分で 和暦のための計算ができないので、クラスファイルを読み込む時点で計算しておき ます。

1834 \newcount\heisei \heisei\year \advance\heisei-1988\relax

\today 縦組の場合は、漢数字で出力します pIFTEX 2018-12-01 以前では縦数式ディレクショ \pltx@today@year ン時でも漢数字で出力していましたが、pIFTEX 2019-04-06 以降からはそうしなくなりました。

```
1835 \def\pltx@today@year@#1{%
      \ifnum\numexpr\year-#1=1 元\else
         \ifnum1=\iftdir\ifmdir0\else1\fi\else0\fi
1837
            \kansuji\number\numexpr\year-#1\relax
1838
         \else
1839
            \number\numexpr\year-#1\relax\nobreak
1840
         \fi
1841
      \fi 年
1842
1843 }
1844 \def\pltx@today@year{%
       \int \operatorname{numexpr} \operatorname{vear} 10000 + \operatorname{month} 100 + \operatorname{day} 19890108
1846
         昭和 \pltx@today@year@{1925}%
1847
       \ensuremath{\verb| linum| numexpr| year*10000+\month*100+\day<20190501}
1848
         平成 \pltx@today@year@{1988}%
1849
         令和 \pltx@today@year@{2018}%
1850
      fi\fi
1851
1852 \left( \frac{1}{8} \right)
       \if 西暦
1853
         \ifnum1=\iftdir\ifmdir0\else1\fi\else0\fi\kansuji\number\year
1854
         \else\number\year\nobreak\fi 年
1856
       \else
1857
         \pltx@today@year
```

```
1858 \fi
1859 \ifnum1=\iftdir\ifmdir0\else1\fi\else0\fi
1860 \kansuji\number\month 月
1861 \kansuji\number\day 日
1862 \else
1863 \number\month\nobreak 月
1864 \number\day\nobreak 日
1865 \fi}
```

31 初期設定

```
\prepartname
   \postpartname
                1866 \newcommand{\prepartname}{第}
                 1867 \newcommand{\postpartname}{部}
\prechaptername
                 1868 (report | book) \newcommand{\prechaptername}{第}
\postchaptername
                \contentsname
\listfigurename 1870 \newcommand{\contentsname}{目 次}
                1871 \newcommand{\listfigurename}{図 目 次}
 \listtablename
                 1872 \newcommand{\listtablename}{表 目 次}
       \refname
       \bibname
                1873 (article)\newcommand{\refname}{参考文献}
                1874 (report | book)\newcommand{\bibname}{関連図書}
      \indexname
                 1875 \newcommand{\indexname}{索 引}
    \figurename
     \tablename 1876 \newcommand{\figurename}{図}
                 1877 \newcommand{\tablename}{表}
  \appendixname
   \abstractname
                1878 \newcommand{\appendixname}{付 録}
                 1879 (article | report) \newcommand {\abstractname} {概要}
                 1880 \langle book \rangle \rangle 
                 1881 \langle !book \rangle \rangle 
                 1882 \pagenumbering{arabic}
                 1883 \raggedbottom
                 1884 \if@twocolumn
                 1885
                      \twocolumn
                      \sloppy
                 1886
                 1887 \else
                 1888 \onecolumn
                 1889 \fi
```

\@mparswitch は傍注を左右(縦組では上下)どちらのマージンに出力するかの指定です。偽の場合、傍注は一方の側にしか出力されません。このスイッチを真とすると、とくに縦組の場合、奇数ページでは本文の上に、偶数ページでは本文の下に傍注が出力されますので、おかしなことになります。

また、縦組のときには、傍注を本文の下に出すようにしています。\reversemarginparとすると本文の上側に出力されます。ただし、二段組の場合は、つねに隣接するテキスト側のマージンに出力されます。

```
1890 (*tate)
1891 \normalmarginpar
1892 \@mparswitchfalse
1893 (/tate)
1894 (*yoko)
1895 \if@twoside
1896 \@mparswitchtrue
1897 \else
1898 \@mparswitchfalse
1899 \fi
1900 (/yoko)
1901 (/article|report|book)
```

File h jltxdoc.dtx

```
jltxdoc クラスは、ltxdoc をテンプレートにして、日本語用の修正を加えています。
            2 \DeclareOption*{\PassOptionsToClass{\CurrentOption}{ltxdoc}}
            3 \ProcessOptions
            4 \LoadClass{ltxdoc}
\normalsize ltxdoc からロードされる article クラスでの行間などの設定値で、日本語の文章
    \small を組版すると、行間が狭いように思われるので、多少広くするように再設定します。
\parindent また、段落先頭での字下げ量を全角一文字分とします。
            5 \renewcommand{\normalsize}{%
                \@setfontsize\normalsize\@xpt{15}%
            7
              \abovedisplayskip 10\p@ \@plus2\p@ \@minus5\p@
              \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
            9 \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
               \belowdisplayskip \abovedisplayskip
           10
               \let\@listi\@listI}
           11
           12 \renewcommand{\small}{%
           13 \@setfontsize\small\@ixpt{11}%
              \abovedisplayskip 8.5\p@ \@plus3\p@ \@minus4\p@
              \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@
               17
               \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
                         \topsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
                         \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
           19
                         \itemsep \parsep}%
           20
           21 \belowdisplayskip \abovedisplayskip}
           22 \normalsize
           23 \setlength\parindent{1zw}
     \file \file マクロは、ファイル名を示すのに用います。
           24 \providecommand*{\file}[1]{\texttt{#1}}
   \pstyle \pstyle マクロは、ページスタイル名を示すのに用います。
           25 \providecommand*{\pstyle}[1]{\textsl{#1}}
   \Lcount \Lcount マクロは、カウンタ名を示すのに用います。
           26 \providecommand*{\Lcount}[1]{\textsl{\small#1}}
     \Lopt \Lopt マクロは、クラスオプションやパッケージオプションを示すのに用います。
           27 \providecommand*{\Lopt}[1]{\textsf{#1}}
```

```
\dst \dst マクロは、"DOCSTRIP" を出力する。
      28 \providecommand\dst{{\normalfont\scshape docstrip}}
```

\NFSS \NFSS マクロは、"NFSS"を出力します。

29 \providecommand\NFSS{\textsf{NFSS}}

\c@clineno \mlineplus マクロは、その時点でのマクロコードの行番号に、引数に指定された \mlineplus 行数だけを加えた数値を出力します。たとえば \mlineplus{3}とすれば、直前のマ クロコードの行番号 (29) に 3 を加えた数、"32" が出力されます。

- 30 \newcounter{@clineno}
- ${\tt 31 \def\mlineplus\#1{\setcounter{@clineno}{\arabic{CodelineNo}}}\%}$
- \addtocounter{@clineno}{#1}\arabic{@clineno}}

tsample tsample 環境は、環境内に指定された内容を罫線で囲って出力をします。第一引数 は、出力するボックスの高さです。plext.dtx の中で使用しています。このマクロ 内では縦組になることに注意してください。

- $33 \left| 4f\right|$
- \hbox to\linewidth\bgroup\vrule width.1pt\hss
- \vbox\bgroup\hrule height.1pt
- 36 \vskip.5\baselineskip
- \vbox to\linewidth\bgroup\tate\hsize=#1\relax\vss} 37
- 38 \def\endtsample{%
- \vss\egroup 39
- \vskip.5\baselineskip 40
- \hrule height.1pt\egroup 41
- \hss\vrule width.1pt\egroup}

\DisableCrossrefs jclasses.dtx を処理するときに、\if 西暦の部分でエラーになるため、一時的に \EnableCrossrefs クロスリファレンスの機能をオフにします。しかし、デフォルトの定義では完全に 制御できないので、ここで再定義をします。

- 43 \def\DisableCrossrefs{\@bsphack\scan@allowedfalse\@esphack}
- 44 \def\EnableCrossrefs{\@bsphack\scan@allowedtrue
- \def\DisableCrossrefs{\@bsphack\scan@allowedfalse\@esphack}\@esphack}

\verb plfTFX では、\verb コマンドを修正して直前に \xkanjiskip が入るようにしてい ます。しかし、ltxdoc.cls が読み込む doc.sty が上書きしてしまいますので、こ れを再々定義します。doc.sty での定義は

> \def\verb{\relax\ifmmode\hbox\else\leavevmode\null\fi \bgroup \let\do\do@noligs \verbatim@nolig@list \ttfamily \verb@eol@error \let\do\@makeother \dospecials \Oifstar{\Osverb}{\Ovobeyspaces \frenchspacing \Osverb}}

となっていますので、plcore.dtxと同様に\nullを外して\vadjust{}を入れます。

```
46 \ensuremath{\label{leavevmode} \fi} \\
```

- 47 \bgroup \let\do\do@noligs \verbatim@nolig@list
- $49 \qquad \verb{\continuous} \end{area} $$ \ord{\continuous} \end{area} $$ \ord{\continuous} $$ \ord$

\xspcode コマンド名の\と 16 進数を示すための"の前にもスペースが入るよう、これらの \xspcode の値を変更します。

- 50 \xspcode"5C=3 %% \
- 51 \xspcode"22=3 %% "
- $52 \langle / \mathsf{class} \rangle$

1992/02/04 jclasses.dtx v1.1d	1995/08/11 plext.dtx v1.1c
General: disablejfam の判断を間違	\X@tabular: \tabarray のタイプミ ス修正
えてたのを修正 160	.,
1995/02/05 plcore.dtx v1.1c	1995/08/22 plfonts.dtx v1.0c
\@outputpage: \oddsidemargin と	\@@kenc@update: 縦横用エンコード
\evensidemargin が逆だったの	の保存 40
を修正98	\selectfont: 縦横両方のフォント
1995/03/28 plfonts.dtx v1.1b	を切り替えるようにした 32
\ktenc@list: リストの初期値を変更 11	1995/08/23 jclasses.dtx v1.0d
\notffam@list: リストの初期値を	\ps@bothstyle: 横組の evenfoot が
変更 11	中央揃えになっていたのを修正 185
1995/04/05 plcore.dtx v1.1b	\ps@myheadings: 横組モードの左右
\verb: 互換モードのときは、	が逆であったのを修正 186
pl209.def の定義を使う 108	1995/08/24 plfonts.dtx v1.1c
1995/04/07 plcore.dtx v1.0a	\strut: "\centerling \strut" O
\@footnotetext: 組方向の判定を	幅がゼロになってしまうのを修正 13
	1995/08/25 plcore.dtx v1.1c
	\@gnewline: 行頭禁則文字の直前で
1995/04/12 plcore.dtx v1.0a	の改行での不具合の修正 83
\@footnotemark : 脚注記号の出力位	1995/08/30 jclasses.dtx v1.0a
置の調整 106	General: 柱の書体がノンブルに影響
Cmakefnmark: 縦組でも上付き数字	するバグの修正 182
を使うように修正 103	1995/08/30 plvers.dtx v1.0a
\thempfn: Removed \thempfn 103	General: IATFX <1995/06/01>版用
\thempfootnote: Removed	に修正 1
\thempfootnote 103	1995/08/31 plfonts.dtx v1.0c
1995/04/12 plfonts.dtx v1.1b	\adjustbaseline: 欧文書体の基準
\textunderscore: 下線マクロを追	を 'M' から '/' に変更 36
加64	1995/09/07 plcore.dtx v1.1c
1995/04/26 plfonts.dtx v1.1b	\@setref: change \null to \relax
\selectfont: ベースラインの調整	in \@setref 107
をサイズ変更時に行なうように	
した 33	1995/09/11 plext.dtx v1.1c
1995/05/10 plfonts.dtx v1.1b	\@iiiminipage: Add
\fontfamily: \notkfam@list \\\C\	\adjustbaseline 134
エンコードごとに登録されてし	\@iiiparbox: Add
まうのを修正した。欧文につい	\adjustbaseline 135
ても同様。 42	\p@array: Add \adjustbaseline. 124
	1995/09/12 plfonts.dtx v1.1c
	General: \xkanjiskip のデフォルト
\notffam@list: リスト内の空白を	值 77
削除	1995/09/26 jclasses.dtx v1.0a
1995/05/16 plvers.dtx v1.0	General: Change b4paper
General: pI $ otin T_E X 2_{\varepsilon}$ 用に	width/height $352x250$ to
ltvers.dtx を修正	364×257

Change b5paper width/height	1996/01/12 plext.dtx v1.1g
250x176 to 257x182 157	\@iiiminipage:
1995/10/24 plext.dtx v1.1c	Grouping \@iiiminipage 133
\@iiiparbox:	\@iiiparbox:
typo \adjustbaesline 135	Grouping \@iiiparbox 135
1995/11/09 plfonts.dtx v1.2	1996/01/26 plcore.dtx v1.1b
\DeclareFixedFont:	\@makefnmark: 脚注マークの後ろに
\DeclareFixedFont の日本語化 25	余計なスペースが入るのを修正 103
1995/11/10 plcore.dtx v1.1a	1996/01/31 plvers.dtx v1.0b
\@outputpage: \topmargin が反映	General: 译TEX <1995/12/01>版用
されないバグを修正 98	に修正1
1995/11/10 plext.dtx v1.1d	1996/02/17 plcore.dtx v1.1e
\p@array: \@array to \p@array . 124	General: \printglossary を追加 . 111
\p@tabarray: \@tabarray to	1996/02/29 jclasses.dtx v1.0d
\p@tabarray 124	General: article と report のデフォ
\p@tabular: \@tabular to	ルトを plain に修正 221
\p@tabular 124	\ps@jpl@in: <i>jpl@in</i> の初期値を定
\X@tabular: \@tabarray to	義 182
\p@tabarray 123	1996/03/05 jclasses.dtx v1.0d
\@tabular to \p@tabular 123	\ps@bothstyle: 横組で偶数ページ
1995/11/21 plext.dtx v1.1d	と奇数ページの設定が逆なのを
\prensuji: \Rensuji, \prensuji	修正 185
を作成 142	1996/03/06 plfonts.dtx v1.1c
1995/11/21 plfonts.dtx v1.2	\notffam@list: \notkfam@list \angle
\@notffam: \fontfamily コマンド	\notffam@list の初期値を変更 12
用のフラグ追加 41	1996/03/12 plcore.dtx v1.1d
\adjustbaseline: 縦組時のみ調整	\@stopfield: \=の後ろに和欧文間
するようにした 36	スペースが入るのを修正 110
\fontfamily: 代用フォントが使わ	1996/03/13 plext.dtx v1.0h
れないバグを修正 41	\DeclareLayoutCaption: ++プ
1995/11/22 plfonts.dtx v1.2	ション出力位置の初期値を設定 130
\selectfont: エラーフォントに対	\kanji: \@Kanji を追加。英語版と
	同様にした。 142
· –	1996/03/13 plext.dtx v1.1h
1995/11/24 jclasses.dtx v1.1d	\make@pcaptionbox: typo:
\marginparwidth:	\c 0latex@warning
typo: \marginmarwidth to	1996/03/14 jclasses.dtx v1.0e
\marginparwidth 176	description: \topskip や \parkip
1995/11/24 plfonts.dtx v1.2	などの値を縦組時のみに設定す
General: it, sl, sc の宣言を外した . 78	るようにした 206
1995/12/25 jclasses.dtx v1.0c	itemize: 縦組時のみに設定するよう
General: Macro \if@openbib	にした 205
removed	1996/03/21 jclasses.dtx v1.0e
openbib オプションを再実装 160	General: \usepackage to
1995/12/25 jclasses.dtx v1.1c	\RequirePackage 161
\maxdepth: \@maxdepth の設定を除	1996/07/10 jclasses.dtx v1.0f
外した 167	General: 面付けオプションを追加 158
1995/12/28 jclasses.dtx v1.0c	1996/07/10 plcore.dtx v1.0f
\listoftables: fix the	\maketombowbox: トンボの横に DVI
\listoftable typo 217	ファイルの作成日を出力するよ

うにした。 93	1997/01/25 jclasses.dtx v1.1a
1996/09/03 jclasses.dtx v1.0g	\if@stysize: Add \if@stysize. 156
General: Add to \@bannertoken. 158	\textheight: Add paper option
1996/09/03 plcore.dtx v1.1f	with compatibility mode 170
\@bannerfont: Add	\textwidth: Add paper option
\@bannertoken 93	with compatibility mode 168
1996/12/17 jclasses.dtx v1.0h	1997/01/25 plfonts.dtx v1.1
\ 和暦: Typo:和歴 to 和暦 220	\ktenc@list: Add TS1 encoding
1997/01/11 plvers.dtx v1.0c	to the starting member of
General: \LaTeX <1996/06/01>版用	\fenc@list
に修正1	1997/01/28 jclasses.dtx v1.1a
1997/01/15 jclasses.dtx v1.1	\labelitemiv: Bug fix:
\backmatter: \frontmatter,	\labelitemii 205
$\mbox{\mbox{\it mainmatter}}, \mbox{\mbox{\it backmatter}} \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ $	1997/01/28 jclasses.dtx v1.1b
E⁴T _E X の定義に修正 194	\if@enablejfam:
\part: \part を lÞT _E X の定義に修	Add \if@enablejfam 156
正 196	1997/01/28 plfonts.dtx v1.3b
1997/01/16 plcore.dtx v1.1g	
\verb: \verb コマンドを LATEX	\textgt: \textmc, \textgt の動作 修正59
<1996/06/01>に合わせて修正 108	1997/01/29 pl209.dtx v1.0e
1997/01/23 jclasses.dtx v1.1a	, , -
General: 日付出力オプション 158	General: 二文字書体変更コマンドの 動作を旧版と同等にした。 145
thebibliography:	
PTEX <1996/12/01>に合わせて	1997/01/29 plfonts.dtx v1.3b
修正 218	General: フォント定義ファイルのサ
1997/01/23 jltxdoc.dtx v1.0a	イズ指定の調整 78
\parindent: \normalsize, \small などの再定義 223	1997/01/30 plfonts.dtx v1.0
などの再定義 223 1997/01/23 plcore.dtx v1.0g	\reDeclareMathAlphabet:
1997/01/23 picore.dtx V1.0g \maketombowbox: 作成日の出力をす	\reDeclareMathAlphabet を追
るかどうかをフラグで指定する	加。ありがとう、ymt さん。 28
ようにした。 93	1997/01/30 plfonts.dtx v1.3b
1997/01/23 plvers.dtx v1.0d	General: 数式用フォントの宣言をク
General: L ^A T _E X <1996/12/01>版用	ラスファイルに移動した 76
に修正 1	1997/02/05 jclasses.dtx v1.1d
1997/01/24 plfonts.dtx v1.3	General: 開始ページがおかしくなる
General: Rename font definition	のを修正 159
filename 76	\topmargin: \tompargin を半分に
Rename provided font definition	するのはアキ領域の計算後 174
filename	1997/02/12 jclasses.dtx v1.1d
1997/01/25 jclasses.dtx v1.0g	\maketitle: 縦組クラスの表紙を縦
General: Insert \hbox, to switch	書きにするようにした 189
tate-mode 159	1997/02/14 jclasses.dtx v1.1d
\columnseprule: \columnsep:	\thefigure: \ifnum 文の構文エ
$10pt to 3\Cwd or 2\Cwd 165$	ラーを訂正。 208
\marginparwidth:	1997/02/14 plcore.dtx v1.1g
$\verb \oddsidemargin ,$	\@footnotemark : 縦組時の位置調整
\evensidemagin: Opt if	を 2\cht から.9zh に変更 106
specified papersize at	\@makefnmark: 縦組時に脚注マーク
\documentstyle option 175	の書体が正しくないのを修正 . 103

1997/02/20 pl $209.dtx$ v $1.0e$	\ps@headings: 片面印刷のとき、
General: Typemiss:oldlfont from	section レベルが出力されないの
oldlfonts 144	を修正184
1997/03/11 plfonts.dtx v1.3b	1997/09/03 jclasses.dtx v1.1f
General: すべてのサイズをロード可	\textheight: landscape での指定を
能にした 78	追加170
1997/04/08 jclasses.dtx v1.1e	1997/09/03 jclasses.dtx v1.1h
\topmargin: 横組クラスでの調整量	General: landscape オプションを互
を-2.4 インチから-2.0 インチに	換モードでも有効に 158
した。 173	オプションの処理時に縦横の値を
1997/04/08 plfonts.dtx v1.3c	交換 158
\DeclareTateKanjiEncoding@: 和	\textwidth: landscape での指定を
文エンコード宣言コマンドを縦組	追加 168
用と横組用で分けるようにした。 17	1997/12/12 jclasses.dtx v1.1i
1997/04/09 plfonts.dtx v1.3c	\ps@bothstyle: report, book クラ
\DeclareFixedFont: 縦横エンコー	スで片面印刷時に、bothstyle ス
ド・リストの分離による拡張 25	タイルにすると、コンパイルエ
1997/04/24 plfonts.dtx v1.3c	ラーになるのを修正 185
、 \fontfamily: フォント定義ファイ	1998/02/03 jclasses.dtx v1.1j
ル名を小文字に変換してから探	\topmargin: 互換モード時の a5p の
すようにした。 42	トップマージンを 0.7in 増加 . 173
1997/06/25 pl209.dtx v1.0f	1998/02/03 plcore.dtx v1.1g
\em:\em で和文を強調書体に 146	\@outputpage: \@shipoutsetup ₺
1997/06/25 plcore.dtx v1.1h	\@outputpage 内に入れた 98
\@gnewline: ĿATFX の改行マクロの	1998/02/03 plcore.dtx v1.1i
変更に対応。ありがとう、奥村	\@shipoutsetup: Command
さん。 83	removed
1997/06/25 plfonts.dtx v1.3d	1998/02/17 plvers.dtx v1.0f
\eminnershape: \em,\emph で和文	General: トム゙T _E X <1997/12/01>版用 に修正
を強調書体に 63	に修正
1997/07/02 plvers.dtx v1.0e	\@spart: report と book クラスで番
General: I≱T _F X <1997/06/01>版用	号を付けない見出しのペナルティ
ェ に修正 1	が \Moだったのを \@M に修正 197
1997/07/08 jclasses.dtx v1.1f	1998/04/07 jclasses.dtx v1.1m
General: 縦組時にベースラインがお	\heisei: \today の計算手順を変更 220
かしくなるのを修正 159	1998/08/10 plfonts.dtx v1.3f
1997/07/10 plfonts.dtx v1.3e	\DeclareFixedFont: プリアンブ
\fontfamily: fd ファイル名の小文	ル・コマンドにしてしまってい
字化が効いていなかったのを修正 42	たのを解除 25
fd ファイル名の小文字化が効いて	1998/09/01 plvers.dtx v1.0g
いなかったのを修正。ありがと	General: LATEX <1998/06/01>版用
う、大岩さん 42	に修正1
1997/07/29 jltxdoc.dtx v1.0b	1998/10/13 jclasses.dtx v1.1n
\xspcode: \と"の\xspcode を変	General: 動作していなかったのを修
更 225	正。ありがとう、刀袮さん 158
1997/08/25 jclasses.dtx v1.1g	\thetable: report, book クラスで
\ps@bothstyle: 片面印刷のとき、	chapter カウンタを考慮していな
section レベルが出力されないの	かったのを修正。ありがとう、
を修正 185	平川@慶應大さん。 208

1998/12/24 jclasses.dtx v1.1o	が、縦組で中身が空のボックス
\@makechapterhead: secnumdepth	だけの場合も適正になるように
カウンタを ―1 以下にすると、	修正87
見出し文字列も消えてしまうの	2001/05/10 plext.dtx v1.1i
を修正 199	\@iimakePbox: 縦組でzを指定する
1999/04/05 plcore.dtx v1.1j	とエラーになるのを修正。 139
\@gnewline: オプションを付けた場	2001/05/10 plfonts.dtx v1.3k
合に、余計な空白が入ってしま	\adjustbaseline: 欧文書体の基準
うのを修正。ありがとう、鈴木	を再び '/'から 'M' に変更 36
隆志@京都大学さん。 83	2001/09/04 jclasses.dtx v1.2
1999/04/05 plfonts.dtx v1.3g	\@makechapterhead: \chapter \mathcal{O}
\process@table: plpatch.ltx の内	出力位置がアスタリスク形式と
容を反映。ありがとう、山本さ	そうでないときと違うのを修正
λ ₀ 63	(ありがとう、鈴木@津さん) . 199
1999/04/05 plvers.dtx v1.0h	$\$ \@makeschapterhead: \chapter ${\cal O}$
General: PTEX <1998/12/01>版用	出力位置がアスタリスク形式と
に修正1	そうでないときと違うのを修正
1999/05/18 jclasses.dtx v1.1q	(ありがとう、鈴木@津さん) . 200
enumerate: 縦組時のみに設定するよ	2001/09/04 plcore.dtx v1.2
うにした 205	\@makespecialcolbox: 本文と
1999/08/09 jclasses.dtx v1.1r	\footnoterule が重なってしま
\topmargin: \if@stysize フラグに 限らず半分にする 174	うのを修正 90, 91
限らす半分にする 174 1999/08/09 plfonts.dtx v1.3h	2001/09/04 plvers.dtx v1.0l
\strut: 縦組のとき、幅のあるボッ	General: PTEX <2001/06/01>版用
クスになってしまうのを修正 13	に修正1
1999/08/09 plvers.dtx v1.0i	2001/09/26 plcore.dtx v1.2a
General: LATEX <1999/06/01>版用	\@outputpage: IATEX
に修正1	<2001/06/01>に対応 97
1999/1/6 jclasses.dtx v1.1p	2001/10/04 jclasses.dtx v1.3
\marginparwidth: \oddsidemargin	\@dottedtocline : 第5引数の書体
のポイントへの変換を後ろに . 175	を \rmfamily から \normalfont
2000/02/29 plvers.dtx v1.0j	に変更 214
General: LATEX <1999/12/01>版用	2002/04/05 plfonts.dtx v1.3l
ェ に修正 1	\adjustbaseline:
2000/07/13 plfonts.dtx v1.3i	\adjustbaseline でフォントの
\check@nocorr@: \text コマンド	基準値が縦書き以外では設定さ
の左側に \xkanjiskip が入らな	れないのを修正 36
いのを修正(ありがとう、乙部	2002/04/09 jclasses.dtx v1.4
@東大さん) 73	General: 縦組スタイルで
2000/10/24 plfonts.dtx v1.3j	\flushbottom しないようにし
\adjustbaseline: 文頭に鈎括弧な	<i>τ</i> ε
どがあるときに余計なアキがで	2004/06/14 plfonts.dtx v1.3m
る問題に対処 36	(Cnotffam: \fontfamily コマンド
2000/11/03 plvers.dtx v1.0k	内部フラグ変更 41
General: LATEX <2000/06/01>版用	\fontfamily: \fontfamily コマン
に修正 1	ド内部フラグ変更 41
2001/05/10 plcore.dtx v1.1j	2004/08/10 plfonts.dtx v1.3n
\@makecol: \@makecol で組み立て	\@changed@kcmd: 和文エンコーディ
られる \@outputbox の大きさ	ングの切り替えを有効化 40

\KanjiEncodingPair: 和文エンコー	\plEndIncludeInRelease を新
ディングの切り替えを有効化 18	設。3
\selectfont: 和文エンコーディン	2016/02/28 plcore.dtx v1.2c
グの切り替えを有効化 32	∖@iiiparbox: 1.2b と同様の修正を
2004/08/10 plvers.dtx v1.0m	\parbox 命令にも行った 116
General: L ^A T _E X <2003/12/01>版対	∖@tabular: 1.2b と同様の修正を
応確認 1	tabular 環境にも行った 115
2005/01/04 plfonts.dtx v1.3o	\underline: 1.2b と同様の修正を
\fontfamily: \fontfamily 中のフ	\underline 命令にも行った . 117
ラグ修正 41	2016/04/01 plcore.dtx v1.2d
2006/01/04 plfonts.dtx v1.3p	\@outputtombow: multicol パッケー
\DeclareFontEncoding@:	ジを使うとトンボの下端が縮む
\DeclareFontEncoding@中で	問題を修正 95
\LastDeclaredEncodeng の再定	2016/04/01 plfonts.dtx v1.6a
義が抜けていたので追加 15	\@text@composite: ベースライン補
2006/06/27 jclasses.dtx v1.6	正量が 0 でないときに \AA など
General: フォントコマンドを修正。	一部の合成文字がおかしくなる
ありがとう、ymt さん。 211	ことに対応するため再定義 68
2006/06/27 plfonts.dtx v1.4	\@text@composite@x: ベースライン
\reDeclareMathAlphabet:	補正量が 0 でないときに \AA な
\reDeclareMathAlphabet を修 正。ありがとう、ymt さん。 28	ど一部の合成文字がおかしくな
2006/11/10 plfonts.dtx v1.5	ることへの対応。 72
\reDeclareMathAlphabet:	2016/04/17 plvers.dtx v1.0u
\reDeclareMathAlphabet を修	General: LATEX <2016/03/31>版対
正。ありがとう、ymt さん。 28	応確認1
2016/01/26 plcore.dtx v1.2b	2016/04/30 plfonts.dtx v1.6b
\@makecol: \@outputbox の深さが	General: ptrace.sty の冒頭で
他のものの位置に影響を与えな	tracefnt.sty &
いようにする	\RequirePackageWithOptions
\vskip -\dimen@が縦組モード	するようにした 8
では無効になっていたので修正 87	2016/05/07 plvers.dtx v1.0v
∖@makefnmark: 2013年以降のpTEX	General: パッチファイルをロードす
(r28720) で脚注番号の前後の和	るのをやめた。2
文文字との間に xkanjiskip が	\everyjob: 起動時の文字列を最新の
入ってしまう問題に対応 103	PTEX に合わせた。2
2016/02/01 plfonts.dtx v1.6	2016/05/12 plvers.dtx v1.0w
\eminnershape: IATEX	\everyjob: 起動時の文字列に入れる
<2015/01/01>での \em の定義変	PTEX のバージョンを元の
更に対応。\eminnershape を追	IATEX のバナーから引き継ぐよ
加。	うに改良 2
2016/02/01 plvers.dtx v1.0s	起動時の文字列に入れる Babel の
General: IATEX <2015/01/01>版用	バージョンを元の IATEX のバ
に修正1	ナーから取得するコードを
latexrelease 利用時に警告を出す	platex.ini から取り入れた 2
ようにした 4	2016/05/20 plcore.dtx v1.2e
2016/02/03 plvers.dtx v1.0t	General: fltrace パッケージの
\plIncludeInRelease:	pIPTEX 版として pfltrace パッ
\plIncludeInRelease $arnothing$	ケージを新設 86

2016/06/06 plfonts.dtx v1.6c	\footnotetext: 閉じ括弧類の直後
\@text@composite: v1.6a での誤っ	に \footnotetext が続く場合に
た再定義を削除 (forum:1941) . 68	改行が起きることがある問題に
\@text@composite@x : v1.6a での修	対処 105
正でéなど全てのアクセント付	\pltx@foot@penalty: カウンタ
き文字で周囲に \xkanjiskip が	\pltx@foot@penalty を追加 . 104
入らなくなっていたのを修正。. 72	2016/08/26 plvers.dtx v1.0z
\g@tlastchart@:マクロ追加 66	General: platex.cfg の読み込みを
\pltx@isletter: マクロ追加 67	plcore.ltxからplatex.ltxへ
2016/06/08 kinsoku.dtx v1.0a	
General: T1 などの 8 ビットフォン	2016/09/01 plcore.dtx v1.2h
トエンコーディングのために	\@makecol: 縦組で longtable パッ
$128 ext{}256$ の文字を \xspcode=3	ケージを使って表組の途中で改
に設定 151	ページするとき無限ループが起
2016/06/19 plfonts.dtx v1.6d	こる問題に対処 (Issue 21) 87
、 \pltx@isletter: アクセント付き文	2016/09/08 plcore.dtx v1.2i
字をさらに修正 (forum:1951) . 67	\@footnotetext: v1.2g の修正で入
2016/06/19 plvers.dtx v1.0x	れた \null がまずかったので水
\ppatch@level: パッチレベルを	平モードのときだけ発行するこ
plvers.dtx で設定 1	とにした (Issue 23) 105
2016/06/26 plfonts.dtx v1.6e	2016/09/14 plvers.dtx v1.1
\@text@composite@x: v1.6a 以降の	\everyjob: 起動時のバナーを取得す
修正で全てのアクセント付き文	るコードを改良 2
字でトラブルが相次いだため、	2016/11/07 plext.dtx v1.2b
いったんパッチを除去。 72	\@@rensuji: 横組で段落の頭に
2016/06/27 plvers.dtx v1.0y	\rensuji を使えるように
General: platex.cfg の読み込みを	\leavevmode を追加して修正 141
追加 3	2016/11/09 plcore.dtx v1.2j
2016/06/30 plcore.dtx v1.2f	\e@alloc@top: FAM256 パッチ適用
\AtBeginDvi: \@begindvibox を常	e-pT _E X に対応 118
に横組に 102	\e@mathgroup@top: FAM256 パツ
2016/07/25 jltxdoc.dtx v1.0c	チ適用 e-pTpX に対応 119
\verb: doc パッケージが上書きする	2016/11/12 jclasses.dtx v1.7
\verb を再々定義 224	\@makefntext: Replaced all \hbox
2016/08/20 plext.dtx v1.2a	to by \hb@xt@ (sync with
\@iiiparbox: \parbox 前後の余分	classes.dtx v1.3a) 219
な \xkanjiskip を削除 135	\footnoterule: use \@width (sync
\endtabular: tabular 環境後の余分	with classes.dtx v1.3a) 219
な \xkanjiskip を削除 125	thebibliography: Moved
\p@array: 横組で <t>を指定した場</t>	\@mkboth out of heading arg
合に \@arstrutbox を余計に	(sync with classes.dtx v1.4c) 218
\hbox に入れていたのを修正 . 124	theindex: \columnsep \&
\p@tabular: tabular 環境前の余分	\columnseprule の変更を後ろ
な \xkanjiskip を削除 124	に移動 (sync with classes.dtx
2016/08/25 plcore.dtx v1.2g	v1.4f) 219
\@footnotetext: 脚注の合印直後で	\listoffigures: Moved \@mkboth
の改行が禁止されてしまう問題	out of heading arg (sync with
に対処 105	classes.dtx v1.4c) 217
\footnote: 合印の前の文字と合印の	\listoftables: Moved \@mkboth
間をベタ組に 104	out of heading arg (sync with

classes.dtx v1.4c) $\dots 217$	Changed \endgraf to \@@par	
\maketitle: ドキュメントに反して	(sync with ltboxes.dtx v1.0y)	135
∖@maketitle が空になっていな	Ensure \@parboxto holds the	
かったのを修正 191	value of \@tempdimb not the	
2016/11/16 jclasses.dtx v1.7a	register itself (pr/3867) (sync	
\@dottedtocline: Added		135
$\nonline \normalfont{1}{\normalfon$	\@iminipage: Changed \@empty to	
with ltsect.dtx v1.0z) 214	\relax as flag for natural	
\@makechapterhead: replace	width: $pr/2975$ (sync with	
\reset@font with \normalfont		133
(sync with classes.dtx v1.3c) 199	\@iparbox: Changed \@empty to	
\@makeschapterhead: replace	\relax as flag for natural	
\reset@font with \normalfont	width: pr/2975 (sync with	
(sync with classes.dtx v1.3c) 200		135
\@part: replace \reset@font with	\endminipage: put \global into	
\normalfont (sync with	definition of \@minipagefalse	
classes.dtx v1.3c) 196		134
\@spart: replace \reset@font	\p@tabular: Use \setlength, so	
with \normalfont (sync with	that calc extensions apply	
classes.dtx v1.3c) 197	,	124
enumerate: Use \expandafter	\X@minipage: Changed \@empty to	
(sync with ltlists.dtx v1.0j) . 205	\relax as flag for natural	
\paragraph: replace \reset@font	width: pr/2975 (sync with	
with \normalfont (sync with		133
classes.dtx v1.3c) 200	\X@parbox: Changed \@empty to	
\part: Check @noskipsec switch	\relax as flag for natural	
and possibly force horizontal	width: pr/2975 (sync with	
mode (sync with classes.dtx	- , , -	135
v1.4a) 196	2016/11/22 jclasses.dtx v1.7b	
\section: replace \reset@font	\backmatter: 補足ドキュメントを	
with \normalfont (sync with	追加	194
classes.dtx v1.3c) 200	2016/12/18 jclasses.dtx v1.7c	
\subparagraph: replace	\@endpart: Only add empty page	
\reset@font with \normalfont	after part if twoside and	
(sync with classes.dtx v1.3c) 200	openright (sync with	
\subsection: replace \reset@font		198
with \normalfont (sync with	\@schapter: 奇妙な article ガード	
classes.dtx v1.3c) 200	とコードを削除してドキュメン	
\subsubsection: replace		200
\reset@font with \normalfont	2017/02/04 plext.dtx v1.2d	
(sync with classes.dtx v1.3c) 200	\kanji: \Kanji の引数だけでなく後	
itemize: Use \expandafter (sync	に連続する数字も漢数字になっ	
with ltlists.dtx v1.0j) 205	てしまうバグを修正	142
2016/11/19 plext.dtx v1.2c	2017/02/15 jclasses.dtx v1.7d	
\@iiiminipage: Use \@setminpage	General: openleft オプション追加	159
(sync with ltboxes v1.1a) 134	\if@openleft: \if@openleft ス	
\@iiiparbox: Changed \@empty to	イッチ追加	156
\relax as flag for natural	titlepage: book クラスで titlepage	
width: pr/2975 (sync with	を必ず奇数ページに送るように	
ltboxes.dtx v1.1f) 135	変更	188
,		

titlepage のページ番号を奇数なら	2017/03/10 v1.3c) 98
ば1に、偶数ならば0にリセッ	\verb: \verb の途中でハイフネー
トするように変更 188	ションが起きないように
\p@thanks: 縦組クラスの所属表示の	\language を設定 (sync with
番号を直立にした 189	ltmiscen. $dtx 2017/03/09$
\pltx@cleartoevenpage:	v1.1m) 109
\cleardoublepage の代用とな	2017/03/19 plvers.dtx v1.1b
る命令群を追加 180	General:
2017/02/20 plcore.dtx v1.2k	\document@default@language
\@setref: 目次で \ref を使った場	の定義を保証 (sync with
合に後ろの空白が消える現象に	ltfinal.dtx $2017/03/09 \text{ v2.0t}$) 3
対処するため、\relax のあとに	\1@nohyphenation の定義を保証
{} を追加 107	(sync with ltfinal.dtx
2017/02/20 plfonts.dtx v1.6f	$2017/03/09 \text{ v}2.0t) \dots 3$
\set@fontsize: \ystrutbox を組み	2017/03/28 plext.dtx v1.2f
立てるように 35	\fork@array@option: 表と周囲との
\strut: \strutbox の代わりに	揃え位置を修正 126
\ystrutbox を使用 13 \strutbox: \strutbox を縦横両対	\fork@parbox@option: 段落の箱と
. t	周囲との揃え位置を修正 137
応に	2017/04/23 plcore.dtx v1.2n
\ystrutbox: \ystrutbox を追加 12	\@gnewline:ドキュメントの追加 . 84
2017/02/20 plvers.dtx v1.1a	2017/04/23 plvers.dtx v1.1c
General: 译TEX <2017/01/01>版対	General: IATEX <2017-04-15>版対
応確認	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
2017/02/25 plcore.dtx v1.2l	2017/05/03 plcore.dtx v1.2o
\@makecol: 脚注とボトムフロートの	\@no@lnbk: 行頭禁則文字の直前でも
順序を入れ替えたことで版面全	改行するようにした 84
体の垂直位置がずれていたのを	2017/05/04 plext.dtx v1.2g
修正 (Issue 32) 86	\@iimakePbox: Use \setlength, so
\@makespecialcolbox: \@makecol	that calc extensions apply 139
を変更したのに	\pbox: Make \pbox Robust 138
\@makespecialcolbox を変更し	2017/07/21 plcore.dtx v1.2p
ない、という判断について明文化 90	\@classv: tabular 環境のセル内の
2017/03/02 plext.dtx v1.2e	JFM グル―を削除 115
\parbox: Make \parbox Robust	\@tabclassz: tabular 環境のセル内
(sync with ltboxes $2015/01/08$	の JFM グル─を削除 111
v1.1h)	2017/07/21 plext.dtx v1.2h
2017/03/05 jclasses.dtx v1.7e	\fork@array@option: 表と周囲との
General: トンボに表示するジョブ情	揃え位置をさらに修正 126
報の書式を変更 158	2017/08/05 kinsoku.dtx v1.0b
\backmatter: \frontmatter と	General: %、&、%、&の禁則ペナ
\mainmatter を奇数ページに送 るように変更 194	ルティが誤っていたのを修正
るように変更 194 2017/03/07 plfonts.dtx v1.6g	$(post \rightarrow pre) \dots 148$
\textunderscore: ベースライン補	2017/08/05 plfonts.dtx v1.6h
では 正量を修正 64	\adjustbaseline: trace \mathcal{O} \supset \vdash \vdash
2017/03/19 plcore.dtx v1.2m	の%忘れを修正 37
\@outputpage: \language をリセッ	和文書体の基準を全角空白から
\(\text{(sync with ltoutput.dtx}\)	「漢」に変更 37

2017/08/25 plcore.dtx v1.2q	\platexrelease のエミュレー
\@no@lnbk: \nolinebreak の場合に	ト内部処理を分離 3
\(x)kanjiskip が入らなくなっ	2017/11/11 plvers.dtx v1.1f
ていたのを修正 84	General: L ^A T _E X のバナーを保存する
2017/08/31 jclasses.dtx v1.7f	コードを platex.ltx から
\Chs: 和文書体の基準を全角空白か	plcore.ltx へ移動2
ら「漢」に変更 163	2017/12/04 plvers.dtx v1.1g
2017/09/19 jclasses.dtx v1.7g	\everyjob: plPT _E X のバナーの定義
\Chs: 内部処理で使ったボックス 0	時に \pfmtname, \pfmtversion,
を空にした 163	\ppatch@level を展開しないよ
2017/09/24 jltxdoc.dtx v1.0d	うに 2
\verb: を追加 224	2017/12/05 plfonts.dtx v1.6k
2017/09/24 plfonts.dtx v1.6i	General: デフォルト設定ファイルの
\<: \< が段落頭でも効くようにした 74	読み込みを plcore.ltx から
\check@nocorr@: 2010年の pT _E X	platex.ltx へ移動 75
本体の修正により、v1.3iで入れ	2018/01/10 plvers.dtx v1.1h
た対処が不要になっていたので	\plIncludeInRelease: Modify
削除	$\verb \plincludeInRelease code to$
2017/09/24 plvers.dtx v1.1d	check matching
\everyjob: パッチレベルが負の数の	$\verb \plEndIncluderelease (sync$
場合を pre-release 扱いへ 2	with ltvers.dtx $2018/01/08$
2017/09/26 plcore.dtx v1.2r	v1.1a) 3
\@tabclassz : tabular 環境の右揃え (r) で罫線がずれるようになって	2018/01/27 plcore.dtx v1.2v
(I) C野椒がすれるようになり C いたバグを修正 111	\@no@lnbk: v1.2o と v1.2q の修正で
2017/09/27 plcore.dtx v1.2s	\nolinebreak が効かない場合
\@setref: 相互参照のスペースファ	があったので、元に戻した 84
クターを補正 107	2018/02/04 jclasses.dtx v1.7h
\@startline: tabbing 環境の行冒頭	\Cjascale: 和文スケール値
の JFM グルーを削除 110	\Cjascale を定義 165
verb: verb の冒頭の半角空白を保	2018/02/04 plfonts.dtx v1.6l
持	General: 和文スケール値を明文化 78
2017/10/31 plcore.dtx v1.2t	2018/02/24 plcore.dtx v1.2w
\@setref: v1.2s の変更に伴い、	\e@alloc@top: $e ext{-upT}_{ ext{EX}}$ でも
\ref が数式モードでエラーに	\omathchardef を使用 118
なっていたのを修正 107	2018/03/01 plcore.dtx v1.2x
2017/11/04 plcore.dtx v1.2u	\@classv: セル最初の \par で空行
\@setref: emath ∅ \marusuuref	が入らないようにした 115
対策 107	\@tabclassz: \removejfmglue $ガ$
2017/11/06 plfonts.dtx v1.6j	あれば利用するようにした 111
General: 縦横のエンコーディングの	\pltx@next@inhibitglue:
セット化を plcore から pldefs へ	\everyparに\inhibitglueを
移動75	仕込むマクロ追加 115
\ct@encoding: \cy@encoding \angle	\removejfmglue: JFM グルーノー
\ct@encoding を具体的な値で	ドを削除するマクロ追加 82
はなく「空」で初期化8	2018/03/12 plcore.dtx v1.2y
2017/11/09 plvers.dtx v1.1e	\pltx@next@inhibitglue:
\plIncludeInRelease:	\inhibitglueを\everyparの
latexrelease $arnothing$	末尾に移動 115

2018/03/31 plfonts.dtx v1.6m	\@tombowreset@@paper: コマンド
\DeclareFontEncoding@: utf8.def	に分離、さらに bleed 幅を
由来のコードを追加 16	\@tombowbleed に切り出し 97
2018/03/31 plvers.dtx v1.1i	\maketombowbox: bleed 幅を
General: I $ oldsymbol{E}$ TEX 2_{ε} 2017-04-15 以降	\@tombowbleed に切り出し 93
必須1	2018/07/03 jclasses.dtx v1.8
2018/04/06 plfonts.dtx v1.6n	\ 和暦: \today のデフォルトを和暦
\DeclareFontEncoding@:	から西暦に変更 220
\UseRawInputEncoding で使わ	2018/07/03 plfonts.dtx v1.6q
れる \DeclareFontEncoding@の	General: シリーズ b が bx と等価に
保存版(従来の定義)を準備	なるように宣言 78
(sync with ltfinal.dtx	2018/07/25 plfonts.dtx v1.6r
$2018/04/06 \text{ v2.1b}) \dots 15$	\@text@composite@x:
2018/04/07 plvers.dtx v1.1j	\[no]fixcompositeaccent ♥
General: IATEX <2018-04-01>版対	クロ追加
応確認1	コード整理 72
2018/04/08 plfonts.dtx v1.6o	\pltx@isletter: PDF のしおりに
\DeclareFontEncoding@: Delay	アクセント文字が含まれる場合
full UTF-8 handling to	に対応 67
\everyjob (sync with	\pltx@ltx@sh@ft: コード追加 66
ltfinal.dtx $2018/04/08 \text{ v2.1d}$) . 16	\pltx@oalign: コード追加 65
2018/04/08 plvers.dtx v1.1k	\pltx@saved@ltx@sh@ft: コード追 加66
\everyjob: バナー調節のコードを最	7-11
後 (plfinal) ではなく最初	
(plcore) に早めた 2	\pltx@saved@text@composite@x: コード整理68
2018/04/09 plfonts.dtx v1.6p	\pltx@text@composite@x: コード
\DeclareFontEncoding@: $v1.6o$ $ ilde{ ilde{c}}$	整理 69
加えた対策を削除。参考:	2018/09/02 plcore.dtx v1.3
plvers.dtx $2018/04/09 \text{ v}1.11 \mathcal{O}$	\@outputtombow: platexrelease
\everyjob 16	バグ修正 95
2018/04/09 plvers.dtx v1.1l	\removejfmglue: \removejfmglue
General: バナーの保存しかたを改良 2	の挙動を明文化 82
\everyjob: バナーの再構築のしかた	2018/09/09 plext.dtx v1.2i
を改良2	\@@rensuji: 縦数式ディレクション
2018/05/13 plcore.dtx v1.2z	の連数字 141
\@outputpage:	\@pcaption : Made caption an
\@tombowreset@@paper コマン	error outside a float:
ドに分離 98	latex/2815 (sync with ltfloat
\Coutputtombow: 色の付いたテキス	1999/04/19 v1.1u) 130
トの途中で改ページするとトン	\DeclareLayoutCaption: 安全のた
ボにも色が付く現象に対処、さ	め、 $\backslash DeclareLayoutCaption$ で
らにトンボの色を	定義する内部命令を
\@tombowcolor へ・bleed 幅を \@tombowbleed に切り出し 95	\@layoutcaptionから
	\@layoutc@ption 个変更 . 130
\@tombowbleed: \@tombowbleed マ	\p@array: Check for hmode to see
クロ追加 92	if something went wrong during
\@tombowcolor: \@tombowcolor マ	parsing (pr/2884) (sync with
クロ追加 92	lttab.dtx 1998/11/13 v1.1m) 125

Moved the code associated with	2019/04/02 jclasses.dtx v1.8b
\@mkpream into the group	\heisei: \heisei の値は
provided by the box, for	西暦 – 1988 で固定 220
robustness ($latex/2183$) (sync	\pltx@today@year: \today の計
with lttab.dtx $1996/10/21$	算・出力方法を変更。 220
v1.1i)	2019/08/13 plfonts.dtx v1.6s
$\operatorname{Use} \$	General: Explicitly set some
(sync with lttab.dtx	defaults after
$1996/10/21 \text{ v1.1i}) \dots 124$	\DeclareErrorKanjiFont
2018/09/20 plext.dtx v1.2j	change (sync with ltfssini.dtx
\p@tabular: Change \@stabular	$2019/07/09 \text{ v}3.1c) \dots 75$
to \p@stabular, to avoid	\DeclareErrorKanjiFont:
conflict with stabular package 124	\DeclareErrorKanjiFont:
2018/09/24 plvers.dtx v1.1m	Don't set any \k@ macros
\everyjob: バナーの再構築を簡略化 2	(sync with ltfssbas.dtx
2018/10/07 plext.dtx v1.2k	$2019/07/09 \text{ v3.2c}) \dots 21$
\DeclareLayoutCaption: キャプ	2019/09/16 plcore.dtx v1.3c
ションのデフォルトの組方向を y	\AtBeginDvi: Make \AtBeginDvi
から n へ変更 (forum:2506,	robust (sync with ltoutput.dtx
issue 76) 130	2019/08/27 v1.4e) 102
$\mbox{\colored}$ \make@pcaptionbox: $+ r T > 3$	\underline: Make \underline
の組み方向が基本組の組み方向	robust (sync with ltboxes.dtx $2019/08/27 \text{ v1.3b}$) 117
と直交する場合に、深さを忘れ	2019/09/27 V1.3b) 117 2019/09/16 plfonts.dtx v1.6t
ていたバグ修正 (forum:2506,	\strut: Make \strut, \tstrut
issue 76)	etc. robust (sync with
2018/10/25 jclasses.dtx v1.8a	ltdefns.dtx 2019/08/27 v1.5f) 13
\addcontentsline: ファイル書き出	\usefont: Make \usefont etc.
し時の行末文字対策 (sync with	robust (sync with ltfssbas.dtx
ltsect.dtx $2018/09/26 \text{ v}1.1c)$ 214	2019/08/27 v3.2d) 50
2018/10/31 plcore.dtx v1.3a	2019/09/16 plvers.dtx v1.1p
General: $\LaTeX 2_{\varepsilon} \succeq p \LaTeX 2_{\varepsilon} \mathcal{O}$	\plIncludeInRelease: エラーメッ
更新タイミングずれ対策を	セージを更新 (sync with
plvers.dtx (plfinal) から	ltvers.dtx 2019/07/01 v1.1c) 3
plcore.dtx へ移動、	2019/09/29 plext.dtx v1.2l
latexrelease 対策 (sync with	\bou: Make \bou robust 142
ltfinal $2018/08/24 \text{ v2.1f}$) 120	\kasen: Make \kasen robust 143
2018/10/31 plvers.dtx v1.1n	2019/09/29 plfonts.dtx v1.6u
General: $\LaTeX 2_{\varepsilon} \succeq p \LaTeX 2_{\varepsilon} \mathcal{O}$	\adjustbaseline: Make
更新タイミングずれ対策を	\adjustbaseline robust 37
plvers.dtx (plfinal) から	\userelfont: Make \userelfont
plcore.dtx へ移動3	robust 31
2018/12/01 plvers.dtx v1.1o	2019/10/01 plvers.dtx v1.1q
General: PTEX <2018-12-01>版対	General: L ^A T _E X <2019-10-01>版対
応確認1	応確認 1
2019/02/08 plcore.dtx v1.3b	2019/10/17 jclasses.dtx v1.8c
\@tabclassz : 中央揃えのセルでの	\@normalsize: フォントサイズ変更
\unskip 対策 (sync with lttab	命令を robust に (sync with
$2018/12/30 \text{ v}1.1\text{p}) \dots 111$	classes.dtx 2019/08/27 v1.4j) 163

\footnotesize: フォントサイズ変	ltfssbas.dtx 2019/12/17 v3.2e) 50
更命令を robust に (sync with	2020/02/01 plvers.dtx v1.1r
classes.dtx $2019/08/27 \text{ v}1.4\text{j}$) 164	General: LATFX <2020-02-02>版対
\Huge: フォントサイズ変更命令を	応確認1
robust & (sync with classes.dtx	2020/02/03 plfonts.dtx v1.6w
$2019/08/27 \text{ v}1.4\text{j}) \dots 164$	\init@series@setup: 巻き戻しのバ
\small: フォントサイズ変更命令を	グ修正 59
robust $\ensuremath{\mathcal{C}}$ (sync with classes.dtx	2020/02/24 plfonts.dtx v1.6y
$2019/08/27 \text{ v}1.4\text{j}) \dots 163$	\fontseriesforce: Switch
2019/10/19 plcore.dtx v1.3d	\if@forced@series added
\e@alloc@top: 判定順序を修正;	(sync with ltfssaxes.dtx
extended mode かつ FAM256	2020/02/18 v1.0c) 44
拡張ありの場合に限りレジスタ	\mdseries: Make the \ifx
数が 65536 個のため。 118	selection outside of
\float@count: コピー忘れ 119	\fontseries argument so that
2019/10/25 jclasses.dtx v1.8d	it is not done several times
\@normalsize: Don't use	(sync with ltfssini.dtx
\MakeRobust if in rollback	2020/02/18 v3.1i) 55
prior to 2015 (sync with	\update@series@target@value@kanji:
classes. $dtx 2019/10/25 v1.4k$) 163	No series auto-update when
2020/01/03 jclasses.dtx v1.8e	forced (sync with ltfssini.dtx
\labelitemiv: Normalize label	2020/02/18 v3.1i) 56
fonts (sync with classes.dtx	Recognize current family if it is
$2019/12/20 \text{ v}1.4\text{l}) \dots 205$	not a "meta" family and
2020/02/01 plfonts.dtx v1.6v	auto-update series using
General: Set \kanjishapedefault	\bfdefault (sync with
explicitly to "n" (sync with	ltfssini.dtx 2020/02/18 v3.1i) . 56
fontdef.dtx 2019/12/17 v3.0e) 76	2020/02/28 plfonts.dtx v1.6z
\<: 定義を pldefs から plcore へ移動 74	\pltx@latex@level:
\eminnershape: Support \emph	\series@maybe@drop@one@m \mathcal{O}
sequences (sync with	存在確認 43
ltfssini.dtx 2019/12/17 v3.1e) 63	\set@target@series@kanji: Drop
定義を pldefs から plcore へ移動 63	"m" only in a specific set of
\fontseriesforce: New	values (sync with ltfssaxes.dtx
commands \fontseriesforce	2020/02/27 v1.0d) 45
etc. (sync with ltfssaxes.dtx	\update@series@target@value@kanji:
2019/12/16 v1.0a) 44	Drop surplus "m" from
\fontshapeforce: New commands	\target@series@value (sync
\fontshapeforce etc. (sync	with ltfssini.dtx 2020/02/25
with ltfssaxes.dtx 2019/12/16 v1.0a) 47	v3.1j)
v1.0a) 47 \mdseries@gt: L ^A T _F X が mweights	2020/03/05 plcore.dtx v1.3e
パッケージを基にしたシリーズ	\do@noligs: 合字処理を抑止しつつ
のカスタム設定を導入したので、	\xkanjiskip は挿入 109
これをサポート (sync with	2020/03/05 plfonts.dtx v1.7
ltfssini.dtx $2019/12/17 \text{ v3.1e}$) 53	\inlist@: 引数・リストとも
ttissiii.dtx 2019/12/17 vs.1e) - 55 \textgt: 定義を pldefs から plcore	\detokenize によって文字列化 10
へ移動59	\pltx@do@subst@correction@tate:
\usefont: Don't call \fontseries	\do@subst@correctionの日本
or \fontshape (sync with	語化 26
or tronomapo (sync with	ны ш

\pltx@latex@level: \series@maybe@drop@one@m@x の存在確認 43 2020/03/06 plfonts.dtx v1.7a \normalfont:	2020/03/25 plvers.dtx v1.1t \everyjob: バナーの再構築を効率化 2 2020/03/26 plfonts.dtx v1.7e \DeclareKanjiSubstitution:
へ Qdefaultfamilyhook を活用 (sync with ltfssini.dtx	\default@k@を使用 20 \ensure@KanjiEncodingPair: 縦横 エンコーディングのセット化確認 18
2020/02/10 v3.1h) 52 2020/03/14 plfonts.dtx v1.7b General: 古い トffトネX 2 ε でもフォー	\selectfont: 縦横エンコーディン グのセット化確認 32
マット生成が通るように 59 2020/03/14 plvers.dtx v1.1s	\wrong@ja@fontshape: \wrong@fontshape の和文対応 22
General: LPT _E X <2020-02-02> PL5 版対応確認	2020/03/28 plvers.dtx v1.1u General: latexrelease 利用時の警告 を早めた
\fontshape/\fontshapeforce が和文シェイプ未定義の場合は \k@shape を更新しないように変	\mdseries: Support legacy use of \bfdefault and \mddefault, use
更	\@setYYseriesdefaultshook (sync with ltfssini.dtx 2020/03/19 v3.1k and
ドキュメント改艮 26	$2020/04/06 \text{ v}3.1\text{m}) \dots 55$

イタリック体の数字は、その項目が説明されているページを示しています。下線の 引かれた数字は、定義されているページを示しています。その他の数字は、その項 目が使われているページを示しています。

Symbols	\@Alph g1321,
\ h50	$g1322,\ g1330,\ g1331,\ g1415,\ g1421$
\# f4	\@alph g1413, g1419
\\$ f5	\@ampacol
\% f6	c1113, c1137, c1168, c1197, c1226
\& f7	\@arabic g1122, g1124, g1125,
\ g1797	g1127, g1129, g1131, g1133,
\< b2463	g1137, g1139, g1140, g1142,
\@@enc@update b1093	g1144, g1146, g1148, g1412,
\@@end a14, a23, b2541	g1418, g1511, g1514, g1518,
\@@endpbox d48	g1521, g1538, g1541, g1545,
\@@if@newlist	g1548, g1587, g1591, g1785, g1792
c605, c655, c672, c726, c741, c795	\@arrayacol
$\verb \coloredge \verb b1105 , b1114 $	\Qarrayclassiv
\@@paperheight c502, c529,	\@arrayclassz
c551, <u>c569</u> , c581, c582, c694, c763	\@arstrut d47
\@@paperwidth c505, c508, c510, c512,	\@arstrutbox
c514, c530, c533, c535, c537,	\\Qauthor g949, g999, g1013, g1052, g1071
c539, c552, c555, c557, c559,	\@auxout g1655
$c561, \ \underline{c569}, \ c579, \ c580, \ c693, \ c762$	\@badtab c1076, c1090
\@@par c1312, c1335, d54, d337, d340	\@bannerfont <u>c393</u> , c405, c454
\@@picture $d455$, $\underline{d456}$	\@bannertoken <u>c393</u> , <u>c405</u> , <u>c454</u> , <u>g70</u>
\@@rensuji $\underline{d509}$	\@BC . <u>c388</u> , c427, c475, c515, c540, c562
\c 0@startpbox $d48$	\@begin@alignbox d23, d64, d70, d76,
\@dtopmargin $c569$, $c577$, $c583$, $c634$,	d81, d88, d95, d100, d103, d106,
c691, c695, c706, c760, c764, c775	d113, d116, d119, d124, d127, d130
\@@underline c1355,	\@begin@parbox
c1356, c1363, c1364, c1371, c1372	d346, d355, d358, d361, d364,
\@acol c1121, c1145, c1176,	d369, d372, d375, d378, d383,
c1205, c1234, c1281, c1288, d3, d17	d386, d389, d392, d399, d402,
\@acolampacol c1111,	d405, d408, d413, d416, d419, d422
c1119, c1135, c1143, c1166,	\@begin@tempboxa
c1174, c1195, c1203, c1224, c1232	c1312, c1335, d336, d339
\@addamp	\@begindocumenthook a109, a110
c1117, c1141, c1172, c1201, c1230	\@begindvi c632, c704, c773
\@addtopreamble c1249, c1255, c1260	\@begindvibox
\@addtoreset g1589, g1822	c807, c808, c815, c816, c823, c824
\@afterheading	\\(\text{Qbeginparpenalty} \text{g1083}, \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\
g1199, g1225, g1267, g1286	\@biblabel g1785, g1786, g1802
$\c g1170, g1251, g1642$	\@BL . <u>c388</u> , c421, c469, c515, c540, c562

 $\label{eq:File Key: a=plvers.dtx} \textbf{ a=plvers.dtx}, \textbf{ b=plfonts.dtx}, \textbf{ c=plcore.dtx}, \textbf{ d=plext.dtx}, \textbf{ e=pl209.dtx}, \textbf{ f=kinsoku.dtx}, \textbf{ g=jclasses.dtx}, \textbf{ h=jltxdoc.dtx}$

\@B1 . <u>c388</u> , c424, c472, c512, c537, c559	\@defaultunits b928, b930, b966, b968
\@bou d537, d538, d554	\@depth b941, b944, b947,
\@BR . <u>c388</u> , c431, c479, c515, c540, c562	b979, b982, b985, d29, d32, d35,
\@Br . <u>c388</u> , c434, c482, c512, c537, c559	d40, d43, d519, d520, d521, d560
\@bsphack h43, h44, h45	\@dotsep g1632, g1648
\@captionbox	\@dottedtocline
d144, d218, d222, d224, d226, d269	g1638, g1723, g1724, g1728,
\@captype d199, d203,	$g17\overline{29}, g1730, g1731, g1734,$
d206, d232, d233, d237, d248, d264	g1735, g1736, g1737, g1742,
\@cclv c157, c198, c229, c260	g1743, g1744, g1745, g1748,
\@cclvi	g1749, g1750, g1751, g1765, g1766
b2264, b2308, b2311, b2312, b2320	\@eha b340, b359,
\@centercr g1494	b382, b407, b821, b880, b1087,
$\verb \colored \verb Cchanged @ cmd $	b1099, b1131, d213, g1610, g1614
$\verb \docker b261, b285, b1115, \underline{b1136}$	\@ehd c15, d200
$\c g847, g871, g905, g930,$	\@elt b1728, b1730, b1731, b1759,
$\underline{g1150}$, $g1257$, $g1259$, $g1277$, $g1328$	b1761, b1762, b1781, b1789,
\@chappos . g847, g871, g905, g930,	b1940, b1942, b1943, b1970,
g1150, g1257, g1259, g1277, g1329	b1972, b1973, b1991, b1999, c158
\@chapter g1252, g1253	\@enablejfamfalse g113
\@check@plIncludeInRelease	\@enablejfamtrue g16
a96, a97, a98, a100	\@end@alignbox
\@chnum c1125, c1149, c1180, c1209, c1238	d56, d57, d68, d74, d77,
\Qcite $g1803$	d86, d93, d96, d101, d104, d107,
\@CL . <u>c391</u> , c438, c485, c510, c535, c557	d114, d117, d120, d125, d128, d131
\@classiv c1283, c1290, d4, d19	\@end@check@plIncludeInRelease .
\@classv $\underline{c1246}$	a97, a99
\@classz c1282, c1289, d3, d18	\@end@parbox
$\c \c g1795$	d348, d356, d359, d362, d365,
\@colht c180,	d370, d373, d376, d379, d384,
c205, c236, c267, c301, c307,	d387, d390, d393, d400, d403,
c311, c329, c334, c656, c727, c796	d406, d409, d414, d417, d420, d423
$\colored{Combinefloats}$ c161, c201, c232, c263	\@end@tempboxa c1325, c1348, d349
\QCR . $\underline{c391}$, c441, c488, c510, c535, c557	\@endparpenalty g1086, g1351
\@curline c1081, c1095	\@endpart g1218, g1232, g1234
\@current@cmd b1116	\Qendpbox c1250, c1256, c1261, d48
\@currentlabel c912, c935, c957	
\@currname a72, a80	\@enumctr g1441, g1442, g1452
\@curtab c1080, c1094	\\(\text{Qenumdepth} \) \(\text{g1439}, \text{g1440}, \text{g1441}, \text{g1448} \)
\@curtabmar . c1079, c1080, c1093, c1094	\@eqnnum <u>d565</u>
\@date g950, g1002, g1014, g1053, g1074	\@esphack h43, h45
\@dblarg d206	\@evenfoot c620,
\@dblfloat g1533, g1560	$c687, c756, \underline{g806}, g811, g819,$
\@dblfpbot $\underline{g738}$	g822, g824, g829, g882, g888, g938
\@dblfpsep $\dots g738$	\@evenhead $c619, c686, c755,$
\@dblfptop $g738$	<u>g806</u> , g810, g815, g817, g826,
\@defaultfamilyhook	g830, g832, g881, g887, g939, g941
\dots b1530, b1532, b1549, b1551	\@expandfontdefaultshook b1611
\@defaultsubs . b505, b536, b581, b616	\@finalstrut c917, c940, c962

 $\label{eq:file-key:} \textbf{File-Key:} \ \ a = \texttt{plvers.dtx}, \ b = \texttt{plfonts.dtx}, \ c = \texttt{plcore.dtx}, \ d = \texttt{plext.dtx}, \ e = \texttt{pl209.dtx}, \\ f = \texttt{kinsoku.dtx}, \ g = \texttt{jclasses.dtx}, \ h = \texttt{jltxdoc.dtx}$

\@firstampfalse	\@ifnextchar c20,
c1121, c1145, c1176, c1205, c1234	c863, c867, c875, c879, c889,
\@firstofone d204	c897, d8, d10, d12, d20, d146,
\@firstoftwo b751,	d149, d185, d186, d187, d190,
b2167, b2171, b2178, b2187,	d191, d194, d273, d275, d277,
b2196, b2200, b2209, b2244, b2337	d279, d323, d325, d327, d329,
\@float g1530, g1557	d279, d329, d327, d329, d426, d428, d430, d452, d454, d511
\\(\text{@floatbox} \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\@ifstar c1024, c1036, c1046, d510, h49
	\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\
\\(\text{QfontQinfo} \cdot \text{b178}, \text{b206}, \\ \text{b228}, \text{b266}, \text{b290}, \text{b304}, \text{b310}, \\ \text{constant} \)	\\(\mathref{Q}\)iiminipage \(.\ddot\) \\(\ddot\)278, \(\ddot\)281
b854, b914, b955, b993, b1462	
\@font@shape@subst@warning	\@iiiparbox <u>c1304,</u> d322, d326, d328, d330, <u>d331</u>
b1290, b1293,	
b1397, b1401, b1404, b1439,	\@iilayoutcaption d183
b1442, b1886, b1889, b1907, b1910	\@iimakePbox
\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\\Quad \Quad \\Quad \Quad \\Quad \Quad \\Quad \Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \Quad \\Quad \Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \\Quad \Quad \Quad \\Quad \Quad \Quad \\Quad \Quad \Quad \Quad \\Quad \Quad \Quad \Quad \Quad \Quad \\Quad \Quad \Qua
b532, b537, b577, b582, b610, b617	\@iiparbox d328, <u>d329</u>
\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\@ilayoutcaption d183
\@footnotemark	\@imakePbox d428, d430
. c865, c870, c877, c882, <u>c966</u> , <u>e11</u>	\@imakepbox
\@footnotetext	\@iminipage d276, \d276,
c865, c877, c891, c899, <u>c901</u> , d305	\@inmathwarn b1138
\\Qforced\Qseriesfalse \\.\b\begin{array}{c} \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\@input@ c1101
\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\@iparbox d326, d327
b1215, b1261, b1262	\@itemdepth g1467, g1468, g1469, g1476
\@fpbot g723	\@itemitem g1469, g1470
	\@itempenalty $g1351$
\@fpsep <u>g723</u>	\@ixpt e68, g179, g221, h13
\@fptop <u>g723</u>	\@Kanji $\underline{d533}$
\@freelist c159, c199, c230, c261	\@kanji@shape@nochange@info $\underline{b1449}$
\@getpen c93, c108, c124, c140	\@kludgeins c177,
\@gnewline	c202, c233, c264, c291, c292,
\@gobble b502, b533, b578,	c293, c302, c326, c330, c348, c359
b612, b720, b721, b722, b728,	\@knjcmdfalse b837, b896
b1789, b1999, c628, c629, c630,	\@knjcmdtrue b790, b795
c700, c701, c702, c769, c770,	\@landscapefalse g3
c771, d201, g944, g945, g946, g1656	\@landscapetrue $$
\@gobble@plIncludeInRelease	\@lastchclass
	c1110, c1134, c1165, c1194, c1223
\@gobbletwo	\@latex@error b326,
b507, b538, b583, b618, b723,	b340, b359, b382, b407, b821,
b725, b726, g806, g813, g820, g943	b880, b1087, b1099, b1131,
\@halignto d5, d7, d16, d46	c10, d200, d213, g1609, g1613
\@height b941, b944, b947,	\@latex@info d172
b979, b982, b985, d28, d31, d34,	$\verb \@latex@warning b238 ,$
d39, d42, d519, d520, d521, d560	c979, c993, c1006, d233, g1799
\@highpenalty <u>g290</u> , g1677, g1696, g1704	$\cline{1.0}$ \@latex@warning@no@line a115, c24
\@hightab c1075, c1077, c1089, c1091	\@layoutfloat $\underline{d146}$
\@idxitem $g1812$, $\underline{g1814}$	\@listdepth d306, g1444, g1472
\@ifl@t@r c23	\@listI g163, g1358, h11

 $\label{eq:File Key: a=plvers.dtx} \textbf{ a=plvers.dtx}, \textbf{ b=plfonts.dtx}, \textbf{ c=plcore.dtx}, \textbf{ d=plext.dtx}, \textbf{ e=pl209.dtx}, \textbf{ f=kinsoku.dtx}, \textbf{ g=jclasses.dtx}, \textbf{ h=jltxdoc.dtx}$

\@listi g163, g183, g193, g203,	$\mbox{Qmparswitchtrue}$ $g1896$
g215, g225, g235, g1358, h11, h17	\@mpfn c863, c875, d303
\@listii g1377	\@mpfootins d312, d313, d316, g1584
\@listiii g1377	\@mpfootnotetext d305
\@listiv g1377	\@mplistdepth d306
\@listv g1377	\@namedef b180, b181, b208,
	b209, b230, b231, b268, b269,
\@listvi $\underline{g1377}$	b292, b293, b317, b397, b422, d8
$\verb \cline{Glnumwidth} \ . \ \underline{g1636}, \ g1645, \ g1646,$	\@nameuse c613, c680, c749
g1683, g1701, g1702, g1716, g1717	\@needsformat c8
\@lowpenalty	\@needsPf@rmat
. $\underline{g290}$, $g1083$, $g1351$, $g1352$, $g1353$	\@needsPformat
$\ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ $	\Onewlistfalse c606, c673, c742
g1193, g1212, g1223, g1230, g1643	\@nextchar c1249, c1255, c1260
\@m c984, g1797	\@nil a16,
$\c \c \$	a73, a74, b454, b467, b1275,
\@mainmattertrue g11, g1160	b1277, b1378, b1380, b1424,
$\c \c g1562$	b1426, b1873, b1894, b2419, b2442
\@makechapterhead $g1267$, $\overline{g1268}$	\@nnil b928, b930, b966, b968
\@makecol	\@no@lnbk
\@makefnmark <u>c833</u> , c968, c969,	\@nobreakfalse g1689
<u>e11</u> , g1025, g1029, g1825, g1829	\@nobreaktrue g1688
\@makefntext	\@noitemerr g1798
c939, c961, g1028, g1032, g1823	\@noligs c1022, c1034, c1045
\@makeother c1021, c1033, c1044, h48	\@nolnerr c79, c89, c104, c120, c136
$\c 0.00000000000000000000000000000000000$	\@nomath b2046, b2050, b2066,
\@makespecialcolbox	b2073, b2080, e58, g1624, g1625
c178, c203, c234, c265, <u>c288</u>	\@normalsize g139
\@maketitle	\@notffam b1154
g1036, g1037, g1042, g1049, g1060	\@notffamfalse b1162
\@mathrmmcfalse g17	\@notffamtrue b1191, b1203
\@mathrmmctrue g111, g114	\@notkfam b1154
\@maxdepth c165, c181, c191,	\@notkfamfalse b1161
c206, c223, c237, c254, c268, c285	\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\
\@medpenalty g290	\\(\text{Qnxttabmar} \\ \text{c1075}, \\ \text{B1103}, \\ \text{B11075}, \\ \\ \text{C1075}, \\ \\ \\ \text{C1075}, \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\
\@meta@family@list b1729, b1941	c1077, c1079, c1089, c1091, c1093
\@meta@family@list@kanji	\@obsoletefile
<u>b1713</u> , b1971, b1991	e83, e87, e91, e95, e99, e103
\@midlist c159, c160,	\@oddfoot
c199, c200, c230, c231, c261, c262	. c616, c683, c752, g806, g809,
\@minipagefalse d318, g1575	g811, g819, g823, g825, g829,
\@minipagerestore d307	g858, g884, g890, g917, g919, g938
\@mkboth g806, g813, g820, g834,	\\Quadhead \cdot g650, g517, g515, g556 \\\Quadhead \cdot c616, c683,
g861, g892, g920, g943, g1670,	c752, g806, g808, g816, g818,
g501, g532, g520, g543, g1070, g1761, g1774, g1783, g1784, g1808	g826, g831, g833, g859, g860,
\@mkpream d46	g883, g889, g916, g918, g940, g942
\@MM c910, c933, c955	\\Q\conlypreamble \tag{9340}, \\gamma\) \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\
\@mpargs d284, d322	b299, b300, b316, b445, b478,
\@mparswitchfalse g1892, g1898	b734, b2038, b2039, c28, c29, d180
(omparbarounding) g1002, g1000	5191, 52000, 52000, 620, 623, 0100

 $\label{eq:File Key: a=plvers.dtx} \textbf{ } a = \texttt{plvers.dtx}, \ b = \texttt{plfonts.dtx}, \ c = \texttt{plcore.dtx}, \ d = \texttt{plext.dtx}, \ e = \texttt{pl209.dtx}, \ f = \texttt{kinsoku.dtx}, \ g = \texttt{jclasses.dtx}, \ h = \texttt{jltxdoc.dtx}$

$\verb \colored 103, g1789, g1801 $	$\verb \@resetactivechars c604, c671, c740$
\Copenleftfalse $g9\overline{5, g97}$	\@restonecolfalse g957,
\@openlefttrue g96	g970, g1666, g1757, g1770, g1805
\@openrightfalse g96, g97	\@restonecoltrue g956,
\@openrighttrue g93, g95	g968, g1665, g1756, g1769, g1805
\@outputbox c157,	\@Roman g1121, g1136
c164, c166, c180, c183, c184,	\@roman g1414, g1420
c198, c205, c208, c209, c227,	\@rotswfalse d60, d239, d285, d351, d433
c229, c236, c239, c240, c260,	\@rotswtrue
c267, c270, c271, c295, c297,	. d30, d79, d241, d288, d367, d436
c298, c303, c306, c311, c313,	\@schapter g1252, g1285
c328, c334, c336, c646, c718, c787	\@secondoftwo
\@outputpage <u>c593</u>	. b2167, b2173, b2183, b2196,
\@outputtombow . $\underline{c494}$, $c633$, $c705$, $\overline{c774}$	b2205, b2209, b2210, b2242, b2335
\@parboxrestore c607,	\@secpenalty g1676, g1711
c674, c743, c911, c934, c956,	\@setbfseriesdefaultshook
c1312, c1335, d302, d337, d340	b1630, b1670, b1680, b1681
\@parboxto c1307, c1315, c1322,	\@setfontsize g141, g142, g143,
c1330, c1338, c1345, d344, d346	g144, g145, g146, g179, g189,
\@parse@version a16, a73, a74	g199, g211, g221, g231, g242,
\@part g1171, g1180, g1182	g243, g244, g245, g246, g247,
\@pboxswfalse	g248, g251, g252, g253, g254,
c1310, c1333, d216, d253, d433	g255, g256, g257, g260, g261,
\@pboxswtrue	g262, g263, g264, g265, h6, h13
c1320, c1343, d221, d259, d444	\@setmdseriesdefaultshook
\@pcaption <u>d198</u>	b1649, b1694, b1704, b1705
\@picbox d479, d485, d486	\@setminipage d308
\@picht d464, d467, d472, d475, d485	\@setref $\underline{c971}$
\@picwd d458,	\@setref@ c982, c984, c998, c1011
d464, d467, d472, d475, d479, d485	\@settopoint
\@plIncludeInRele@se a69, a70	g443, g541, g586, g665, g666, g688
\@plIncludeInRelease a67, a68, a69	$\colone{1}$ \Oshape@roman@kanjifalse $b1323$
\@plincludeinreleasefalse	\@shape@roman@kanjitrue b1321
a58, a64, a89, a95	\@sharp c1126, c1128,
\@plincludeinreleasetrue a79	c1130, c1151, c1154, c1157,
\@pnumwidth	c1182, c1185, c1188, c1211,
g1630, g1650, g1680, g1681,	c1214, $c1217$, $c1239$, $c1241$,
g1685, g1699, g1703, g1714, g1718	c1243, $c1250$, $c1256$, $c1261$, $d51$
\@preamble c1123, c1124, c1147,	\@shipoutsetup $\dots \dots \underline{c593}$
c1148, c1178, c1179, c1207,	\Ospart g1171, g1180, g1220
c1208, c1236, c1237, d46, d47, d55	\@specialpagefalse $c613$, $c680$, $\overline{c749}$
\@preamerr d54	\@specialstyle c613, c680, c749
\@ptsize g4, g57, g59,	\@startfield c1082, c1096
g61, g62, g133, g134, g135, g136	\(\text{@startline} \cdot \cd
\@reinserts <u>c354</u>	\@startpbox c1249, c1255, c1260, d48
\@rensuji <u>d509</u>	\@startsection
\@reserveda b1217,	g1297,g1301,g1305,g1309,g1313
b1872, b1874, b1875, b1880,	\@starttoc g1671, g1762, g1775
b1881, b1895, b1896, b1901, b1902	\@stopfield <u>c1100</u>

 $\label{eq:File Key: a=plvers.dtx} \textbf{ b=plfonts.dtx}, \ c=plcore.dtx, \ d=plext.dtx, \ e=pl209.dtx, \\ f=kinsoku.dtx, \ g=jclasses.dtx, \ h=jltxdoc.dtx$

\c ostysizefalse g15	\@tempskipa b930, b931, b968, b969,
\@stysizetrue g31,	c91, c94, c95, c106, c110, c111,
g34, g37, g40, g44, g47, g50, g53	c122, c126, c127, c138, c141, c142
	\@tempswafalse d239, g1178
\@sverb c1024, c1036, c1046, h49	_
\@tabacol c1281, c1288, d17	\Otempswatrue d240, d243, g1178
\@tabarray c1283, c1290	\Otempswzfalse b1171, b1192
\@tabclassiv c1283, c1290, d19	\Otempswztrue b1176, b1197
\@tabclassz $c1104$, $c1282$, $c1289$, $d18$	\@temptokena $g1657, g1658, g1660$
\@tabular <u>c1278</u>	$\verb \delta t@composite \dots \dots \underline{b2216}$
\@tabularcr c1283, c1290, d19	\@text@composite@x
\QTC . <u>c385</u> , c410, c459, c506, c531, c553	$b2219, b2228, b2234, \underline{b2358}, \underline{b2374}$
\@tempa b721,	\@textbottom c162, c167, c175, c187,
•	c190, c212, c243, c274, c315, c337
b724, b725, b730, c905, c906,	\@textsuperscript c838, c839, c845, c846
c928, c929, c950, c951, c1268, c1271	\@texttop . c182, c207, c238, c269, c296
\@tempb b722, b726, b731	\@thanks g982,
$\colone{1}{0}$ tempboxa $c348, c636, c643,$	g1004, g1006, g1012, g1044, g1051
c644, $c708$, $c715$, $c716$, $c777$,	
c784, c785, d217, d229, d296,	\@thecounter \d563
d322, g1568, g1569, g1571, g1576	\Othefnmark c838, c839,
\@tempc b723, b724	c845, c846, c864, c869, c876,
\@tempcnta g13, g14, g536, g537	c881, c890, c898, c913, c936,
\@tempcntb b2260, b2261, b2264,	c958, e17, e18, g1025, g1026, g1033
b2265, b2266, b2273, b2274,	\@thefoot $c616$, $c620$, $c650$,
b2294, b2295, b2298, b2308,	c683, c687, c722, c752, c756, c791
b2311, b2312, b2313, b2320, b2321	$\colone{1}$ \Converge thehead c616, c619, c640,
\@tempdima b2299, b2309,	c683, c686, c712, c752, c755, c781
b2324, b2325, c301, c303, c304,	\@themargin c583, c617,
	c618, c621, c622, c635, c684,
c309, c314, c326, c331, c335,	c685, c688, c689, c695, c707,
c1311, c1312, c1334, c1335, d65,	c753, c754, c757, c758, c764, c776
d66, d67, d71, d72, d73, d82,	\@thmcounter <u>d567</u>
d83, d84, d85, d89, d90, d91,	\@title g948, g994, g1015, g1054, g1066
d92, d250, d251, d252, d261,	\Otitlepagefalse g7, g91
d262, d283, d297, d300, d333,	\@titlepagetrue g8, g90
d336, d340, d445, d446, d447,	\@TL . <u>c385</u> , c401, c450, c506, c531, c553
d465, d468, d473, d476, d480,	\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\
d518, d519, d520, d521, g64,	
g66, g418, g419, g420, g421,	\@tocrmarg g1631, g1641
g429, g432, g435, g438, g531,	\@tombowbleed $\underline{c365}$, $c398$, $c402$,
g532, g533, g534, g535, g536,	c409, $c416$, $c418$, $c422$, $c426$,
g650, g651, g652, g654, g655,	c433, c435, c496, c500, c502,
g657, g669, g672, g680, g681,	c505, c506, c514, c515, c580, c582
g682, g683, g684, g685, g686,	\@tombowcolor $\underline{c375}$, $c496$, $c504$
g1275, g1278, g1281, g1294, g1295	$\colone{1}$ \Qtombowreset\Qpaper $\colone{1}$ $$
\@tempdimb	\@tombowwidth
b928, b929, b966, b967, c1314,	. <u>c363</u> , c402, c403, c408, c409,
c1315, $c1337$, $c1338$, $d343$,	c411, c412, c413, c415, c416,
d344, d465, d468, d473, d476,	c418, c419, c422, c423, c425,
d480, g422, g423, g424, g425,	c426, c428, c429, c430, c432,
g426, g427, g429, g430, g435, g436	c433, c435, c436, c439, c440,
, 9	

 $\label{eq:file-key:} \textbf{File-Key:} \ \ a = \texttt{plvers.dtx}, \ b = \texttt{plfonts.dtx}, \ c = \texttt{plcore.dtx}, \ d = \texttt{plext.dtx}, \ e = \texttt{pl209.dtx}, \\ f = \texttt{kinsoku.dtx}, \ g = \texttt{jclasses.dtx}, \ h = \texttt{jltxdoc.dtx}$

440 449 451 450 455	1004 1006 1046
c442, c443, c451, c452, c457,	\@verb c1024, c1036, c1046
c458, c460, c461, c462, c464,	\@viiipt e67, g211, g242, g251, g260
c465, c467, c468, c470, c471,	\@viipt e66, g242, g252, g261
c473, c474, c476, c477, c478,	\@vipt $e65, g243, g252, g261$
c480, c481, c483, c484, c486,	\@vobeyspaces h49
c487, $c489$, $c490$, $g69$, $g76$, $g80$	\@vpt e64, g243
\@toodeep g1439, g1467	\@width b940, b943,
\@topnum g1041, g1250	b946, b978, b981, b984, b2092,
\@TR . <u>c385</u> , c414, c463, c506, c531, c553	b2100, d29, d32, d35, d40, d43,
\@Tr . <u>c385</u> , c417, c466, c508, c533, c555	d519, d520, d521, d560, g1820
\@twocolumnfalse g88	\@writefile g1659
\@twocolumntrue g89	\@wrong@font@char
\@twosidefalse g86	b503, b534, b579, b614
\@twosidetrue g87	\@x@sf
\@typeset@protect b1137	
\Qundefined	\0xfootnote
a11, a54, a113, a114, b76, b107,	\Oxfootnotemark
b117, b134, b135, b148, b152,	\@xfootnotenext c889, c897
b153, b185, b234, b335, b502,	\@xiipt e71,
b533, b578, b590, b591, b612,	g143, g146, g189, g231, g244, g253
b625, b626, b713, b714, b715,	\@xipt e70, g142, g145, g199
	\@xivpt e72, g245, g254, g262
	\@xpt e69, g141, g144, g189, g231, h6
b1215, b1222, b1225, b1248,	\@xviipt $e73, g246, g255, g263$
b1257, b1258, b1259, b1265,	\@xxpt e74, g247, g256, g264
b1266, b1267, b1268, b1310,	\@xxvpt e75, g248, g257, g265
b1329, b1342, b1343, b1344,	\\ c1283, c1290, d5, d19, d49, g1494
b1357, b1358, b1359, b1369,	\' f8
b1370, b1371, b1415, b1416,	\~ b1238, b1239, b1240, c1057, c1066
b1417, b1469, b1470, b1525,	
b1526, b1527, b1532, b1593,	${f A}$
b1594, b1595, b1596, b1597,	\abovecaptionskip g1562, g1567
b1613, b1658, b1659, b1660,	\abovedisplayshortskip
b1661, b1680, b1704, b1713,	. g149, g154, g159, g181, g191,
b1714, b1715, b1716, b1839,	g201, g213, g223, g233, h8, h15
b2044, b2082, b2124, b2149,	\abovedisplayskip
b2154, b2159, b2214, b2269,	g148, g153, g158, g162,
b2316, b2356, b2382, b2383,	g180, g190, g200, g208, g212,
b2384, b2385, b2386, b2387,	g222, g232, g240, h7, h10, h14, h21
b2388, b2389, b2396, b2397,	abstract (environment) g1078
b2398, b2399, b2400, b2401,	\abstractname
b2402, $b2403$, $b2408$, $b2409$,	g1085, g1092, g1096, g1878
b2410, b2411, b2412, b2413,	
b2414, b2415, b2466, c37, c38,	\active c1055, c1064
c62, c372, c382, c590, c818,	\addcontentsline
c826, c851, c857, c998, c1011,	d210, g1186, g1189, g1205,
c1108, $c1276$, $c1365$, $c1373$,	g1208, g1258, g1260, g1262, g1653
c1378, $c1382$, $c1394$, $c1395$,	$\addpenalty g1676, g1677, g1696, g1711$
c1409, $c1410$, $c1418$, $c1429$,	\addto@hook b390, b392, b415, b417
c1439, $c1440$, $c1448$, $c1461$,	\addtocontents $g1265, g1266$
c1464, c1471, c1478, d199, g167	\addtocounter h32

 $\label{eq:file-key:} \textbf{File-Key:} \ \ a = \texttt{plvers.dtx}, \ b = \texttt{plfonts.dtx}, \ c = \texttt{plcore.dtx}, \ d = \texttt{plext.dtx}, \ e = \texttt{pl209.dtx}, \\ f = \texttt{kinsoku.dtx}, \ g = \texttt{jclasses.dtx}, \ h = \texttt{jltxdoc.dtx}$

\addvspace g1169,	c719, $c772$, $c788$, $d53$, $d228$,
g1265, g1266, g1678, g1697, g1712	g174, g512, g535, g537, h36, h40
\adjust@box	\baselinestretch $b856$,
. b1001, b1008, b1009, b1010,	b857, b917, b918, b933, b971, g282
b1011, b1016, b1017, b1018,	\begin g985, g993,
b1022, b1033, b1034, b1035,	g998, g1063, g1070, g1084, g1095
b1036, b1041, b1042, b1043,	\belowcaptionskip $g1562$, $g1578$
b1047, b1060, b1061, b1062,	\belowdisplayshortskip
b1063, b1068, b1069, b1070, b1074	. g150, g155, g160, g182, g192,
\adjust@dimen b1002,	g202, g214, g224, g234, h9, h16
b1017, b1018, b1019, b1020,	\belowdisplayskip
b1021, b1022, b1023, b1042,	g162, g208, g240, h10, h21
b1043, b1044, b1045, b1046,	\bf e44, g1622
b1047, b1048, b1069, b1070,	\bfdef@ult b1608, b1627, b1628,
b1071, b1072, b1073, b1074, b1075	b1629, b1682, b1683, b1809, b2014
\adjustbaseline b938, b976,	\bfdefault
<u>b1001</u> , b1558, b1574, b1589,	. b1599, b1600, b1608, b1623,
d24, d298, d337, d340, d346, g84	b1624, b1625, b1626, b1635, b1675
\afont <u>b28,</u> b631, b649, b653, b849, b908	\bfdefault@previous b1623
\aftergroup b667, b676, b685, b711, b957,	\bfseries
b995, b2262, b2296, b2421,	<u>b1620</u> , c978, c992, c1005, e44,
b2444, c598, c610, c611, c654,	g1085, g1096, g1195, g1198,
c665, c677, c678, c735, c746, c747	g1214, $g1217$, $g1224$, $g1231$,
\all@shape b758	g1272, $g1292$, $g1300$, $g1304$,
\alph	g1308, $g1312$, $g1316$, $g1460$,
\and g1019, g1058	g1492, g1622, g1682, g1700, g1715
\appendix g1317	\bfseries@gt $b1592$, $b1674$, $b1683$
\appendixname g1328, g1878	\bfseries@mc $b1592$, $b1673$, $b1682$
\arabic d566, d567, h31, h32	\bfseries@previous $b1626$
\array \d3	\bfseries@rm b1593,
\arraycolsep g1579	b1627, b1632, b1658, b1817, b1819
\arrayrulewidth g1581	\bfseries@rm@kernel b1817
\arraystretch	\bfseries@sf b1628, b1633, b1820, b1822
d28, d29, d31, d32, d34,	\bfseries@sf@kernel b1820
d35, d39, d40, d42, d43, d85, d92	\bfseries@tt b1629, b1634, b1823, b1825
\AtBeginDocument g83, g1602	\bfseries@tt@kernel b1823
\AtBeginDvi <u>c802</u>	\bibindent $g104$, $g105$, $g1779$
\AtEndOfPackage $g102$	\bibname $g1784$, $\underline{g1873}$
\author g948, g1017, g1056	\bigskipamount $g285$
\autospacing b2543	\botmark c658, c729, c798
\autoxspacing b2545	\bottomfraction g760
•	\bou
В	\boutenchar $d536$
\backmatter g1154	\box@dir
\baselineskip b935, b936, b937,	d24, d62, d79, d98, d111, d122,
b941, b944, b947, b973, b974,	d287, d288, d289, d292, d293,
b975, b979, b982, b985, b2105,	d296, d336, d339, d346, d353,
b2113, b2117, c631, c647, c703,	d367, d381, d397, d411, d435,

d436, d437, d440, d441, d446,	$\colongraph{\texttt{caption@posb}}$ $d143$,
d447, d463, d466, d471, d474, d479	d179, d184, d197, d218, d222,
\boxmaxdepth	d224, d226, d235, d255, d256, d267
. c165, c181, c206, c237, c268,	\captiondir d140, d240,
c312, c501, c524, c528, d542, d546	d241, d242, d243, d244, d246, d262
\break c81	\captionfloatsep
	d138, d218, d222, d224, d226
${f C}$	\captionfontsetup d145, d247, d263
\c@@paper g1, g298, g328, g344,	\captionwidth
g360, g446, g462, g478, g555, g575	d141, d177, d183, d193, d234, d252
\c@bottomnumber g756	\Cdp <u>b19</u> , g170, g514
\c@chapter g1110,	
g1124, g1139, g1330, g1331,	\cdp <u>b19</u> , b1010, b1014, b1021,
g1514, g1521, g1541, g1548, g1591	b1035, b1039, b1046, b1062,
\c@clineno <u>h30</u>	b1066, b1073, d358, d372, d402
\c@dbltopnumber g758	\cdp@elt
	b170, b171, b190, b191, b220,
\c@enumi g1412, g1418	b221, b257, b258, b281, b282,
\c@enumii g1413, g1419	b387, b390, b392, b412, b415, b417
\c@enumiii g1414, g1420	\cdp@list b171, b191, b221,
\coenumiv . g1415, g1421, g1785, g1792	b258, b282, b394, b395, b419, b420
\c@equation g1587, g1591	\centering g1004, g1211, g1229
\c@figure $g1508$	\cf@encoding b1090, b1146
\c@footnote $g1822$	\chapter g1245,
\c@mpfootnote d304	g1246, g1669, g1758, g1771, g1784
\c@page $c66, g766, g778, g790, g795, g973$	\chaptermark g844, g868,
\c@paragraph g1110, g1131, g1146	g902, g927, g944, g1102, g1264
\c@part g1121, g1136	\char b1008, b1033,
\c@secnumdepth	b1060, c46, c1058, c1067, d248,
\dots g837, g840, g845, g852,	d264, d536, d544, d548, d552, g170
g864, g869, g895, g898, g903,	\chardef
g910, g923, g928, g1108, g1184,	c47, c48, c1380, c1397, c1412,
g1194, g1203, g1213, g1254, g1274	c1422, c1423, c1431, c1449, c1457
\c@section g1110, g1122,	\check@icl b2420,
g1125, g1137, g1140, g1321, g1322	b2427, b2429, b2443, b2450, b2452
\c@subparagraph . g1110, g1133, g1148	\check@icr b2421,
\c@subsection g1110, g1127, g1142	b2430, b2435, b2444, b2453, b2458
\c@subsubsection g1110, g1129, g1144	\check@nocorr@ b2417
	\Chs <u>b25</u> , g170
\c@table g1535	
\c@tocdepth	\chs <u>b25</u> , b1013, b1038, b1065, d508
g1628, g1639, g1675, g1695, g1710	\Cht $\underline{b17}$, $\underline{g170}$, $g313$, $g513$
\c@topnumber $g754$	\cHT $\underline{b27}$, b1014,
\c@totalnumber $g757$	b1019, b1039, b1044, b1066, b1071
\cal g1626	\cht $\underline{b17}$, $b1009$, $b1014$, $b1034$, $b1039$,
\caption@dir d139, d176,	b1061, b1066, d355, d369, d399, e15
d183, d189, d234, d240, d241, d243	\circle <u>d489</u>
\caption@posa	\Cjascale g269
d142, d178, d184, d197, d219,	\ck@encoding <u>b7</u> ,
d220, d235, d257, d258, d270, d272	b1102, b1115, b1121, b1139, b1149
,,, 42-0, 42-0	,,,,,

$\begin{tabular}{l l l l l l l l l l l l l l l l l l l $	g475, g476, g480, g481, g482, g483, g484, g485, g487, g488, g489, g490, g491, g492, g496, g497, g498, g500, g501, g503, g504, g505, g506, g507, g508, g520, g521, g522, g1269, g1284, g1289, g1295, g1298, g1299, g1302, g1303, g1306, g1307 \cvs \cdot \cdo
g1668, g1669, g1670, <u>g1870</u> \cr d47	\cy@encoding <u>b7</u> , b810, b819, b830, b871, b878, b889, b1125
\crcr b2106, b2114,	D
b2118, c1295, c1301, d56, d57 \ct@encoding b7, b812, b817, b825, b872, b877, b884, b1129 \curr@fontshape b485, b491, b494, b503, b510, b512, b516, b522, b525, b534, b541, b543, b561, b567, b570, b579, b586, b588, b597, b603, b606, b614, b621, b623, b664, b673, b682, b708, b850, b909, b1290, b1293, b1397, b1401, b1404, b1439, b1442, b1886, b1889, b1907, b1910, b2055 \curr@kfontshape b15, b826, b831, b885, b890, b1290, b1293, b1397, b1401, b1404, b1439, b1442, b1886, b1889, b1907, b1910 \CurrentOption	$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$

\DeclareKanjiFamily	$\DeclareSymbolFont e26, e27, g1595$
<u>b357</u> , b2554, b2565, b2576, b2586	\DeclareSymbolFontAlphabet
\DeclareKanjiSubstitution	$e28$, $e29$, $g1596$
$$ $\underline{b376}$, $b2489$, $b2491$	\DeclareTateKanjiEncoding $\underline{b237}$, $\underline{b2490}$
$\DeclareLayoutCaption \dots \underline{d169}$	\DeclareTateKanjiEncoding@ $b237$
$\verb \DeclareMathAlphabet g1599$	\DeclareTextCommandDefault
\DeclareOldFontCommand	b2087, b2097
\dots g1617, g1618, g1619, g1620,	\DeclareTextFontCommand b1856, b1857
g1621, g1622, g1623, g1624, g1625	\DeclareYokoKanjiEncoding <u>b237</u> , b2488
\DeclareOption g18,	\DeclareYokoKanjiEncoding@ b237
g21, g24, g27, g31, g34, g37,	\default@family b172,
g40, g44, g47, g50, g53, g59,	b192, b222, b422, b495, b571, b607
g61, g62, g63, g67, g74, g78,	\default@k@family b259, b283,
g82, g86, g87, g88, g89, g90,	b378, b397, b455, b468, b471, b526
g91, g95, g96, g97, g99, g100,	\default@k@series b259,
g101, g113, g114, g116, g117, h2	b283, b398, b456, b469, b472, b523
\DeclarePreloadSizes	\default@k@shape b260,
\dots b2507, b2508, b2509,	b284, b399, b457, b470, b473, b521
b2510, b2513, b2514, b2515,	\default@KM b269, b293, b309, b312, b315
b2516, $b2519$, $b2520$, $b2521$,	\default@KT b303, b306, b314, b1117
b2522, b2525, b2527, b2529, b2531	\default@M b181, b209, b231
\DeclareRelationFont $\underline{b758}$, $b2555$,	\default@series b172,
b2556, b2566, b2567, b2577, b2587	b192, b222, b423, b492, b568, b604
\DeclareRobustCommand	\default@shape b173,
\dots b91, b122, b124, b140,	b193, b223, b424, b490, b566, b602
b790, b803, b864, b1007, b1085,	description (environment) g1482
b1097, b1109, b1157, b1158,	\descriptionlabel g1490, g1491
b1159, b1249, b1250, b1251,	\detokenize b36, b38, b40
b1253, b1254, b1255, b1261,	\dimen@ b2130,
b1262, b1263, b1311, b1312,	b2132, b2141, b2143, c183,
b1313, b1318, b1319, b1320,	c186, c208, c211, c239, c242,
b1330, b1331, b1332, b1334,	c270, c273, c297, c299, d15, d16
b1335, b1336, b1346, b1347,	\dimexpr c402, c409, c416, c418, c422,
b1348, b1361, b1362, b1363,	c426, c433, c435, c500, c580, c582
b1475, b1480, b1485, b1496,	\DisableCrossrefs h43
b1499, b1502, b1533, b1544,	\DLMfontsw@oldlfont b744, b757
b1564, b1579, b1620, b1639,	\DLMfontsw@oldstyle b741, b756
b1840, b1843, b1847, b1850,	\DLMfontsw@standard . b738, b746, b755
b1864, b1865, b1866, b1867,	\do c1021, c1033, c1044, h47, h48
b1868, b1869, b2045, b2049,	
b2065, b2072, b2079, b2361,	\do@emfont@update b2056
b2366, c806, c1353, d323, d426,	\do@noligs <u>c1050</u> , h47
d509, d537, d556, e32, e38, e44,	\do@subst@correction b656
e45, e51, e52, e53, e54, e55,	\document@default@language
e56, e57, g177, g209, g242, g243,	c603, c670, <u>c1468</u>
g244, g245, g246, g247, g248,	\documentclass
g251, g252, g253, g254, g255,	\documentstyle <u>c30</u>
g256, g257, g260, g261, g262,	\dospecials c1021, c1033, c1044, h48
g263, g264, g265, g948, g949,	\doublerulesep g1582
g950, g1608, g1612, g1626, g1627	\dst <u>h28</u>

\DualLang@mathalph@bet b729, b735	table g1556
\DualLang@Mfontsw	table* g1556
b738, b741, b744, b746, b751, b753	thebibliography $\dots \qquad \overline{g1782}$
	theindex g1804
${f E}$	titlepage
\eQallocQchardef $\dots \dots \dots \underline{c1375}$	
\e@alloc@top <u>c1375</u> , c1443	tsample <u>h33</u>
\e@mathgroup@top	verse
\em <u>b2041</u> , <u>e57</u>	\errhelp a12, a17, b2536
\em@currfont b2055	\errmessage a13, a21, b487, b518, b563, b599, b2539
\emfontdeclare@clist b2051, b2056	\error@fontshape
\eminnershape $\underline{b2041}$	b488, b519, b564, b600,
\emph	b804, b805, b836, b865, b866, b895
\enablecjktoken c1418	\error@kfontshape
\EnableCrossrefs <u>h43</u>	b451, b464, b805, b866
\enc@elt <u>b53</u> , b55, b56, b175, b176, b203, b204,	\euc b1060,
	d248, d264, d536, d544, d548, d552
b225, b226, b262, b263, b264, b286, b287, b288, b1174, b1195	\evensidemargin c617,
\enc@update	c622, c684, c689, c753, c758, g599
b437, b855, b916, b1091, b1093	\every@math@size b633
\encodingdefault	\everyjob a40, a42
. b1538, b1545, b1569, b1584, e46	\everypar c1268, c1269, c1270, g1689
\end d537, d539, g1000, g1003,	\ExecuteOptions
g1007, g1072, g1075, g1087, g1097	g121, g122, g125, g126, g129, g130
\end@dblfloat g1534, g1561	\expand@font@defaults
\end@float g1531, g1558	<u>b1604</u> , b1622, b1641,
\endarray <u>d56</u>	b1724, b1755, b1826, b1936, b1966
\endlist g1454, g1481,	\ext@figure g1524
g1490, g1498, g1504, g1507, g1800	\ext@table $\overline{\mathrm{g}1551}$
$\verb \endminipage \dots \dots \underline{d309}$	
\endpicture $\underline{d483}$	${f F}$
\endquotation $g1099$	$\verb \f@baselineskip . b475, b857, b918,$
\endtabular $\underline{c1292}, \underline{d56}$	b931, b935, b956, b969, b973, b994
\endtabular* <u>c1292</u>	\f@encoding . b16, b439, b484, b515,
\endtitlepage $g1088$	b546, b560, b596, b688, b1089,
\endtsample h38	b1090, b1282, b1389, b1431,
\ensure@KanjiEncodingPair	b1771, b1878, b1899, b1982, b2170
<u>b318</u> , b811, b818	\f@family b16, b495,
enumerate (environment) g1438	b526, b571, b607, b1157, b1188,
environments:	b1201, b1208, b1282, b1389,
abstract $g1078$	b1431, b1481, b1539, b1546,
description $g1482$	b1570, b1632, b1633, b1634,
enumerate $g1438$	b1651, b1652, b1653, b1727,
figure g1529	b1771, b1878, b1899, b1939, b1982
figure* $\overline{\text{g1529}}$	\f@linespread b856, b917, b932, b933, b936, b950,
itemize g1466	b953, b970, b971, b974, b988, b991
quotation $g1499$	\f@series b16,
quote g1505	b492, b523, b568, b604, b1249,
1 <u>81000</u>	5152, 5525, 5500, 5501, 51245,

b1261, b1482, b1540, b1547,	\fnum@figure $g1524$
b1571, b1720, b1736, b1738,	\fnum@table $\overline{g1551}$
b1742, b1743, b1744, b1867,	\font b28, b631,
b1932, b1948, b1950, b1954, b1955	b640, b646, b649, b652, b653,
\f@shape b16,	b663, b665, b707, b709, b824,
b490, b521, b566, b602, b1311,	b829, b849, b883, b888, b908,
b1315, b1330, b1346, b1350,	b2046, b2052, b2066, b2073,
b1361, b1483, b1541, b1548, b1572	b2080, b2132, b2143, c393, e59
\f@size b474, b512, b543, b588, b623,	\font@name b511,
b664, b673, b682, b708, b826,	b542, b587, b622, b662, b671,
b831, b850, b857, b885, b890,	b680, b706, b826, b828, b831,
b909, b918, b929, b956, b967,	b833, b850, b852, b854, b885,
b994, b2055, e64, e65, e66, e67,	b887, b890, b892, b909, b911, b914
e68, e69, e70, e71, e72, e73, e74, e75	\fontdimen $b2046, b2052, b2066,$
\fam@elt $\underline{b53}$,	b2073, $b2080$, $b2132$, $b2143$, $e59$
b60, b61, b62, b345, b346, b364,	\fontencoding
b365, b1172, b1183, b1193, b1204	. $\underline{b1085}$, $b1545$, $b2504$, $b2505$, $e21$
\famdef@ult b1610, b1827, b1828, b1829 \familydefault b1539,	\fontfamily $\underline{b1157}$,
b1546, b1570, b1585, b1610, e47	b1721, b1732, b1933, b1944, e22
\fboxrule g1585	\fontname b665, b674, b683, b709
\fboxsep g1585	\fontseries <u>b1247</u> , b1473,
\fenc@list b55, b176, b204, b226, b1198	b1563, b1632, b1633, b1634,
\ffam@list \(\frac{\begin{array}{c} \begin{array}{c} \begin{array} \begin{array}{c} \begin{array}{c} \begin{array}{c} \begin{array}{c}	b1635, b1651, b1652, b1653, b1654, b1663, b1667, b1669,
figure (environment) g1529	b1670, b1671, b1672, b1691,
	b1693, b1694, b1695, b1696, b1866
figure* (environment)	\fontseriesforce b1212, b1248,
\figurename g1527, g1528, g1876	<u>b1257</u> , b1265, b1369, b1415, b1869
\file <u>h24</u>	\fontshape <u>b1307</u> , b1473, b1563
\firstmark c658, c729, c798	\fontshapeforce . $b1310$, $b1329$, $\underline{b1339}$
\fixcompositeaccent	\fontsize b634, b2487, e23
. <u>b2358</u> , b2374, b2379, b2382, b2391, b2393, b2396, b2405, b2408	\footins c163, c168, c172, c213, c214,
\fl@trace	c218, c244, c245, c249, c275,
. c291, c306, c307, c308, c309,	c276, $c280$, $c316$, $c317$, $c321$,
c328, c329, c330, c331, c332, c350	c338, c339, c343, c356, c357,
\float@count c1442	$c358,c906,c929,c951,\underline{g693},g1584$
\float@pos d154, d217, d227	\footnote $c859$,
\floatheight d136, d154,	c902, c926, g989, g1064, g1065
d158, d159, d162, d165, d166, d167	\footnotemark $\underline{c859}$, $g981$
\floatingpenalty c910, c933, c955	\footnoterule $c171$, $c217$, $c248$,
\floatpagefraction g762	c279, c320, c342, d315, g987, g1818
\floatruletick d137,	\footnotesep $c909$,
d156, d160, d163, d165, d167, d168	c917, c932, c940, c954, c962, g690
$\verb \floatsep g696 $	\footnotesize
\floatwidth d135, d154, d155,	$$ c907, c930, c952, $\underline{g209}$, g986
d156, d163, d164, d166, d168, d268	\footnotetext $\underline{c884}$
\fmtname a2, c7	\footskip
\fmtversion a3, a11, a16	$c647, c719, c788, \underline{g314}, g573, g685$
$\verb \fnsymbol \dots \dots g1024 $	$\verb fork@array@option d23, \underline{d59} $

$\verb fork@parbox@option d334, \underline{d350} $	g92, g110, g321, g326, g444,
\fps@figure g1524	g542, g599, g952, g1594, g1687
\fps@table g1551	\if@enablejfam $\dots g16, g1593$
	\if@forced@series
\frenchspacing h49	b1719, b1750, b1931, b1961
\frontmatter $g1154$	\if@knjcmd <u>b785</u> , b837, b896
\ftype@figure $g1524$	
\ftype@table g1551	\if0landscape g3, g329, g345,
	g361, g377, g447, g463, g479, g495
${f G}$	\if@mainmatter $g11$, $g846$,
\g@addto@macro	g870, g904, g929, g1255, g1276
b1551, b1614, b1681, b1705, b1833	\if@mathrmmc g17, g1601
\G@refundefinedtrue c977, c991, c1004	\if@newlist
\g@tlastchart@ <u>b2151</u> , b2260, b2294	c605, c655, c672, c726, c741, c795
\GenericInfo a75, a78, a83	\if@noskipsec g1168
\glossary c630, c702, c771, g1656	\if@notffam b1155, b1207
	\if@notkfam b1154, b1207
\gt e38, e59, g1617	\if@openleft g10,
\gtdef@ult b1616, b1674, b1698, b1835	g800, g1162, g1175, g1237, g1247
\gtdefault	\if@openright g9,
. b1616, b1845, b1852, b2494, e40	g802, g1163, g1176, g1239, g1248
\gtfam e63	\if@pboxsw
\gtfamily	c1324, c1347, d225, d265, d451
. b1835, <u>b1839</u> , b1857, b2047,	\if@plincludeinrelease a57, a60, a88
b2053, b2067, b2074, b2081, g1618	\if@restonecol g5, g961,
	g975, g1672, g1763, g1776, g1813
Н	
H \hangindent g1814	$\verb \dif@rotsw \underline{d1}, d246, d249, d254, d265,\\$
	\if@rotsw <u>d1</u> , d246, d249, d254, d265, d297, d320, d335, d444, d541, d558
\hangindent g1814	$\label{eq:control_def} $$ \if @rotsw $\underline{d1}$, d246, d249, d254, d265, \\ d297, d320, d335, d444, d541, d558 \\ \if @shape@roman@kanji$
$\label{lem:condition} $$ \hb@xt@ \dots c640, c650, c712,$	\if@rotsw d1, d246, d249, d254, d265, d297, d320, d335, d444, d541, d558 \if@shape@roman@kanji b1304, b1383, b1399
$\label{lem:condition} $$ \begin{array}{llllllllllllllllllllllllllllllllll$	\if@rotsw d1, d246, d249, d254, d265, d297, d320, d335, d444, d541, d558 \if@shape@roman@kanji b1304, b1383, b1399 \if@specialpage c612, c679, c748
\hangindent	\if@rotsw d1, d246, d249, d254, d265, d297, d320, d335, d444, d541, d558 \if@shape@roman@kanji b1304, b1383, b1399 \if@specialpage c612, c679, c748 \if@stysize
\hagindent	$eq:control_co$
\hangindent	$eq:control_co$
\hangindent g1814 \hb@xt@ c640, c650, c712,	$eq:control_co$
$\label{eq:continuous_state} $$ \begin{array}{lll} \hb@xt@ & \dots & g1814 \\ hb@xt@ & \dots & c640, c650, c712, \\ & c722, c781, c791, d447, g1029, \\ & g1033, g1576, g1637, g1650, \\ & g1685, g1703, g1718, g1825, g1829 \\ headheight & \dots & c636, \\ & c708, c777, g294, g564, g569, g683 \\ headsep & \dots & c645, \\ & c717, c786, g294, g565, g570, g684 \\ \hline \end{tabular}$	$eq:control_co$
$\label{eq:continuous_state} $$ \begin{array}{llll} \hb@xt@ & \dots & g1814 \\ hb@xt@ & \dots & c640, c650, c712, \\ & c722, c781, c791, d447, g1029, \\ & g1033, g1576, g1637, g1650, \\ & g1685, g1703, g1718, g1825, g1829 \\ headheight & \dots & c636, \\ & c708, c777, g294, g564, g569, g683 \\ headsep & \dots & c645, \\ & c717, c786, g294, g565, g570, g684 \\ heisei & \dots & g1834 \\ \end{array} $$$	$eq:control_co$
$\begin{array}{llllllllllllllllllllllllllllllllllll$	$eq:control_co$
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	\if@rotsw d1, d246, d249, d254, d265, d297, d320, d335, d444, d541, d558 \if@shape@roman@kanji b1304, b1383, b1399 \if@specialpage c612, c679, c748 \if@stysize
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	\if@rotsw d1, d246, d249, d254, d265, d297, d320, d335, d444, d541, d558 \if@shape@roman@kanji b1304, b1383, b1399 \if@specialpage c612, c679, c748 \if@stysize
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	\if@rotsw d1, d246, d249, d254, d265, d297, d320, d335, d444, d541, d558 \if@shape@roman@kanji b1304, b1383, b1399 \if@specialpage c612, c679, c748 \if@stysize
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	\if@rotsw d1, d246, d249, d254, d265, d297, d320, d335, d444, d541, d558 \if@shape@roman@kanji b1304, b1383, b1399 \if@specialpage c612, c679, c748 \if@stysize
$\label{eq:hampindent} $$ \begin{array}{llll} \hb@xt@ & \dots & & & & & \\ c640, c650, c712, & & & \\ c722, c781, c791, d447, g1029, & & & \\ g1033, g1576, g1637, g1650, & & & \\ g1685, g1703, g1718, g1825, g1829 \\ headheight & \dots & & & \\ c636, & & & \\ c708, c777, g294, g564, g569, g683 \\ headsep & \dots & & \\ c445, & & \\ c717, c786, g294, g565, g570, g684 \\ heisei & \dots & & & \\ g1834 \\ hour & \dots & & \\ c1102, g12, g72 \\ hrule & \dots & & \\ b2092, & & \\ b2100, d163, d168, g1820, h35, h41 \\ hspace g1187, g1206, g1492, g1815, g1816 \\ Huge & \dots & & & \\ g241, g1217, g1231 \\ huge & \dots & & & \\ g1198, g1214, g1224, g1272, g1292 \\ \end{array} $	\if@rotsw d1, d246, d249, d254, d265, d297, d320, d335, d444, d541, d558 \if@shape@roman@kanji b1304, b1383, b1399 \if@specialpage c612, c679, c748 \if@stysize
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	\if@rotsw d1, d246, d249, d254, d265, d297, d320, d335, d444, d541, d558 \if@shape@roman@kanji
\hangindent	\if@rotsw d1, d246, d249, d254, d265, d297, d320, d335, d444, d541, d558 \if@shape@roman@kanji b1304, b1383, b1399 \if@specialpage c612, c679, c748 \if@stysize c515, g273, g297, g327, g409, g445, g525, g544, g554, g574, g643 \if@tempswa d250, g1243 \if@tempswz b1156, b1179, b1200 \if@titlepage g6, g984, g1079 \if@twocolumn c69, c74, g394, g410, g428, g587, g637, g644, g769, g774, g781, g786, g792, g797, g956, g967, g1035, g1091, g1099, g1178, g1333, g1341, g1665, g1756, g1769, g1805, g1884 \if@twoside c65, c615, c682, c751, g615, g653, g668, g765, g777, g789, g794, g827, g878, g976, g1236, g1895 \ifcsname b1285, b1288,
\hangindent	\if@rotsw d1, d246, d249, d254, d265, d297, d320, d335, d444, d541, d558 \if@shape@roman@kanji

\ifdefined	$\verb \indexspace \underline{g1817}$
\IffileExists b1175, b1196	\inhibitglue . b2464, b2467, b2469,
\ifin@ b344,	b2475, c860, c862, c866, c1083,
b363, b549, b638, b644, b691,	c1126, c1128, c1130, c1150,
b695, b809, b816, b870, b876,	c1153, c1156, c1181, c1184,
b1113, b1125, b1129, b1165, b1169, b1188, b1191, b1489,	c1187, c1210, c1213, c1216,
b1506, b1522, b1819, b1822, b1825	c1255, c1267, c1270, d247, d263
\ifmdir b2089, b2300,	\inhibitxspcode
b2343, d514, g1837, g1854, g1859	f230, f231, f232, f233, f234, f235, f236, f237, f238, f239, f240,
\ifnot@advanceline d506, d516	f241, f242, f243, f244, f245, f246,
\ifodd b2266, b2313, c66, c616, c683,	f247, f248, f249, f250, f251, f252,
c752, g766, g778, g790, g795, g973	f253, f254, f255, f256, f257, f258,
\iftbox c357	f259, f260, f261, f262, f263, f264
\iftdir b81, b92, b1015,	\init@series@setup b1816
b1040, b1067, b2089, b2099,	\inlist@ <u>b29, b343, b362,</u>
b2116, b2299, b2342, c67, c185,	b548, b637, b643, b690, b694,
c210, c241, c272, c599, c617,	b808, b815, b869, b875, b1112,
c621, c666, c684, c688, c736,	b1124, b1128, b1164, b1168,
c753, $c757$, $d26$, $d61$, $d240$,	b1187, b1190, b1488, b1505, b1521
d286, d352, d434, d462, d514,	\input b2500,
d535, d541, d564, g767, g784,	b2501, b2502, b2503, c31, e3,
g1443, g1457, g1471, g1484,	g99, g100, g133, g134, g135, g136
g1568, g1572, g1837, g1854, g1859	\InputIfFileExists b198, b2534, e77
\iftombow	\insert c356, c359, c906, c929, c951
\iftombowdate <u>c361</u> , c404, c453	\interfootnotelinepenalty
\ifvbox c177, c202, c233, c264, c359	
\ifydir b102,	\interlinepenalty c908, c931, c953,
b112, c72, c830, c832, c838,	g1193, g1212, g1223, g1230, g1643
c845, c905, c928, c950, c968,	\intextsep
$d557,\ e14,\ e17,\ g772,\ g779,\ g1025$	\it e55, e59, g1623
\if 西暦 g1831	\item g1498, g1504, g1507, g1812
\ignorespaces b1479, b1484,	\itemindent g105,
b1498, b1501, b1514, b1517,	g106, g1483, g1495, g1496, g1501
b1573, $b1588$, $c82$, $c96$, $c112$,	itemize (environment) g1466
c128, c143, c917, c940, c962,	\itemsep g186, g196,
c1126, c1128, c1130, c1151,	g206, g218, g228, g238, g1363,
c1154, c1157, c1182, c1185,	g1368, g1373, g1391, g1399, g1446, g1474, g1487, g1495, h20
c1188, c1211, c1214, c1217,	\itshape b2047, b2053,
c1239, c1241, c1243, c1249, c1255, c1260, d211, d482, e50	b2067, b2074, b2081, e55, g1623
\ine b37,	\ixpt e68
b41, b49, b50, b1818, b1821, b1824	(
\in@@ b35, b37, b41, b48, b50	J
\in@false b37, b49	\jcharwidowpenalty b2546
\in@true b37, b49	\jfam e31, e44, g1598
\index c629, c701, c770, g1656	\jfont b640,
\indexname g1806, g1807, g1808, g1873	b672, b674, b829, b888, c42, c44
5 , 5 , 5 , <u>6 </u>	, , , ,

\jis b1008, b1033,	b1441, b1450, b1455, b1478,
c46, f32, f33, f34, f35, f36, f37,	b1537, b1555, b1568, b1880,
f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52,	b1884, b1897, b1903, b1906, b1909
f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59,	\Kanji d533
f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170	\kanji <u>d533</u>
	\kanjidef@ult b1617, b1834, b1835
K	\kanjiencoding $\underline{b1085}$, $b1475$, $b1497$,
\k@encoding $\dots \dots \underline{b7}, b15,$	b1513, b1534, b1552, b1565,
b323, b327, b430, b433, b442,	b1580, b2029, b2499, e33, e39, g165
b806, b810, b812, b817, b819,	\kanjiencodingdefault
b821, b825, b830, b834, b839,	. b1534, b1552, b1565, b1580,
b841, b843, b846, b867, b871,	b2029, b2495, e33, e39, g164, g165
b872, b877, b878, b880, b884,	\KanjiEncodingPair
b889, b893, b898, b900, b902,	<u>b317</u> , b320, b328, b801, b2492
b905, b1101, b1102, b1116,	\kanjifamily <u>b1157</u> ,
b1118, b1119, b1121, b1122,	b1497, b1513, b1581, b1752,
b1125, b1129, b1131, b1282,	b1763, b1842, b1845, b1963,
b1284, b1288, b1389, b1391,	b1974, b2030, b2484, e34, e40
b1395, b1431, b1433, b1437,	\kanjifamilydefault $b1535, b1553,$
b1453, b1771, b1878, b1880,	b1566, b1581, b1617, b2030, b2496
b1884, b1899, b1901, b1905, b1982	$\verb \kanjiprocess@table \dots \dots \underline{b2026}$
\k@family <u>b12</u> , b15, b471, b839, b841,	\kanjiseries <u>b1247</u> ,
b843, b846, b898, b900, b902,	b1497, b1513, b1582, b1672,
b905, b1158, b1165, b1180,	b1673, b1674, b1675, b1696,
b1208, b1282, b1284, b1288,	b1697, b1698, b1699, b1865,
b1389, b1391, b1395, b1431,	b1866, b2031, b2485, e35, e41
b1433, b1437, b1453, b1476,	\kanjiseriesdefault
b1535, b1553, b1566, b1673,	b1536, b1554, b1567,
b1674, b1697, b1698, b1758,	b1582, b2031, b2497, e35, e41
b1771, b1787, b1788, b1878,	\kanjiseriesforce <u>b1257</u> , b1868, b1869
b1880, b1884, b1899, b1901,	\kanjishape <u>b1307</u> , b1497, b1513,
b1905, b1969, b1982, b1997, b1998	b1583, $b2032$, $b2486$, $e36$, $e42$
\k@series $\underline{b13}$, $b15$, $b472$, $b839$, $b841$,	\kanjishapedefault
b843, b846, b898, b900, b902,	$\dots b1537, b1555, b1568,$
b905, b1250, b1262, b1273,	b1583, b2032, b2498, e36, e42
b1299, b1300, b1391, b1395,	\kanjishapeforce $\dots \dots \underline{b1339}$
b1433, b1437, b1453, b1477,	\kanjiskip b2542
b1536, b1554, b1567, b1751,	\kansuji d534,
b1767, b1769, b1774, b1775,	d535, g1838, g1854, g1860, g1861
b1776, b1798, b1804, b1807,	\kasen
b1809, b1868, b1901, b1905,	\kenc@list . <u>b55</u> , b264, b288, b548,
b1919, b1920, b1924, b1925,	b1112, b1177, b1488, b1505, b1521
b1962, b1978, b1980, b1985,	\kenc@update b440, b835,
b1986, b2006, b2009, b2012, b2014	b894, b1103, b1105, b1120, b1135
\k@shape $\underline{b14}$, $b15$, $b473$, $b839$,	\kernel@ifnextchar a66
b846, b898, b905, b1284, b1288,	$\verb \kfam@list \dots \underline{b60}, b362, b365, b1164 $
b1308, b1312, b1331, b1340,	$\verb \ktenc@list \dots \dots \underline{b55}, b287,$
b1347, b1362, b1367, b1376,	b643, b694, b815, b875, b1128
b1386, b1393, b1396, b1403,	\kyenc@list $\underline{b55}$, $\underline{b263}$,
b1422, b1429, b1435, b1438,	b637, b690, b808, b869, b1124

${f L}$	\Lcount <u>h26</u>
\locale \loca	\leaders g1648
\lambda l@figure $\dots \dots g1765$, $g1778$	$\verb \label{leavevmode } \textbf{leavevmode} \dots \dots$
\lendrightarrownalty} . c1023, c1035, $\underline{c1463}$	b2098, b2105, b2113, b2266,
\leftaragraph $g1726$	b2313, b2325, b2340, b2469,
\l@part g1674	c966, c1019, c1031, c1042,
\left\(\text{l@section} \cdots \cdots \text{g} \right\(\text{g} \right) \text{g} \text{g} \text{g} \text{g} \text{g} \text{g} \text{g} \text{g} \text{g}	c1058, c1067, c1281, c1288,
\lesubparagraph $\dots \qquad \overline{g1726}$	c1309, c1332, c1356, c1364, d17, d282, d332, d426, d513, d537,
\1@subsection g1726	d559, e12, g1168, g1273, g1293,
\1@subsubsection g1726	g1644, g1682, g1700, g1715, h46
\l@table g1778	\leftmargin g104, g183,
\label c628, c700, c769, g1656	g193, g203, g215, g225, g235,
\labelenumi g1423	g1333, g1359, g1377, g1392,
\labelenumii g1423	$\overline{g1400}$, $g1403$, $g1406$, $g1448$,
\labelenumiii g1423	g1449, $g1450$, $g1476$, $g1477$,
\labelenumiv g1423	g1478, g1483, g1485, g1497,
\labelitemfont g1455,	g1502, g1506, g1787, g1788, h17
g1458, g1460, g1463, g1464, g1465	\leftmargini
\labelitemi g1455	. g183, g193, g203, g215, g225,
\labelitemii g1455	g235, g1333, g1349, g1359, h17
\labelitemiii g1455	\leftmarginii $g1333$, $g1377$, $g1378$
\labelitemiv g1455	\leftmarginiii $g1333$, $g1392$, $g1393$
\labelsep g1348, g1378, g1393,	\leftmarginiv $g1333$, $g1400$, $g1401$
g1402, g1405, g1408, g1447,	\leftmarginv <u>g1333</u> , g1403, g1404
g1475, g1487, g1492, g1583, g1788	\leftmarginvi g1333, g1406, g1407
\labelwidth g1348,	\leftmark
$g1378$, $g1393$, $g1401$, $\overline{g1402}$,	g830, g832, g881, g887, g939, g941
g1404, $g1405$, $g1407$, $g1408$,	\leftskip g1449, g1477,
g1447, g1475, g1483, g1786, g1787	g1485, g1641, g1646, g1702, g1717
\language c603, c670, c1023, c1035	\line <u>d489</u>
\LARGE <u>g241</u> , g994, g1066	\lineskip b2105, b2113, b2117, c631,
\Large $g241$, g996, g1195, g1300	c703, $c772$, $d53$, $g280$, $g997$, $g1069$
\largeg241,	\lineskiplimit c631, c703, c772
g1002, g1068, g1074, g1304, g1682	\linewidth
\last@fontshape b486, b504,	d181, d182, g1275, g1294, h34, h37
b517, b535, b562, b580, b598, b615	\list g1442, g1470,
\lastbox	g1483, g1495, g1500, g1506, g1785
\lastnodechar b2154	\listfigurename
\lastnodesubtype c37, c48, c53	\dots g1758, g1760, g1761, g1870
\lastnodetype c47, c52	\listoffigures $g1754$
\lastpenalty c888	\listoftables $g1767$
\lastskip c91, c106, c122, c138	\listparindent
\latexreleaseversion a5, a113	. g106, g1488, g1496, g1500, g1501
\layoutcaption $\underline{d183}$	\listtablename
\layoutfloat $\underline{d146}$, $d213$	g1771, g1773, g1774, <u>g1870</u>
\lccode c1057, c1066	\lap g1453, g1480

\. 103	1000
\LoadClass	\mathsf g1620
. e84, e88, e92, e96, e100, e104, h4	\mathsurround b2315
\Lopt <u>h27</u>	\mathtt g1621
\lower b2325,	\maxdepth
b2341, d358, d372, d402, d480	c191, c223, c254, c285, c312, g321
\lowercase	$\mbox{\mbox{$\mbox{$$}}}$ \maxdimen c501, c528, d542, d546
b197, b1175, b1196, c1058, c1067	\maybe@ic . b2420, b2421, b2443, b2444
\ltx@sh@ft b2363, b2368, b2395	\maybe@load@fontshape
	. b1283, b1390, b1432, b1740,
${f M}$	b1772, b1879, b1900, b1952, b1983
\m@th b2117, b2268,	\mbox c1126, c1128, c1130,
c1324, $c1347$, $c1356$, $c1364$,	c1181, c1184, c1187, c1255, d486
c1372, d20, d225, d249, d265,	\mc e32,
d320, d337, d365, d379, d393,	e59, e64, e65, e66, e67, e68, e69,
d409, d423, d451, e17, e18,	e70, e71, e72, e73, e74, e75, g1617
g983, g1025, g1026, g1033, g1648	\mcdef@ult b1615, b1673, b1697, b1834
\mainmatter g1154	\mcdefault b1615,
\make@pcaptionbox $d215, \underline{d230}$	b1842, b1849, b2493, b2496, e34
\makeatletter c31	
\makeatother	\mcfam e62
\makelabel g1453, g1480, g1490	\mcfamily b1834, b1839, b1856,
	b2060, b2068, b2074, b2081, g1617
\MakeRobust g167, g168	\mddef@ult b1609, b1646, b1647,
\maketitle <u>g981</u>	b1648, b1706, b1707, b1807, b2012
\maketombowbox $\underline{c396}$, $g73$, $g77$, $g81$	\mddefault b1601,
\marginparpush $g587$	b1602, b1609, b1642, b1643,
\marginparsep g587	b1644, b1645, b1654, b1699, b2497
\marginparwidth $\dots \dots g599$	$\mbox{mddefault@previous} \dots b1642$
\markboth	\mdseries $\dots \dots \underline{b1620}$
. g834, g836, g844, g861, g892,	$\verb \mbox b1592, b1698, b1707 $
g894, g902, g920, g1191, g1210	\mdseries@mc $b1592$, $b1697$, $b1706$
\markright g839, g851,	$\verb \mbox \verb mdseries@previous b1645 $
g863, g868, g897, g909, g922, g927	\mdseries@rm b1646, b1651
\math@bgroup b737, b740, b743	\mdseries@sf b1647, b1652
\math@fontsfalse b632	\mdseries@tt b1648, b1653
\mathbf b1621, b1666, g1604, g1622	\medskipamount g285
\mathcal g1621, b1000, g1004, g1022	\merge@font@series b1253, b1864
\mathcar g1020	\merge@font@shape b1318, b1334
	\merge@kanji@series
c1379, c1383, c1384, c1396,	b1254, <u>b1265</u> , b1865
c1399, c1400, c1411, c1414,	\merge@kanji@series@ <u>b1265</u> , b1873
c1415, c1430, c1433, c1434, c1451	\merge@kanji@shape b1319, b1335, b1366
\mathgroup e37,	\merge@kanji@shape@ <u>b1366</u> , b1894
e43, e44, e51, e52, e53, e54, e55, e56	\messageBreak a116, a117, a118, b240,
\mathgt b1844, b1851, e29,	b242, b244, b502, b533, b578,
g1599, g1604, g1612, g1613, g1618	
\mathit g1623	b613, b1462, c11, c13, c15, c25
\mathmc b1841, b1848, e28,	\minipage \d273
g1596, g1603, g1608, g1609, g1617	\minute <u>c1102</u> , <u>g12</u> , g72
\mathnormal g1627	\mit $\underline{g1626}$
\mathrm b737, b740, b743, g1603, g1619	\mkern $g1648$

 $\label{eq:File Key: a=plvers.dtx} \textbf{ a=plvers.dtx}, \textbf{ b=plfonts.dtx}, \textbf{ c=plcore.dtx}, \textbf{ d=plext.dtx}, \textbf{ e=pl209.dtx}, \textbf{ f=kinsoku.dtx}, \textbf{ g=jclasses.dtx}, \textbf{ h=jltxdoc.dtx}$

\mlineplus $\underline{\text{h}30}$	\nofixcompositeaccent
\month . g71, g1845, g1847, g1860, g1863	<u>b2358</u> , b2376,
\moveleft	b2381, b2383, b2397, b2407, b2409
c502, c529, c551, d543, d547, d551	\noindent
\moveright c635, c707, c776	. g983, g1028, g1032, g1825, g1829
(
N	\nointerlineskip d543, d547, d551
\NeedsTeXFormat $b2, \underline{c2}, c148, e80$	\normalbaselineskip b937, b975,
	b1012, b1037, b1064, g1444, g1472
\newblock g109, g1781	\normalcolor
\newbox $b65, b66, b71, b86,$. c170, c216, c247, c278, c319,
b1001, c385, c386, c387, c388,	c341, c378, c639, c649, c711,
c389, c390, c391, c392, d134, d144	c721, c780, c790, d314, d563, g1650
\newcount c851, c1102, c1103, g1834	\normalfont
\newcounter	<u>b1529</u> , c838, c839, c845, c846,
g2, g1110, g1112, g1113, g1115,	d145, e44, g1193, g1212, g1223,
g1116, g1117, g1118, g1119,	
g1508, g1509, g1535, g1536, h30	g1230, g1272, g1292, g1300,
	g1304, g1308, g1312, g1316,
\newdimen	g1465, g1492, g1617, g1618,
. b17, b18, b19, b20, b21, b22,	g1619, g1620, g1621, g1622,
b23, b24, b25, b26, b27, b1002,	g1623, g1624, g1625, g1650, h28
c363, c569, c570, c571, d135,	$\verb normallineskip g280 \\$
d136, d137, d138, d141, d456,	\normalmarginpar $\dots g1891$
d457, $d458$, $g1633$, $g1636$, $g1779$	\normalsfcodes c627, c699, c768
\newenvironment $g953$,	\normalsize . c626, c698, c767, d145,
g964, $g1080$, $g1090$, $g1482$,	g139, g1308, g1312, g1316, <u>h5</u>
g1493, g1499, g1505, g1529,	
g1532, g1556, g1559, g1782, g1804	\not@advancelinefalse d516
\newif a57, b785,	\not@advancelinetrue d510
b1154, b1155, b1156, b1305,	\not@math@alphabet b1621,
c361, c362, d2, d506, g3, g5,	b1640, b1664, b1666, b1688,
g6, g9, g10, g11, g15, g16, g17	b1690, b1841, b1844, b1848, b1851
\newlanguage	$\verb notffam@list \underline{b60}, b1190, b1204 \\$
\newlanguage g1562, g1563	\notkfam@list $\overline{\underline{b60}}$, b1168, b1183
	\null b2266, b2274,
\newpage c68, c69, c73, c74, g768,	c46, c81, c918, c941, c982, c996,
g769, g773, g774, g780, g781,	c1009, c1100, c1281, c1295,
g785, g786, g791, g792, g796,	c1320, c1324, c1356, c1364,
g797, g957, g961, g970, g975,	
g1040, g1061, g1235, g1238, g1240	d17, d57, d332, d349, g991,
\newskip $d507$	g1004, g1006, g1061, g1082,
\newtoks c394	g1088, g1179, g1238, g1240, g1646
\next d539, d554, d555	$\verb \number g71, g1838, g1840, g1854,$
\NFSS h29	g1855, g1860, g1861, g1863, g1864
\nfss@catcodes $b158$, $b250$, $\overline{b274}$	\numberline d211, g1259, g1636
\nfss@text c978, c992, c1005	\numexpr
\nobreak c81, c967, d544, d548,	g1836, g1838, g1840, g1845, g1847
d552, g1196, g1199, g1225,	0 70 70 70 70
, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	O
g1279, g1284, g1646, g1647,	
g1649, g1684, g1686, g1703,	\oalign b2362, b2367, b2394
g1718, g1840, g1855, g1863, g1864	\oddsidemargin c618,
\nocorr b2419, b2422, b2442, b2445	c621, c685, c688, c754, c757, g599

\offinterlineskip d162	g1325, g1572, g1573, g1651,
\omathchar . c1382, c1394, c1409, c1448	
	g1685, g1703, g1718, g1814, g1817
\omathchardef	\paragraph $g1309$
c1387, c1403, c1404, c1419, c1420	\paragraphmark $g1102$
\on@line b1720, b1723, b1751,	\parbox <u>d323</u>
b1754, b1932, b1935, b1962, b1965	\parfillskip g1641, g1681, g1699, g1714
\onecolumn $g956, g968, g1178,$	\parindent d247, d263, g283, g1028,
g1665, g1756, g1769, g1813, g1888	$g1032, g1192, g1\overline{222}, g1270,$
\org@circle $d504$, $d505$	g1290, g1642, g1680, g1699,
\org@dashbox d498, d499	g1714, g1809, g1824, g1828, <u>h5</u>
\org@line d492, d493	\parsep g107, g185, g186,
\org@oval d501, d502	g195, g196, g205, g206, g217,
\org@put d489, d490	g218, g227, g228, g237, g238,
\org@vector d495, d496	g1361, g1366, g1371, g1381,
\oval <u>d489</u>	g1385, g1389, g1391, g1397,
\overfullrule $g116, \overline{g117}$	g1446, g1474, g1503, h19, h20
	\parskip g283, g1446, g1474, g1488, g1810
P	\part g1166
$\verb \p@array \dots \dots$	\partopsep g1355, g1398, g1488
\p@enumii g1435	\PassOptionsToClass h2
\p@enumiii g1435	\patch@level b1216
\p@enumiv $g1435, \overline{g1791}$	-
\p@known@latexreleaseversion a6	\pbox
\p@stabular d9, <u>d14</u>	\pcaption d198
\p@tabarray d11, d19, d20	\penalty c93, c108,
-	c109, c124, c140, c920, c943, g1704
\p0tabular d13, d14	\pfmtname <u>a27</u> , a44, a46, a48, c4, c11
\p@thanks g981, g988, g1011, g1050, g1065	\pfmtversion
\p@warn@latexrelease	. <u>a27</u> , a44, a46, a48, a74, c23, c26
	\pickup@font b513, b544, b589, b624,
\PackageError	b827, b832, b851, b886, b891, b910
\pagenumbering g1157, g1160, g1882	\picture \d452
\pageshrink c304, c308, c332	\platexBANNER a39, a52, a54
\pagestyle g1880, g1881	\platexNILa a39, a50
\paperheight c581,	\platexNILb a41, a50
c694, c763, g19, g22, g25, g28,	\platexreleaseversion a31, a114
g32, g35, g38, g41, g45, g48,	\plEndIncludeInRelease
g51, g54, g64, g65, g412, g415,	. a87, a92, a94, b44, b51, b73,
g418, g528, g529, g532, g568, g680	b77, b83, b87, b98, b108, b118,
\paperwidth c579,	b127, b136, b143, b149, b154,
c693, c762, g20, g23, g26, g29,	b214, b235, b332, b336, b402,
g33, g36, g39, g42, g46, g49,	b426, b460, b476, b556, b592,
g52, g55, g65, g66, g411, g414,	b627, b701, b716, b792, b797,
g419, g526, g527, g531, g650, g660	b861, b921, b962, b999, b1029,
\par d50,	b1056, b1083, b1326, b1338,
d228, d310, g109, g983, g994,	b1354, b1365, b1412, b1448,
g1000, g1002, g1003, g1022,	b1466, b1471, b1493, b1509,
g1066, g1072, g1076, g1088,	b1528, b1561, b1576, b1591,
g1169, $g1196$, $g1198$, $g1215$,	b2062, b2069, b2076, b2083,
g1217, g1224, g1231, g1318,	b2094, b2101, b2108, b2121,

b2125, b2135, b2146, b2150,	c842, c848, c855, c859, c873,
b2156, b2160, b2190, b2211,	c884, c894, c901, c925, c947,
b2215, b2221, b2230, b2236,	c972, c987, c1000, c1015, c1028,
b2248, b2283, b2330, b2353,	c1039, $c1051$, $c1061$, $c1071$,
b2357, b2373, b2378, b2390,	c1086, $c1105$, $c1162$, $c1191$,
b2404, b2416, b2439, b2462,	c1220, c1246, c1253, c1258,
b2472, b2476, c59, c63, c99,	c1263, $c1274$, $c1278$, $c1286$,
c115, c131, c146, c194, c225,	c1292, c1299, c1304, c1328,
c256, c287, c370, c373, c380,	c1350, c1359, c1367, c1375,
c383, c446, c492, c522, c545,	c1392, c1407, c1427, c1437,
c567, c587, c591, c661, c731,	c1445, c1455, c1459, c1468, c1476
c800, c811, c819, c827, c841,	\pltx@cleartoevenpage g765
c847, c854, c858, c872, c883,	\pltx@cleartoleftpage $g765, g801$
c893, c900, c924, c946, c964,	\pltx@cleartooddpagegros, goor
c986, c999, c1012, c1027, c1038,	
c1048, c1060, c1068, c1085,	<u>g765</u> , g966, g1156, g1159
c1098, c1161, c1190, c1219,	\pltx@cleartorightpage $g765$, $g803$
c1245, c1252, c1257, c1262,	\pltx@composite@chkenc
c1273, c1277, c1285, c1291,	b2169, b2187, b2188
c1298, c1303, c1327, c1349,	\pltx@composite@temp
c1358, c1366, c1374, c1391,	\dots b2261, b2262, b2295, b2296
c1406, c1426, c1436, c1441,	\pltx@cond b2166,
c1454, c1458, c1462, c1475, c1479	b2178, b2181, b2185, b2186,
\plEndIncludeRelease	b2195, b2200, b2203, b2207, b2208
	$\verb \pltx@do@subst@correction@al \underline{b656} $
\plIncludeInRelease	\pltx@do@subst@correction@tate <u>b656</u>
$\frac{a56}{b}$, $\frac{b30}{b}$, $\frac{b45}{b}$, $\frac{b68}{b}$,	\pltx@do@subst@correction@yoko <u>b656</u>
b74, b78, b84, b88, b99, b109,	\pltx@fontseries@saved
b119, b128, b137, b144, b150,	b1659, b1663, b1671, b1695
b162, b215, b319, b333, b377,	\pltx@foot@penalty <u>c848</u> , c888,
b403, b447, b461, b480, b557,	c919, c920, c921, c942, c943, c944
b593, b657, b702, b787, b793,	\pltx@gluetype c47, c52
b800, b862, b924, b963, b1004,	\pltx@isletter <u>b2161</u> , b2255, b2289
b1030, b1057, b1307, b1327,	\pltx@isletter@i
b1339, b1355, b1366, b1413,	b2176, b2177, b2198, b2199
b1449, b1467, b1472, b1494,	\pltx@isletter@ii
b1510, b1529, b1562, b1577,	-
b2041, b2063, b2070, b2077,	b2179, b2180, b2201, b2202
b2084, b2095, b2102, b2109,	
	\pltx@isletter@iii
b2122, b2126, b2136, b2147,	$\dots b2182, \ b2183, \ b2204, \ b2205$
b2151, b2157, b2161, b2191,	b2182, b2183, b2204, b2205 \pltx@isletter@iv
b2151, b2157, b2161, b2191, b2212, b2216, b2222, b2231,	b2182, b2183, b2204, b2205 \pltx@isletter@iv
b2151, b2157, b2161, b2191, b2212, b2216, b2222, b2231, b2237, b2249, b2284, b2331,	$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
b2151, b2157, b2161, b2191, b2212, b2216, b2222, b2231, b2237, b2249, b2284, b2331, b2354, b2358, b2374, b2379,	$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
b2151, b2157, b2161, b2191, b2212, b2216, b2222, b2231, b2237, b2249, b2284, b2331, b2354, b2358, b2374, b2379, b2391, b2405, b2417, b2440,	b2182, b2183, b2204, b2205 \pltx@isletter@iv b2182, b2184, b2204, b2206 \pltx@jfmgluesubtype c48, c53 \pltx@latex@level . b1211, b1861, b1863, b1872, b1917, b1922, b1929
b2151, b2157, b2161, b2191, b2212, b2216, b2222, b2231, b2237, b2249, b2284, b2331, b2354, b2358, b2374, b2379, b2391, b2405, b2417, b2440, b2463, b2473, c34, c60, c85,	$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
b2151, b2157, b2161, b2191, b2212, b2216, b2222, b2231, b2237, b2249, b2284, b2331, b2354, b2358, b2374, b2379, b2391, b2405, b2417, b2440, b2463, b2473, c34, c60, c85, c100, c116, c132, c153, c195,	$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
b2151, b2157, b2161, b2191, b2212, b2216, b2222, b2231, b2237, b2249, b2284, b2331, b2354, b2358, b2374, b2379, b2391, b2405, b2417, b2440, b2463, b2473, c34, c60, c85, c100, c116, c132, c153, c195, c226, c257, c366, c371, c376,	$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
b2151, b2157, b2161, b2191, b2212, b2216, b2222, b2231, b2237, b2249, b2284, b2331, b2354, b2358, b2374, b2379, b2391, b2405, b2417, b2440, b2463, b2473, c34, c60, c85, c100, c116, c132, c153, c195, c226, c257, c366, c371, c376, c381, c397, c447, c495, c523,	b2182, b2183, b2204, b2205 pltx@isletter@iv b2182, b2184, b2204, b2206 pltx@jfmgluesubtype c48, c53 pltx@latex@level b1211, b1861, b1863, b1872, b1917, b1922, b1929 pltx@ltx@sh@ft b2136, b2363, b2387, b2401, b2413 pltx@mark b2164, b2178, b2179, b2181, b2183,
b2151, b2157, b2161, b2191, b2212, b2216, b2222, b2231, b2237, b2249, b2284, b2331, b2354, b2358, b2374, b2379, b2391, b2405, b2417, b2440, b2463, b2473, c34, c60, c85, c100, c116, c132, c153, c195, c226, c257, c366, c371, c376, c381, c397, c447, c495, c523, c546, c573, c588, c594, c662,	b2182, b2183, b2204, b2205 \pltx@isletter@iv
b2151, b2157, b2161, b2191, b2212, b2216, b2222, b2231, b2237, b2249, b2284, b2331, b2354, b2358, b2374, b2379, b2391, b2405, b2417, b2440, b2463, b2473, c34, c60, c85, c100, c116, c132, c153, c195, c226, c257, c366, c371, c376, c381, c397, c447, c495, c523,	b2182, b2183, b2204, b2205 pltx@isletter@iv

\pltx@mark@ b2164, b2193	\prepare@family@series@update
$\verb \pltx@next@inhibitglue . c1249, \underline{c1263}$	b1713, b1718, b1930
\pltx@oalign	\prepare@family@series@update@kanji
<u>b2109</u> , b2362, b2385, b2399, b2411	<u>b1713</u> , b1839, b1849, b1852, b1960
\pltx@patch@bfseries	\prepartname
b1660, b1664, b1687	g1187, g1195, g1206, g1214, g1866
\pltx@patch@mdseries	\printglossary <u>c110</u>
b1661, b1688, b1711	\process@table a106, a107, b2026
\pltx@pdfencA b2168, b2170	\ProcessOptions g132, h5
\pltx@reset@catcode@trick	\protect
b1238, b2024	b719, b1137, c602, c669, c739,
\pltx@saved@ltx@sh@ft b2126,	c977, c982, c991, c1004, d211,
b2368, b2386, b2395, b2400, b2412	g983, g1259, g1265, g1266, g1660
$\protect\$ \pltx@saved@oalign $\underline{b2102}$,	\protected b2466, b2469, c51, c1266
b2367, b2384, b2394, b2398, b2410	\protected@edef c912, c935, c95
\pltx@saved@text@composite@x	\protected@file@percent g1653, g166
<u>b2237,</u> b2369, b2388, b2402, b2414	\protected@write g1658
\pltx@scanstop b2165,	\protected@xdef c864,
b2176, b2177, b2179, b2180,	c869, c876, c881, c890, c898, g985
b2194, b2198, b2199, b2201, b2202	\providecommand
$\verb \pltx@temp@catcode@ix . b1239, b1244 $	g1653, h24, h25, h26, h27, h28, h29
\pltx@temp@catcode@xiv b1240, b1242	\ProvidesFile
\pltx@tempa b430, b433	b2478, b2548, b2549, b2550, b2551
\pltx@text@composite@x	\ProvidesPackage b3, c149
<u>b2249</u> , b2364, b2389, b2403, b2415	\ps@bothstyle $g878$
$\verb \pltx@textbottom c162, c190 $	\ps@footnombre $g820$, $g879$, $g915$
$\protect\pro$	\ps@headings g82'
\pltx@today@year@	\ps@headnombre $g813$, $g828$, $\overline{g85}$
\dots g1835, g1846, g1848, g1850	\ps@jpl@in g807, g812, g814,
\postbreakpenalty f4, f5, f8, f11, f22,	g821, g828, g857, g879, g915, g937
f35, f39, f41, f44, f46, f48, f49,	\ps@myheadings g93
f51, f53, f55, f57, f59, f61, f67, f68	\ps@plain g806, g812, g93'
\postchaptername $g1152, g1866$	\pstyle <u>h28</u>
\postpartname	\put <u>d489</u>
g1187, g1195, g1206, g1214, g1866	(Pas :
\ppatch@level . $a27$, a43, a45, a46, a48	${f Q}$
\prebreakpenalty	\quotation g1098
\dots f2, f3, f6, f7, f9, f10, f12,	quotation (environment) g1499
f13, f14, f15, f16, f17, f18, f19,	quote (environment) g1508
f20, f21, f23, f24, f25, f26, f27,	3
f28, f29, f30, f31, f32, f33, f34,	${f R}$
f36, f37, f38, f40, f42, f43, f45,	\raggedbottom g1883
f47, f50, f52, f54, f56, f58, f60,	\raggedright g1192, g1222, g1271, g1291
f62, f63, f64, f65, f66, f69, f70,	\raise b2089, b2099, c405,
f71, f72, f73, f74, f75, f76, f77,	c454, c969, d67, d73, d85, d92,
f78, f79, f80, f81, f82, f83, f84,	d355, d369, d399, d559, d564, e18
f85, f86, f87, f88, f89, f90, f91, f92	\reDeclareMathAlphabet
\prechaptername $g1151, \underline{g1866}$	$$ $\underline{b718}$, $\underline{g1603}$, $\underline{g1604}$
\prensuji $\underline{d531}$, $\underline{e7}$	\ref c973, c988

 $\label{eq:File Key: a=plvers.dtx} \textbf{ a=plvers.dtx}, \textbf{ b=plfonts.dtx}, \textbf{ c=plcore.dtx}, \textbf{ d=plext.dtx}, \textbf{ e=pl209.dtx}, \textbf{ f=kinsoku.dtx}, \textbf{ g=jclasses.dtx}, \textbf{ h=jltxdoc.dtx}$

\refname g1783, g1873	\rightmargin g1486, g1497, g1502, g1506
\refstepcounter	\rightmark g831, g833, g859, g860,
\dots d203, g1185, g1204, g1256	g883, g889, g916, g918, g940, g942
\rel@fontshape $\underline{b16}$	\rightskip
\rel@shape b760, b761, b774, b775	g1486, g1641, g1680, g1699, g1714
\removejfmglue	\rm b740, e51,
<u>c34</u> , c1108, c1151, c1154, c1157	e59, e64, e65, e66, e67, e68, e69,
\renewenvironment g1438, g1466	e70, e71, e72, e73, e74, e75, g1617
\text{Rensuji} $\underline{d531}$, $\underline{e7}$	\rmdef@ult b1605, b1632, b1651, b1827
\rensuji $d509$, $d531$, $d532$, $d566$,	\rmdefault b1605, b1818
d567, $e8$, $e9$, $g1121$, $g1122$,	\rmfamily b1827, d563, e51, g1619
g1124, g1125, g1127, g1129,	\roman@normal
g1131, g1133, g1321, g1330,	
g1412, g1413, g1414, g1415,	e45, e51, e52, e53, e54, e55, e56
g1511, g1514, g1538, g1541, g1657	\romanencoding b764, b769, b777,
	$b781, \underline{b1085}, b1480, b1500,$
\rensujiskip d507, d508, d515, d528	b1516, b1538, b1569, b1584, e46
$\RequirePackage \dots e5, e6, g137$	\romanfamily b764, b769, b777, b781,
$\Require Package With Options$. $b5, c151$	b1157, b1500, b1516, b1585,
\reserved@a b34, b42,	b1721, b1732, b1933, b1944, e47
b323, b325, b329, b348, b351,	\romannumeral g1441, g1469
b353, b367, b370, b372, b385,	\romanprocess@table b2026
b389, b410, b414, b485, b486,	• —
b501, b504, b509, b516, b517,	\romanseries b765,
b532, b535, b540, b561, b562,	b770, b778, b782, <u>b1247</u> , b1500,
b577, b580, b585, b597, b598,	b1516, b1586, b1668, b1669,
	b1692, b1693, b1864, b1866, e48
b611, b615, b620, b951, b953,	\romanseriesforce $\underline{b1257}$, $b1867$, $b1869$
b956, b989, b991, b994, b1175,	\romanshape b770, b782,
b1176, b1196, b1197, b1278,	<u>b1307</u> , b1500, b1516, b1587, e49
b1279, b1284, b1285, b1381,	\romanshapeforce <u>b1339</u>
b1382, b1391, b1392, b1427,	\rule c917, c940, c962
b1428, b1433, b1434, b1783,	(1416 6017, 6010, 6002
b1784, b1993, b1994, b2422,	S
b2425, b2445, b2448, c3, c4, c7, c10	
\reserved@b b324, b328, b329, b388,	\save@tbaselineshift d457, d461, d488
b389, b413, b414, b1453, b1454,	\save@ybaselineshift d456, d460, d487
b1458, b1790, b1795, b1799,	\sbox g1568, g1569
b1800, b1807, b1808, b2000,	\sc e54, <u>g1623</u>
	\scan@allowedfalse h43, h45
b2005, b2007, b2008, b2012,	\scan@allowedtrue h44
b2013, b2423, b2425, b2446, b2448	\scriptsize g241
\reserved@c b1792,	
b1795, $b1805$, $b1806$, $b1809$,	\scshape e54, g1625, h28
b1810, b2002, b2005, b2010,	\secdef g1171, g1180, g1252
b2011, b2014, b2015, b2424,	\section $g1092$, $g1297$,
b2426, b2433, b2447, b2449, b2456	g1668, g1760, g1773, g1783, g1806
\reserved@d b1797, b1798, b1803, b1804	$\verb \sectionmark \dots \dots g836, g851,$
\reserved@ec81	g863, g894, g909, g922, g945, g1102
\reserved@f	\selectfont b437, b440,
\reset@font b1559, b1575, b1590,	<u>b799</u> , b1478, b1483, b1498,
c625, c697, c766, c907, c930,	b1501, b1514, b1517, b1542,
c952, c978, c992, c1005, d563, g809	b1550, b1573, b1588, b1637,

b1656, b1664, b1677, b1688,	\skip c168, c214, c245, c276, c317,
b1701, b1842, b1845, b1849,	c339, d313, g693, g694, g695, g1584
b1852, b2504, b2505, e37, e43, e50	\sl e53, g1623
\series@change@debug	\sloppy g1793, \overline{\gamma}{\gamma}886
b1720, b1723, b1734,	\slshape e53, g1624
b1737, b1741, b1751, b1754,	\small g177, g986, g1094, <u>h5</u> , h26
b1765, b1768, b1773, b1786,	\smallskipamount g285
b1794, b1799, b1805, b1808,	\spacefactor c967, c970, c984, e13, e16
b1810, b1932, b1935, b1946,	\split@name b452, b465
b1949, b1953, b1962, b1965,	\splitmaxdepth c910, c933, c955
b1976, b1979, b1984, b1996,	\splittopskip c909, c932, c954
b2004, b2007, b2010, b2013, b2015	\stepcounter c657,
\series@drop@one@m b1920	c728, c797, c863, c868, c875, c880
\series@maybe@drop@one@m	\strip@pt b929, b967, b2131, b2142
b1222, b1229,	\strut <u>b88</u> , c1083, c1097
b1230, b1300, b1608, b1609,	\strutbox <u>b78</u> ,
b1744, b1776, b1796, b1802, b1925	b113, b977, c910, c917, c933,
\series@maybe@drop@one@m@x	c940, c955, c962, d28, d29, d42, d43
b1225, b1229, b1231	\subitem g1814
\seriesdefault	\subparagraph g1313
. b1540, b1547, b1571, b1586, e48	\subparagraphmark g1102
\set@fontsize b857, b918, <u>b923</u>	\subsection g1301
\set@safe@kanji@shape	\subsectionmark g839, g897, g946, g1102
b1314, b1349, b1384, b1400, <u>b1449</u>	\subst@correction b661, b667,
\set@target@series@kanji	b670, b676, b679, b685, b705, b711
<u>b1265</u> , b1876,	\subsubitem g1814
b1882, b1885, b1888, b1918, b1923	\subsubsection $g1305$
\set@typeset@protect c609,	
c611, c676, c678, c745, c747, d52	\subsubsectionmark g1102
\setcounter g18, g21, g24, g27, g31,	\symbold e44
g34, g37, g40, g44, g47, g50,	\symgothic e43, e44, e65 \symitalic e55
g53, g755, g756, g757, g758,	\symmincho e31, e37, e62, g1598
g959, g973, g977, g1008, g1046,	\symoperators e51, e57, e62, g1596
g1108, $g1109$, $g1319$, $g1320$,	\symsans e51
g1326, g1327, g1628, g1629, h31	\symslanted e53
$\verb \SetRelationFont \dots \dots \underline{b758}$	\symsmallcaps e54
$\SetSymbolFont \dots e30, g1597$	\symtypewriter e56
\settowidth $g1786$	
\sf e52, g1617	${f T}$
\sfcode $\overline{g1797}$	\tabbingsep g1583
\sfdef@ult b1606, b1633, b1652, b1828	\tabcolsep g1580
\sfdefault b1606, b1821	table (environment) g1556
\sffamily b1828, e52, g1620	table* (environment) g1556
\shapedefault	\tablename g1554, g1555, g1876
. b1541, b1548, b1572, b1587, e49	\tableofcontents $g1663$, $g1663$
\shipout c608, c675, c744	\tabskip d47
\size@update	\tabular d3
b859, b920, b934, b960, b972, b998	\tabular* <u>d</u>
0000, 0020, 0001, 0000, 0012, 0000	,νανατατ · · · · · · · · · · · · · · · · · ·

\tabularnewline $d49$	\textwidth
\target@meta@family@value . b1726,	. c600, c640, c650, c667, c712,
b1757, b1784, b1791, b1793,	c722, c737, c781, c791, d301,
b1938, b1968, b1994, b2001, b2003	g326, g571, g652, g663, g681, g990
\target@series@value b1725,	\tfont b646, b681, b683, b824, b883
b1733, b1736, b1738, b1742,	\thanks g988, g989, g1009, g1047, g1064
b1743, b1744, b1756, b1764,	thebibliography (environment) . g1782
b1767, b1769, b1774, b1775,	\thechapter g847,
b1776, b1800, b1806, b1807,	g871, g905, g930, g1120, g1257,
b1809, b1937, b1945, b1948,	g1259, g1277, g1330, g1331,
b1950, b1954, b1955, b1967,	g1514, g1521, g1541, g1548, g1591
b1975, b1978, b1980, b1985,	\theenumi
b1986, b2008, b2011, b2012, b2014	g1410, g1424, g1430, g1435, g1436
\tate b122, b124,	\theenumii g1410, g1425, g1431, g1436
b130, b132, b942, b945, b980,	\theenumiii g1410, g1426, g1432, g1437
b983, c357, c905, c928, c950,	\theenumiv g1410, g1427, g1433, g1792
d38, d98, d111, d242, d243,	\theequation d564, d565, g1587
d289, d292, d381, d397, d437,	
d440, d466, d471, g83, g990, h37	\thefigure <u>g1508</u> , g1527, g1528
\tbaselineshift b1016, b1023,	\thefootnote c830, c869, c881, g983, g1024
b1025, b1041, b1048, b1051,	theindex (environment) g1804
b1068, b1075, b1078, b2090,	\thempfn
b2099, b2116, b2227, b2258,	<u>c829</u> , c864, c876, c890, c898, d303
b2277, b2292, b2301, b2303,	\thempfootnote <u>c831</u> , d303
b2324, b2344, b2346, d65, d71,	\thepage
d82, d89, d461, d481, d488,	c979, c993, c1006, g809, g815,
d490, d493, d496, d499, d502, d505	g816, g817, g818, g822, g823,
\tenmin	g824, g825, g830, g831, g832,
textasteriskcentered g1463	g833, g859, g860, g882, g884,
\textbaselineshiftfactor	g888, g890, g917, g919, g939,
b2269, b2270, b2316, b2317	g940, g941, g942, g1657, g1658
\textbullet g1455	\theparagraph g1120
\textcircled g1458	\thepart
\textendash g1460	g1120, g1187, g1195, g1206, g1214
\textfloatsep $\underline{g696}$	\thesection g837, g852, g864, g895,
\textfraction $g761$	g910, g923, g1120, g1321, g1322
$\verb \textgt \dots \dots \underline{b1855}$	\thesubparagraph g1120
\textheight	\thesubsection g840, g898, g1120
. c600, c656, c667, c727, c737,	\thesubsubsection $g1120$
c796, g444, g572, g651, g662, g990	\thetable g1535, g1554, g1555
\textmc b1855	\thispagestyle c68,
\textperiodcentered g1464	c73, g768, g773, g780, g785,
\textsf h27, h29	g791, g796, g958, g972, g1044,
\textsl h25, h26	g131, g130, g330, g372, g1044, g1177, g1238, g1240, g1249, g1809
\TextSymbolUnavailable b1142	\three g1439, g1246, g1249, g1665
\text\ b2418	\time g1433, g1437
\textt h24	\tiny g241
\textunderscore	\title g948, g1016, g1055
veremuerscore <u>D2004</u>	(01016 8340, 81010, 81036

\titlepage g1081	\typeout a50,
titlepage (environment) g952	a51, b1025, b1051, b1078, e2, g1257
\tmp@error@fontshape	, , , , , , , ,
b804, b836, b865, b895	\mathbf{U}
	\ucs c41
\tmp@item . b341, b343, b360, b362,	
b546, b548, b635, b637, b643,	\underline <u>c1350</u> , d557, d558
b688, b690, b694, b806, b808,	\unexpanded
b815, b834, b867, b869, b875,	. b35, b37, b39, b41, c1269, c1270
b893, b1110, b1112, b1122,	\unhcopy b93,
b1124, b1128, b1160, b1164,	b95, b103, b105, b113, b115,
b1168, b1187, b1190, b1486,	b123, b125, b131, b133, b141, b147
	\unitlength d464, d465,
b1488, b1503, b1505, b1519, b1521	
\t to@captionboxwidth . $d266$, $d268$, $d269$	d467, d468, d472, d473, d475, d476
\toclineskip $g1633$, $g1640$	\unpenalty c888
\today g951, g1835	\update@series@target@value
\toks a44, a46, a48, a51	b1728, b1940
	\update@series@target@value@kanji
\toks@ a71, a75, a78,	<u>b1713,</u> b1970, b1992
a83, a109, a110, b386, b390,	\updefault b2498
b392, b395, b411, b415, b417, b420	
\tombowdatefalse g75, g79	\upshape
\tombowdatetrue c362, g68	b2060, b2068, b2074, b2075, b2081
\tombowfalse	\usecounter g1452, g1790
\tombowtrue	\usefont $\underline{b1472}$
	\usekanji $b639, b645, \underline{b1472}$
\topfraction <u>g759</u>	\userelfont b786
\topmargin $c577, c691, c760, \underline{g542}, g682$	\useroman b648, b1472
\topsep g184, g194, g204,	
g216, g226, g236, g1362, g1367,	V
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388,	V \vadjust c1019, c1058, h46
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399,	\textbf{V} \text{\vadjust} \cdots \cdots \cdots \cdots \cdots \cdots \cdots \delta \delta \cdots \cdots \cdots \delta \de
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399, g1444, g1445, g1472, g1473, h18	$ \begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399, g1444, g1445, g1472, g1473, h18 \topskip g294, g324, g511, g540, g1488	$ \begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399, g1444, g1445, g1472, g1473, h18	$ \begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399, g1444, g1445, g1472, g1473, h18 \topskip g294, g324, g511, g540, g1488	$\begin{tabular}{llllll} & & & & & & & & & & & & & & & & $
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399, g1444, g1445, g1472, g1473, h18 \topskip g294, g324, g511, g540, g1488 \tracingfonts b853, b913, b949, b987, b1024, b1050, b1077	$\begin{tabular}{llllll} & & & & & & & & & & & & & & & & $
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399, g1444, g1445, g1472, g1473, h18 \topskip g294, g324, g511, g540, g1488 \tracingfonts b853, b913, b949, b987, b1024, b1050, b1077 \try@load@fontshape . b497, b528, b573	$\begin{tabular}{llllll} & & & & & & & & & & & & & & & & $
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399, g1444, g1445, g1472, g1473, h18 \topskip g294, g324, g511, g540, g1488 \tracingfonts b853, b913, b949, b987, b1024, b1050, b1077 \try@load@fontshape . b497, b528, b573 \tsample h33	$\begin{tabular}{llllll} & & & & & & & & & & & & & & & & $
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399, g1444, g1445, g1472, g1473, h18 \topskip g294, g324, g511, g540, g1488 \tracingfonts b853, b913, b949, b987, b1024, b1050, b1077 \try@load@fontshape . b497, b528, b573 \tsample	\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399, g1444, g1445, g1472, g1473, h18 \topskip g294, g324, g511, g540, g1488 \tracingfonts b853, b913, b949, b987, b1024, b1050, b1077 \try@load@fontshape . b497, b528, b573 \tsample	V \vadjust c1019, c1058, h46 \vector d489 \verb c1014, h46 \verb@eol@error c1021, c1033, c1044, h48 \verbatim@font c1022, c1034, c1045 \verbatim@nolig@list h47 verse (environment) g1493 \vfil . c637, c709, c778, g991, g1004, g1006, g1082, g1088, g1179, g1235 \vfill c509, c511, c534, c536, c556, c558
$\begin{array}{c} \text{g216, g226, g236, g1362, g1367,} \\ \text{g1372, g1380, g1384, g1388,} \\ \text{g1394, g1395, g1396, g1399,} \\ \text{g1444, g1445, g1472, g1473, h18} \\ \text{\downarrowtopskip} & & & & & & & & & & & & & & & & & & $	V \vadjust c1019, c1058, h46 \vector d489 \verb c1014, h46 \verb@eol@error c1021, c1033, c1044, h48 \verbatim@font c1022, c1034, c1045 \verbatim@nolig@list h47 verse (environment) g1493 \vfil . c637, c709, c778, g991, g1004, g1006, g1082, g1088, g1179, g1235 \vfill c509, c511, c534, c536, c556, c558 \viiipt 667
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399, g1444, g1445, g1472, g1473, h18 \topskip g294, g324, g511, g540, g1488 \tracingfonts b853, b913, b949, b987, b1024, b1050, b1077 \try@load@fontshape . b497, b528, b573 \tsample	V \vadjust c1019, c1058, h46 \vector d489 \verb c1014, h46 \verb@eol@error c1021, c1033, c1044, h48 \verbatim@font c1022, c1034, c1045 \verbatim@nolig@list h47 verse (environment) g1493 \vfil . c637, c709, c778, g991, g1004, g1006, g1082, g1088, g1179, g1235 \vfill c509, c511, c534, c536, c556, c558
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399, g1444, g1445, g1472, g1473, h18 \topskip g294, g324, g511, g540, g1488 \tracingfonts b853, b913, b949, b987, b1024, b1050, b1077 \try@load@fontshape .b497, b528, b573 \tsample h33 tsample (environment) h33 \tstrut b119 \tstrutbox b65, b81, b93, b105, b115, b123, b131, b942, b980, d34, d35, d39, d40, d84, d91	\textbf{V} \text{\varphi} \var
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399, g1444, g1445, g1472, g1473, h18 \topskip g294, g324, g511, g540, g1488 \tracingfonts b853, b913, b949, b987, b1024, b1050, b1077 \try@load@fontshape . b497, b528, b573 \tsample	\textbf{V} \text{\varphi} \var
$\begin{array}{c} \text{g216, g226, g236, g1362, g1367,} \\ \text{g1372, g1380, g1384, g1388,} \\ \text{g1394, g1395, g1396, g1399,} \\ \text{g1444, g1445, g1472, g1473, h18} \\ \text{\topskip} & & & & & & & & & & & \\ \text{\tracingfonts} & & & & & & & & \\ \text{\tracingfonts} & & & & & & & & \\ \text{\tracingfonts} & & & & & & & \\ \text{\tracingfonts} & & & & \\ \text{\tracingfonts} & & \\ \text{\tracingfonts} & & & \\ \text{\tracingfonts} & & & \\ $	\textbf{V} \text{\varphi} \text{vadjust} \tag{1019}, \cdot \
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399, g1444, g1445, g1472, g1473, h18 \topskip g294, g324, g511, g540, g1488 \tracingfonts b853, b913, b949, b987, b1024, b1050, b1077 \try@load@fontshape b497, b528, b573 \tsample b133 \tsample (environment) b119 \tstrutbox b65, b81, b93, b105, b115, b123, b131, b942, b980, d34, d35, d39, d40, d84, d91 \tt e56, g1617 \ttdef@ult b1607, b1634, b1653, b1829	\textbf{V} \text{\varphi} \text{vadjust} \tag{1019}, \cdot \
$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	\textbf{V} \text{\varphi} \text{vadjust} \tag{1019}, \cdot \
$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	V \vadjust c1019, c1058, h46 \vector d489 \verb c1014, h46 \verb@eol@error c1021, c1033, c1044, h48 \verbatim@font c1022, c1034, c1045 \verbatim@nolig@list h47 verse (environment) g1493 \vfil c637, c709, c778, g991, g1004, g1006, g1082, g1088, g1179, g1235 \vfill c509, c511, c534, c536, c556, c558 \viiipt e67 \viipt e66 \vipt e65 \voidb@x c50, g176 \vpt
$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	V \vadjust c1019, c1058, h46 \vector d489 \verb c1014, h46 \verb@eol@error c1021, c1033, c1044, h48 \verbatim@font c1022, c1034, c1045 \verbatim@nolig@list h47 verse (environment) g1493 \vfil c637, c709, c778, g991, g1004,
$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	V \vadjust c1019, c1058, h46 \vector d489 \verb c1014, h46 \verb@eol@error c1021, c1033, c1044, h48 \verbatim@font c1022, c1034, c1045 \verbatim@nolig@list h47 verse (environment) g1493 \vfil c637, c709, c778, g991, g1004,
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399, g1444, g1445, g1472, g1473, h18 \topskip g294, g324, g511, g540, g1488 \tracingfonts b853, b913, b949, b987, b1024, b1050, b1077 \try@load@fontshape b497, b528, b573 \tsample h33 \tsample (environment) h33 \tstrut b119 \tstrutbox b65, b81, b93, b105, b115, b123, b131, b942, b980, d34, d35, d39, d40, d84, d91 \tt e56, g1617 \ttdef@ult b1607, b1634, b1653, b1829 \ttdefault b1829, e56, g1621, h48 \two@digits g71, g72 \twocolumn g961, g975, g1037, g1243, g1672,	V \vadjust c1019, c1058, h46 \vector d489 \verb c1014, h46 \verb@eol@error c1021, c1033, c1044, h48 \verbatim@font c1022, c1034, c1045 \verbatim@nolig@list h47 verse (environment) g1493 \vfil . c637, c709, c778, g991, g1004,
$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	V \vadjust c1019, c1058, h46 \vector d489 \verb c1014, h46 \verb@eol@error c1021, c1033, c1044, h48 \verbatim@font c1022, c1034, c1045 \verbatim@nolig@list h47 verse (environment) g1493 \vfil c637, c709, c778, g991, g1004,
g216, g226, g236, g1362, g1367, g1372, g1380, g1384, g1388, g1394, g1395, g1396, g1399, g1444, g1445, g1472, g1473, h18 \topskip g294, g324, g511, g540, g1488 \tracingfonts b853, b913, b949, b987, b1024, b1050, b1077 \try@load@fontshape b497, b528, b573 \tsample h33 \tsample (environment) h33 \tstrut b119 \tstrutbox b65, b81, b93, b105, b115, b123, b131, b942, b980, d34, d35, d39, d40, d84, d91 \tt e56, g1617 \ttdef@ult b1607, b1634, b1653, b1829 \ttdefault b1829, e56, g1621, h48 \two@digits g71, g72 \twocolumn g961, g975, g1037, g1243, g1672,	V \vadjust c1019, c1058, h46 \vector d489 \verb c1014, h46 \verb@eol@error c1021, c1033, c1044, h48 \verbatim@font c1022, c1034, c1045 \verbatim@nolig@list h47 verse (environment) g1493 \vfil . c637, c709, c778, g991, g1004,

c457, c458, c460, c461, c462, c464, c465, c467, c468, c470, c471, c473, c474, c476, c477, c478, c480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, d28, d31, d34, d39, d42, d165, d167, d519, d520, d521, d560, h34, h42 \vspace g1096	f177, f178, f179, f180, f181, f182, f183, f184, f185, f186, f187, f188, f189, f190, f191, f192, f193, f194, f195, f196, f197, f198, f199, f200, f201, f202, f203, f204, f205, f206, f207, f208, f209, f210, f211, f212, f213, f214, f215, f216, f217, f218, f219, f220, f221, f222, f223, f224, f225, f226, f227, f228, f229, h50
\mathbf{W}	\xviipt e73
\widowpenalties	\xxpt e74
\dots c1378, c1395, c1410, c1429	\xxvpt e75
\widowpenalty $g1796$	
\wlog b196, b199, b201	\mathbf{Y}
\wrong@al@fontshape $\dots \dots \underline{b479}$	\ybaselineshift $b2089, b2091,$
\wrong@fontshape $\dots \dots \underline{b479}$	b2116, b2140, b2227, b2258,
\wrong@ja@fontshape $\underline{b479}$	b2277, b2292, b2301, b2306,
X	b2324, b2344, b2349, d66, d72,
X@layoutcaption	d83, d90, d460, d481, d487,
\X@layoutfloat <u>d185</u>	d490, d493, d496, d499, d502, d505
\X@makePbox	\year g71, g1834, g1836, g1838,
\X@makepbox	g1840, g1845, g1847, g1854, g1855 \yoko b140, b146,
\X@minipage d274, d275	b939, b977, c357, c401, c407,
\X@parbox $d324$, $\overline{d325}$	c410, c414, c417, c421, c424,
\X@picture $d453$, $\overline{d454}$	c427, c431, c434, c438, c441,
\X@tabarray d5, <u>d10</u>	c450, c456, c459, c463, c466,
\X@tabular $d7$, $\underline{d10}$	c469, c472, c475, c479, c482,
\xiipt e71	c485, c488, c608, c675, c744,
\xipt e70	c808, c816, c830, c832, c839,
\xivpt e72	c846, c905, c928, c950, d27, d62,
\xkanjiskip b2544, c835,	d122, d240, d244, d287, d293,
c1052, c1279, c1293, c1305, c1360	d353, d411, d435, d441, d463,
\xpt e69	d474, d517, d524, d525, d526,
\xspcode b2266, b2274, b2313, b2321,	d547, d551, d564, e18, g983, g1026
f93, f94, f95, f96, f97, f98, f99,	\ystrut <u>b137</u>
f100, f101, f102, f103, f104, f105, f106, f107, f108, f109, f110,	\ystrutbox <u>b67</u> , b81, b95,
f111, f112, f113, f114, f115, f116,	b100, b103, b141, b147, b925, b939
f117, f118, f119, f120, f121, f122,	${f z}$
f123, f124, f125, f126, f127, f128,	\zstrut <u>b119</u>
f129, f130, f131, f132, f133, f134,	\zstrutbox <u>b65</u> ,
f135, f136, f137, f138, f139, f140,	b125, b133, b945, b983, d31, d32
f141, f142, f143, f144, f145, f146,	,,,,,,
f147, f148, f149, f150, f151, f152,	セ
f153, f154, f155, f156, f157, f158,	\ 西暦 g1831
f159, f160, f161, f162, f163, f164,	
f165, f166, f167, f168, f169, f170,	ワ
f171, f172, f173, f174, f175, f176,	\ 和曆 <u>g</u> 1831